

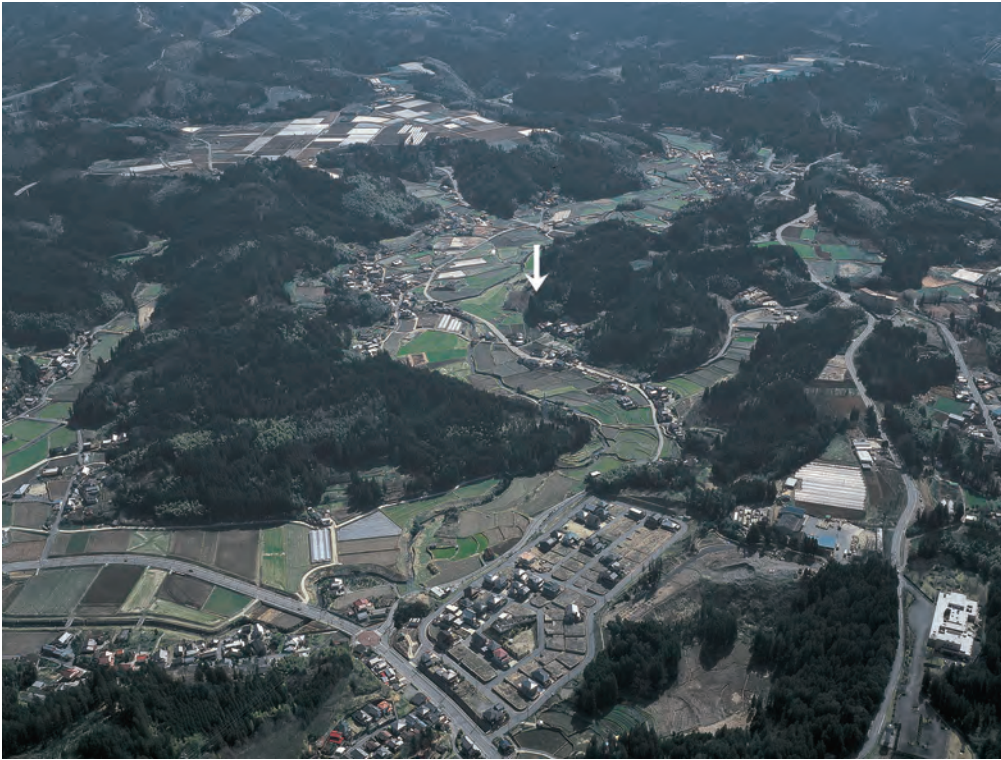
求来里の遺跡Ⅱ

— 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2） —

金田遺跡の調査

2009年

日田市教育委員会



求来里川流域遠景（北西から）



調査区近景（北から）

序 文

求来里地区は日田盆地の東部に位置し、その中央を流れる求来里川によって形成された沖積地に水田が広がる長閑な農業地域であります。

この求来里川流域では平成 14 年度より、圃場整備や市道改良、河川改修工事が実施されるのに伴い、多くの発掘調査が行われ、旧石器時代から近世に至る遺物・遺構が発見されてきました。

本書では、圃場整備工事に伴って、平成 16 年度に実施した金田遺跡の調査内容を報告しています。調査では市内における最も古いカマドを持つ住居が、初期須恵器や朝鮮半島系の土器などとともに確認され、日田地域だけでなく、筑後川流域や北部九州の古墳時代中期を考える上で重要な発見がありました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護や学術研究、地域の歴史を学ぶための教材などとして、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に従事いただきました作業員の皆様、地元の方をはじめとして調査にご協力いただきました方々に、心から厚くお礼申し上げます。

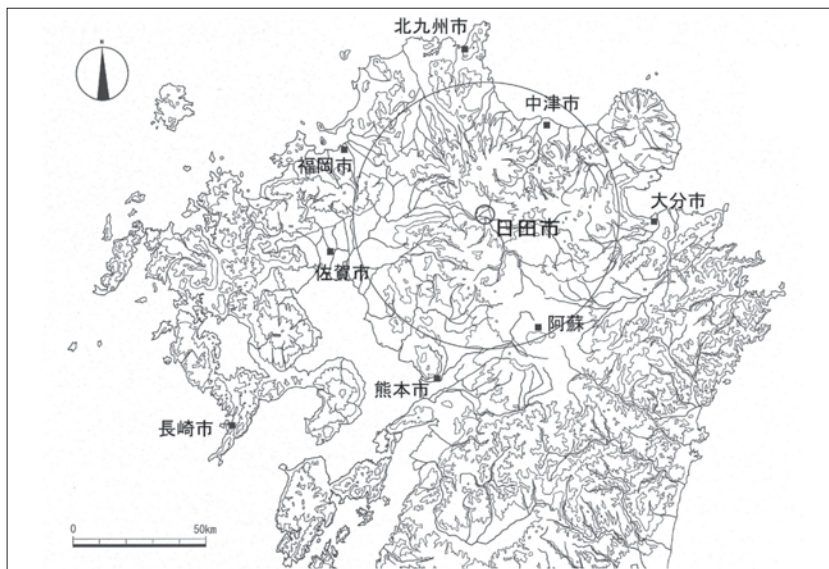
平成 21 年 3 月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成 16 年度に実施した金田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成 16 年度に県営経営体育成基盤（圃場整備）整備事業 求来里地区の工事実施に伴い、大分県日田地方振興局（現、大分県西部振興局）の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 本遺跡では発掘調査が 3 度行われており、このうち、平成 15・16 年度に求来里川河川改修工事に伴い、大分県教育庁文化課（現、大分県教育庁埋蔵文化財センター）が実施した調査をそれぞれ 1 次・3 次調査、本調査を 2 次調査としている。
4. 調査にあたっては、求来里地区圃場整備組合（故）室文男組合長、伊藤或忠副組合長（現、組合長）をはじめ、地元の方々、市経済部農政課（現、農林振興部農業振興課）のご協力を得た。
5. 調査現場での実測は若杉及び渡邊・杉森が行った他、雅企画有限会社に委託し、遺構写真撮影は、若杉・渡邊が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測図およびその製図は、雅企画有限会社・株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託した成果品のほかに、若杉が行ったものを使用した。また、遺構配置図を除く遺構図の製図については、株式会社九州文化財総合研究所に委託したものを使用した。
7. 遺物実測については、今田秀樹・矢羽田幸宏（市文化財保護課）の協力を得た。
8. 空中写真は九州航空株式会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
9. 遺物写真は雅企画有限会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
10. 個別遺構図中の方位は磁北である。
11. 遺物写真に付した番号は、実測図番号に対応する。
12. 出土遺物及び図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターで保管している。
13. 石材については、石器を野田雅之氏（大分県天然記念物（地質）調査指導委員会会長）に、玉類を大坪志子氏（熊本大学埋蔵文化財調査室助教）に同定していただいた。
14. 本書の執筆・編集は若杉が行った。



日田市の位置

本文目次

I 調査に至る経過と組織	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の組織	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 調査の内容	6
(1) 調査の概要	6
(2) 遺構と遺物	6
1. 竪穴住居	6
2. 竪穴遺構	59
3. 溝状遺構	60
4. 墓	61
5. 土坑	63
6. その他の遺物	74
IV まとめ	84
(1) 弥生時代の遺構と遺物について	84
(2) 古墳時代の遺構と遺物について	85

挿 図 目 次

第 1 図	金田遺跡周辺地形図 (1/5,000)	1
第 2 図	求来里川流域の主要遺跡分布図 (1/15,000)	5
第 3 図	遺構配置図 (1/300)	7～8
第 4 図	1号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)	10
第 5 図	2～4号竪穴住居実測図 (1/60) 及び3号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	11
第 6 図	1～4号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	12
第 7 図	5・6号竪穴住居実測図 (1/60)	13
第 8 図	5・6号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	13
第 9 図	7号竪穴住居実測図 (1/60)	14
第 10 図	7号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	14
第 11 図	8号竪穴住居実測図 (1/60)	15
第 12 図	8号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	16
第 13 図	8号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3・1/2)	17
第 14 図	9号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)	18
第 15 図	9号竪穴住居出土遺物実測図 (1) (1/3・1/2)	19
第 16 図	9号竪穴住居出土遺物実測図 (2) (1/3)	20
第 17 図	10号竪穴住居実測図 (1/60・1/30)	21
第 18 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (1) (1/3)	22
第 19 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (2) (1/3)	23
第 20 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (3) (1/3)	24
第 21 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (4) (1/3)	25
第 22 図	10号竪穴住居出土遺物実測図 (5) (1/3)	26
第 23 図	11号竪穴住居実測図 (1/60)	27
第 24 図	11号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	28
第 25 図	12～14号竪穴住居実測図 (1/80)	29
第 26 図	12～14号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	30
第 27 図	15号竪穴住居実測図 (1/60)	31
第 28 図	15号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	32
第 29 図	16・17号竪穴住居実測図 (1/60)	33
第 30 図	16・17号竪穴住居出土遺物実測図 (1) (1/3)	34
第 31 図	16・17号竪穴住居出土遺物実測図 (2) (1/3)	35
第 32 図	16・17号竪穴住居出土遺物実測図 (3) (1/3)	36
第 33 図	18・19号竪穴住居実測図 (1/60)	37
第 34 図	18号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	37
第 35 図	19号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	38
第 36 図	20号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)	39
第 37 図	20号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	40
第 38 図	21号竪穴住居実測図 (1/60)	41

第 39 図	21 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	41
第 40 図	22 号竪穴住居実測図 (1/60)	42
第 41 図	23 号竪穴住居実測図 (1/60)	42
第 42 図	22・23 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	43
第 43 図	24 号竪穴住居実測図 (1/60)	44
第 44 図	24 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	44
第 45 図	25 号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)	45
第 46 図	25 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3・1/2)	46
第 47 図	26 号竪穴住居実測図 (1/60)	47
第 48 図	26 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	47
第 49 図	27 号竪穴住居実測図 (1/60)	48
第 50 図	27 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	48
第 51 図	28 号竪穴住居実測図 (1/60)	49
第 52 図	28 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	49
第 53 図	29 号竪穴住居実測図 (1/60) 及び出土遺物実測図 (1/3)	50
第 54 図	30 号竪穴住居実測図 (1/60)	50
第 55 図	30 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	50
第 56 図	31 号竪穴住居実測図 (1/60)	51
第 57 図	31 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	51
第 58 図	32 号竪穴住居実測図 (1/80)	52
第 59 図	32 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	53
第 60 図	33・34 号竪穴住居実測図 (1/60) 及び 34 号竪穴住居カマド実測図 (1/30)	54
第 61 図	33・34 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	55
第 62 図	35 号竪穴住居実測図 (1/60)	55
第 63 図	35 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	55
第 64 図	36 号竪穴住居実測図 (1/60)	56
第 65 図	37・38 号竪穴住居実測図 (1/60)	57
第 66 図	36～38 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)	58
第 67 図	1・2 号竪穴遺構実測図 (1/60)	59
第 68 図	1・2 号竪穴遺構出土遺物実測図 (1/3)	59
第 69 図	3 号竪穴遺構実測図 (1/60)	60
第 70 図	溝状遺構実測図 (1/100) 及び出土遺物実測図 (1/3)	60
第 71 図	1 号甕棺墓実測図 (1/30)	61
第 72 図	1 号甕棺実測図 (1/3)	62
第 73 図	1 号石棺墓実測図 (1/30)	63
第 74 図	土坑実測図 (1) (1/30)	64
第 75 図	1, 3～5 号土坑出土遺物実測図 (1/3・1/6)	65
第 76 図	土坑実測図 (2) (1/30・1/60)	66
第 77 図	8 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	67

第 78 図	11 号土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)	69
第 79 図	11 号土坑出土遺物実測図 (2) (1/3)	70
第 80 図	土坑実測図 (3) (1/30)	72
第 81 図	19・22 号土坑出土遺物実測図 (1/3)	73
第 82 図	その他の出土土器実測図 (1) (1/3)	74
第 83 図	その他の出土土器実測図 (2) (1/3・1/2)	75
第 84 図	その他の出土土器実測図 (3) (1/3)	76
第 85 図	その他の出土土器実測図 (4) (1/3)	76
第 86 図	出土石器実測図 (1) (2/3・1/2・1/3)	77
第 87 図	出土石器実測図 (2) (1/2)	78
第 88 図	出土石器実測図 (3) (1/2・2/3)	79
第 89 図	出土石器実測図 (4) (2/3)	80
第 90 図	出土石器実測図 (5) (2/3)	81
第 91 図	出土土製品・石製品・鉄製品実測図 (1/2・1/1・1/3)	83
第 92 図	弥生～古墳時代の竪穴住居変遷図 (1/600)	85

挿入写真目次

写真 1	発掘作業風景	表目次下
写真 2	発掘体験風景	2
写真 3	10 号竪穴住居南側土層	21

写真図版目次

写真図版 1 上	調査区遠景 (東から)	下	9 号竪穴住居カマド発掘状況 (南東から)
	下 調査区空中写真 (真上から)	写真図版 6 上	9 号竪穴住居遺物出土状況
写真図版 2 上	1 号竪穴住居発掘状況 (南東から)	中	9 号竪穴住居遺物出土状況
	中 1 号竪穴住居 A カマド発掘状況 (南東から)	下	10 号竪穴住居発掘状況 (南西から)
	下 1 号竪穴住居 B カマド発掘状況 (南東から)	写真図版 7 上	10 号竪穴住居遺物出土状況
写真図版 3 上	2 号竪穴住居発掘状況 (南東から)	中	10 号竪穴住居遺物出土状況
	中 3 号竪穴住居発掘状況 (南東から)	下	10 号竪穴住居遺物出土状況
	下 3 号竪穴住居カマド発掘状況 (南東から)	写真図版 8 上	11 号竪穴住居発掘状況 (北から)
写真図版 4 上	5・6 号竪穴住居発掘状況 (北西から)	中	11 号竪穴住居遺物出土状況
	中 5・6 号竪穴住居遺物出土状況	下	11 号竪穴住居遺物出土状況
	下 8 号竪穴住居発掘状況 (南東から)	写真図版 9 上	12～14 号竪穴住居発掘状況 (北東から)
写真図版 5 上	8 号竪穴住居カマド発掘状況 (南東から)	中	15 号竪穴住居発掘状況 (南から)
	中 9 号竪穴住居カマド遺物出土状況	下	16・17 号竪穴住居発掘状況 (北西から)

写真図版 10 上 16・17 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 21 上 3 号竪穴遺構発掘状況（北東から）
中 16・17 号竪穴住居遺物出土状況	中 2 号溝状遺構発掘状況（南東から）
下 18 号竪穴住居発掘状況（北東から）	下 4 号溝状遺構発掘状況（南東から）
写真図版 11 上 18 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 22 上 1 号甕棺墓発掘状況（南西から）
中 19 号竪穴住居発掘状況（南西から）	中 1 号甕棺墓発掘状況（南西から）
下 20 号竪穴住居発掘状況（北東から）	下 1 号石棺墓検出状況（南東から）
写真図版 12 上 20 号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）	写真図版 23 上 1 号石棺墓発掘状況（南東から）
中 20 号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）	中 1 号土坑発掘状況（北東から）
下 23 号竪穴住居発掘状況（北西から）	下 2 号土坑発掘状況（北西から）
写真図版 13 上 24 号竪穴住居発掘状況（南東から）	写真図版 24 上 3 号土坑発掘状況（北西から）
中 24 号竪穴住居焼土・	中 4 号土坑発掘状況（南東から）
炭化物検出状況	下 5 号土坑発掘状況（南西から）
下 25 号竪穴住居発掘状況（南東から）	写真図版 25 上 8 号土坑遺物出土状況
写真図版 14 上 25 号竪穴住居カマド遺物出土状況	中 8 号土坑遺物出土状況
中 25 号竪穴住居カマド発掘状況（南東から）	下 9 号土坑発掘状況（北から）
下 26 号竪穴住居発掘状況（北西から）	写真図版 26 上 10 号土坑発掘状況（北西から）
写真図版 15 上 27 号竪穴住居発掘状況（北西から）	中 11 号土坑発掘状況（東から）
中 28 号竪穴住居発掘状況（北西から）	下 11 号土坑遺物出土状況
下 28 号竪穴住居屋内土坑遺物出土状況	写真図版 27 上 11 号土坑遺物出土状況
写真図版 16 上 29 号竪穴住居発掘状況（北東から）	中 12 号土坑発掘状況（東から）
中 30 号竪穴住居発掘状況（南西から）	下 20 号土坑発掘状況（北東から）
下 30 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 28 上 22 号土坑発掘状況（南西から）
写真図版 17 上 31 号竪穴住居発掘状況（北から）	中 発掘作業に従事したみなさん
中 31 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 29 1～9 号竪穴住居出土遺物
下 32 号竪穴住居発掘状況（東から）	写真図版 30 9・10 号竪穴住居出土遺物
写真図版 18 上 33 号竪穴住居発掘状況（北西から）	写真図版 31 10 号竪穴住居出土遺物
中 33 号竪穴住居遺物出土状況	写真図版 32 12～16 号竪穴住居出土遺物
下 34 号竪穴住居発掘状況（北東から）	写真図版 33 16～25 号竪穴住居出土遺物
写真図版 19 上 34 号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）	写真図版 34 25～38 号竪穴住居及び土坑出土遺物
中 35 号竪穴住居発掘状況（北東から）	写真図版 35 1 号甕棺墓、土坑、ピット
下 37 号竪穴住居発掘状況（北東から）	及びグリッド一括出土遺物
写真図版 20 上 38 号竪穴住居発掘状況（北から）	写真図版 36 出土石器・土製品・玉類
中 1 号竪穴遺構発掘状況（北東から）	写真図版 37 出土石器（剥片類）
下 2 号竪穴遺構発掘状況（南東から）	

表 目 次

第 1 表	出土土器観察表 (1)	89
第 2 表	出土土器観察表 (2)	90
第 3 表	出土土器観察表 (3)	91
第 4 表	出土土器観察表 (4)	92
第 5 表	出土土器観察表 (5)	93
第 6 表	出土土器観察表 (6)	94
第 7 表	出土土器観察表 (7)	95
第 8 表	出土石器観察表 (1)	96
第 9 表	出土石器観察表 (2)	97
第 10 表	出土土製品観察表	98
第 11 表	出土玉類観察表	98
第 12 表	出土鉄器観察表	98



写真1 発掘作業風景

I 調査に至る経過と組織

(1) 調査に至る経過

県営経営体育成基盤整備事業求来里地区全体の調査の経緯については、『求来里の遺跡』Iに記述しているので、ここでは省略し、金田遺跡の調査の経緯について述べる。

神来2工区内に存在する金田遺跡の発掘調査は、大分県日田地方振興局耕地課（現大分県西部振興局農林基盤部、以下県耕地課）の工事の進捗に合わせ、平成16年度に実施することとなった。しかし、この年度は平成15年度より着手している町ノ坪遺跡B区の継続調査、及び町ノ坪遺跡D区・小西遺跡が調査予定になっていたことから、その実施時期が課題となった。当初は、継続調査である町ノ坪遺跡B区と小西遺跡を年度前半に、金田遺跡と町ノ坪遺跡D区を年度後半に行う予定としていた。しかし、県耕地課との協議を進める中で、小西遺跡周辺の用水の関係から休耕時期が平成17年度にずれ込むことになった。このことから、年度後半に金田遺跡・小西遺跡・町ノ坪遺跡D区の調査を実施することは、事実上不可能と判断し、予定を変更して金田遺跡の調査を年度前半に行うこととした。

以上の経過により、平成16年4月22日に委託契約を取り交わし、4月23日から11月26日までの間、発掘調査を実施した。その後、平成17年1月17日に調査費の減額による変更契約を締結し、平成17年2月28日までの間、事業を実施した。

以下、平成17年度以降の委託契約の内容と期間を記す。

平成17年度 平成17年5月2日～平成18年2月28日 整理作業

平成19年度 平成19年5月1日～平成20年3月24日 報告書作成

当初契約より工程内容の変更契約を行い、報告書印刷業務を次年度に延期する。

平成20年度 平成20年5月1日～平成21年3月19日 報告書印刷

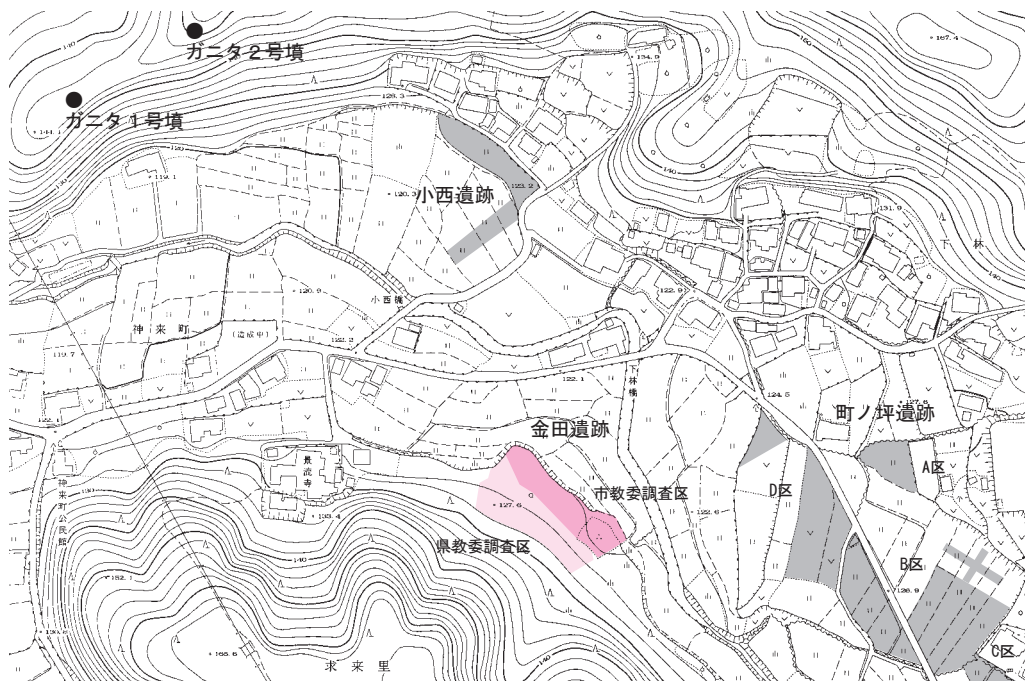
また、調査の経過は以下のとおりである。

4月23日 機械による搬入路作り

4月28日 立木伐採開始

5月7日 遺構検出開始

5月19日 遺構掘り下げ開始



第1図 金田遺跡周辺地形図 (1/5,000)

- 5 月 23 日 大分県立歴史博物館・宮内克己氏指導
- 5 月 26 日 基準点測量実施
- 6 月 3 日 遺構実測開始
東側の調査区調査終了
- 6 月 17 日 有田小学校発掘体験
- 6 月 19 日 西有田公民館わんぱく教室発掘体験
- 7 月 7 日 大分県埋蔵文化財センター・坂本嘉弘氏来訪
- 7 月 25 日 地元住民を対象にした発掘体験（町ノ坪遺跡B区で現地説明会）
- 8 月 4 日 別府大学・清水宗昭講師指導
- 10 月 14 日 福岡大学・小田富士雄名誉教授来訪
- 11 月 2 日 大分県埋蔵文化財センター・田中裕介氏来訪
- 11 月 12 日 空中写真撮影を実施
- 11 月 26 日 器材整理・撤収を行い、調査終了



写真2 発掘体験風景

調査終了後の11月30日に日田警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出し、12月13日に埋蔵文化財の認定を受けた。また、整理作業は平成16年7月1日～平成17年2月24日、同年6月1日～12月28日の間、行った。

(2) 調査の組織

調査関係者は以下のとおりである。（なお、職名・氏名は当時のままとしている）

平成16年度（2004）／発掘調査・整理作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括 後藤 清（日田市教育庁文化課課長）

調査事務 高倉隆人（日田市教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長）

伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）

調査担当 若杉竜太（同文化課主任）

調査員 土居和幸（同文化課主査）行時桂子（同主任）、渡邊隆行（同主事）

発掘作業員 安心院輝雄 足立米子 穴井生海 穴井正利 安藤一枝 諫元正隆 石井猪之助 石谷アサカ

梅木研次郎 梅木忠臣 梅木年子 江藤キミ子 荏隈アイ子 荏隈マサ子 大内栄一

鍛冶谷榮 鍛冶谷フミ子 梶原隆介 河津定雄 河津信義 河津満子 河部松子 北澤幾子

小下一 五島絹代 五反田静子 後藤孝市 財津勲子 財津高子 財津利枝 財津由太

坂本今朝人 佐藤八重子 庄内武子 高倉厚己 高倉エミ子 高倉富美子 高倉美津子

高野瞳 高村三郎 田中傳江 筒井英治 中川照美 中島カズ子 原口勝利 原田強

平川五男 平原知義 藤本弥八 松間敦子 本松シヅエ 森輝雄 森本絹子 山田利彦

吉長利夫

調査補助員 杉森久恵

整理作業員 朝倉眞佐子 穴井トヨ子 石松裕美 伊藤一美 井上とし子 宇野富子 鍛冶谷節子

梶原ヒトエ 川原君子 黒木千鶴子 坂口豊子 坂本和代 佐藤みちこ 田中静香

中原琴枝 聖川暢子 平川優子 安元百合

調査指導員 清水宗昭（別府大学講師）宮内克己（大分県立歴史博物館学芸課長）

平成 17 年度（2005）／整理作業

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括 後藤 清（日田市教育庁文化財保護課長）
調査事務 高倉隆人（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）
伊藤京子（同専門員）、中村邦宏（同主事補）
整理担当 若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任）
調査員 土居和幸（日田市教育庁文化財保護課副主幹）
今田秀樹、行時桂子、渡邊隆行（以上、同主任）、矢羽田幸宏（同主事補）
調査補助員 石川京子 石川健 杉野貴幸 中川照美 藤野美音
整理作業員 朝倉眞佐子 石松裕美 伊藤一美 井上とし子 宇野富子 鍛冶谷節子 梶原ヒトエ
黒木千鶴子 佐藤みち子 中原琴枝 平川優子 安元百合
調査指導員 高倉洋彰（西南大学教授） 田中裕介（大分県埋蔵文化財センター副主幹）

平成 19 年度（2007）／報告書作成

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 諫山康雄（日田市教育委員会教育長、～平成 19 年 8 月 17 日）
合原多賀雄（同教育長、平成 19 年 9 月 27 日～）
調査統括 梶原孝史（日田市教育庁文化財保護課長、～平成 19 年 9 月 30 日）
原田文利（同文化財保護課長、平成 19 年 10 月 1 日～）
調査事務 井上正一郎（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）
田中正勝、伊藤京子（以上、同専門員）、塚原美保（同主査）
報告書担当 若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任）
調査員 今田秀樹（日田市教育庁文化財保護課主査）
行時桂子、渡邊隆行（以上、同主任）、矢羽田幸宏（同主事）

平成 20 年度（2008）／報告書印刷

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括 原田文利（日田市教育庁文化財保護課長）
調査事務 井上正一郎（日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）
田中正勝（同専門員）、塚原美保（同主査）
報告書担当 若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任）
調査員 今田秀樹、行時桂子（以上、日田市教育庁文化財保護課主査）
渡邊隆行（同主任）、矢羽田幸宏（同主事）、比嘉えりか（同囑託）

また、発掘調査・整理作業・報告書作成にあたり、前述の指導者・来訪者の方々のほかに、以下の方々にお世話になった（敬称略、五十音順）。

木村龍生 芝康次郎 下村智 杉井健 長直信 中原幹彦 中村勝 原田昭一 宮田栄二 三吉秀充 吉田和彦

II 遺跡の立地と環境

金田遺跡の所在する求来里地区は盆地の東部に位置し、大字東有田大石峠を源とする求来里川により形成された沖積地が狭い谷状の地形を呈している。求来里川は谷の中で大きく蛇行を繰り返しながら、北西方向に流れ、遺跡の北約2kmの地点で有田川と合流する。

求来里地区及び求来里川流域では、ほ場整備事業に伴って行われた発掘調査の他にも、広域農道建設や市道建設などによる発掘調査が行われている。ここでは、それらの遺跡を中心に周辺の遺跡を概観していく。

金田遺跡より北側200mの台地裾には、弥生時代中期から終末期にかけての集落が確認された小西遺跡(2)が存在する。また、遺跡の北東側には町ノ坪遺跡(3)が存在する。調査では古墳時代中期～後期の集落が確認された。特に古墳時代中期の集落では朝倉産の初期須恵器などが出土しており、地床炉からカマド導入期の集落変遷が窺える遺跡である。

町ノ坪遺跡南側には、縄文時代の竪穴遺構や古墳時代の集落、中世の四面庇の建物が見つかった求来里平島遺跡(4)が存在する。特に、古墳時代中期の住居は金田遺跡や町ノ坪遺跡と同様に導入期カマドとして注目される。さらに求来里平島遺跡の南側には弥生時代・古墳時代の包蔵地である着来遺跡(5)がある。着来遺跡の東側、求来里川が形成する谷の最奥部には縄文時代前期の包含層、古墳時代後期～終末期の集落や中世の墓地が確認された名里遺跡(6)が存在する。

一方、谷の北側には町野原台地が広がり、台地一帯は旧石器時代・縄文時代・古墳時代の包蔵地である町野原遺跡(7)が存在する。また、台地の南東側に円墳の亀ノ甲古墳(8)、さらに台地から西側に派生し、小西遺跡背後にあたる丘陵上には、横穴式石室を主体とし、3基の円墳からなるガニタ古墳群(10～12)がある。

また、谷南側の元宮原台地上には弥生時代後期の甕棺墓・石棺墓や古墳時代後期の石蓋土坑墓、中世の塚と笠塔婆などが見つかった元宮遺跡(13)が存在する。弥生時代～古墳時代にかけての墓地は、求来里川流域に展開する同時期の集落との関係を想起させる。

さらに、求来里地区から求来里川を下流に下った有田地区でも、沖積地及び周辺の丘陵上に多くの遺跡がみられる。小西遺跡の西約600mの丘陵上には古墳時代の集落や古代の土坑墓が見つかった馬形遺跡(16)がある。さらに下流の沖積地及び微高地上には、縄文時代晩期の埋甕や平安時代の竪穴遺構が確認された森ノ元遺跡(17)や弥生時代の墓地や古墳時代の集落、300枚を超える六道銭が埋納された土坑墓が確認された尾漕遺跡(18)が存在する。さらに求来里川右岸の台地上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落や近世墓群が見つかった祇園原遺跡(24)、古墳時代から古代を中心として集落が確認された長迫遺跡(19)、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする塔ノ本1号墳(21)などが存在する。一方、左岸の台地上には古墳時代の土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓などが確認された大迫遺跡(38)や3基の円墳からなる中尾古墳群(36,37)が存在する。

(参考文献)

『平成15～18年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004～2008

村上久和・友岡信彦・染矢和徳編『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)大分県教育委員会 1997

行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998

土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998

友岡信彦・松本康弘『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9)大分県教育委員会 1998

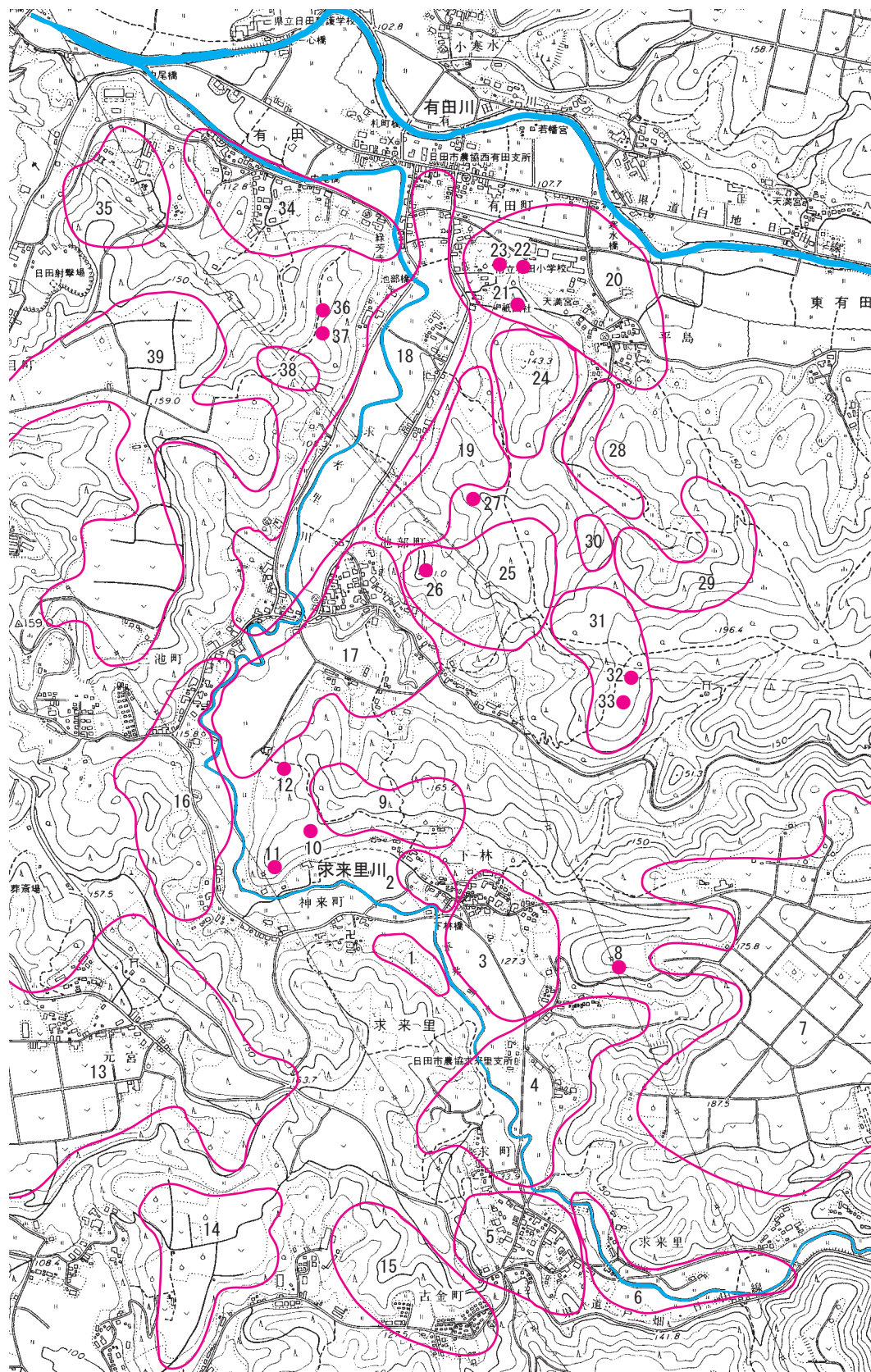
村上久和・原田昭一編『尾漕遺跡』大分県文化財調査報告書第112輯 大分県教育委員会 2000

若杉竜太編『平島遺跡D地点 塔ノ本古墳 祇園原遺跡2次 長迫遺跡C地点 長迫遺跡D地点 尾漕遺跡6次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 日田市教育委員会 2001

行時志郎編『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001

土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2003

行時桂子編『尾漕2号墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第69集 日田市教育委員会 2006
 行時桂子編『求来里平島遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007
 行時桂子編『祇園原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第81集 日田市教育委員会 2007
 行時桂子編『祇園原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第87集 日田市教育委員会 2008
 田中裕介・原田昭一・松本康弘編『求来里平島遺跡D区、求来里名里遺跡A区1次調査区、金田遺跡1次調査区、金田遺跡3次調査区』
 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008



- 1 金田遺跡
- 2 小西遺跡
- 3 町ノ坪遺跡
- 4 求来里平島遺跡
- 5 着来遺跡
- 6 名里遺跡
- 7 町野原遺跡
- 8 亀ノ甲古墳
- 9 倉迫遺跡
- 10 ガニタ1号墳
- 11 ガニタ2号墳
- 12 ガニタ3号墳
- 13 元宮遺跡
- 14 東寺原遺跡
- 15 古金遺跡
- 16 馬形遺跡
- 17 森ノ元遺跡
- 18 尾漕遺跡
- 19 長迫遺跡
- 20 平島遺跡
- 21 塔ノ本1号墳
- 22 塔ノ本2号墳
- 23 塔ノ本3号墳
- 24 祇園原遺跡
- 25 狐迫遺跡
- 26 尾漕1号墳
- 27 尾漕2号墳
- 28 石ヶ迫遺跡
- 29 平島横穴墓群
- 30 クビリ遺跡
- 31 有田塚ヶ原遺跡
- 32 ツカケ原1号墳
- 33 ツカケ原2号墳
- 34 宮ノ下遺跡
- 35 堂迫遺跡
- 36 中尾1号墳
- 37 中尾2号墳
- 38 大迫遺跡
- 39 中尾原遺跡

第2図 求来里川流域の主要遺跡分布図 (1/15,000)

Ⅲ 調査の内容

(1) 調査の概要 (第3図)

調査は、調査区内の立木の伐採や小屋などの除去を行った後、北西 - 南東方向に長さ約 95 m、幅約 15 ～ 25 m の範囲について、表土剥ぎならびに遺構検出を南東側より行った。

その結果、東側より約 20 m 部分 (以下、東側調査区) は、西側 (以下、西側調査区) に比べて、大きく削平を受けており、近世の土坑や溝状遺構などが検出された。この部分の標高は 124.25 ～ 123.75 m で、南西から北東に向かって傾斜している。

西側調査区は、水田側の標高が低い部分で遺構のラインが確認できたものの、その他の大部分では、重複が激しく、検出作業に当初から手間取った。そこで、遺構のラインが確認できる水田側と山側に調査区を横断するトレンチを設定し、遺構の切り合い等が確認できた部分から、面的に広げて掘り下げる作業を繰り返すことで、遺構の確認を行っていった。標高については 125.75 ～ 124.50 m で東側調査区と同様に南西から北東に向かって傾斜している。

また、調査区内を南東から北西に向かって A 1 ～ H 10 までをグリッドで区画し、遺構検出時やピット出土の遺物取り上げ等で利用している。

また、西側調査区は切り合いが激しく、県教委調査の結果からも相当数の遺構の存在が想定できた。そのため、掘り下げ時に廃土置場が確保できなくなると予想できたため、東側調査区を廃土置場とすることとし、この部分の調査を先行して行い、6月3日に調査を終了した。

なお、本調査区の 27、28、30 ～ 32 号竪穴住居については、1・3 次調査区と重複しており、県報告分も合わせて、本報告でも記述している。

(2) 遺構と遺物

調査では、竪穴住居 40 軒、竪穴遺構 3 基、溝状遺構 6 条、甕棺墓 1 基、石棺墓 1 基、土坑 22 基、その他柱穴・ピットや落ち込み等が多数確認された。

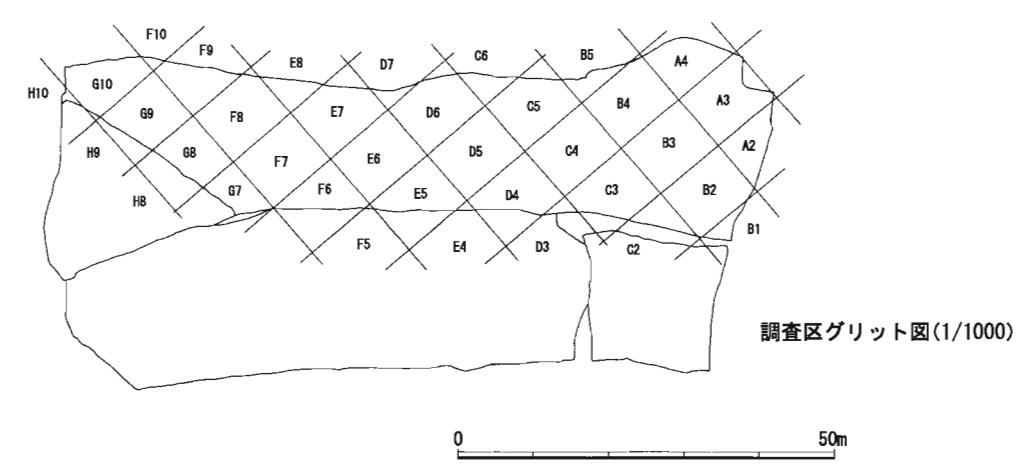
1. 竪穴住居

1号竪穴住居 (第4図 図版2)

調査区の南東側で確認され、1号竪穴遺構に切られ、位置関係から4号竪穴住居を切るとみられる。削平を受けているため、西側のコーナー付近のみ、壁が確認されている。主柱穴は P 1 ～ P 4 の 4 本と考えられ、床面からの深さは約 55 ～ 90 cm である。規模については、北西壁で確認されたカマドが壁の中央に付設されていたとするならば、南西 - 北東軸は約 5 m と推定できる。また、検出面からの床面までの深さは約 25 cm である。カマドについては、2 基検出されたことから、A カマド・B カマドとした。切り合い関係から B → A の順で作られたことがわかる。

A カマドは左袖全々と右袖の一部が残っていたが、袖石・支脚は確認できなかった。袖は暗褐色系の粘土を使用しており、左袖が約 70 cm、右袖が壁から約 30 cm のみ残存する。袖間の幅は奥壁から約 15 cm の部分で約 45 cm を測る。それぞれの袖の前面には袖石の抜取り痕、袖内には支脚の抜取り痕が確認された。支脚の抜取り痕の前面と袖石抜取り痕の間に広がる被熱した面が火床面である。

B カマドは A カマドより約 40 cm 南側の手前に作られている。上面は削平を受けているため、袖、袖石及び支脚は残っていなかったが、これらの抜取り痕とみられるピットは確認できた。袖石抜取り痕間の幅は約 50 cm を測り、支脚抜取り痕前面と袖石抜取り痕の間に広がる被熱した面が火床面となる。



- 住.....竪穴住居
- 堅.....竪穴遺構
- 溝.....溝状遺構
- 壘.....壘形墓
- 石.....石棺墓
- 土.....土坑
- 1・3次調査
- SH.....竪穴住居

第3図 遺構配置図 (1/300)

出土遺物（第6図1・2 図版29）

第6図1は土師器壺である。口縁部は大きく外反し、端部は丸く仕上げる。2は土師器の把手である。甕か甔かは不明である。傾きは確実ではないが、上方を向く。

2号竪穴住居（第5図 図版2）

1号竪穴住居の北東側で確認され、3号竪穴住居に切られる。西側の1/3ほどが残っているとみられ、平面形は方形を呈すると思われる。規模は南西壁で約3.4 m、北西-南西軸で約1.7 m + α で、深さは検出面より約25～30 cmを測る。壁際の一部には壁周溝が巡る。また、床面には深さ約60 cmを測るピット（P1）があるが、これが支柱穴になるとみられ、削平を受けている南東側にもう1本の支柱穴の存在した可能性がある。この他、炉跡・屋内土坑は確認されなかった。

出土遺物（第6図3・4 図版12）

第6図3は弥生土器甕である。口縁部は大きく外側に開く。4は弥生土器高坏である。脚部は接合部より直線的に大きく開く。

3号竪穴住居（第5図 図版3）

2号竪穴住居の北東側で確認され、2号竪穴住居を切る。西隅の一部を除き、削平を受けているが、平面形は方形を呈すとみられる。規模については、北西側に確認されたカマドが、壁の中央に付設されていたとするならば、南西-北東軸の長さは、約5.6 mと推定できる。検出面からの深さは西隅で約10 cmを測る。北西壁の中央にカマドが付設され、壁際には部分的に壁周溝が巡っている。支柱穴はP1 P2に加え、P3 P4の4本と見られ、深さは床面から約30～45 cmを測る。

カマドは上面が大きく削平を受けており、住居の壁から約70～80 cm内側で袖石の抜き取り痕が確認された。抜き取り痕間の幅は約90 cmで、その部分に見られる焼土が火床面である。なお、袖石の抜き取り痕は、担当者のミスで、深さの確認を怠ってしまったため、図面上では破線で表現している。

出土遺物（第6図5～8 図版29）

第6図5～7は土師器甕である。5は比較的長い口縁部が直線的に開く。6は短い口縁部が直線的に開く。7は小型の甕で、口縁部は器壁が厚く、短い。端部を丸く仕上げる。8は弥生土器甕である。底部は僅かに上げ底である。他の遺構からの混入品である。

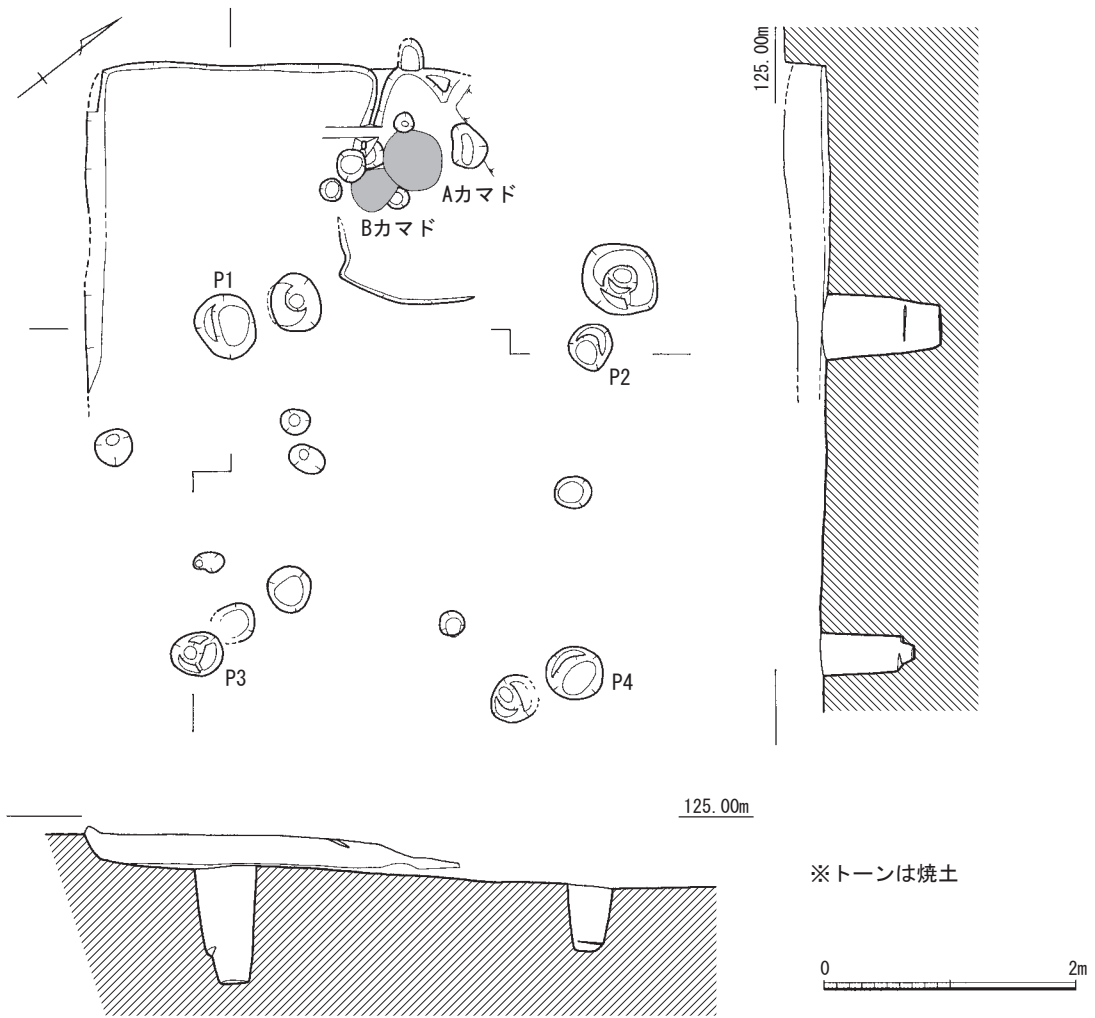
4号竪穴住居（第5図）

1号竪穴住居の北東側で確認された。大部分を3号竪穴住居に切られ、南東側も削平を受けているため、西側の一部しか残っていない。平面形は方形を呈するとみられ、規模は北西壁で約1.6 m + α 、南西壁で約0.8 m + α 、検出面からの深さは約20 cmを測る。住居としたものの、柱穴や炉跡等が確認できなかったことから、根拠には乏しい。

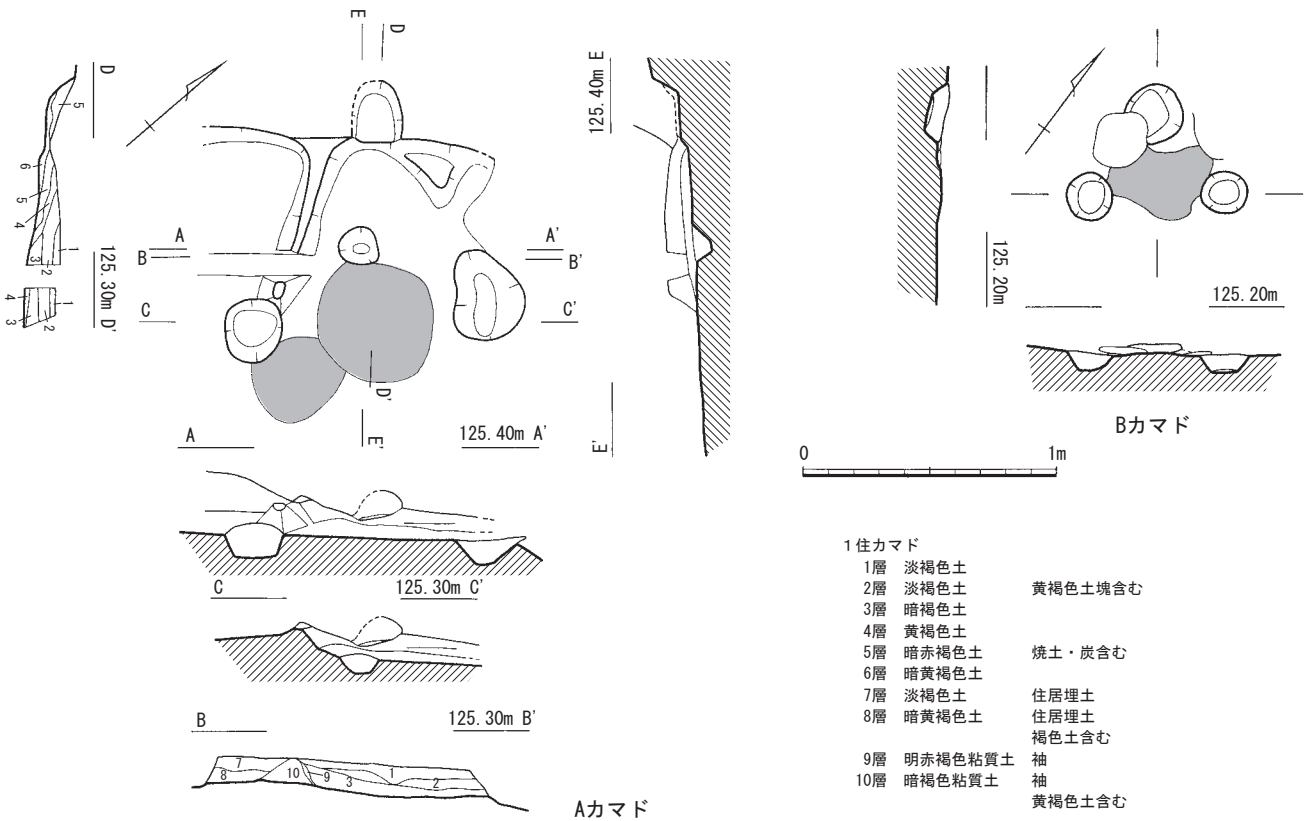
遺物は弥生土器と土師器が出土しているが、遺構については一部が確認されているのみで詳細が不明なため、何れの時代に属すかは、判断できなかった。

出土遺物（第6図9～11 図版29）

第6図9・10は弥生土器甕の口縁部である。9は口縁端部を若干肥厚させ、僅かに跳ね上げる。10は直線的に開き、端部は四角く仕上げる。11は土師器小型丸底壺である。口縁部は大きく開き、端部は薄く仕上げる。



※トーンは焼土



1住カマド

- 1層 淡褐色土
- 2層 淡褐色土 黄褐色土塊含む
- 3層 暗褐色土
- 4層 黄褐色土
- 5層 暗赤褐色土 焼土・炭含む
- 6層 暗黄褐色土
- 7層 淡褐色土 住居埋土
- 8層 暗黄褐色土 住居埋土 褐色土含む
- 9層 明赤褐色粘質土 袖
- 10層 暗褐色粘質土 袖 黄褐色土含む

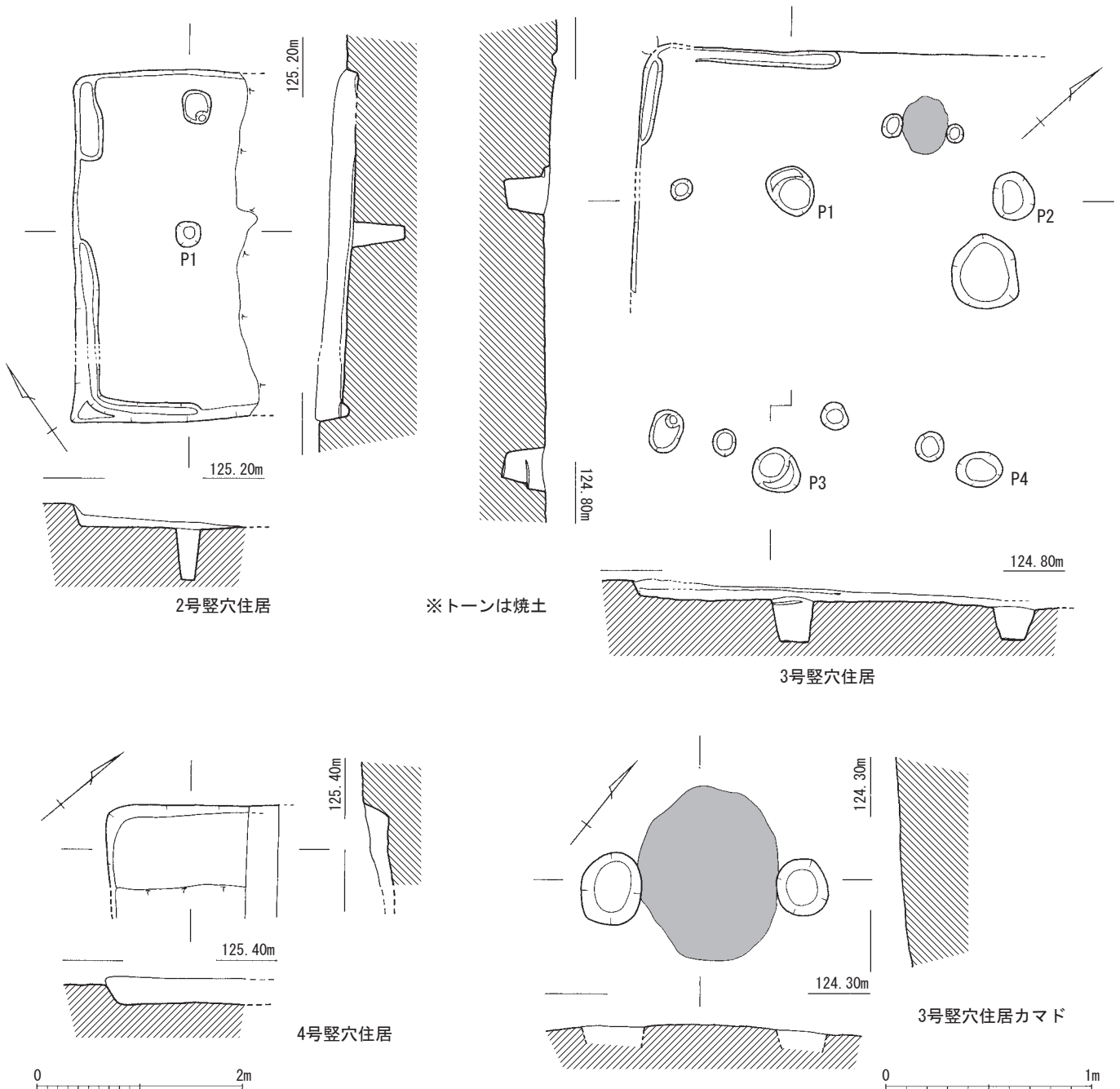
第4図 1号竪穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)

5・6号竪穴住居（第7図 図版4）

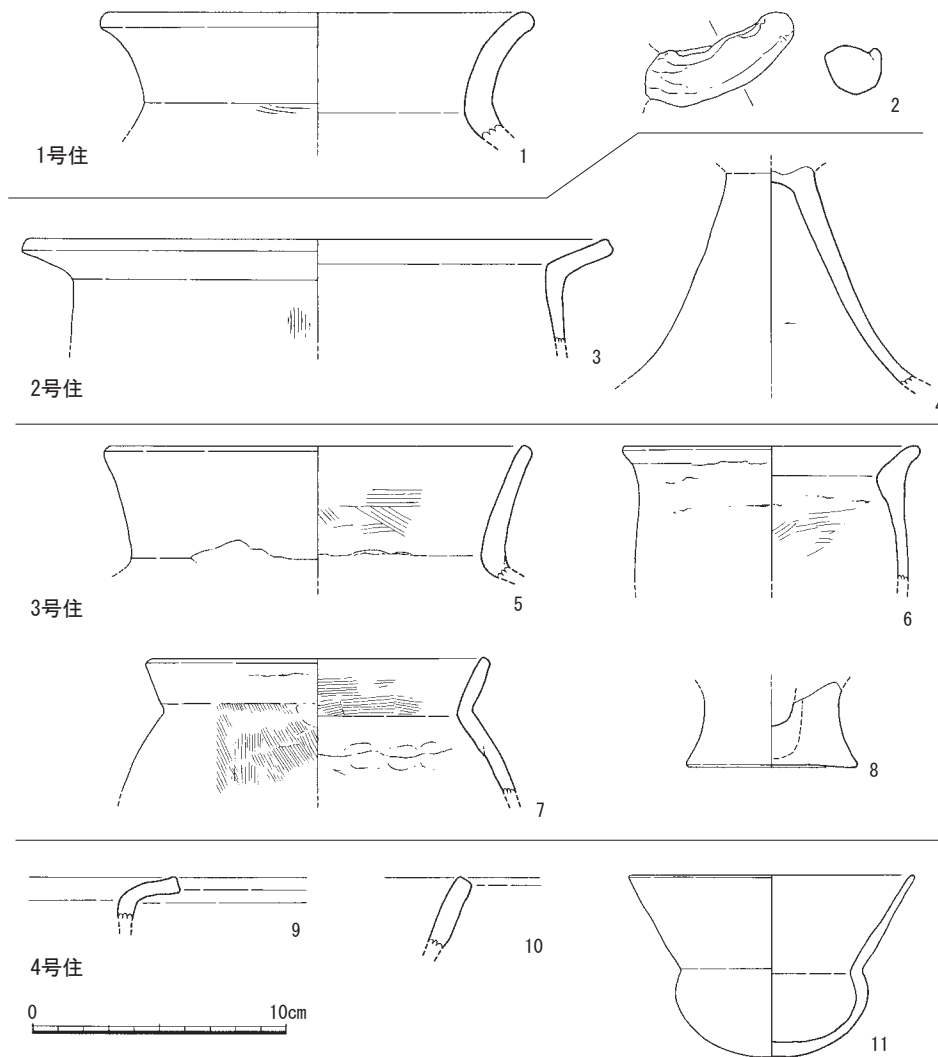
4号竪穴住居の西側で確認され、4、8号竪穴住居に切られる。南側を半周する掘り込みに対し、内側に壁周溝とみられる溝があり、さらに焼土が2ヶ所確認されたことから、2軒の住居があると判断した。

5号竪穴住居は、P1～P4の4本が主柱穴とみられ、床面からの深さは約50～80cmを測る。6号竪穴住居はP5～P10の6本が主柱穴とみられ、床面からの深さは約15～60cmを測る。

5号竪穴住居の柱穴が掘り込まれる床面までの深さは検出面から約20cmを測る。さらに柱穴に囲まれた中央付近には円形の土坑があり、これらの住居に伴う中央土坑になるとみられる。ただし、5号と6号のどちらに伴うものかは確認できなかった。この中央土坑を中心に考えると、5号竪穴住居は南北軸約5.2m、東西軸約4.4mとなる。さらに6号竪穴住居は判明している東西軸約5.5mに対して、南北軸が約6.8mとなり、2軒の住居は何れも平面形は楕円形気味になるとみられる。



第5図 2～4号竪穴住居実測図（1/60）及び3号竪穴住居カマド実測図（1/30）



第6図 1～4号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

これらの住居の切り合い関係については、6号竪穴住居のP 10が5号竪穴住居の周溝を切っており、さらにP 5も5号竪穴住居の周溝の推定線上に掘り込まれていることから、5号→6号の順で拡張したものである。

出土遺物 (第8図 図版 29)

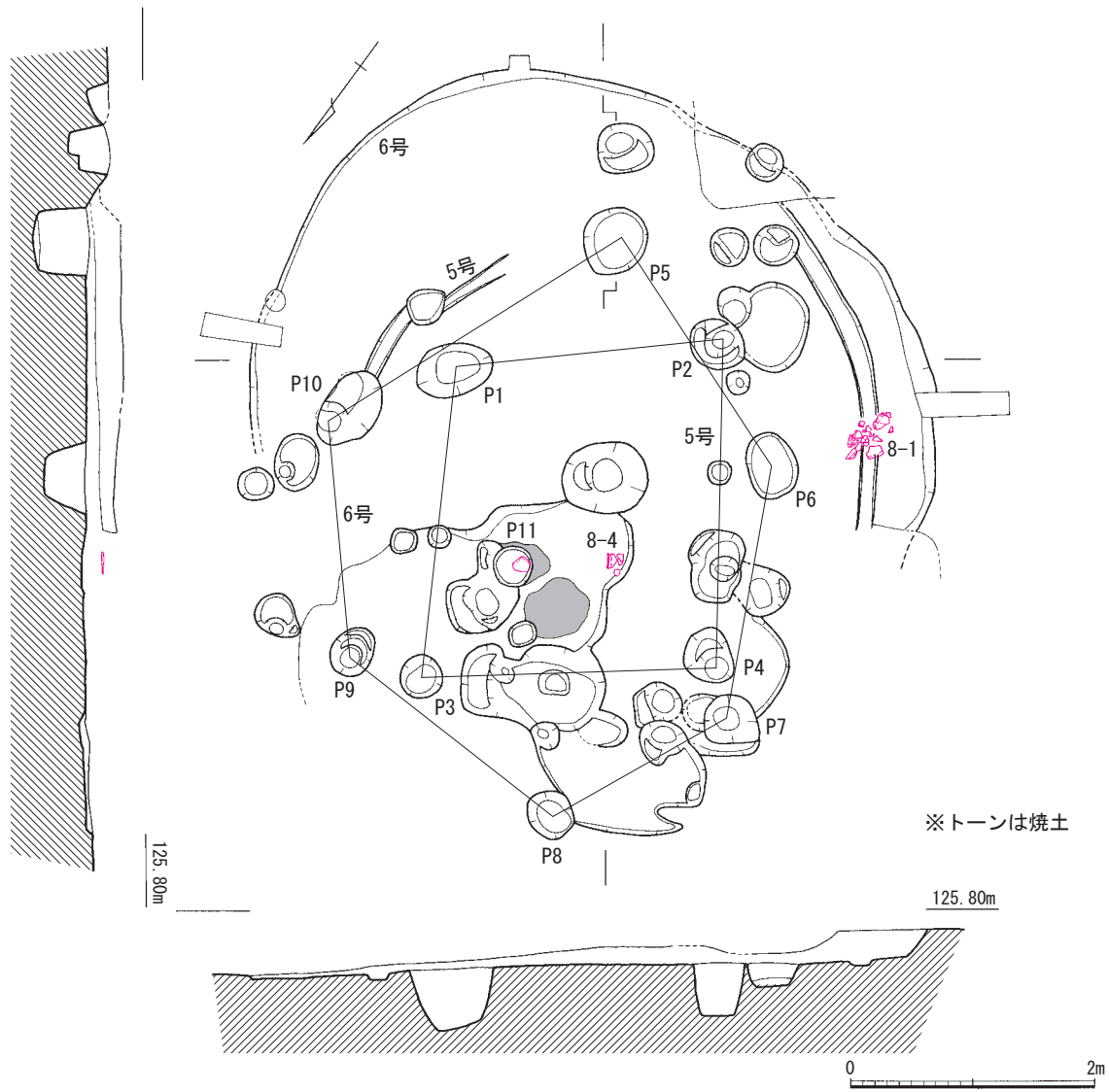
1は弥生土器高坏である。端部は外に向かってやや下がる。2は弥生土器甕の底部で、平底である。3・4は土師器甕である。ともに厚ぼったく、短く外反する口縁部をもつ。端部を丸く仕上げる。他の遺構からの混入品である。

7号竪穴住居 (第9図)

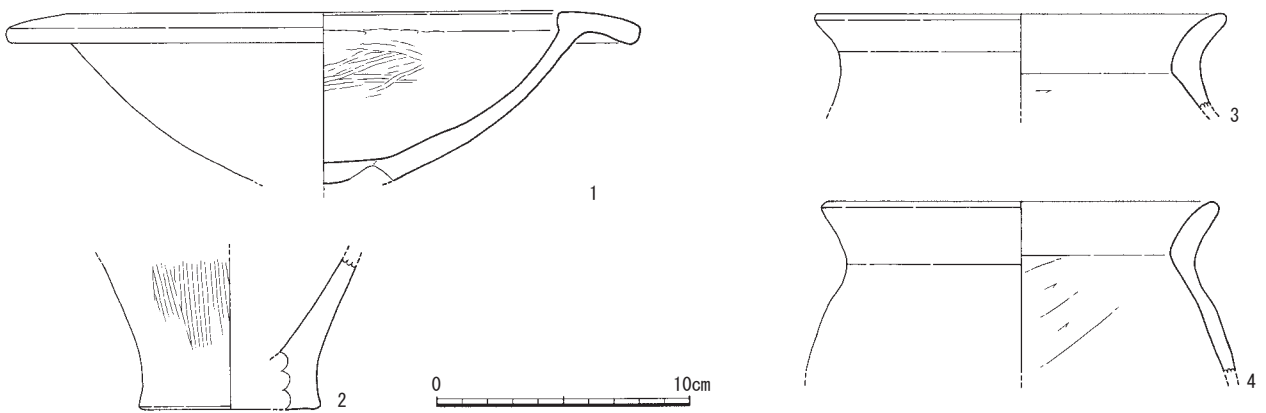
9号竪穴住居の南東側で確認され、これに大部分を切られている。そのため、北西隅の一部しか残存していないものの、平面形は方形を呈するとみられる。残存部分の規模は南壁約2.4m×東壁約1.8m、検出面からの深さは最大15cmを測る。床面には一部に数cmの段落ちがみられることから、ベッド状遺構の可能性はある。

出土遺物 (第10図)

1は弥生土器壺である。頸部に刻み目を施した断面三角形の突帯を貼り付ける。2、3は弥生土器甕である。何れも外底面をやや上底気味に成形する。4は土師器高坏である。脚部は柱状をなし、裾部で屈曲する。混入品である。



第7図 5・6号竪穴住居実測図 (1/60)



第8図 5・6号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

8号竪穴住居（第11・12図 図版4・5）

5・6号竪穴住居の北西側で確認され、5・6、12～15号竪穴住居を切る。北隅と南東側が削平を受けているが、平面形は長方形を呈すと見られ、規模は南西-北東軸は約6.2m、北西-南東軸は約6.6m + α である。検出面からの深さは最大45cmを測る。北西壁の中央にカマドが付設され、壁際には部分的に壁周溝が巡っている。支柱穴はP1～P4の4本とみられ、深さは床面から40～60cmを測る。この他、南東壁から約0.6m内側に1条の溝が掘り込まれていることから、P5～P8を支柱穴とする別の竪穴住居が存在していた可能性もある。

カマドは北西壁に付設され、約35cmの煙道が外側に延びる。袖及び支脚が残り、袖石は確認できなかった。袖は黄白色粘土を使用しているが、掘り下げの際に右袖の大部分を確認できず、掘り過ぎてしまっている。規模は左袖が約140cm、右袖が壁側から約60cm残っているが、袖石の抜き取り痕が確認できたことから、約150cmと推定できる。また、袖間の幅は奥壁側で約80cm、袖石の抜き取り間は約1.1mを測る。袖内は、支脚の前面と袖石間の焼土が見られる部分が火床面である。

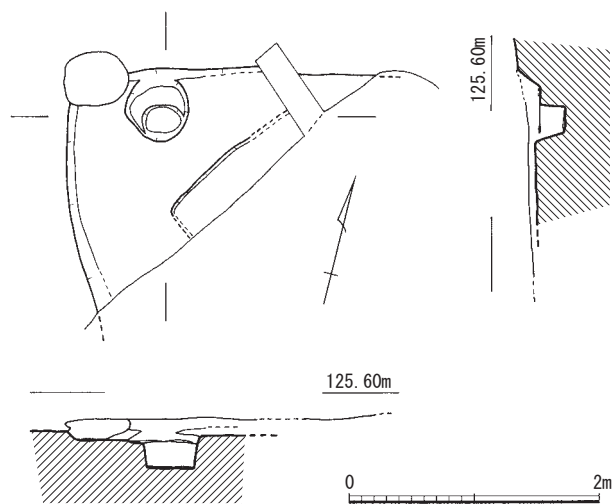
遺物は、カマドとその周辺から多く、出土している。

出土遺物（第13図 図版29）

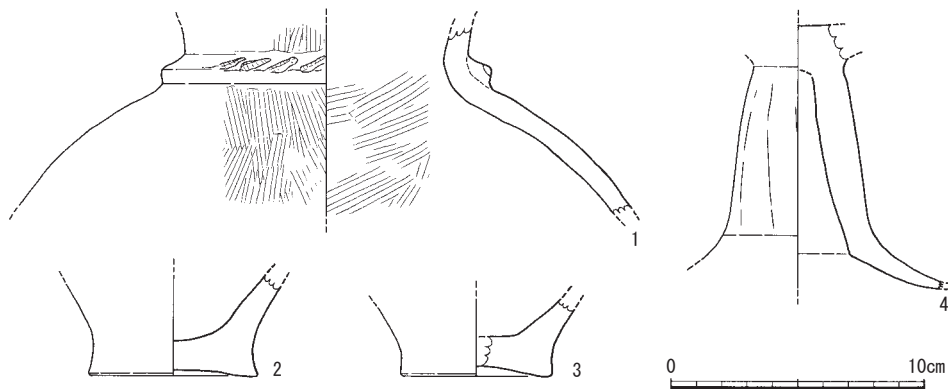
1～5は土師器甕である。1は口縁部が僅かに外反し、端部を丸く仕上げる。頸部の稜は不明瞭である。胴部の張りはなく、直線的になる。2は短い口縁部がわずかに外反し、端部を丸く仕上げる。胴部は球形を呈する。3は短い口縁部が外反し、端部を丸く仕上げる。4は上下、傾きが確実ではないが、胴部が大きく張る。5の底面はやや平坦面をもつ丸底である。6は土師器鉢である。器壁は厚く、端部は三角形に仕上げる。7は土師器坏である。口縁部が内湾し、端部を薄く仕上げる。8は手捏土器である。

9号竪穴住居（第14図 図版5・6）

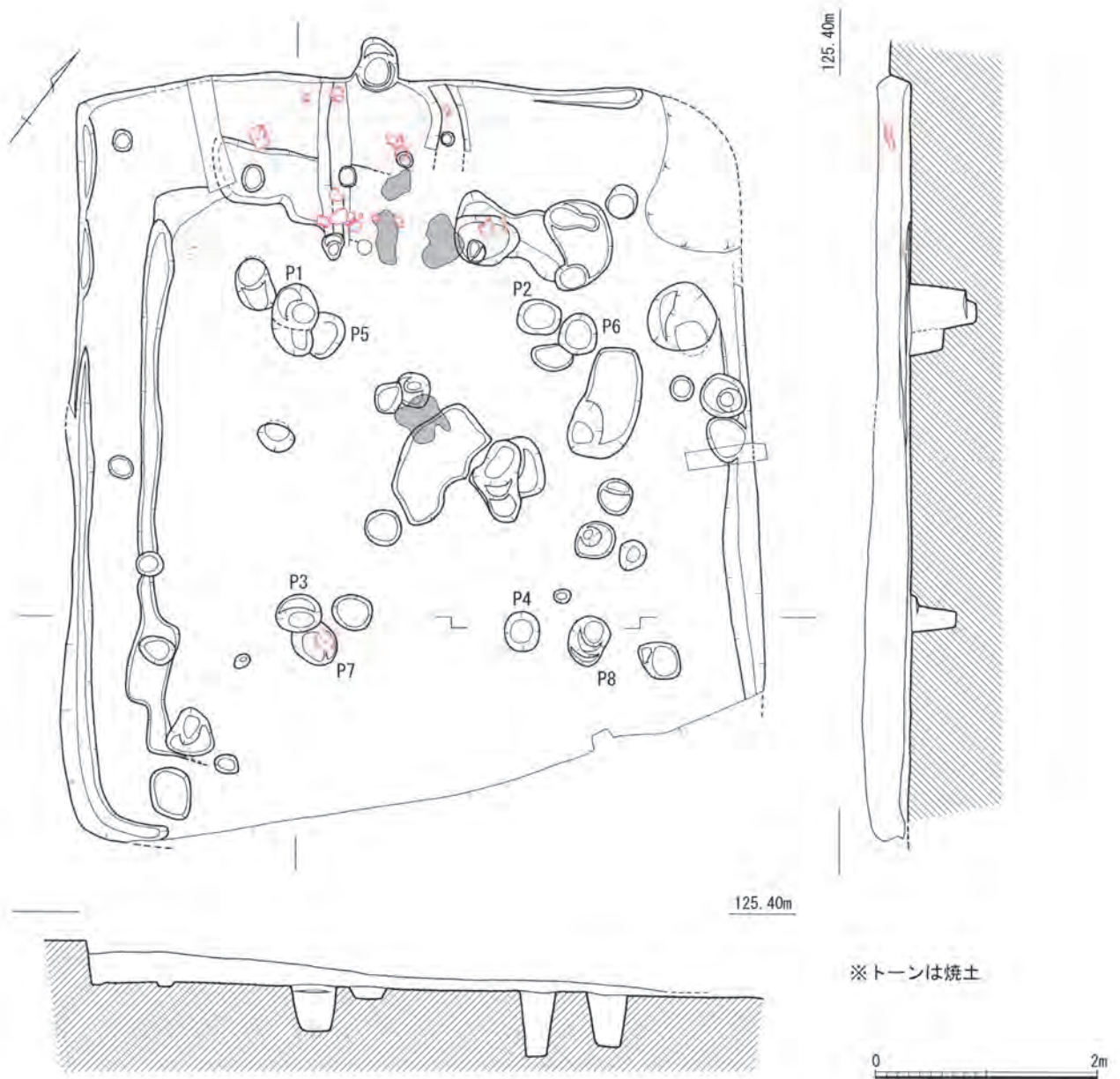
8号竪穴住居の南西側で確認され、7、12～15、20号竪穴住居を切る。平面形は方形を呈し、規模は約5.3m×約5.0m、検出面からの深さは最大60cmを測る。北西壁のほぼ中央にカマドを付設する。壁際には部分的に壁周溝が巡っている。支柱穴はP1～P4を想定しているが、床面からの深さが約65cmであるP4を除き、P1～P3



第9図 7号竪穴住居実測図（1/60）



第10図 7号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）



第 11 図 8号竖穴住居実測図 (1/60)

は床面から約 20 cm と浅いため、確実にこの住居に伴うものかどうか断定しがたい。

カマドは住居北西壁の内側に付設される。袖と高坏が転用された支脚（第 9 図 11）は残っているが、袖石は確認できなかった。袖は暗褐色系の粘土を使用しており、左袖が約 75 cm、右袖が約 90 cm、袖間の幅は奥壁側が約 60 cm、袖石側は約 70 cm を測る。袖内には支脚転用高坏のほか、多くの遺物が見られた。

遺物はカマド内や埋土中より出土しているが、初期須恵器と思われる高坏蓋などが出土しており、注目される。

出土遺物

(第 15・16 図 図版 29・30)

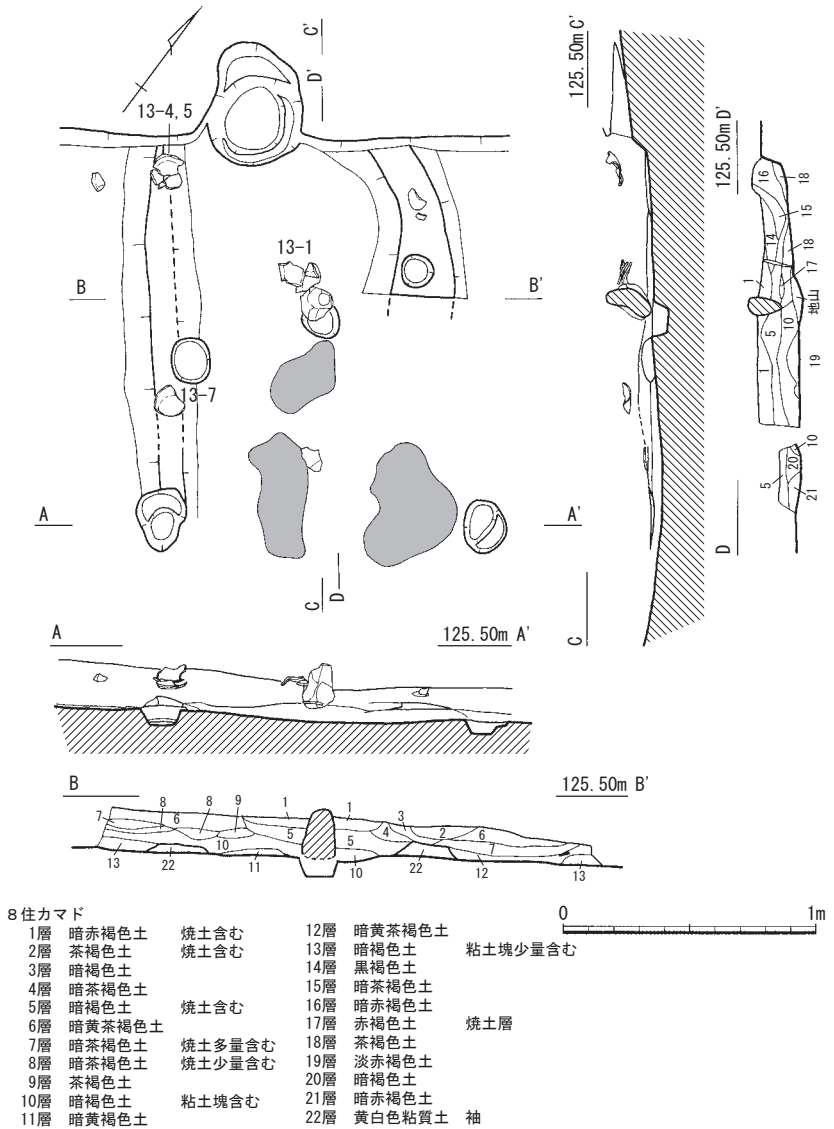
第 15 図 1・2 は弥生土器甕、3 は弥生土器壺である。1・2 はともに底部はやや上げ底である。他の遺構からの混入品である。

4～7 は土師器甕である。4 は口縁部が中位付近で外反し、端部を丸く仕上げる。胴部の張りは少ない。5 の口縁部は 4 とほぼ同じだが、外反の度合いは弱く、端部は四角く仕上げる。胴部は大きく張る。6 の口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。7 の口縁部は直線的に開いて立ち上がり、端部を丸く仕上げる。また、4・6 は比較的幅の広いケズリ痕が見られる。8～10 は土師器環でいずれも丸底である。また、8、10 は端部をわずかに外反気味に薄く仕上げるが、9 は丸く仕上げる。11・12 は土師器高環である。11 は坏部が丸味を帯びながら立ち上がり、口縁端部を外反させる。脚部は接合部から直線的に開きながら、裾部で接地し、端部が開いている。13・14 はミニチュア土器である。ともに口縁端部を短く外反させている。

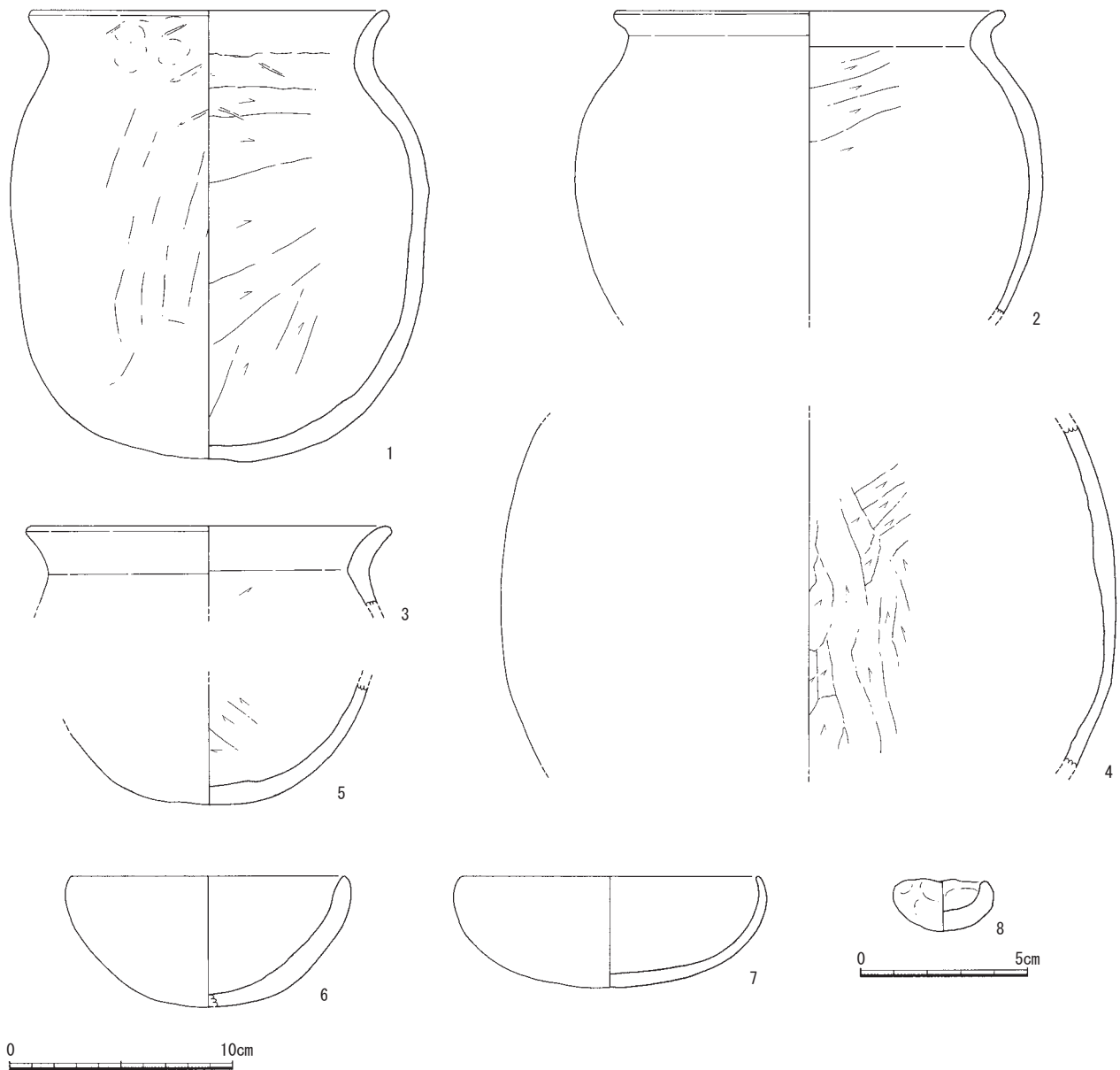
第 16 図 1・2 は土師器甕で同一個体とみられる。1 は口縁部がやや外反する。2 は底部が平底である。底面は約半分が欠損しているが、円形の蒸気孔が中央に 1 個、その周囲に 5～6 個配置されるとみられる。3 は甕の把手である。これも 1・2 と同一個体の可能性がある。把手の先端はほぼ真上を向く。内面には把手を胴部にソケット状に差し込んだ痕がみられる。4 は同様に土師器甕の底部で、径 1～2 cm ほどの円形の蒸気孔が複数穿たれる。

5・6 は須恵器高環の蓋である。5 は高いつまみを有し、上部は山形に突出させている。外面天井部には櫛歯文が施され、口縁部には受け部が見られる。内面は全面に自然釉が付着する。6 はつまみの上部を突出させており、天井部と口縁部の境は明確でない。外面は回転ヘラケズリを施しているが、仕上げは粗い。口縁端部を丸く仕上げる。

7 は須恵器壺の口縁部から頸部である。口縁端部は大きく外反する。外面には 2 段にわたり、波状文が施される。8 は須恵器壺である。外面には 2 段の波状文が施される。内面には自然釉が付着する。



第 12 図 8 号竪穴住居カマド実測図 (1/30)



第13図 8号竪穴住居出土遺物実測図 (1～7:1/3、8:1/2)

10号竪穴住居 (第17図 図版6・7)

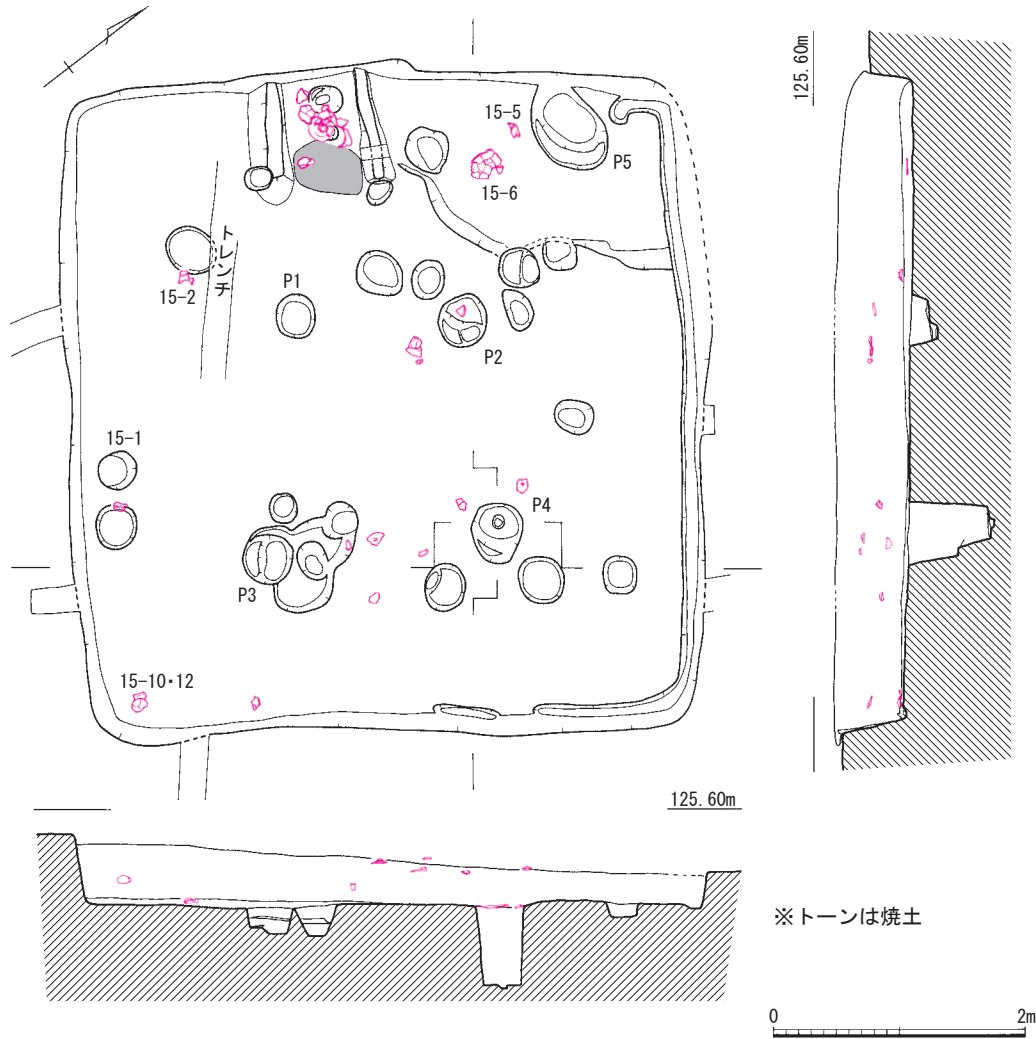
9号竪穴住居の北西側で確認され、11～15、20、23号竪穴住居、3号竪穴遺構、11号土坑を切る。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は約6.9m×約6.0m、検出面からの深さは最大約65cmを測る。床面のほぼ中央に炉跡がみられる。南壁側には屋内土坑が掘り込まれ、壁際には部分的に壁周溝が巡っている。支柱穴はP1～P4の4本と考えられ、深さは床面から60～80cmを測る。

遺物は土師器小型丸底壺・高坏が数多く出土しているほか、朝鮮半島系土器もみられる。

出土遺物 (第18～22図 図版30・31)

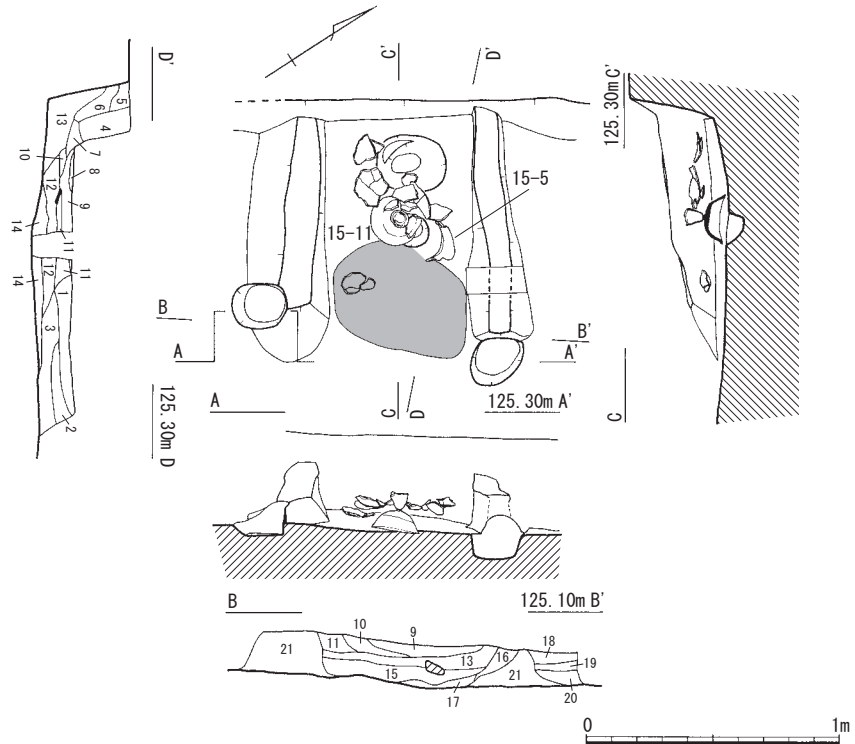
第18図1～4は、弥生土器甕である。1～3は上げ底、4は平底である。混入品である。

5～13は土師器甕である。5、6は口縁部が外反しながら立ち上がり、5は端部を丸く、6は四角く仕上げる。胴部は球体を呈する。5は頸部内面の屈曲部はわずかにつまみ出している。胴部は中位よりやや上で最大径を測

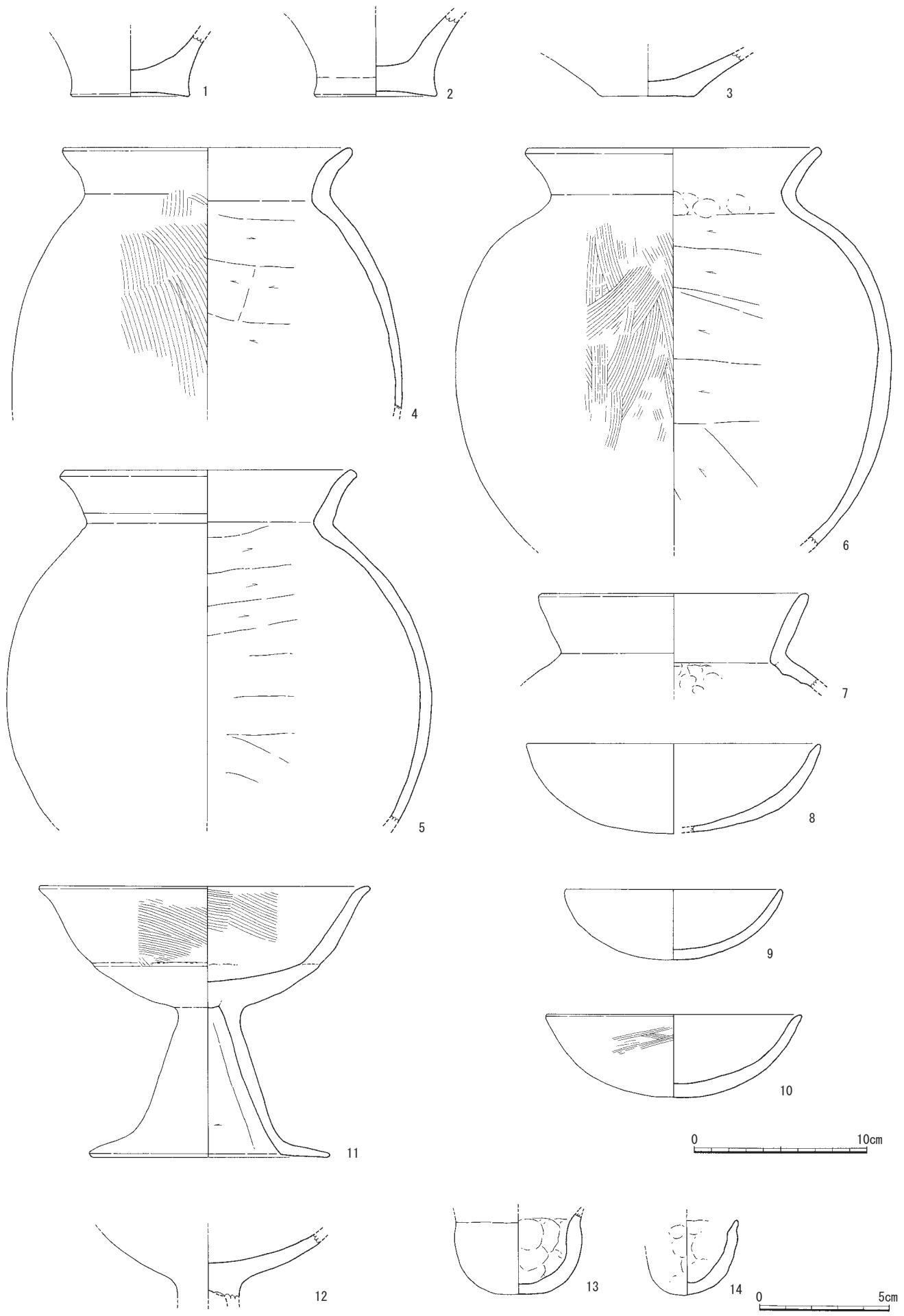


9住カマド

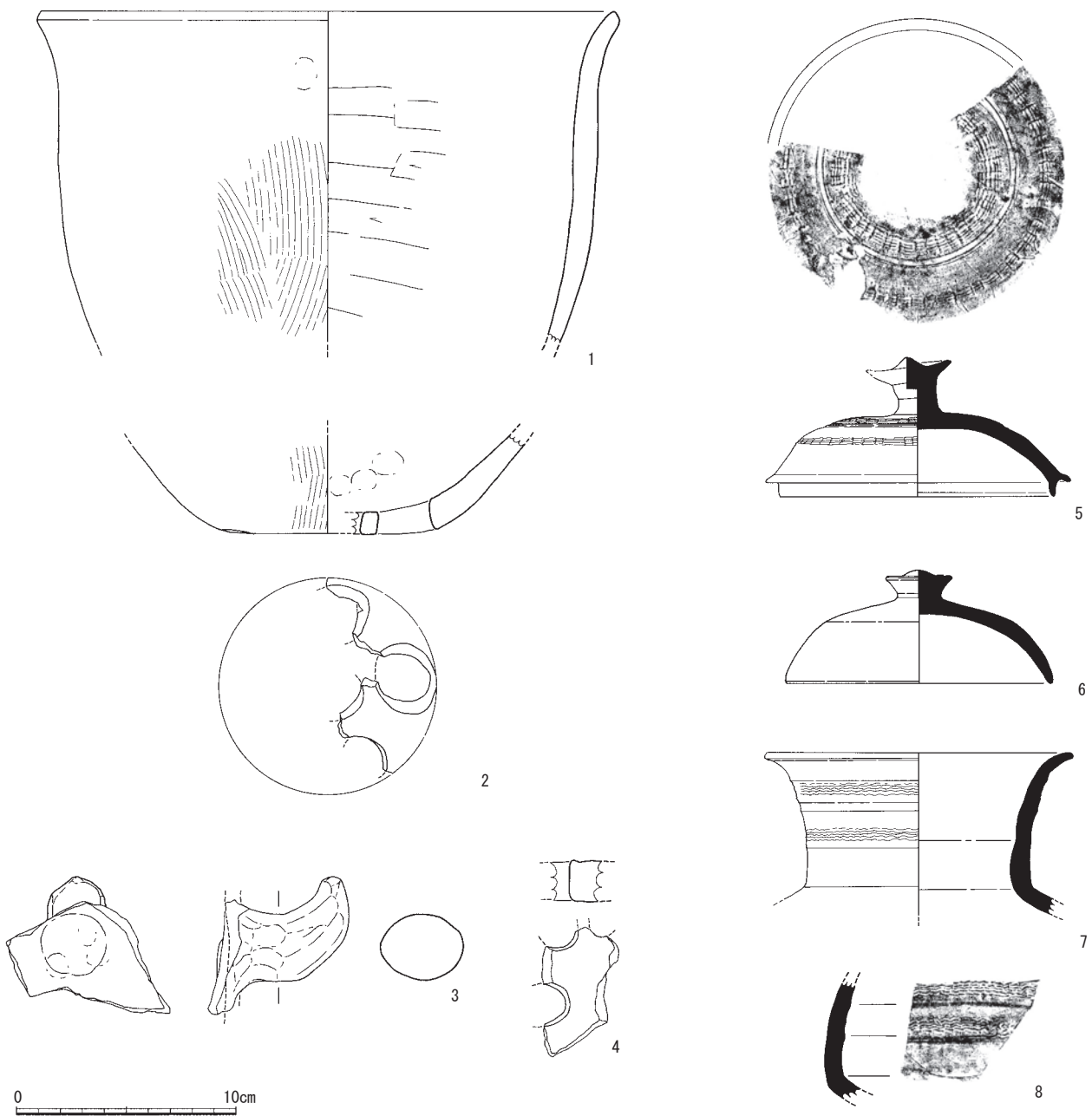
- | | | |
|-----|--------|---------|
| 1層 | 淡褐色土 | 住居埋土 |
| 2層 | 暗褐色土 | 住居埋土 |
| 3層 | 暗灰褐色土 | 住居埋土 |
| 4層 | 暗褐色土 | |
| 5層 | 茶褐色土 | |
| 6層 | 暗茶褐色土 | |
| 7層 | 暗黄茶褐色土 | |
| 8層 | 暗茶褐色土 | |
| 9層 | 黒茶褐色土 | |
| 10層 | 灰褐色土 | 焼土少量含む |
| 11層 | 暗褐色土 | |
| 12層 | 暗褐色土 | |
| 13層 | 赤茶褐色土 | 焼土塊・炭含む |
| 14層 | 赤褐色土 | |
| 15層 | 暗灰茶褐色土 | |
| 16層 | 赤褐色土 | 焼壁 |
| 17層 | 赤褐色土 | 火床面 |
| 18層 | 暗黄褐色土 | |
| 19層 | 暗褐色土 | |
| 20層 | 暗褐色土 | |
| 21層 | 黄褐色粘質土 | 袖 |
| | 暗褐色粘質土 | |



第 14 図 9 竖穴住居実測図 (1/60) 及びカマド実測図 (1/30)



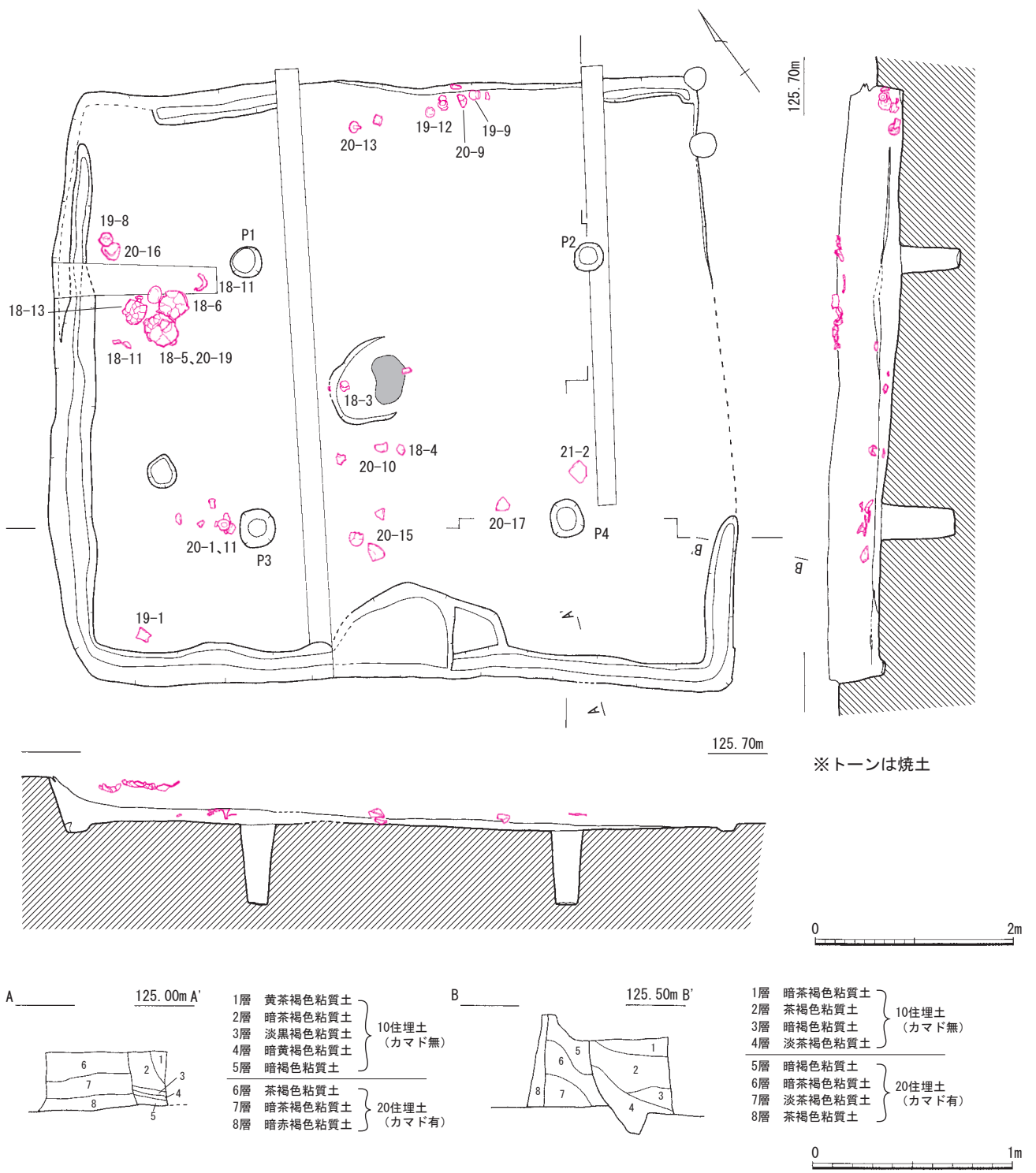
第15图 9号竖穴住居出土遗物实测图(1) (1~12: 1/3、13·14: 1/2)



第16図 9号竪穴住居出土遺物実測図(2)(1/3)

る。7は器壁の薄い口縁部が大きく外反しながら立ち上がる。端部をつまみ出すようにして内湾させている。8は口縁部が外反しながら開く。端部は四角く仕上げる。9は口縁部が直線的に開いて立ち上がり、端部を僅かに内湾させながら、丸く仕上げる。10は口縁部が僅かに外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。11は器壁の厚い口縁部が大きく外反し、端部は薄く、四角く仕上げる。12は口縁部が外反して立ち上がり、端部でさらに開く。13は底部まで器壁が薄く、精緻な作りである。

第19図1～17は土師器壺である。1は比較的大型の壺で、口縁部はほぼ直線的に長く立ち上がり、端部は四角く仕上げる。2～8は中型の壺である。2は口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、頸部との境近くで、僅かに膨らむ。端部は丸く仕上げる。3は口縁部が若干開きながら立ち上がるが、端部を内湾させ、丸く仕上げている。



第17図 10号竖穴住居実測図 (1/60・1/30)

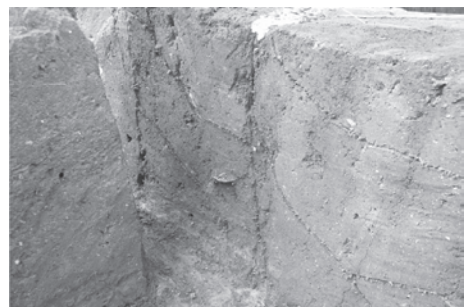
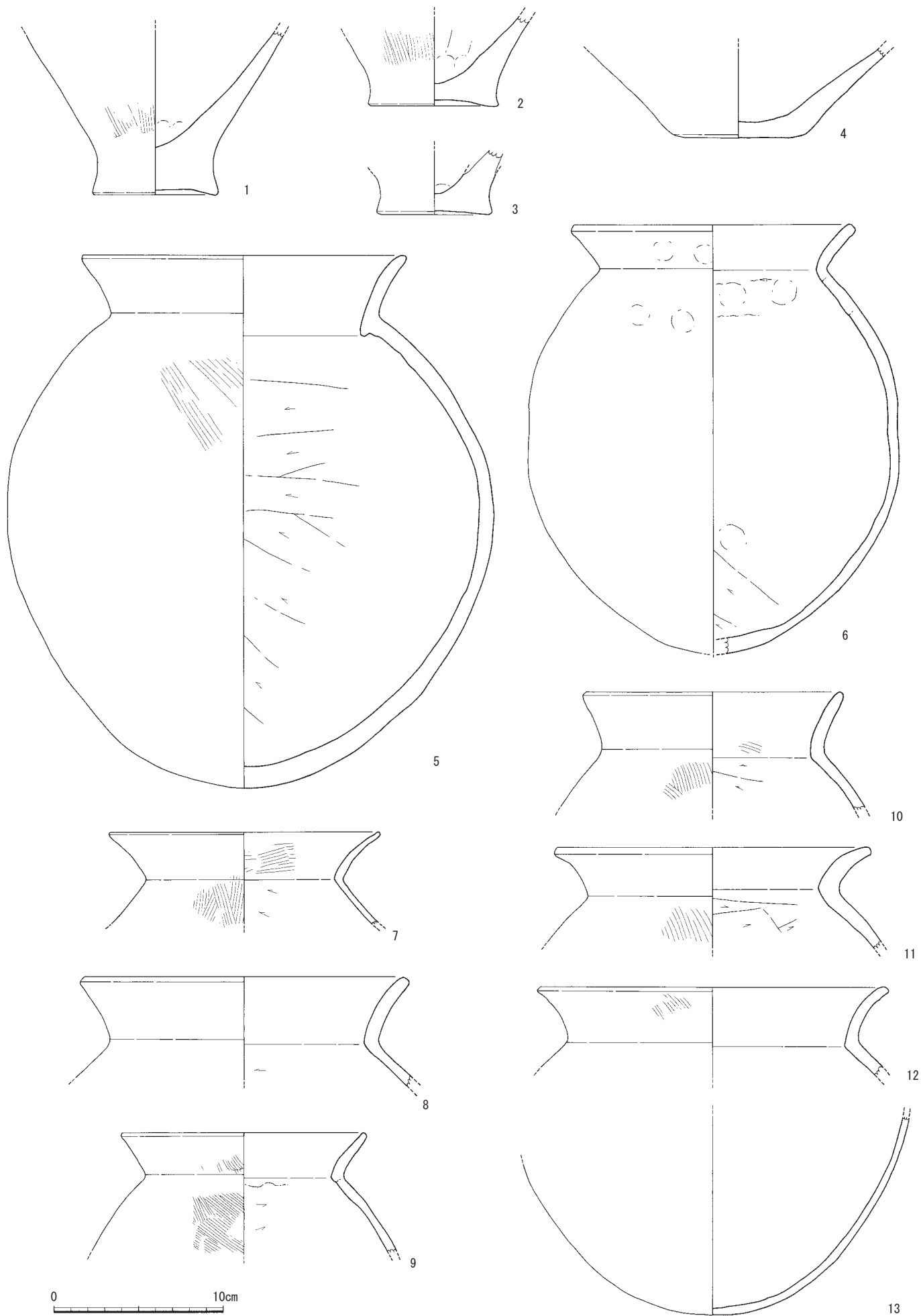
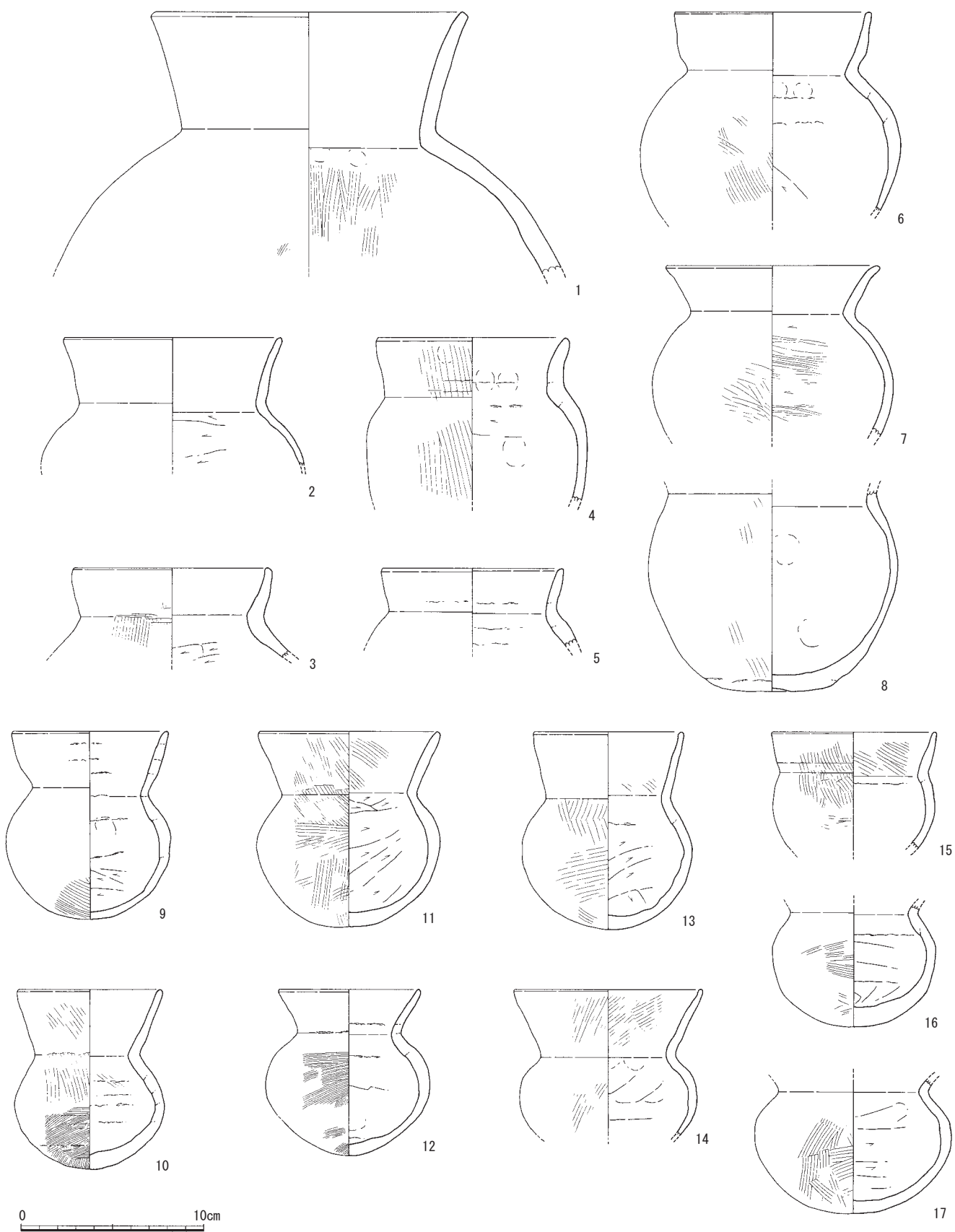


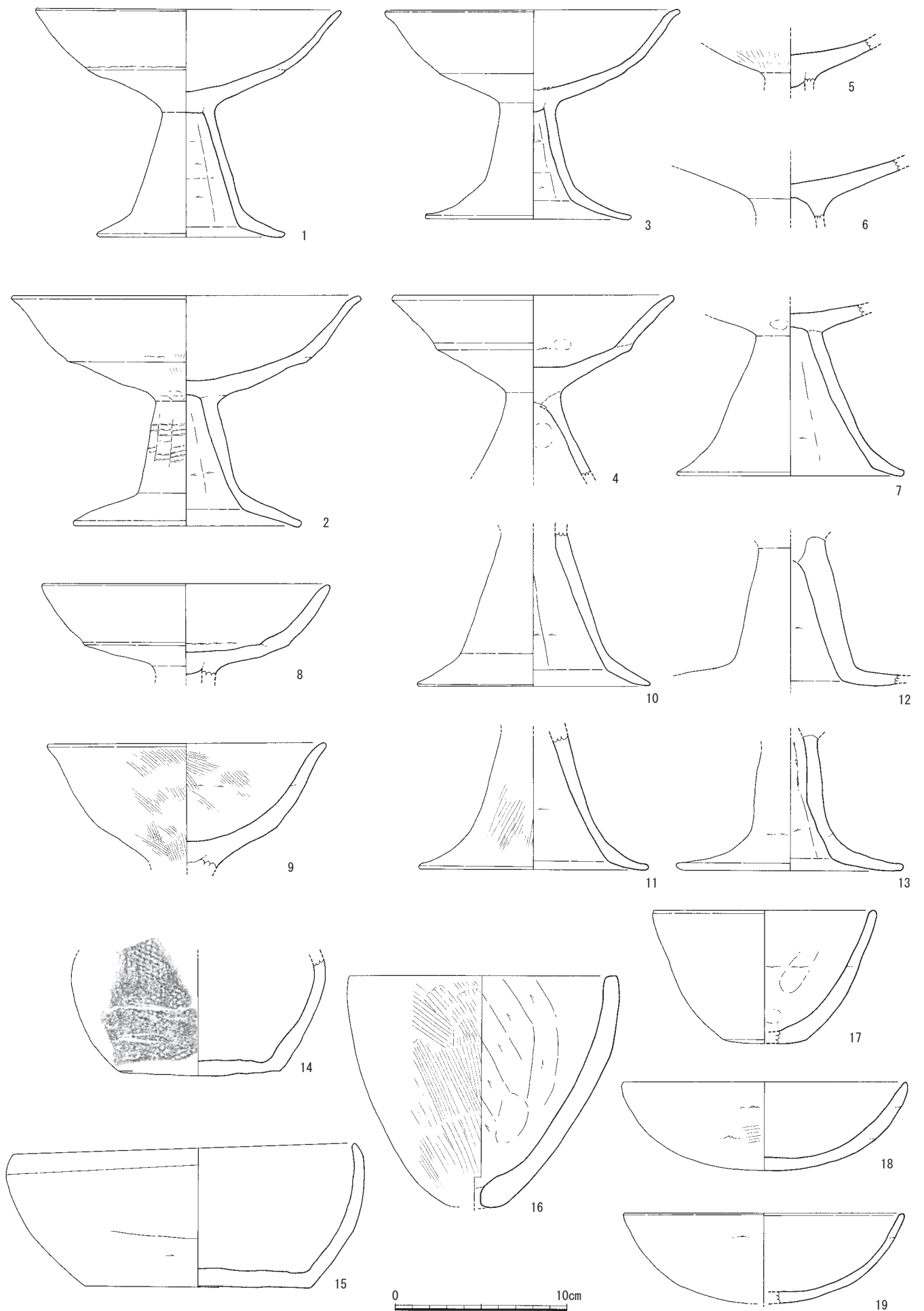
写真3 10号竖穴住居南側土層



第 18 图 10 号竖穴住居出土遺物実測図 (1) (1/3)



第 19 图 10 号竖穴住居出土遺物実測图 (2) (1/3)



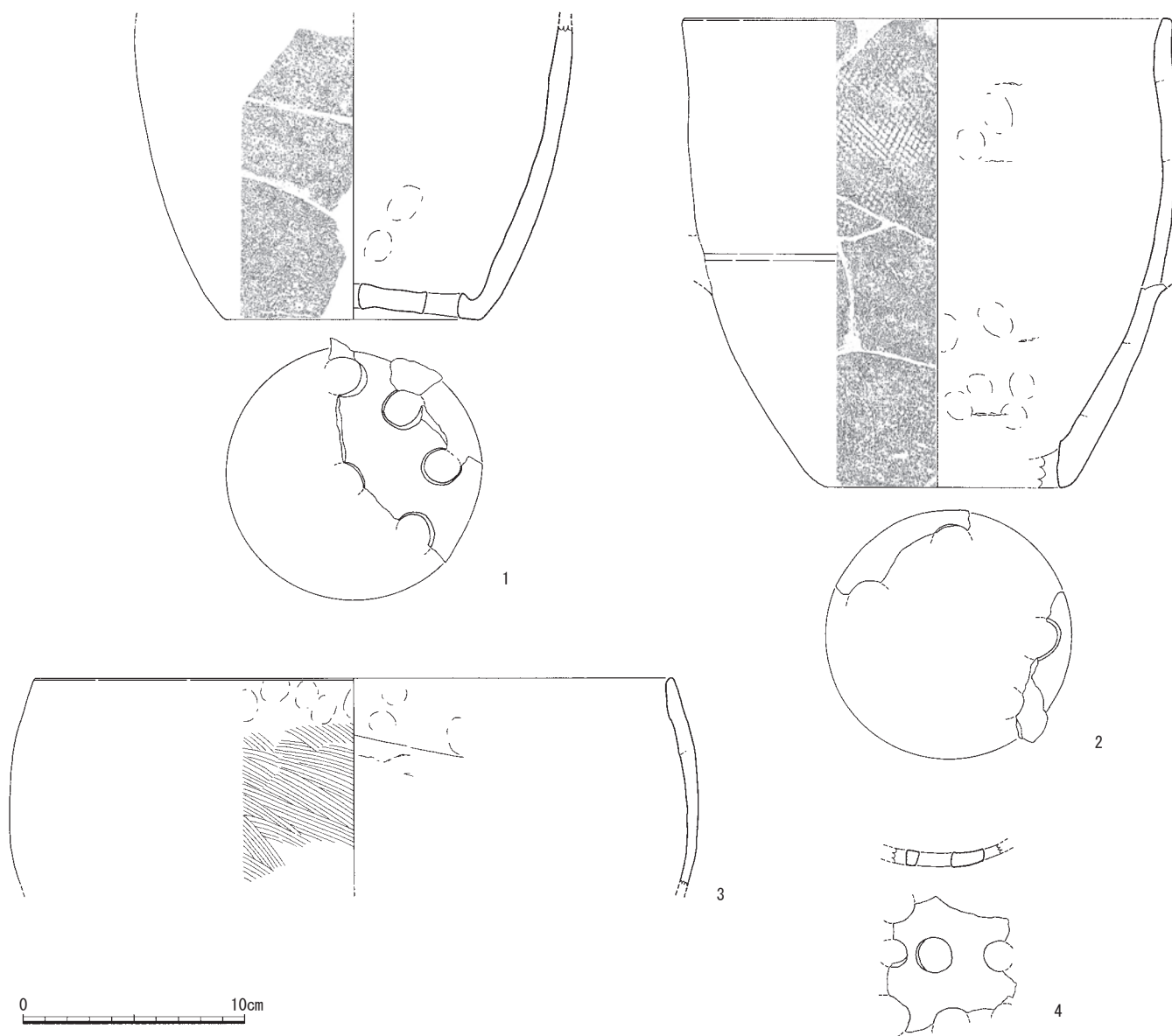
第 20 图 10 号竖穴住居出土遺物実測図 (3) (1/3)

頸部の稜は明確ではない。4は厚ぼったい口縁部が僅かに開きながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。頸部の稜は明確ではない。5は口縁部がほぼ直線的に立ち上がるが、開きはほとんどない。端部は丸く仕上げる。6は口縁部が2とほぼ同じ形態であるが、端部はやや内湾気味である。7は口縁部が開きながら立ち上がり、端部でさらに外反する。8は頸部の稜が明確でなく、胴部の張りは少ない。底部は平底気味である。以上、中型の壺は若干の形態の差こそあれ、いずれも口縁部径が胴部最大径よりも小さくなるのが指摘できる。

9～17は小型丸底壺である。9～12は口縁部が直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。

9～11が口縁部径と胴部最大径がほぼ同じであるのに対し、12は胴部が大きく張る。13～15は口縁部が直線的に開きながら立ち上がり、端部付近で内湾する。13は口縁部径が胴部最大径より小さくなり、14は反対に口縁部径が大きくなる。15は両方の径がほぼ同じである。16は胴部の張りが小さく、17は胴部が比較的大きく張る。

第20図1～13は土師器高坏である。1～3のように坏部が丸味を帯び、明確な稜を持ち、口縁端部を外反



第21図 10号竖穴住居出土遺物実測図(4)(1/3)

させるタイプや4のように直線的に開くタイプが見られる。また、坏部に稜が明確にみられ、口縁部端部を僅かに外反させる。脚部は12や13のように裾付近の屈曲部分が、ほとんど接地するものと1～2cm上で屈曲するものが見られる。また、7は脚部の中位付近がやや膨らんでおり、若干古いタイプである。

14、15、17は土師器鉢である。14は平底で外面に格子目タタキが施される、朝鮮半島系の軟質土器である。15は口縁端部をやや内湾させ、丸く仕上げる。底部は平底で、中央付近において器壁が厚くなる。17は口縁部が直線的に開き、端部を丸く仕上げる。底面はややレンズ状を呈する。16は小型の土師器甌である。口縁端部はほぼ直立し、端部は平坦に仕上げる。底部には蒸気孔が1つある。18・19は土師器坏である。いずれも端部が外反しない単口縁である。18は器壁が厚く、端部は薄く仕上げる。19は器壁が薄く、端部を丸く仕上げる。

第21図1～4は土師器甌である。1は外面に格子目タタキを施す。底部はやや上底気味である。蒸気孔は中央に1個で、その周囲に8個の孔があったとみられる。2は1とほぼ同様の形態で、外面には格子目タタキを施す。中位に把手を接合した痕跡が見られ、この位置に浅い沈線を施している。蒸気孔は多孔式で1と同様の配置、孔数か。3は胴部中位がやや膨らむ形態である。口縁端部は丸く仕上げる。4は底部である。径1.5cmほどの穿孔があり、1、2に比べ、多数の蒸気孔があるタイプと考えられる。

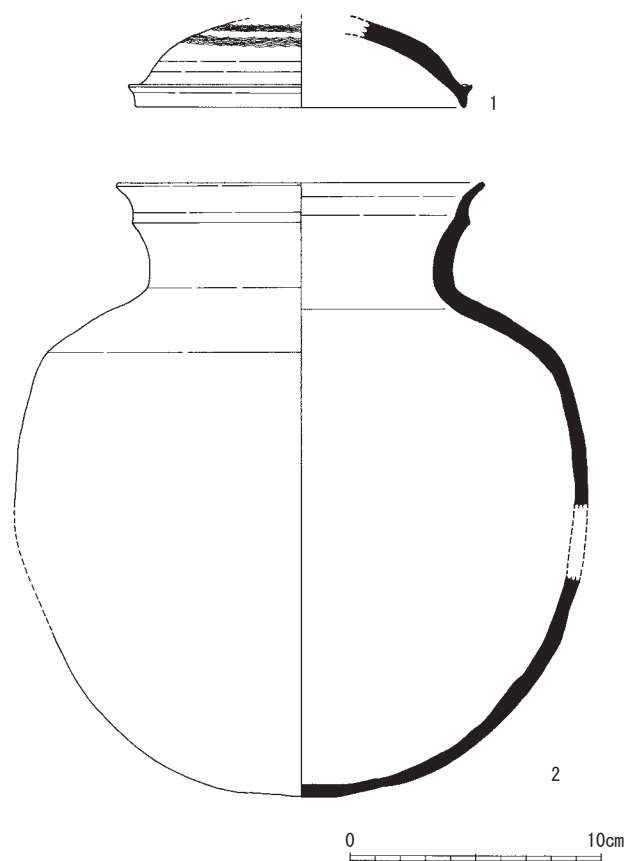
第22図1は須恵器蓋である。天井部は欠損しているため、つまみがあったか不明である。外面天井部付近には2段の波状文が施される。口縁部には受け部が見られるが、9号竪穴住居出土の蓋(第16図1)とは異なり、上方を向く。2は須恵器壺である。口縁部は緩やかに外反しながら、中位付近でやや山形に突出させている。器壁内面はやや赤褐色を呈しており、やや焼成不良の観がある。

11号竪穴住居(第23図 図版4)

10号竪穴住居とほぼ同位置で確認され、10、12～15号竪穴住居、11号土坑に切られる。平面形はほぼ正円形を呈し、規模は径約5.6m、検出面からの深さは最大約45cmを測る。住居のほぼ中央には土坑が確認された。11号土坑によって上面は削平を受けているが、規模は両軸とも約100cm、床面からの深さは約50cmと推定できる。壁際にはほぼ全周にわたり、壁周溝が巡っている。支柱穴はP1～P4の4本とみられ、深さは床面から70～90cmを測る。

出土遺物(第24図 図版32)

1～6は弥生土器甕である。1は口縁が大きく外に開き、端部を丸く仕上げる。胴部はほとんど張らない。2～6は何れも外底面をやや上底気味に成形する。6の内面には工具によるナデが施される。



第22図 10号竪穴住居出土遺物実測図(5)(1/3)

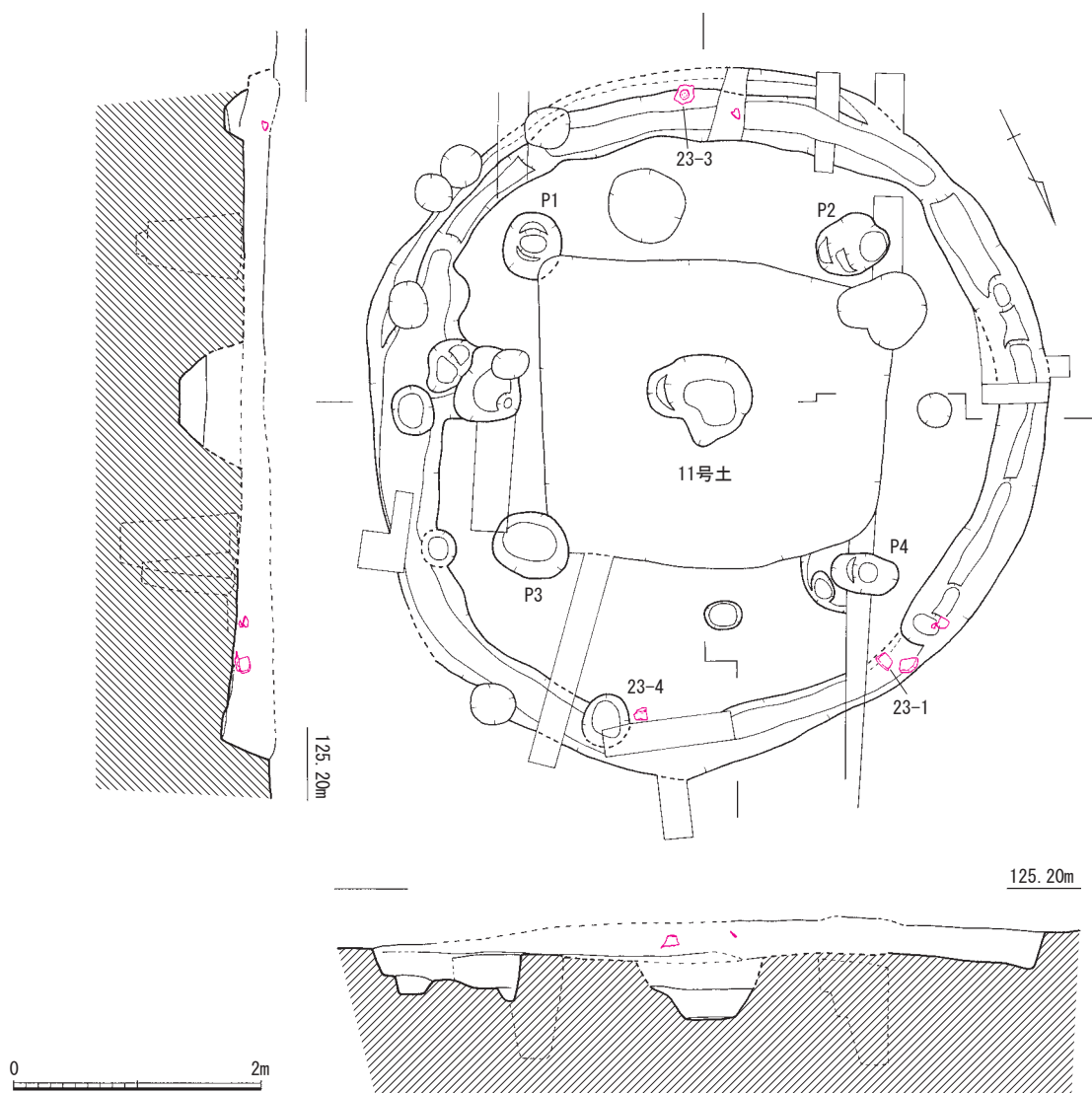
12～14号竪穴住居（第25図 図版9）

7号竪穴住居の西側で確認され、大部分が8～10、15、20号竪穴住居に切られる。このため、西側の壁と壁周溝とみられる溝がごく一部に確認された程度であるが、平面形は歪な円形を呈するとみられ、規模は東西方向で約11.5mを測る。支柱穴になるとみられるピットから少なくとも3軒の住居の存在が想定される。

12号竪穴住居は、P1～P12の12本が支柱穴と考えられ、床面からの深さは約45～100cmを測る。13号竪穴住居はP13～P23の11本が支柱穴になると考えられ、床面からの深さは約30～95cmを測る。14号竪穴住居は西側に展開するP24～28の5本が少なくとも支柱穴になるとみられるが、東側に展開する柱穴は確認できなかった。柱穴の床面からの深さは約40～75cmを測る。

これらに柱穴が掘り込まれる床面までの深さは検出面から約45～60cmを測る。さらに中央付近には土坑があり、住居に伴う中央土坑になるとみられる。平面形は不定形で規模は約2.5m×約1.5m、床面からの深さは最大約45cmを測る。また、炉跡と判断できる焼土等は確認できなかった。

これらの住居の切り合い関係を明確に示すのが難しいが、12号→13号→14号の順番で住居の規模を拡大していったものと思われる。また、この他に柱穴とみられるピットが存在するが、支柱穴として展開を確認するこ



第23図 11号竪穴住居実測図（1/60）

とができなかった。そのため、さらに1ないし2軒ほど存在する可能性はある。

出土遺物 (第26図 図版32)

1・2は弥生土器甕である。1は頸部下部に断面三角形の突帯を貼り付ける。2は跳ね上げ口縁である。3は弥生土器壺である。4、5は弥生土器器台で、同一個体の可能性もある。6、7は弥生土器蓋である。6は口縁端部を肥厚させる。

8、10～14は弥生土器甕の底部である。10が平底になっている以外は、何れも上げ底である。9は土師器高坏の坏部である。口縁端部をわずかに外反させ、丸く仕上げる。

15号竪穴住居 (第27図 図版9)

9号竪穴住居と10号竪穴住居の間で確認され、10、12～14、16、17号竪穴住居を切り、8～10、20号竪穴住居に切られる。削平や掘り過ぎのため、ラインは1/3程度しか残っていないが、平面形はほぼ正方形を呈するとみられ、規模は残っている部分で約6.0m×約6.0m、検出面からの深さは最大15cmを測る。主柱穴は床の南寄りにあるP1・P2の2本と考えられ、深さは床面から45、60cmを測る。P1・P2間には炉跡が見られる。また、壁際には部分的に周溝が巡っている。

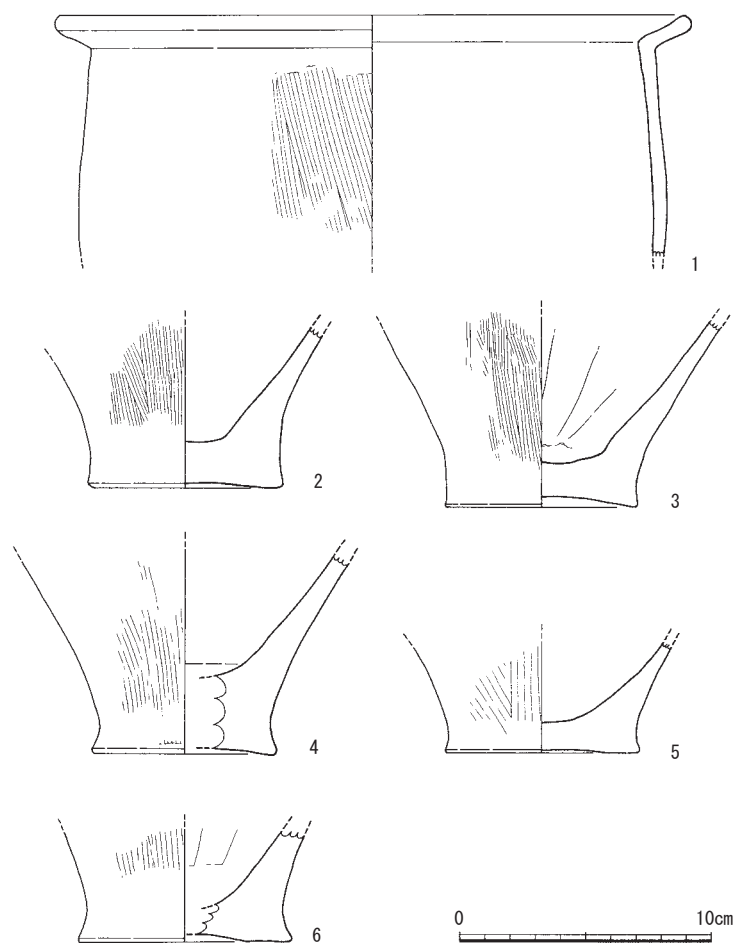
出土遺物 (第28図 図版32)

1・2・4・5は弥生土器甕である。1は口縁部がやや外反気味に開き、端部は四角く仕上げる。2は口縁部があまり開かず、端部は丸く仕上げる。4はわずかにレンズ状を呈する底部である。胴部の張りは少ない。3は弥生土器高坏である。内面にはシボリ痕が見られる。

16・17号竪穴住居 (第29図 図版9・10)

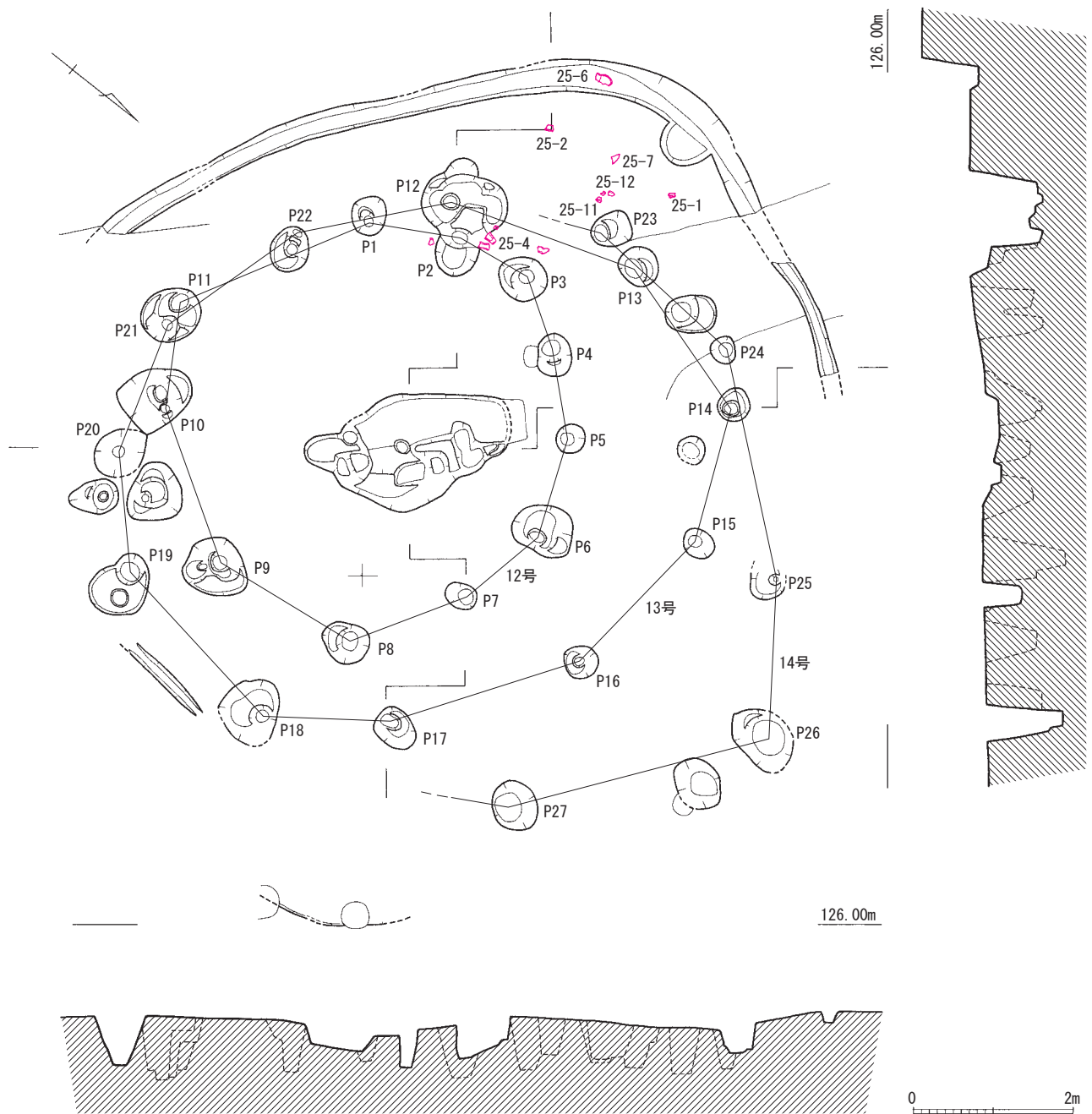
15号竪穴住居の北東側で確認され、15・18号竪穴住居に切られる。16号竪穴住居の南隅から約0.8m外側に段が見られたため、さらに1軒の住居の存在を想定して、17号竪穴住居とした。また、北東壁は削平を受けているものの、現状の規模は約5.6m×約4.6m+α、検出面からの深さは最大約25cmを測る。床面の中央からやや南東寄りに主柱穴とみられるピット(P1・P2)が確認され、その深さは床面から35～40cmを測り、その間に炉跡がみられる。また南東壁際には屋内土坑が掘り込まれ、土坑付近に壁周溝が巡っている。

遺物は炉跡と屋内土坑との間で多く出土している。



第24図 11号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

第24図 11号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

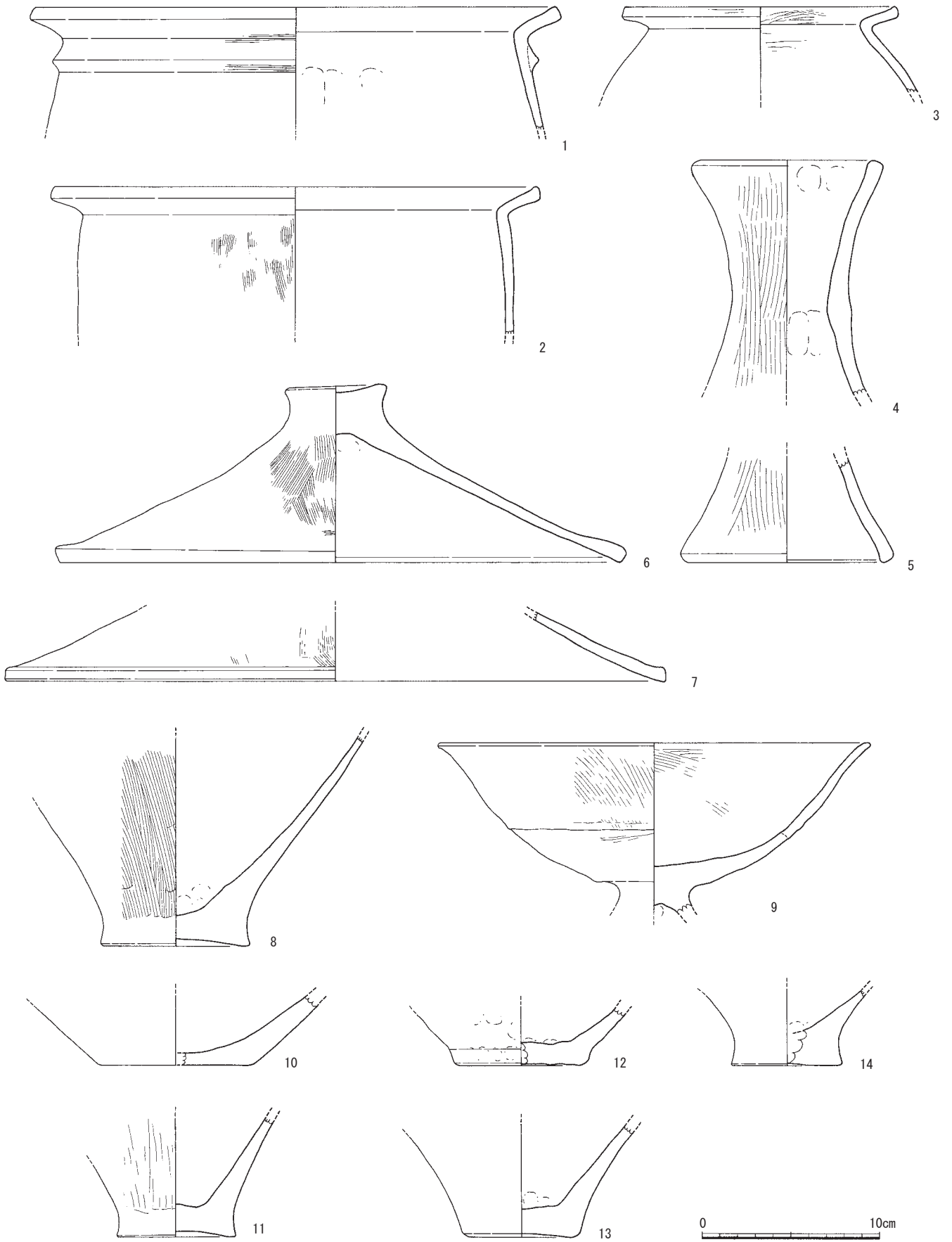


第25図 12～14号竪穴住居実測図 (1/80)

出土遺物 (第30～32図 図版32・33)

第30図1～9は弥生土器甕である。1は底部がレンズ状を呈し、口縁部は大きくは開かない。口縁端部を丸く仕上げる。2、3は口縁部が大きく開き、口縁端部は四角く仕上げる。また、2の胴部は3に比べて張りが小さい。4は口縁部がやや外反しながら開く。5はレンズ状の底部を呈する。また、6は平底、7～9は上底である。

第31図1～6は弥生土器壺である。1は頸部から口縁部にかけて丸味を帯びながら外反し、端部をやや窪ませている。胴部はあまり張らない。2、3は口縁部が緩やかに外反しながら開く。2は端部をやや肥厚させ、沈線が見られる。3は端部を丸く仕上げる。また、2、3ともに頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。4は胴部が楕円形気味に張り、底部はレンズ状を呈する。5は断面M字形の突帯に斜め方向の刻み目を施す。6は底部が



第26图 12~14号竖穴住居出土遗物实测图 (1/3)

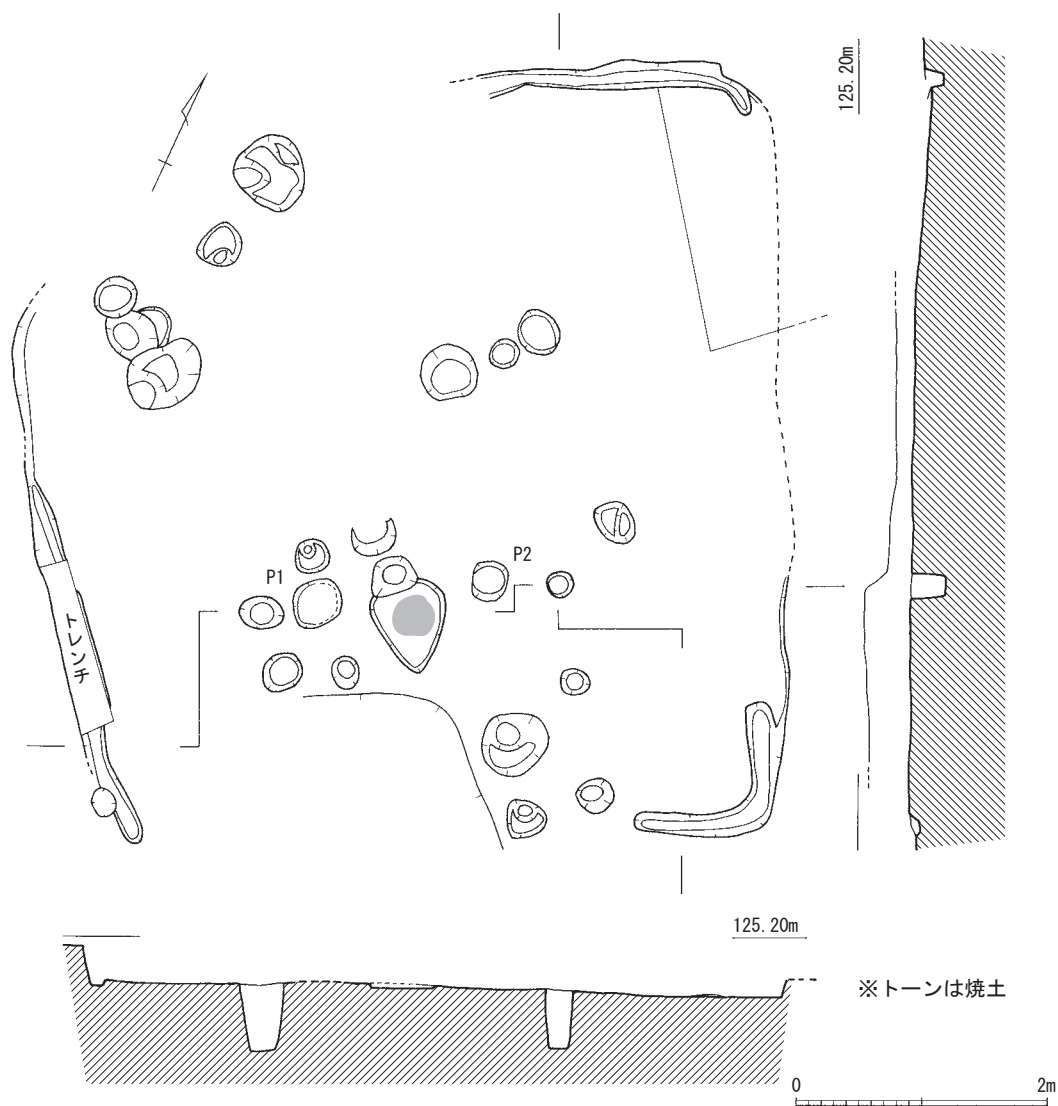
レンズ状を呈する。

7～11は弥生土器鉢である。7は口縁がやや波状を呈し、端部を丸く仕上げる。底部は平底である。8は器壁が厚い。9は口縁端部を四角く仕上げ、底部はレンズ状を呈する。10、11は口縁端部をやや内湾させ、端部を丸く仕上げる。底部はレンズ状を呈する。また、10は内面に暗文を施す。

第32図1～5は弥生土器高坏である。1は鋤先状の口縁部を呈する。口縁上面はやや窪み、端部を丸く仕上げる。2は坏部が中位付近から大きく内湾し、端部を僅かに上方につまみ上げている。3～5は高坏である。3は口縁部が大きく開く。4は口縁部があまり開かず、3に比べて、坏部は深く、接合部は太い。5は脚部が坏部との接合部から開かず、裾近くで開き、端部は薄く仕上げる。

18号竖穴住居（第33図 図版10・11）

8号竖穴住居と16・17号竖穴住居の間で確認され、16・17号竖穴住居・1号甕棺墓を切る。平面形は長方形を呈し、規模は長軸が約2.5m、短軸は掘り過ぎているものの、想定ラインで約2.0mを測る。また、深さは検出面より約30cmである。床面にはいくつかのピットが見られ、中央付近のP1が主柱穴となる可能性がある。



第27図 15号竖穴住居実測図 (1/60)

床面からの深さは、約 55 cm である。炉跡や壁周溝は確認されなかった。

出土遺物 (第 34 図 図版 33)

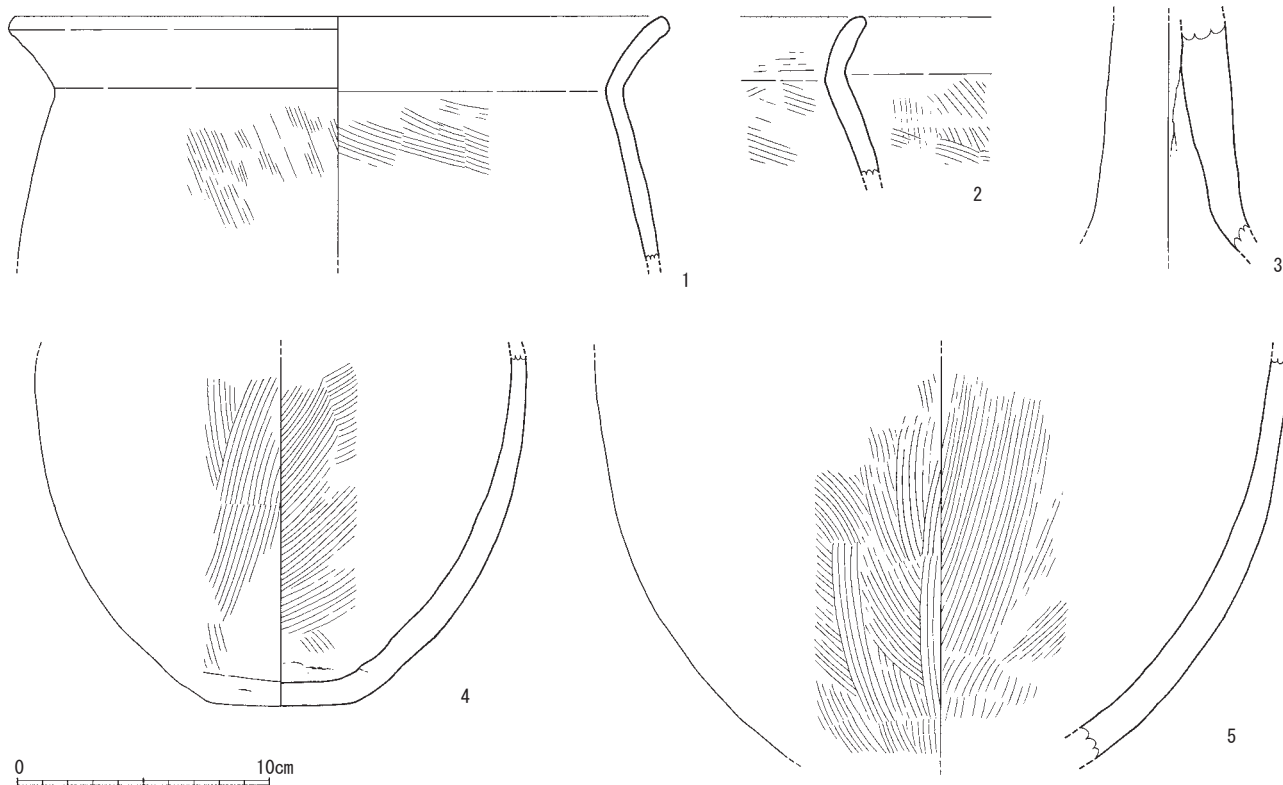
1・2 は弥生土器甕である。長胴タイプで、底部はレンズ状を呈する。口縁部は直線的に開く。2 は丸底である。3 は弥生土器高坏である。一見、器台と思われるが、内面に坏部を接合する。脚端部はやや内湾し、沈線状に窪ませる。

19 号竪穴住居 (第 33 図 図版 11)

10 号竪穴住居西側で確認され、24 号竪穴住居を切る。南西側は調査区外へと広がり、1 次調査区の SH27 にあたる。平面形は方形を呈し、規模は北東壁で約 4.0 m、これに直交する北東-南西軸で 2 次調査区内は約 1.9 m を測る。床面には焼土やピットがいくつか見られるが、この住居に伴う炉跡や主柱穴となるか、不明である。また、壁際には南東側から北側にかけて、壁周溝が巡っている。

出土遺物 (第 35 図 図版 33)

1、2、4、7～10 は弥生土器甕である。1 は口縁部が大きく開き、端部を跳ね上げる。2 は口縁部が緩やかに外反し、端部を丸く仕上げる。4 は口縁部が大きく外反しながら開く。胴部は球形を呈し、底部は丸底である。3 は弥生土器複合口縁壺である。口縁上部は屈曲部より外反しながら立ち上がる。端部は丸く仕上げる。5、6 は弥生土器高坏である。5 は脚部が柱状を呈し、端部近くで外に開くが、その部分に 7 箇所穿孔が施される。一方、6 は坏部との接合部から直線的に大きく開く。7 は底部が平底を呈する。8～10 の甕底部は何れも上げ底である。



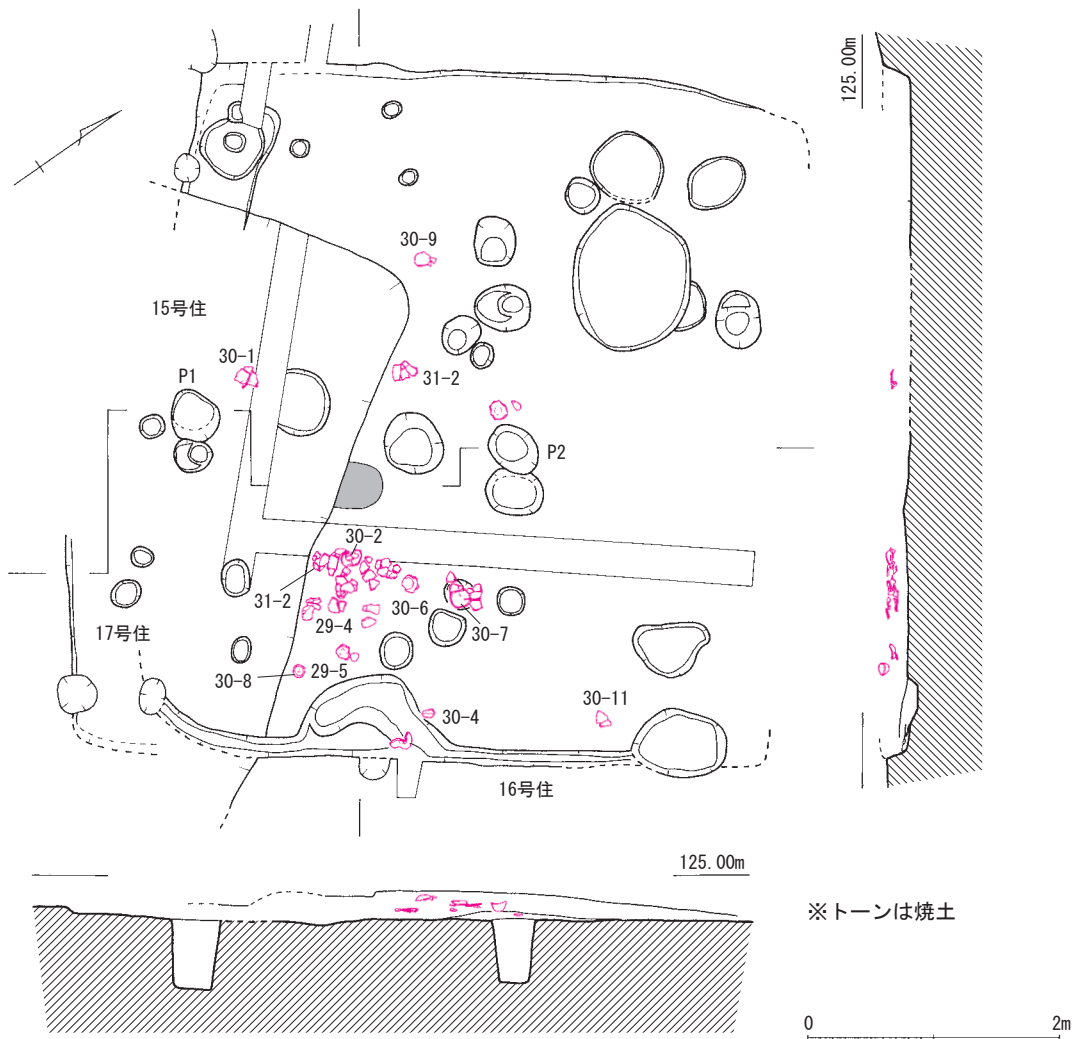
第 28 図 15 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

20号竪穴住居（第36図 図版11・12）

9号竪穴住居と10号竪穴住居の間で確認され、12～15号竪穴住居を切り、9、10号竪穴住居に切られる。この住居については、当初は確認できず、周辺の住居を掘り下げる過程でカマドを検出したため、住居の存在を確認した。よって、周辺の壁の大部分は掘り過ぎてしまっているため、平面形及び規模については不明である。主柱穴はP1～P4と考えられ、深さは床面から40～60cmである。

カマドは南西壁の内側に付設される。袖及び袖石、支脚はいずれも残っていた。袖は暗褐色及び褐色系の粘土を使用しており、左袖が約70cm、右袖が約70cm、袖間の幅は奥壁側が約40cm、袖石側が約55cmを測る。左袖石は板状の石材を利用し、やや内傾しているものの、ほぼ原位置を保っているものと思われる。右袖石は左側と同様に板石を利用しているが、袖の外側に倒れている。袖内には棒状の石材を利用した支脚、その手前には天井石に使用していたとみられる板石が割れて落ち込んでいた。支脚の前面から左右袖間が被熱しており、火床面となる。

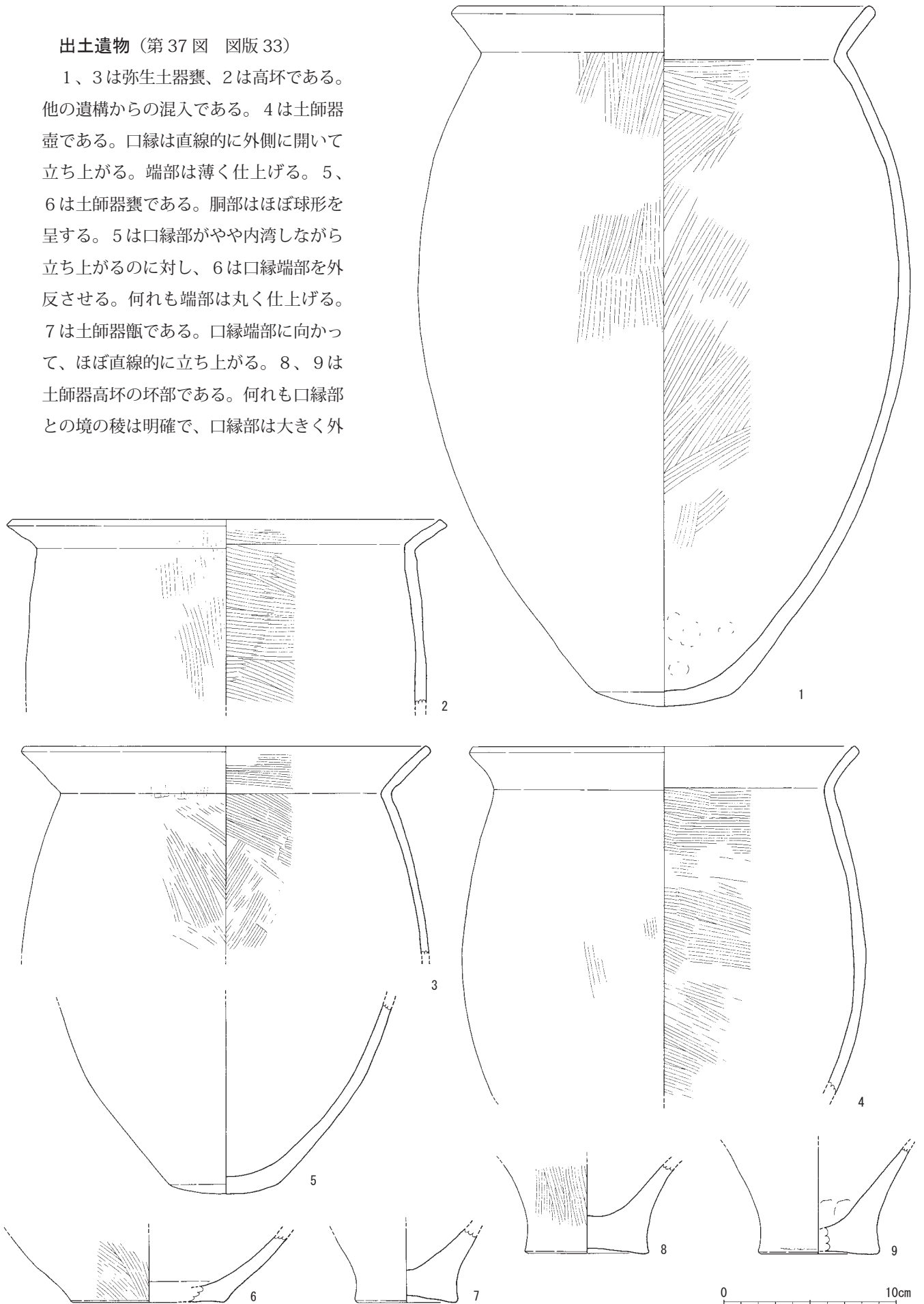
また、2層が天井の崩落に伴う土層と考えられ、この層が袖内にしか存在しないことから、内側への引き倒しによるカマド祭祀が行われた痕跡が窺える。ただし、2層と火床面の間には暗褐色土（3層）が1枚堆積していることから、カマド廃棄後、ある程度時間をおいて祭祀を行った可能性がある。



第29図 16・17号竪穴住居実測図（1/60）

出土遺物（第37図 図版33）

1、3は弥生土器甕、2は高坏である。他の遺構からの混入である。4は土師器壺である。口縁は直線的に外側に開いて立ち上がる。端部は薄く仕上げる。5、6は土師器甕である。胴部はほぼ球形を呈する。5は口縁部がやや内湾しながら立ち上がるのに対し、6は口縁端部を外反させる。何れも端部は丸く仕上げる。7は土師器甑である。口縁端部に向かって、ほぼ直線的に立ち上がる。8、9は土師器高坏の坏部である。何れも口縁部との境の稜は明確で、口縁部は大きく外

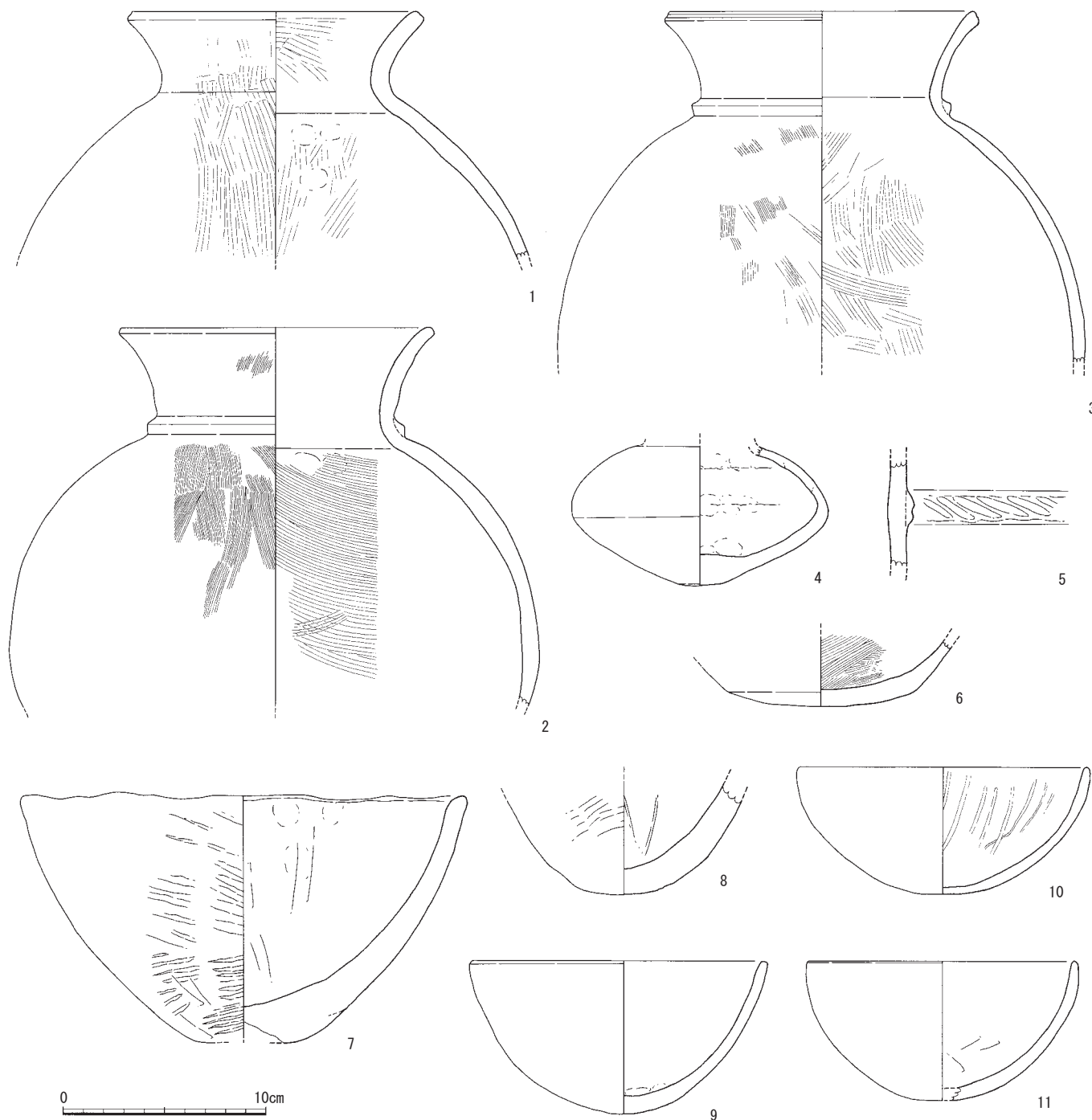


第30図 16・17号竪穴住居出土遺物実測図（1）（1/3）

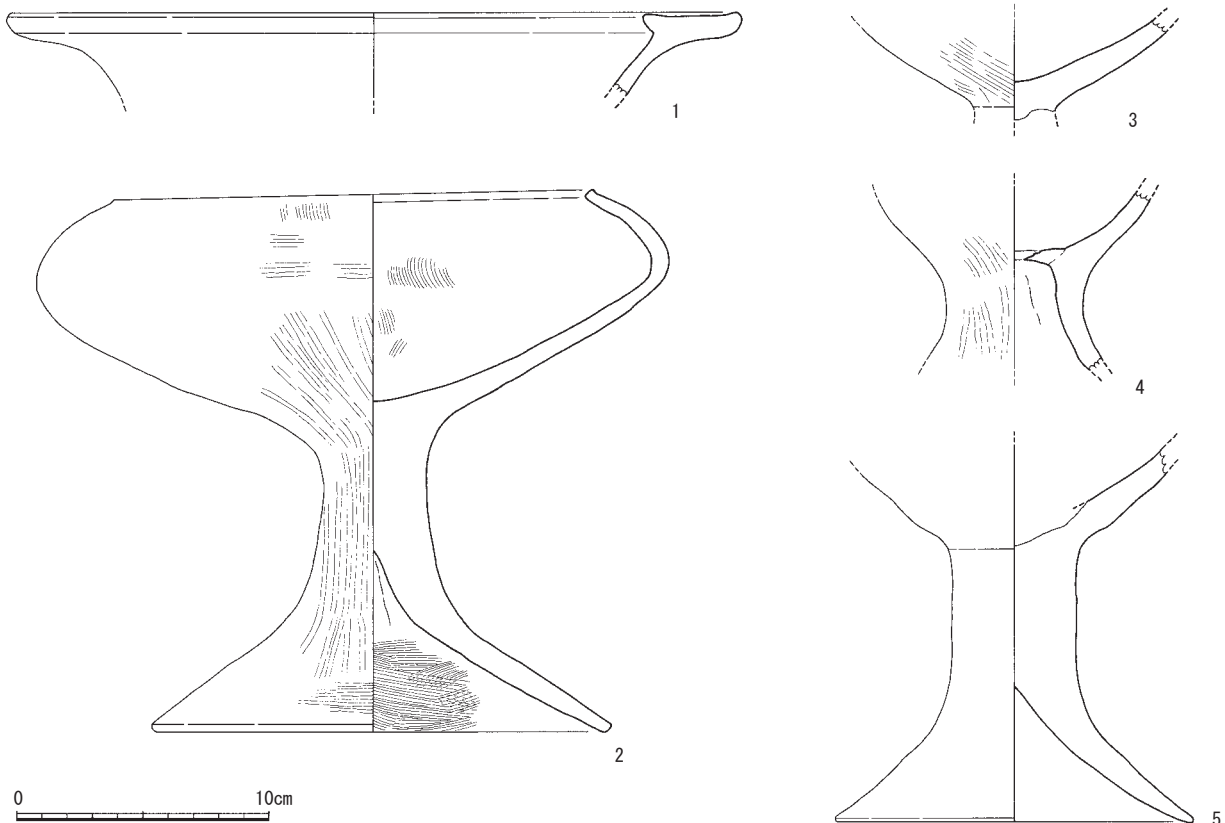
に開きながら立ち上がり、端部を僅かに外反させる。

21号竪穴住居（第38図）

11号竪穴住居の北側で確認され、22号竪穴住居を切り、7号土坑に切られる。北側は削平を受けているが、平面形は長方形を呈すると思われ、規模は約3.0m×約3.0m+α、遺構面からの深さは約20cmを測る。床面のほぼ中央には焼土が見られるが、炉跡の可能性はある。この他、床面に見られるピットが支柱穴になるかどうかは不明である。また、西壁から南壁にかけて、壁周溝が巡る。



第31図 16・17号竪穴住居出土遺物実測図（2）（1/3）



第 32 図 16・17 号竪穴住居出土遺物実測図 (3) (1/3)

出土遺物 (第 39 図)

1 は土師器甕である。口縁は緩やかに外反し、端部を丸く仕上げる。

22 号竪穴住居 (第 40 図)

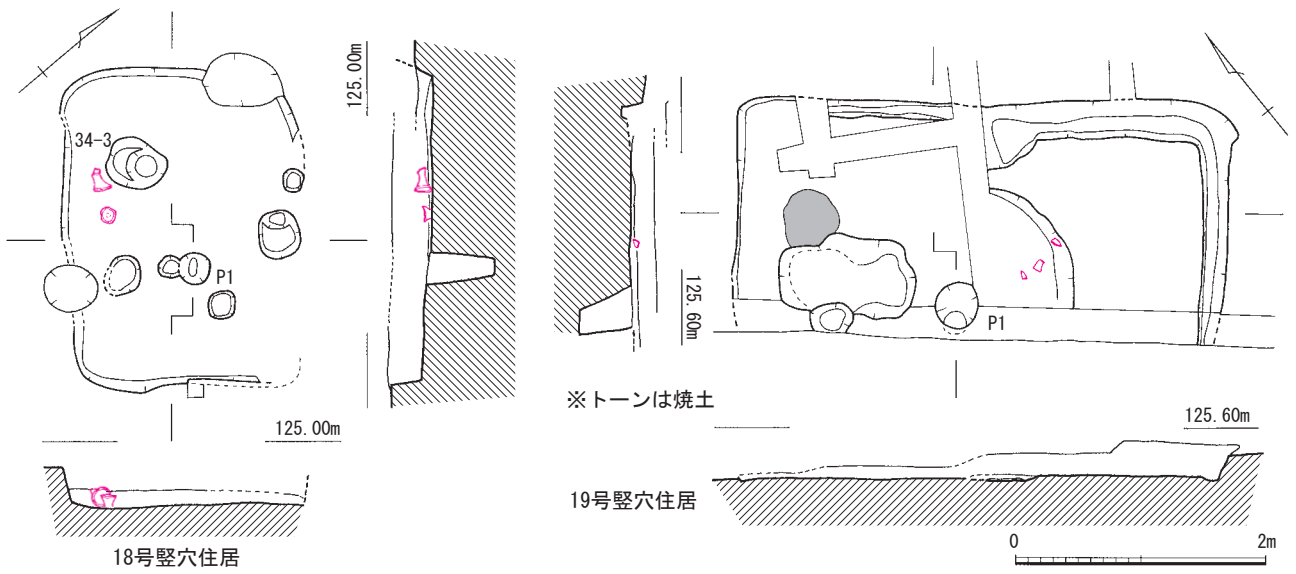
21 号竪穴住居の東側で確認され、この住居に切られる。北東側は削平を受けているが、平面形は方形を呈するとみられる。規模は南西壁で約 1.3 m、南東壁で約 1.1 m、検出面からの深さは最大約 20cm を測る。住居内には焼土やピットがみられるが、炉跡や支柱穴になるか、不明である。この他、壁周溝等は確認されなかった。

出土遺物 (第 42 図 1～3)

1 は土師器椀である。内底面まで深く、口縁端部を薄く仕上げる。2 は土師器甕の底部である。3 は土師器高坏である。坏部下位に稜線が明確に見られる。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部でさらに外に開く。端部は丸く仕上げる。

23 号竪穴住居 (第 41 図 図版 12)

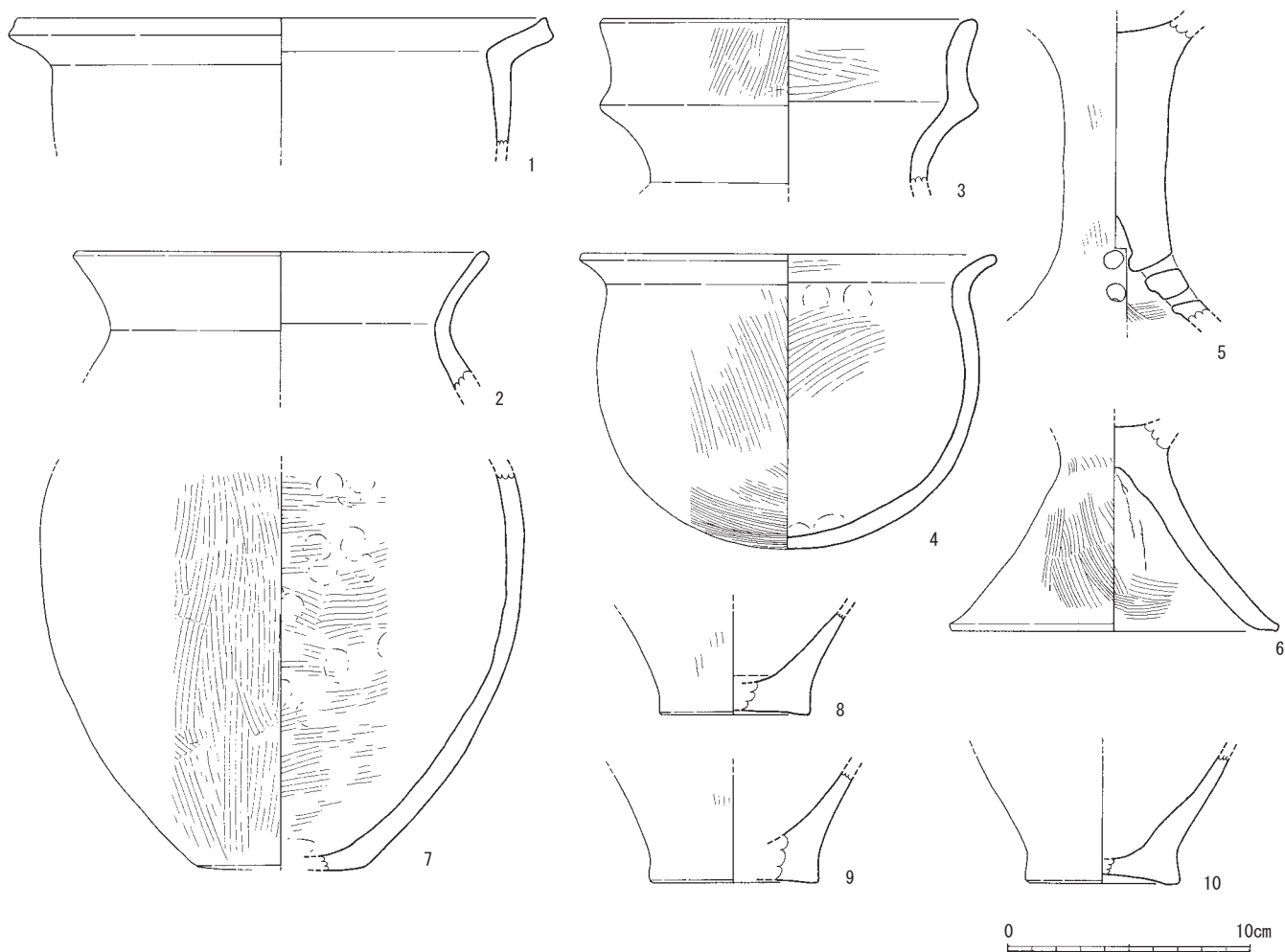
19 号竪穴住居の北東隣りで、この住居とほぼ軸を揃えて検出され、10、24 号竪穴住居に切られる。西側を 10 号竪穴住居により切られているものの、平面形は長方形を呈していることがわかる。規模は約 5.3 m×約 4.8 m、検出面からの深さは最大約 30 cm を測る。支柱穴は住居の軸とずれ、やや歪になるものの、P 1～P 4 の 4 本と推定され、これらの床面からの深さが約 50～70 cm を測る。また、床面中央からやや南西より見られる焼土が炉跡とみられ、南西壁中央には屋内土坑が掘り込まれる。この他、壁際には北側の一部を除き、周溝が巡る。



第33図 18・19号竖穴住居実測図 (1/60)



第34図 18号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)



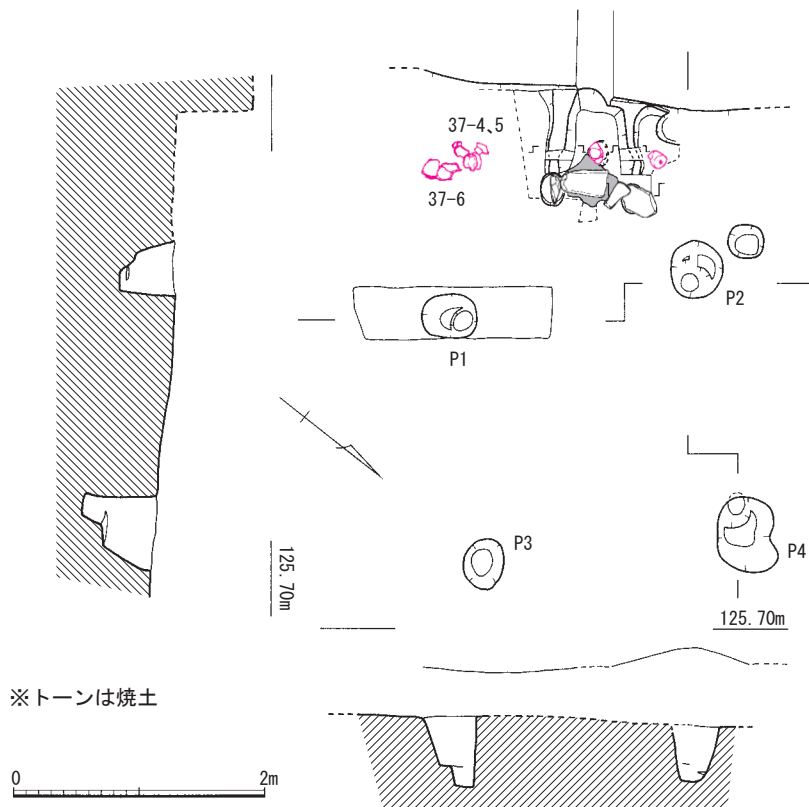
第35図 19号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第42図4~12 図版33)

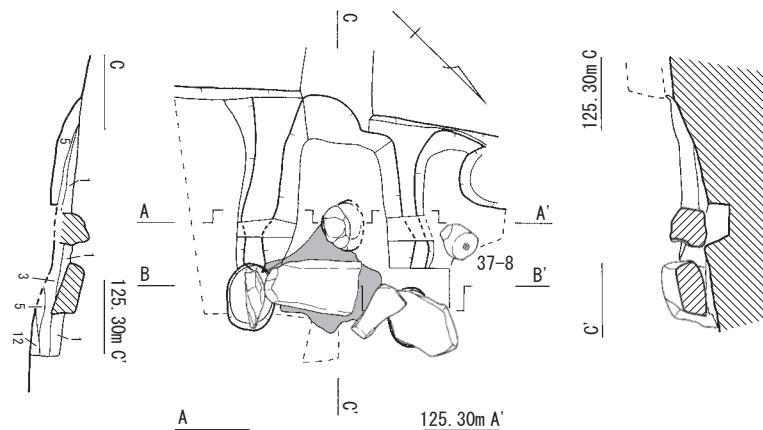
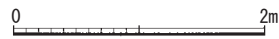
4~7は弥生土器甕である。4はいわゆる長胴甕である。口縁部は直線的に開き、端部は肥厚させる。胴部径は中位付近で最大となり、底部は丸底を呈する。5は口縁部がやや外反しながら立ち上がり、端部は四角く仕上げる。4と同じく長胴甕か。6は三角口縁、7は跳ね上げ口縁の甕である。8は弥生土器壺である。頸部に断面三角形の低い突帯を貼り付ける。9は弥生土器高坏である。坏部との接合部よりやや下位から、裾部に向かって開く。10は弥生土器甕の底部で、平底である。11は土師器坏である。口縁端部は薄く仕上げる。12は土師器甕である。底部から胴部にかけて、器壁の厚さはほぼ同じである。

24号竪穴住居 (第43図 図版13)

19号竪穴住居の北側で確認、これに切られ、23号竪穴住居と13号土坑を切る。住居の南隅は19号竪穴住居に切られ、北側は削平を受けているが、平面形はほぼ正方形を呈すると思われる。規模は約4.4m×約4.4m、検出面からの深さは最大20cmを測る。調査時点では、調査区外へは広がらないと判断したが、1次調査の遺構図と照らし合わせると、SH28と繋がる可能性も考えられる。その場合、南西-北東軸が約2m長くなり、約6.4mとなる。支柱穴は、床面中央よりやや南西にあるP1、P2の可能性が高く、床面からの深さは約30~50cmである。炉跡については、一部焼土がみられるものの、確実なものは存在しない。この他、壁周溝や屋内土坑などの施設は確認されなかった。また、この住居は検出段階で、大量の焼土と炭化材が検出されており、その状況から焼失したものと思われる。

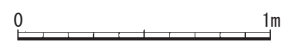
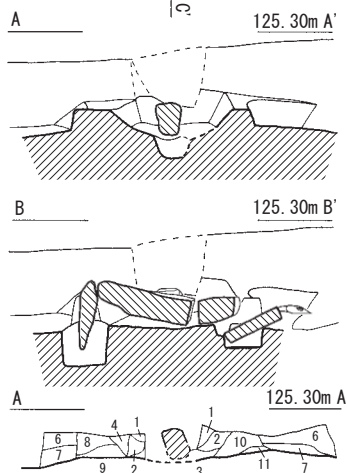


※トーンは焼土



20住カマド

- | | | |
|-----|--------|----------|
| 1層 | 淡褐色土 | |
| 2層 | 褐色土 | 焼土塊多く含む |
| 3層 | 暗褐色土 | 焼土・炭少量含む |
| 4層 | 褐色土 | |
| 5層 | 赤褐色土 | 火床面、焼土層 |
| 6層 | 淡褐色土 | 住居埋土 |
| 7層 | 淡黒褐色土 | 住居埋土 |
| 8層 | 褐色粘質土 | 袖 |
| 9層 | 暗褐色粘質土 | 袖 |
| 10層 | 褐色粘質土 | 袖 |
| 11層 | 暗褐色粘質土 | 袖 |
| 12層 | 未注記 | 住居埋土 |



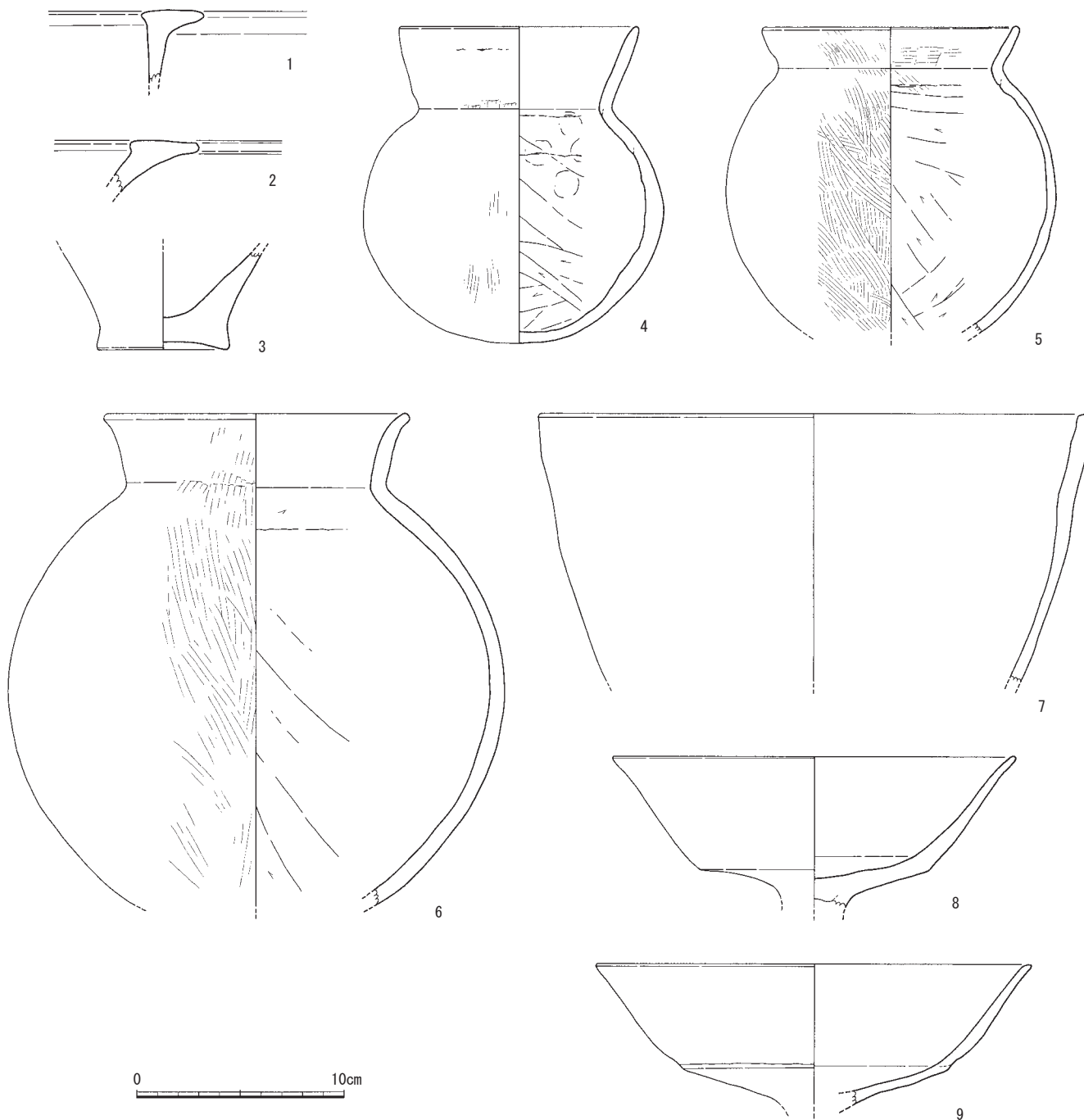
第36図 20号竖穴住居実測図(1/60)及びカマド実測図(1/30)

出土遺物 (第 44 図 図版 33)

1・2は弥生土器甕である。1は逆「L」字形口縁である。低い断面M字形の突帯を貼り付ける。2は底部である。わずかに上げ底気味である。3は土師器高坏である。坏部下部に明瞭な稜がり、口縁部は端部付近を外反させる。脚部は接合部から裾に向かって開く。裾付近には稜を持たず、端部をやや肥厚させる。混入品である。

25号竪穴住居 (第 45 図 図版 13・14)

23号竪穴住居の北側で確認され、26号竪穴住居を切る。平面形は長方形を呈し、規模は約3.6m×約3.2m、検出面からの深さは最大約30cmを測る。支柱穴はP1～P4の4本と考えられる。なお、床面については明確な貼床が確認できず、地山との区別が判断できなかったことから、ベルト部分を残して20cmほど掘り過ぎてし



第 37 図 20 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

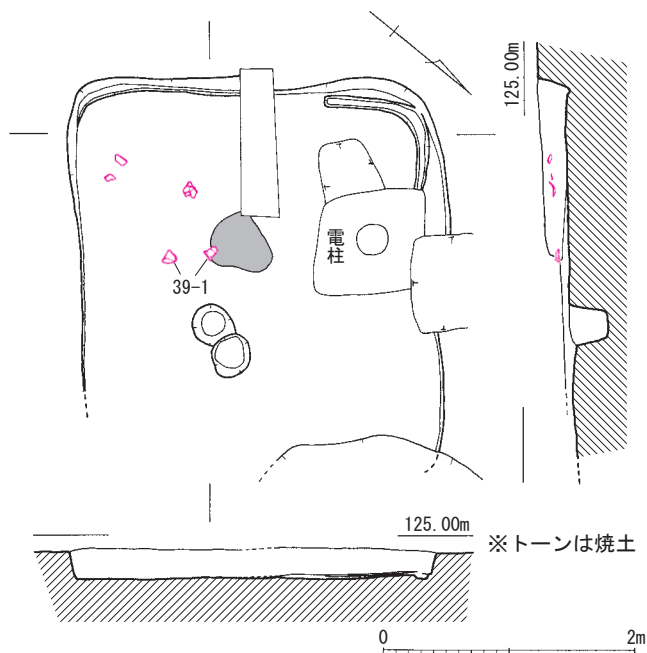
まっている。なお、P 1～P 4の深さは床面から約 30～40 cmと推定できる。

カマドは住居北西壁の内側に付設され、袖及び高環を転用したとみられる支脚が残っていた。袖は暗茶褐色粘質土を使用しており、左袖が約 70 cm、右袖が約 60 cm、袖間の幅は奥壁側で約 35 cm、袖石側で約 50 cm測る。両袖の前面には袖石の抜取り痕が確認された。支脚の前面から左右袖間が被熱しており、火床面となる。また、高環に関しては、床面から約 10 cm浮いた状態で確認されたが、廃棄時の祭祀に伴うかは不明である。

出土遺物 (第 46 図 図版 33・34)

1 は土師器壺である。口縁部は僅かに外に開いて立ち上がり、端部は薄く仕上げる。胴部最大径はやや上位に位置する。2～4 は土師器甕である。2 は底部が尖り気味になる。全体的に器壁が厚い。3 は胴部最大径がやや上位に位置しそうである。4 は口縁部が外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。5 は弥生土器甕である。口縁端部をやや肥厚させる。混入品である。6 は土師器鉢である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。底部はやや丸味を帯びる。7、8 は土師器杯である。7 は単口縁で端部を丸く仕上げる。8 は口縁端部を外反させる。9 は土師器高環である。カマド出土。環部は大きく外側に開き、さらに端部を外反させる。環部下部の接合部は明確な稜が見える。脚部は接合より外に開き、裾部内面で設置し、端部を跳ね上げている。また脚部中に 1ヶ所の穿孔がある。

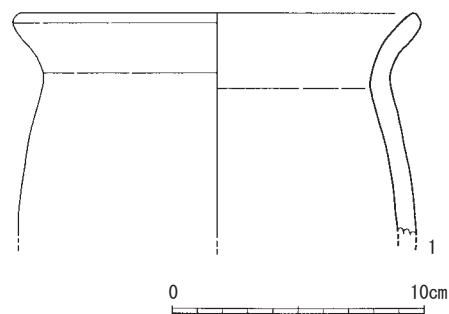
10 は土師器甕である。胴部は丸味を帯びながら立ち上がり、把手の有無は定かではない。底部は平底である。底面には円形とみられる蒸気孔が 2 個あるが、その配置から底面周縁に 8～10 個配置されていたと思われる。他の竪穴住居から出土した土師器甕と同様の配置の蒸気孔なら、中央にも 1 個穿たれていた可能性がある。11・12 は手捏土器である。ともに丁寧な作りである。11 は口縁端部を薄く仕上げ、やや内湾させる。



第 38 図 21 号竪穴住居実測図 (1/60)

26 号竪穴住居 (第 47 図 図版 14)

25 号竪穴住居の北側で確認され、この住居に切れ、36 号竪穴住居を切る。また、溝状の掘り込みが南西側から北東側へ向かって、住居を縦断している。しかし、平面形はほぼ正方形を呈し、規模は約 5.3 m×約 5.3 mであることがわかり、検出面からの深さは最大約 30 cmを測る。支柱穴は P 1～P 4の 4 本とみられ、床面からの深さは 35～50 cmである。床面の南東壁際には屋内土坑が付設される。また、炉跡については確認できなかったが、溝状の掘り込みのため、削平されたと考えられる。この



第 39 図 21 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

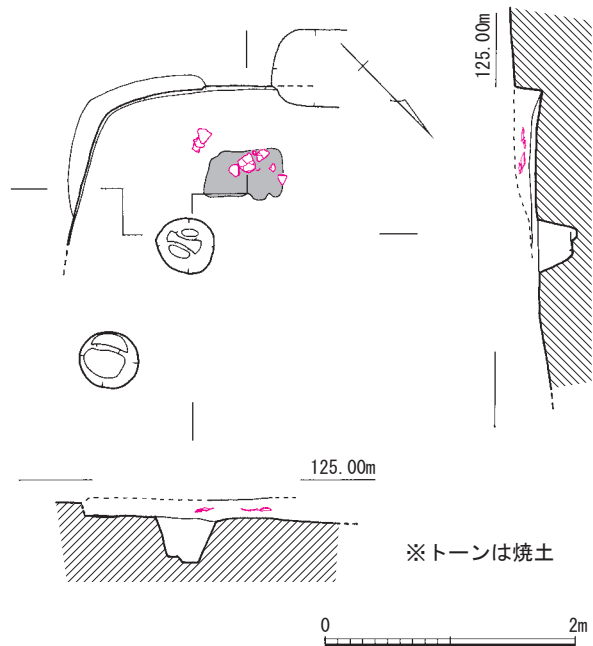
ほか、壁周溝は東壁から南東壁にかけての一部で検出された。

出土遺物 (第 48 図)

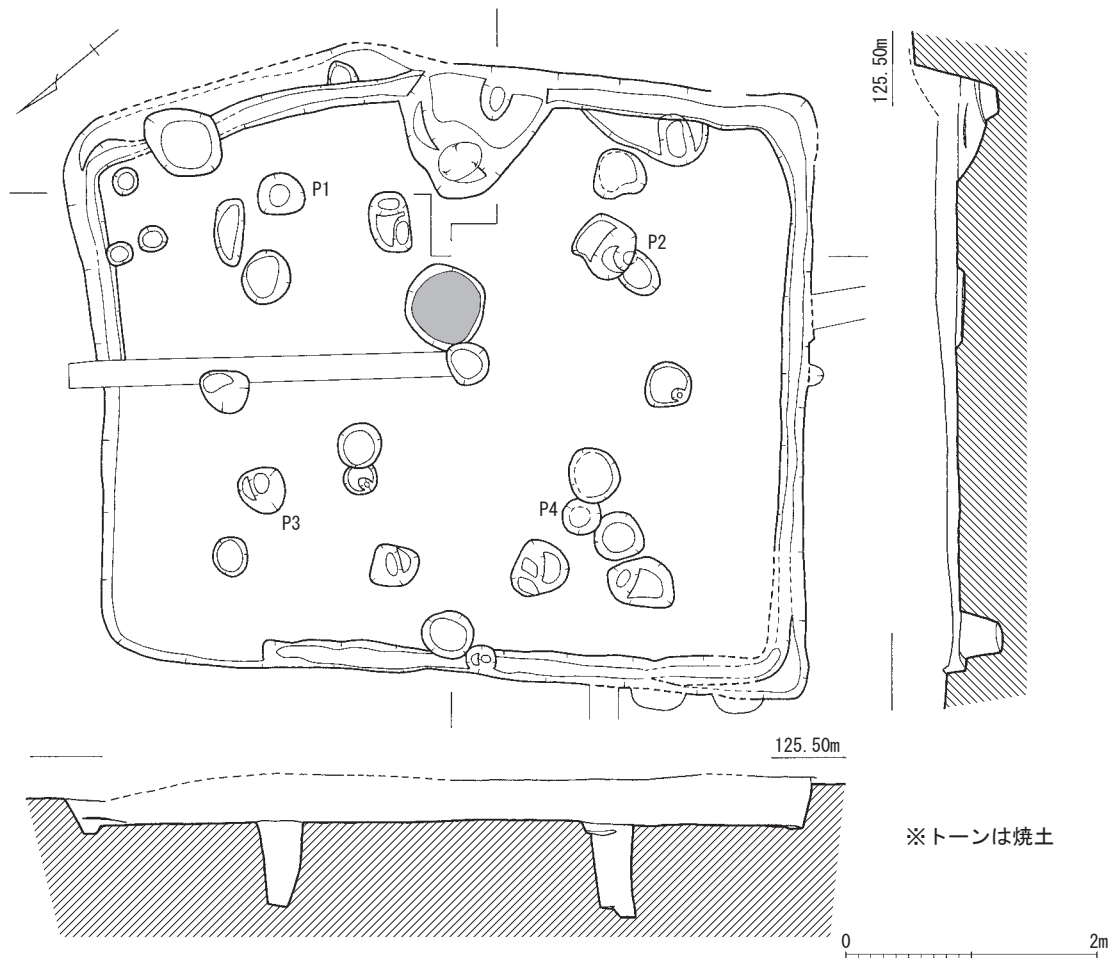
1～4は弥生土器甕である。1は口縁部が大きく傾いて立ち上がり、端部は丸く仕上げる。胴部はあまり張らないようである。2は端部をやや肥厚させる。壺の可能性もある。3は底面をわずかに上げ底に仕上げているのに対し、4はほぼ平底である。

27号竪穴住居 (第 49 図 図版 15)

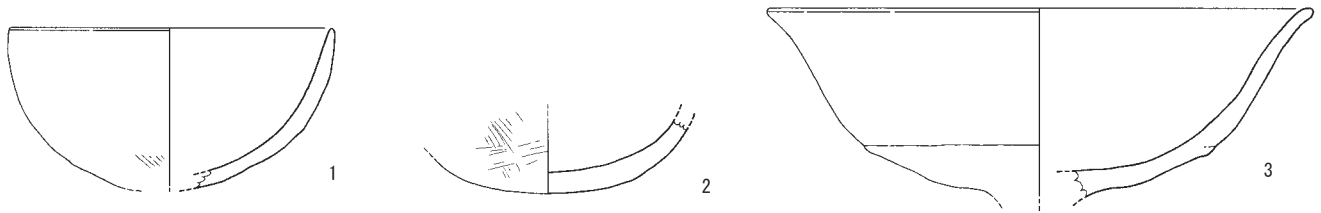
24号竪穴住居の北西側で確認され、28号竪穴住居に切られる。西側の一部が3次調査区のS H 207にあたる。北隅を中心に、削平を受けていたり、掘り過ぎてしまったものの、平面形は長方形を呈し、規模は約6.4 m × 約6.0 mであることがわかる。検出面から



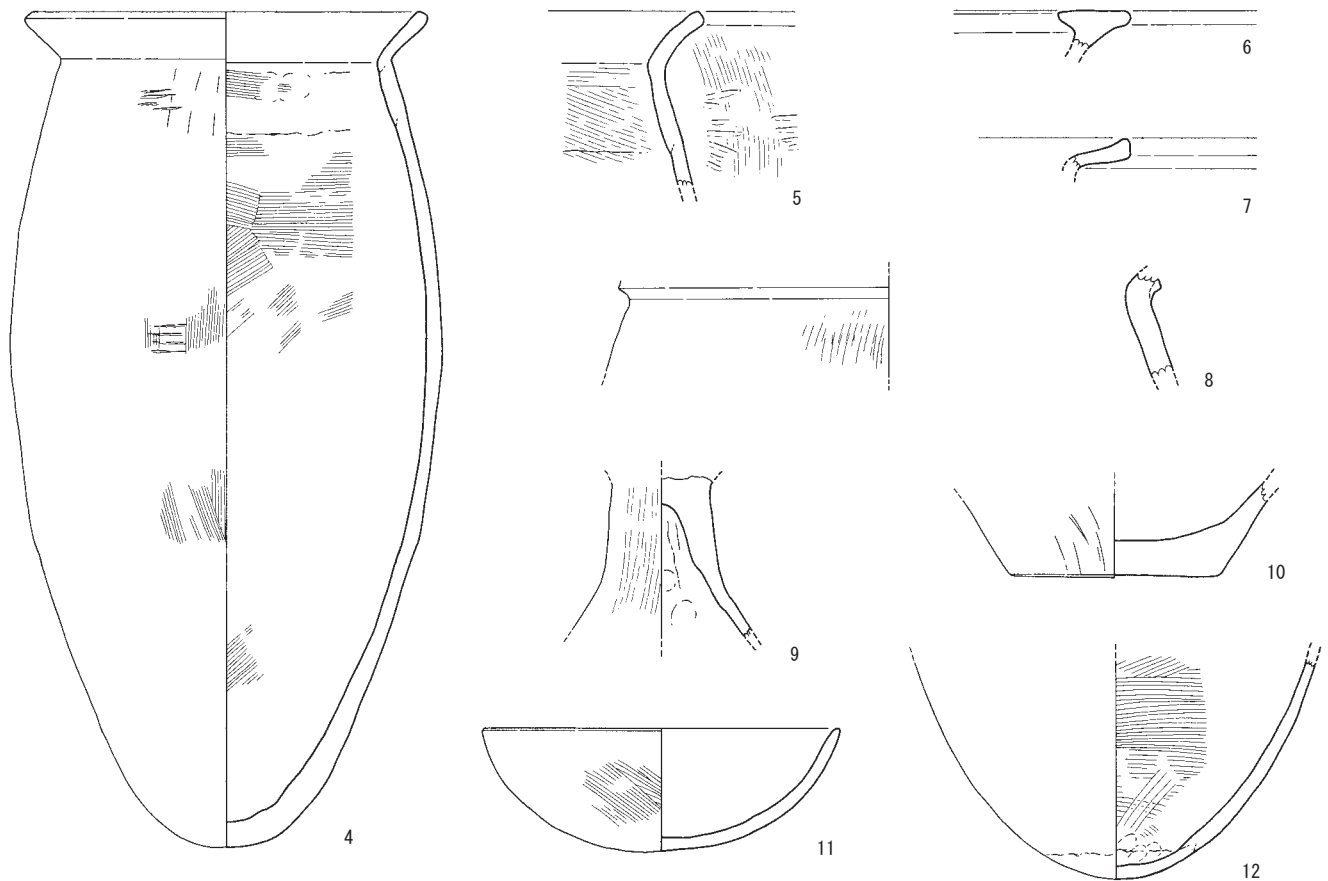
第 40 図 22 号竪穴住居実測図 (1/60)



第 41 図 23 号竪穴住居実測図 (1/60)



22号住



23号住



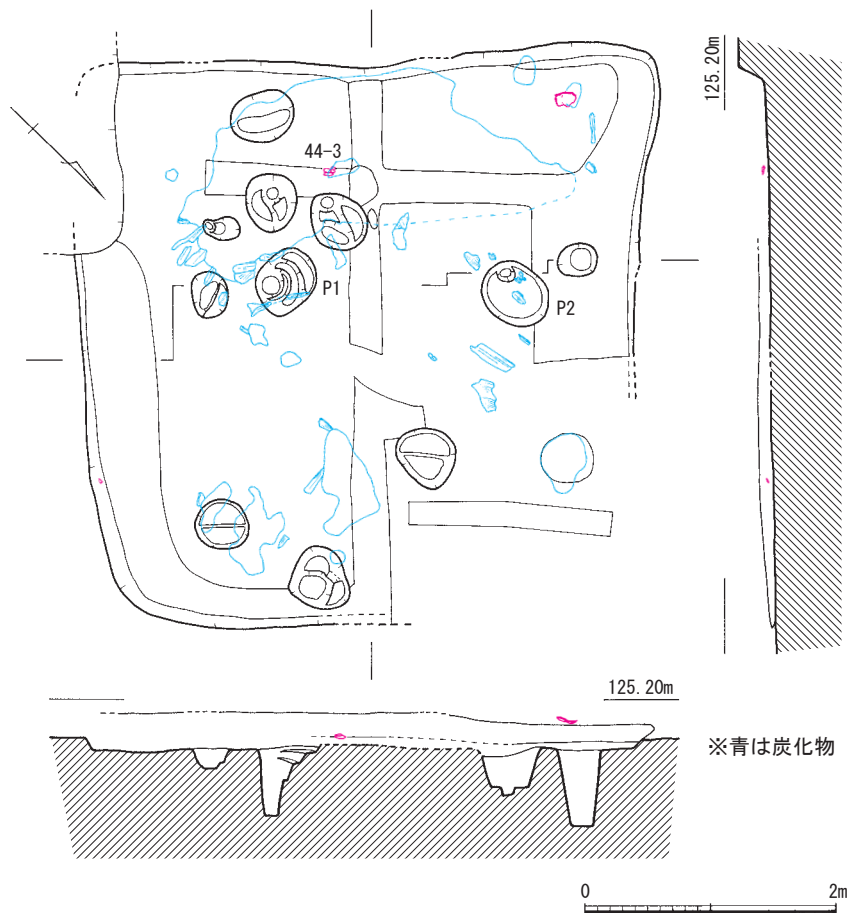
第 42 図 22・23 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

の深さは最大約 25 cmを測る。主柱穴は P 1～P 4 の 4 本とみられ、床面からの深さは 45～75 cmを測る。また、床面の中央よりやや北西寄りに焼土が見られ、炉跡と考えられる。さらに北西壁際には屋内土坑が付設される。壁周溝は確認できなかった。

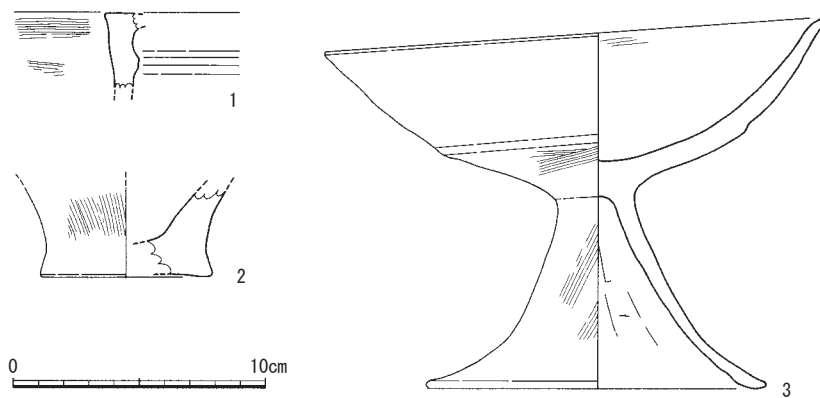
また、3次調査ではこの住居の西側に1軒住居が存在しているが (SH214)、削平を受けていたためか、本調査区では確認できなかった。

出土遺物 (第 50 図 図版 34)

1 は弥生土器高坏である。口縁部上面はほぼ平坦で、内側を僅かに突出させる。2、3 は甕の底部である。2 は上げ底で底端部が大きく突出する。3 は平底である。内底面、底端部は欠損している。



第 43 図 24 号竪穴住居実測図 (1/60)



第 44 図 24 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

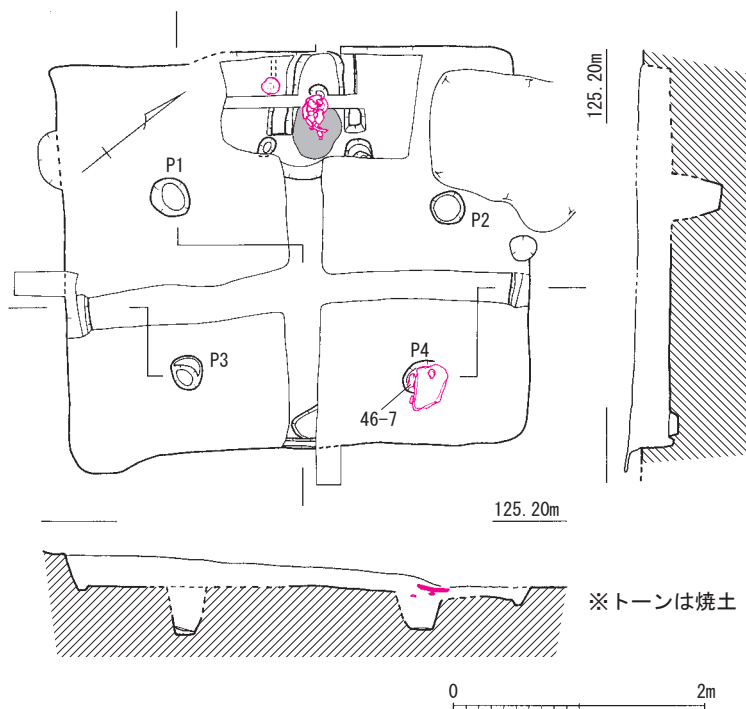
28 号竪穴住居 (第 51 図 図版 15)

27 号竪穴住居の北側で確認され、この住居を切る。西側半分が 3 次調査区の SH215 にあたる。平面形は壁が崩落したためか、台形を呈し、やや歪である。規模は北東壁約 4 m、南西壁約 4.6 m で、北西 - 南東軸が約 3.9 m、検出面からの深さは最大約 45 cm を測る。支柱穴は壁際に寄るものの P 1・P 2 の 2 本とみられ、床面からの深さは約 30 ~ 50 cm を測る。また、床面の中央よりやや南西寄りには少量の焼土が見られ、炉跡の可能性が高い。

さらに南西壁際には屋内土坑が付設され、北東壁、南東壁の一部に壁周溝が確認された。遺物は、屋内土坑から多く出土している。

出土遺物 (第52図 図版34)

1～5は弥生土器甕である。1は口縁部が大きく外側に開いて立ち上がり、端部を跳ね上げ気味に肥厚させる。胴部はあまり張らず、最大径はやや上位に位置する。底部は上げ底である。2は口縁部が開いて立ち上がるが、端部はやや上方につまみ出すように仕上げている。3～5は底部であるが、3は若干の上げ底、4は上げ底、5は平底である。6は弥生土器壺である。底面はやや上げ底気味である。6は弥生土器高坏の脚部である。端部は外面をやや肥厚させ、内面は内湾気味に仕上げている。



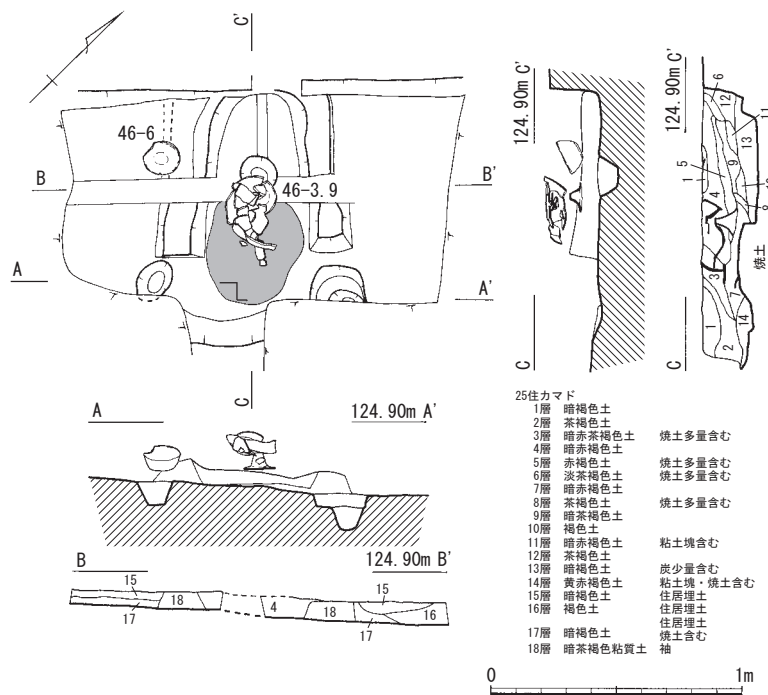
29号竪穴住居

(第53図 図版16)

25号竪穴住居の北東側で確認された。北西側は地形が下がっている分、削平を受けている。平面形は方形を呈し、規模は約3.8m×約2.0m+α、検出面からの深さは最大約15cmを測る。床面にはピットが数個見られるものの、支柱穴になるか、不明である。また、南西壁は南隅の角にかけて壁周溝が掘り込まれている。この他、炉跡・屋内土坑は確認できなかった。

出土遺物 (第53図)

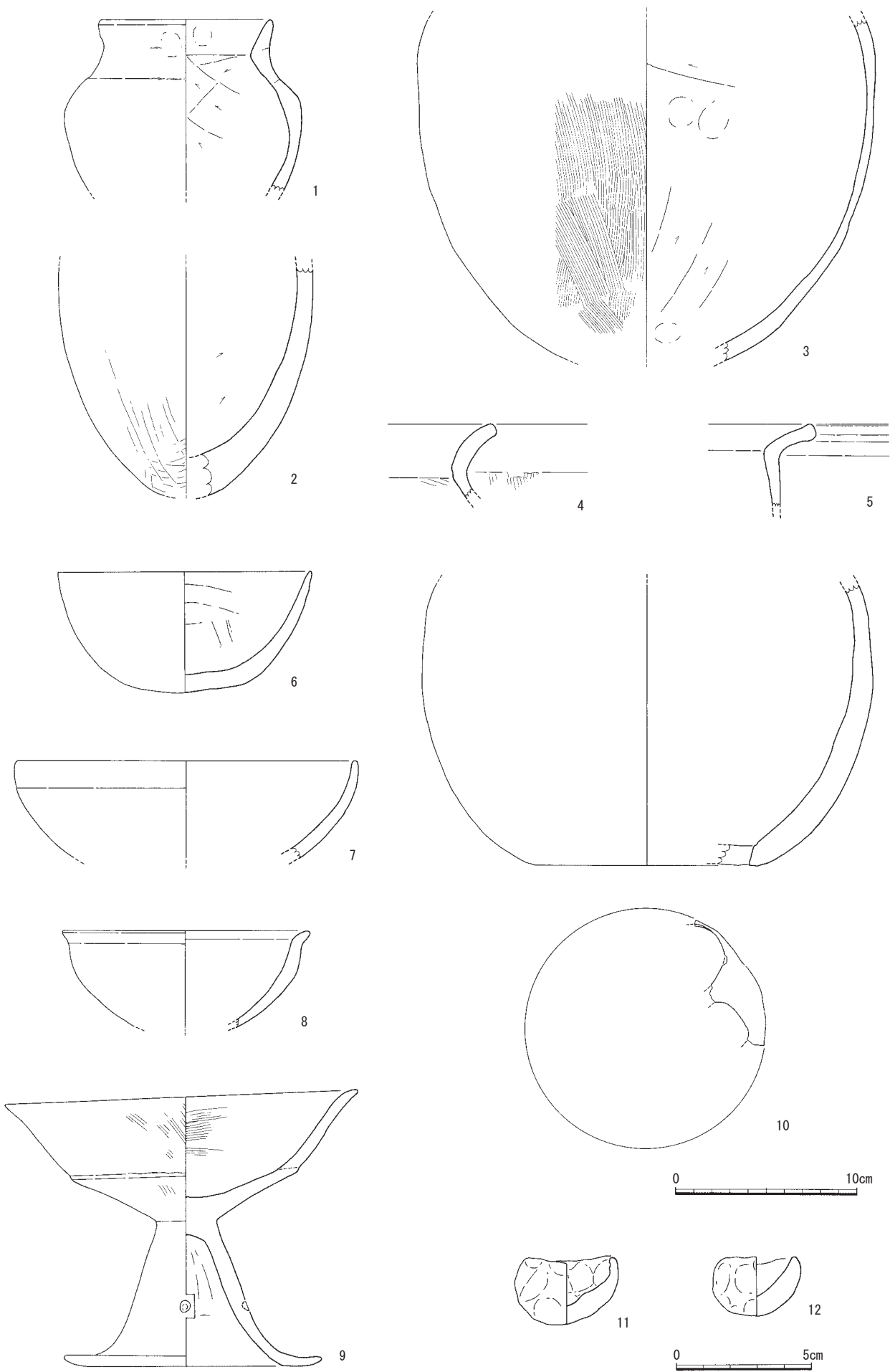
1は弥生土器壺である。口縁端部は丸く仕上げる。2は弥生土器甕である。底面はやや上げ底で、底端部は突出しない。



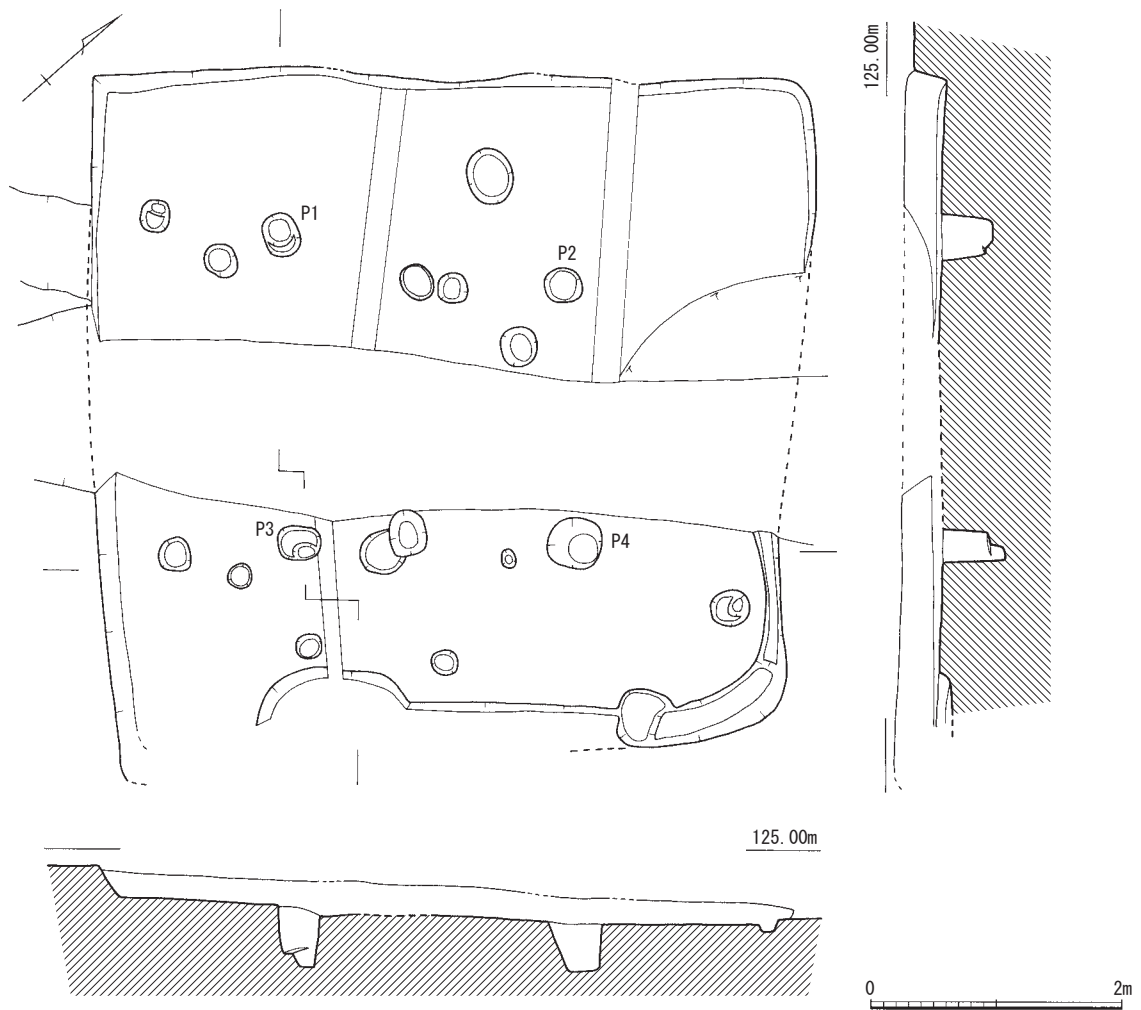
第45図 25号竪穴住居実測図(1/60)及びカマド実測図(1/30)

30号竪穴住居 (第54図 図版16)

19号竪穴住居の南東側で確認され、南西側は調査区外へと広がり、2次調査区のSH22にあたる。平面形は方形を呈すとみられ、調査区内での規模は約1.8m+α×0.3mである。また、検出面からの深さは最大で約5



第46图 25号竖穴住居出土遺物実測図 (1~10:1/3、11・12:1/2)



第 47 図 26 号竪穴住居実測図 (1/60)

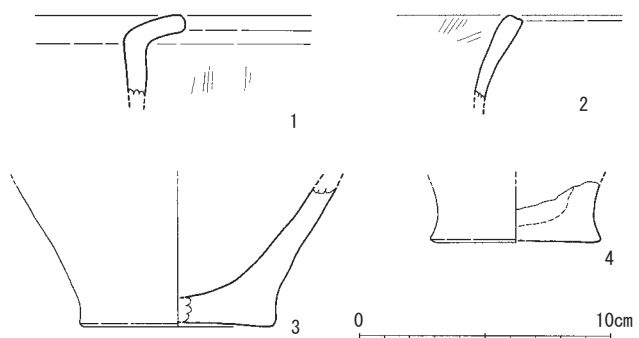
cmとほとんどが削平を受けている。壁際には焼土が見られるが1次調査の発掘状況からカマドの一部と思われる。

1次調査区に広がる部分と合わせれば、規模は約5.4m×約6.1mとなる。

出土遺物 (第55図 図版34)

1は土師器壺である。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げる。胴部は最大径が中位よりやや上に位置する。

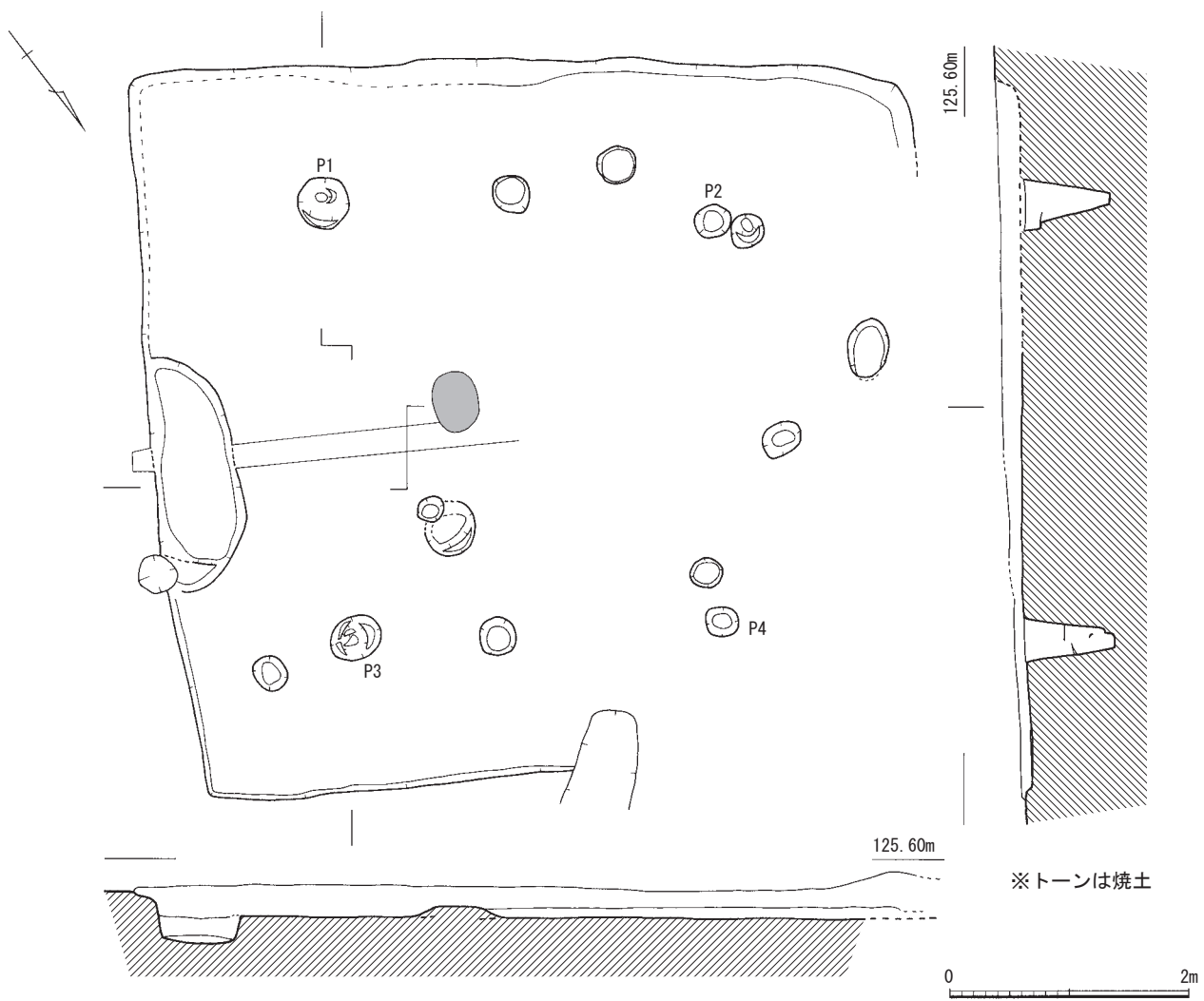
2は土師器高坏脚部である。接合部より開き、端部付近で接地する。端部はわずかに跳ね上げる。



第 48 図 26 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

31 号竪穴住居 (第56図 図版17)

調査区の北隅で確認され、32号竪穴住居を切る。西側の大部分は3次調査区のSH255にあたる。平面形はほぼ長方形を呈し、規模は約5.7m×約4.2m、検出面からの深さは約55cmを測る。主柱穴はP1・2の2本と



第 49 図 27 号竪穴住居実測図 (1/60)



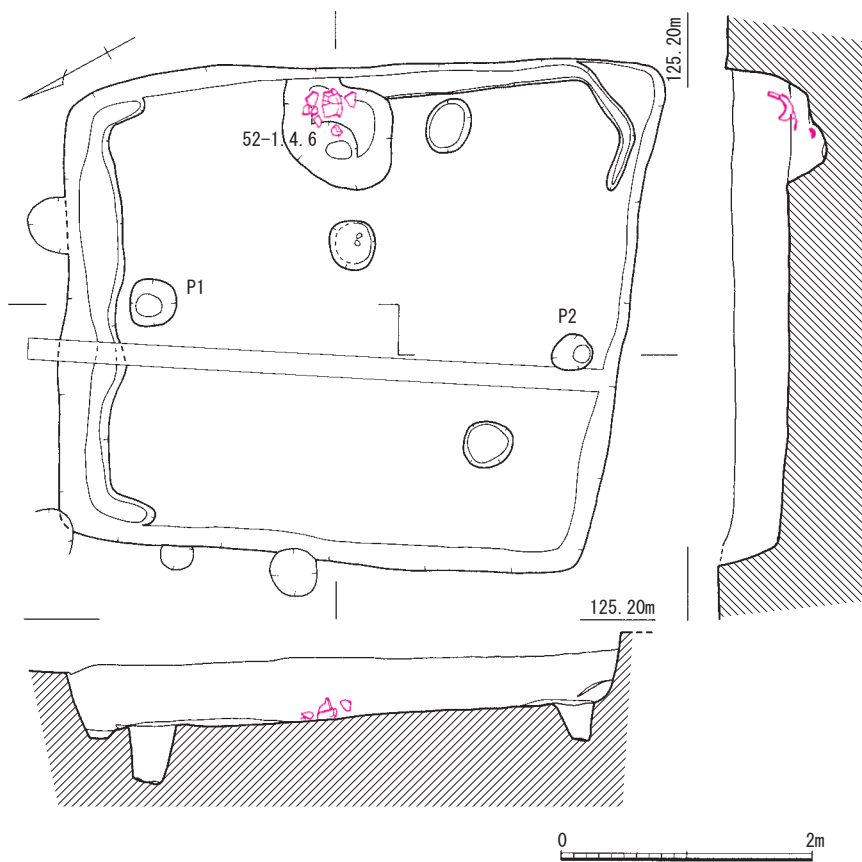
第 50 図 27 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

みられ、床面からの深さは約 60 cm を測る。床面の南側には屋内土坑が付設される。また、炉跡を示す焼土等は確認できなかった。この他、壁際には壁周溝がほぼ全周する。

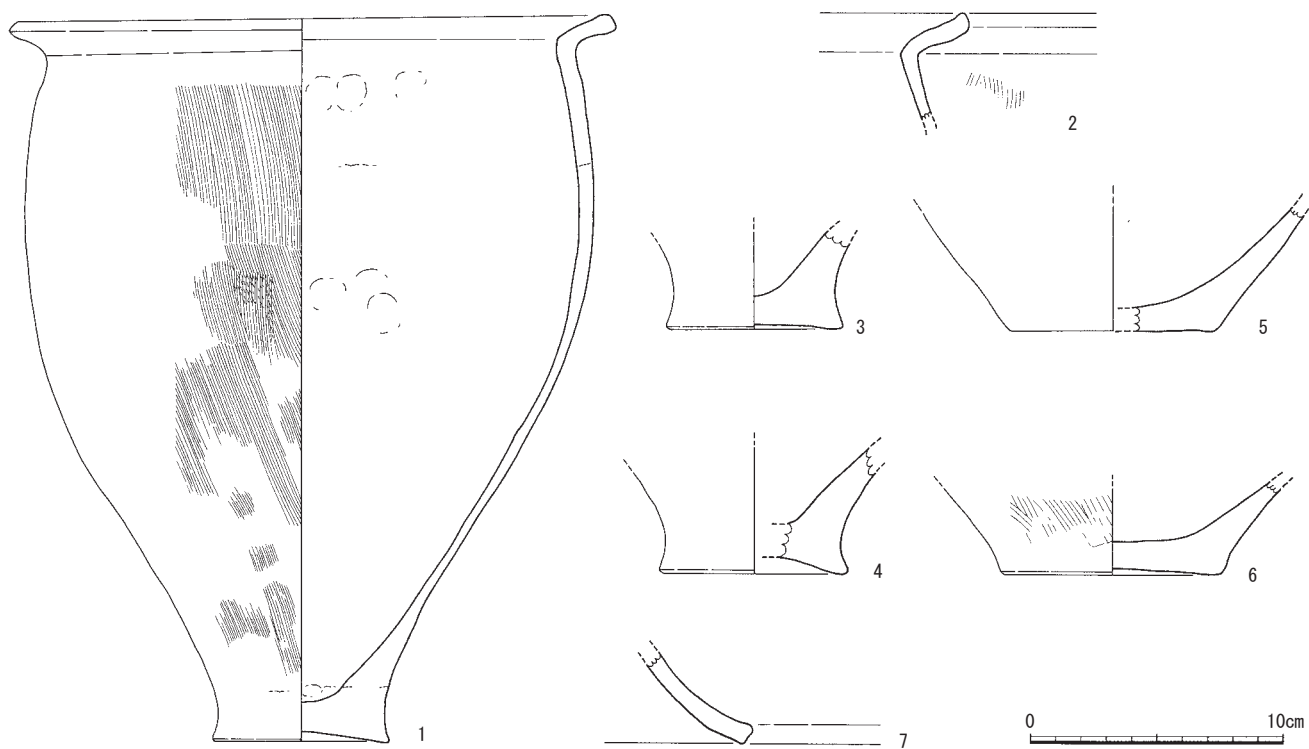
出土遺物 (第 57 図 図版 34)

1・2 は土師器壺である。1 は口縁部が大きく外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。頸部は稜が明瞭ではない。2 は口縁部がほぼ直線的に開く。口縁部の中位付近でやや器壁が厚くなる。

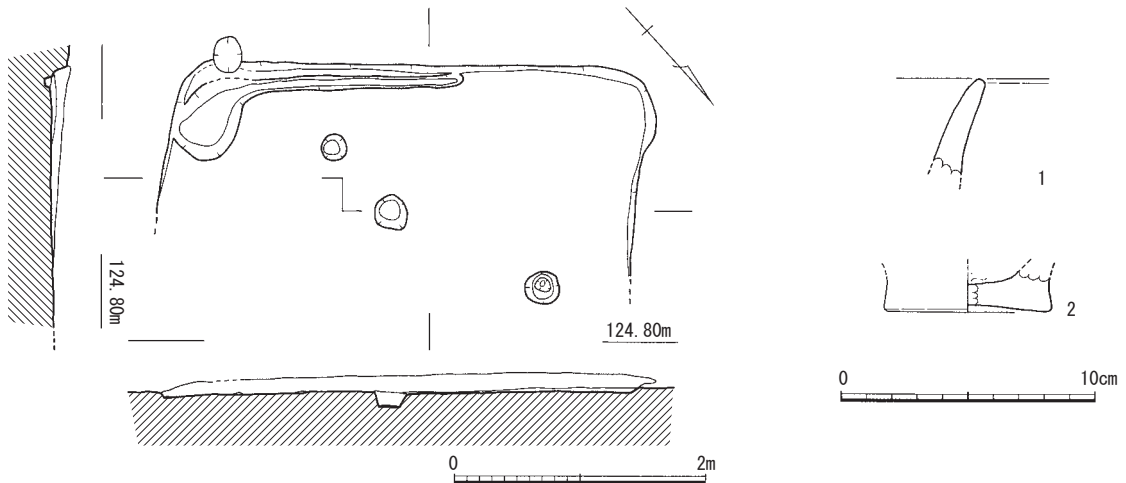
3 は弥生土器甕の底部で、底面は平底である。32 号竪穴住居からの混入品と思われる。



第 51 图 28 号竖穴住居实测图 (1/60)



第 52 图 28 号竖穴住居出土遺物实测图 (1/3)



第53図 29号竪穴住居実測図(1/60)及び出土遺物実測図(1/3)

32号竪穴住居

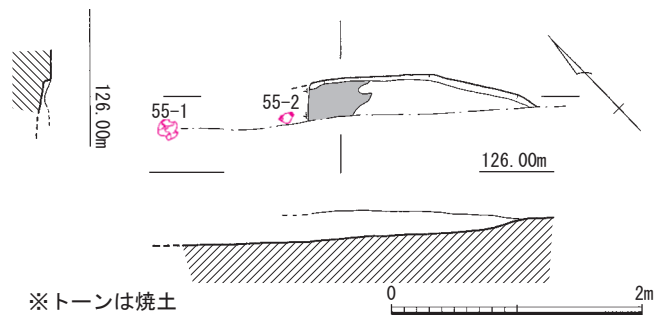
(第58図 図版17)

調査区の北隅、31号竪穴住居を取り囲むように確認され、この住居に切られる。凡そ西半分が3次調査区のSH218にあたる。また、壁周溝や柱穴の展開から少なくとも3軒分の存在が想定されることから、古い順にABCとする。また、このこれらの住居の床面まで深さは、最も深いところで検出面から約65cmを測る。

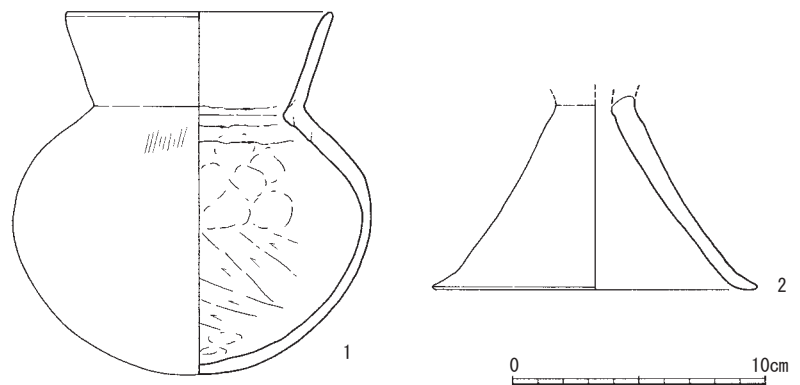
さらに、円形に巡る支柱穴の中心には土坑があり、中央土坑と考えられるが、ABCのどの時期に伴うかなど、切り合い関係は確認できなかった。平面形は不定形で規模は約2.0m×約1.3m、床面からの深さは約30cmである。この他、炉跡とみられる焼土は確認できなかった。

32号A竪穴住居はB竪穴住居に切られるが、壁周溝と考えられる溝が西側に若干残っていることから、平面形は楕円形に近い形を呈すとみられる。規模は西壁から中央土坑までの寄りが約4.4mであることから東西方向の長軸が約8.8mと推測される。また、南北方向をとる短軸は中央土坑との位置関係からおおよそ5~6mになると思われる。支柱穴はP1~P7の7本とみられ、床面からの深さは約55~90cmである。

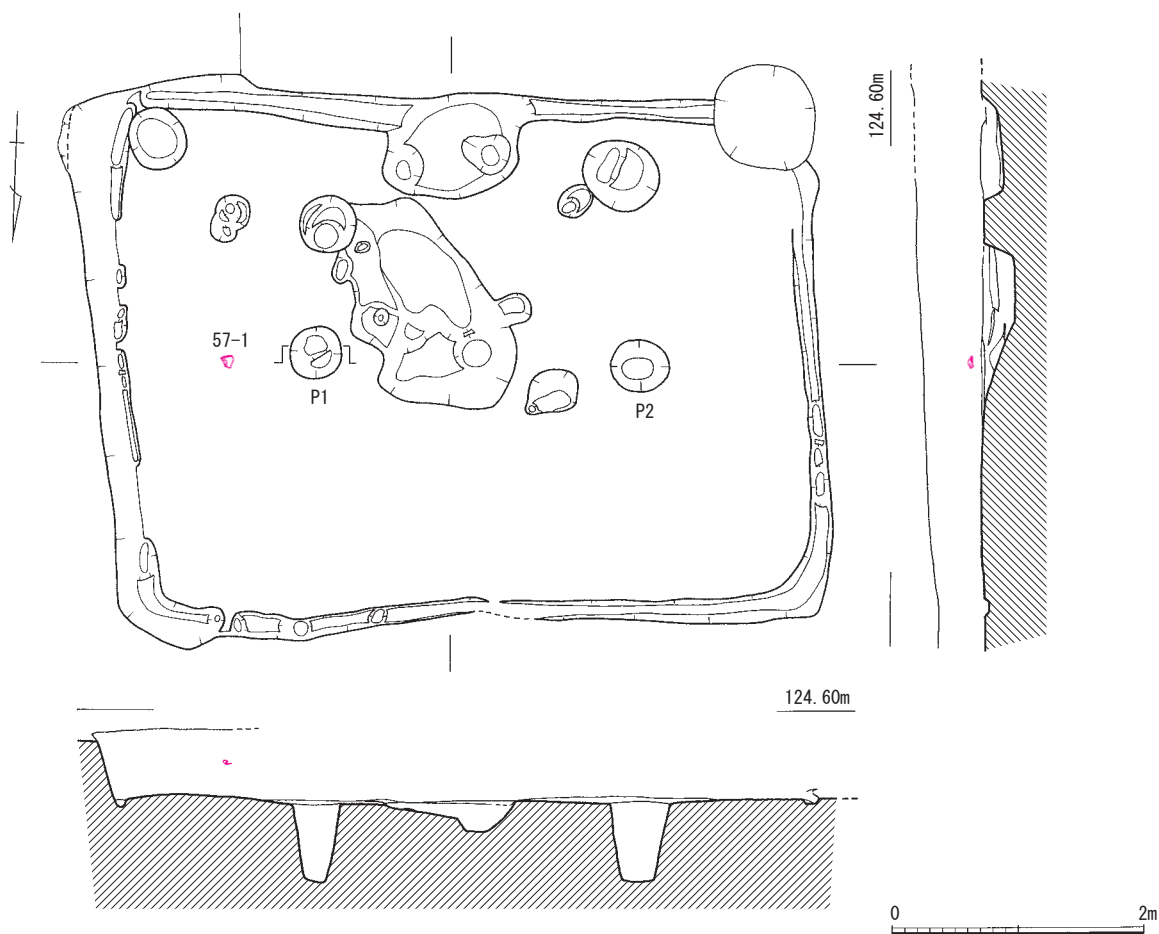
32号B竪穴住居は北側の一部が調査区外へ広がるが、規模は東西軸約11.3m、南北軸約8.9mを測り、平面



第54図 30号竪穴住居実測図(1/60)



第55図 30号竪穴住居出土遺物実測図(1/3)



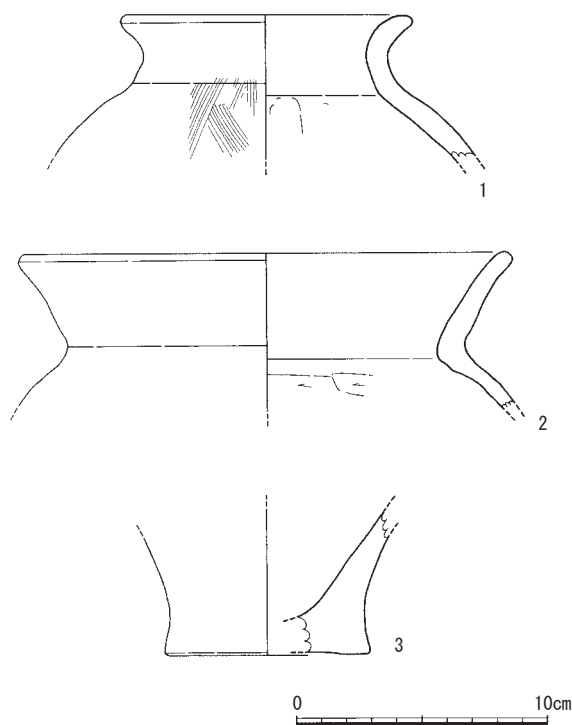
第 56 図 31 号竪穴住居実測図 (1/60)

形は楕円形を呈する。主柱穴は調査区内では P 8 ~ P 17 の 10 本とみられ、床面からの深さは約 40 ~ 95 cm である。このうち、P 14 が A 竪穴住居の壁周溝を切る。

32 号 C 竪穴住居は最も外側の住居で、規模は東西軸約 11.2 m、南北軸約 11.1 m を測り、平面形はほぼ正円となる。主柱穴は P 18 ~ P 29 の 12 本とみられ、床面からの深さは 20 ~ 100 cm である。このうち、P 19 ~ 21、24 は A B 竪穴住居の壁周溝を切る。

この 3 軒以外に、壁周溝とみられる溝、柱穴とみられるピットが存在するが、主柱穴として展開を確認することができなかった。そのため、さらに 1 ないし 2 軒ほど存在する可能性はある。

遺物は弥生土器甕などが数点出土している程度である。



第 57 図 31 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第 58 图 32 号竖穴住居实测图 (1/80)

出土遺物 (第 59 図 図版 34)

1～7は弥生土器甕である。1は口縁部が大きく開き、端部を跳ね上げる。胴部は中位よりやや上で最大径を測る。2～5はいずれも口縁部が大きく開き、端部を跳ね上げる。このうち、5のみが、頸部の稜が明瞭で、直線的にシャープな仕上がりにみえる。6、7はともに底面は上げ底で、底端部の突出は少ない。

33号竪穴住居 (第 60 図 図版 18)

31号竪穴住居の北東側で確認され、32号竪穴住居を切り、35号竪穴住居に切られる。北東側は調査区外へ広がり、住居の西側は上面を掘り過ぎてしまったが、平面形は長方形を呈すとみられ、調査区内での規模は北西-南東軸が約4.2m、南西-北東軸が約3.3m + α である。住居内には、ほぼ中央に焼土が見られ、炉跡と考えられ、また南西側に屋内土坑が掘り込まれる。炉跡の南西側には支柱穴とみられるピットがあり、床面からの深さは約25cmである。炉跡と推定される南西壁との長さは約2.5mであることから、南西-北東軸の長さは約5.0m、調査区外の長さは約1.7mと推定される。このほか、壁周溝は確認されなかった。

出土遺物 (第 61 図 1・2 図版 17)

1は土師器器台である。台部分は浅く、口縁部は緩やかに立ち上がる。脚部は括れ部分から端部に向かって開くが、中位付近でやや膨らみ、その部分に円形の穿孔が4箇所に見られる。2は土師器二重口縁壺の口縁部か。端部を肥厚させる。

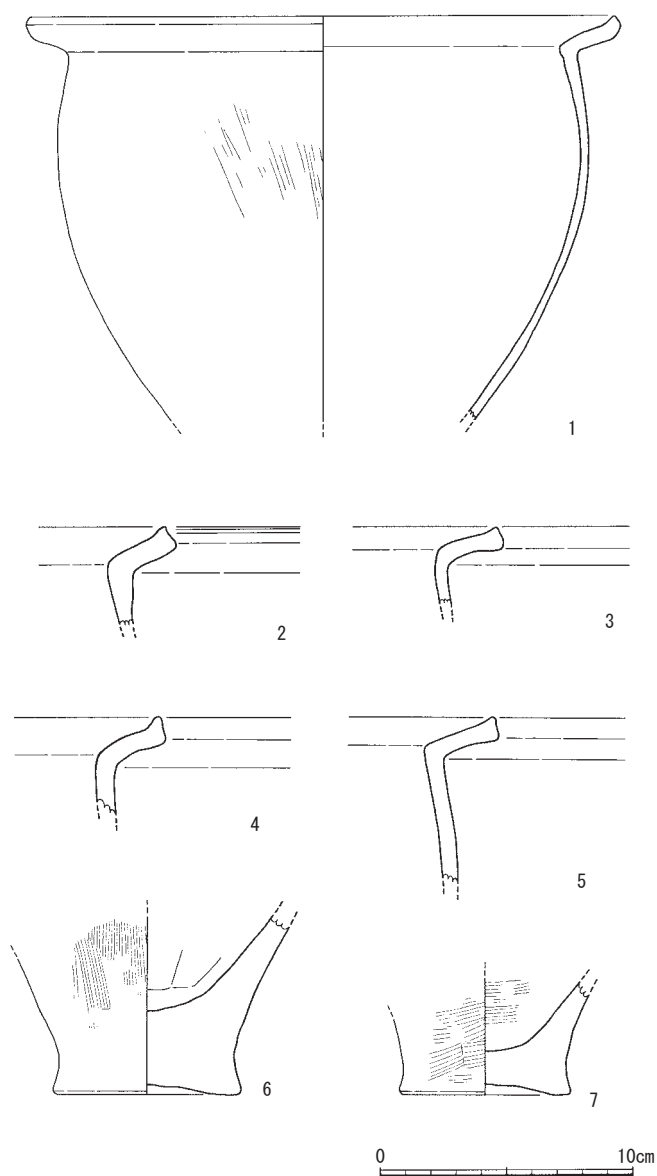
34号竪穴住居 (第 60 図 図版 18・19)

33号竪穴住居の東側で確認され、35号竪穴住居を切り、東側は調査区外へ広がる。平面形は方形を呈し、規模は約3.2m × 約1.0m + α 、検出面からの深さは最大約5cmを測る。支柱穴は調査区内では確認できなかった。カマドは住居南西壁に付設され、外へ方形に張り出す。袖や袖石、支脚は確認できなかった。張り出し部分の幅は約70cmを測る。カマドの前面が被熱しており、火床面となる。

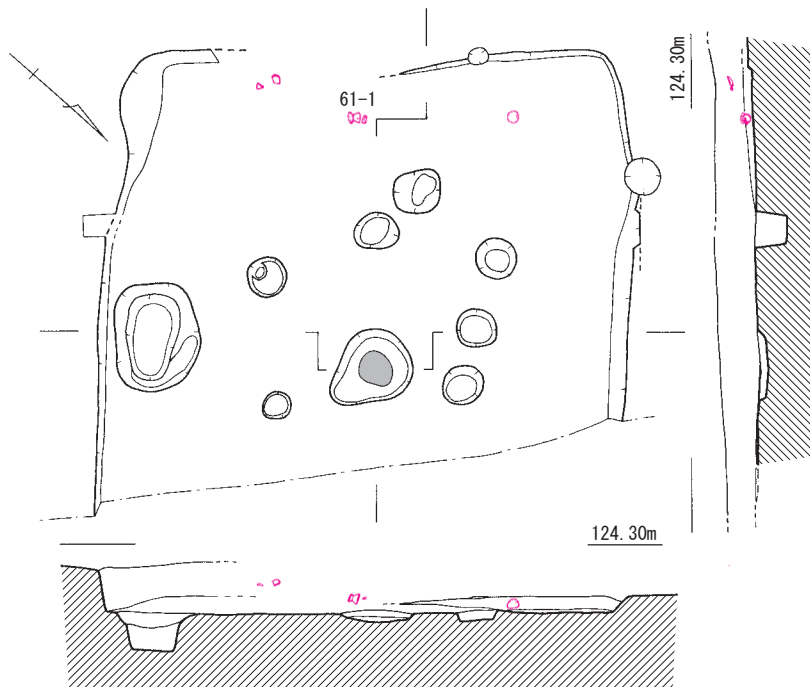
遺物は、カマド内やその周辺から土師器甕などが数点出土しているが、図化可能な遺物は1点のみであった。

出土遺物 (第 61 図 3)

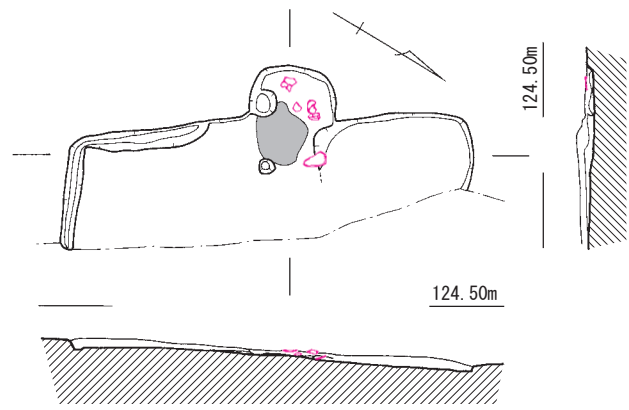
第 61 図 3 は土師器甕で、仕上げは雑である。胴部中位よりやや上で最大径を測る。



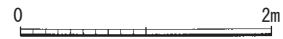
第 59 図 32号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)



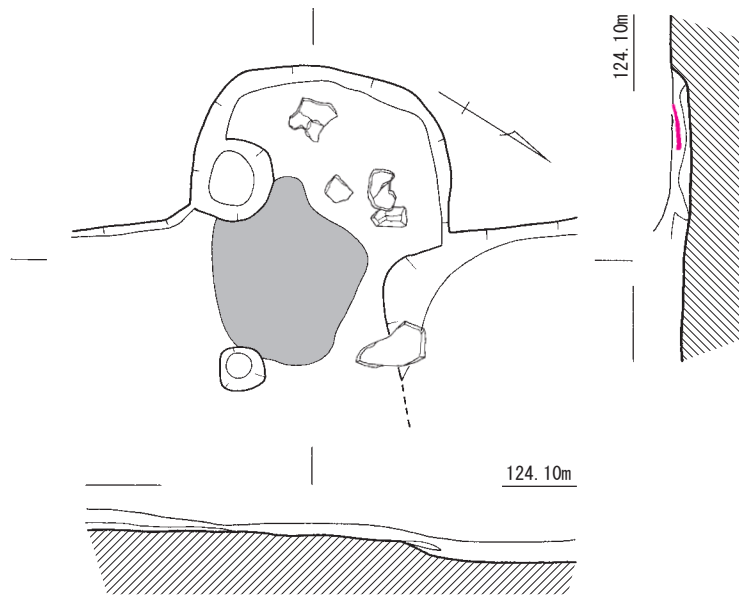
33号竖穴住居



34号竖穴住居



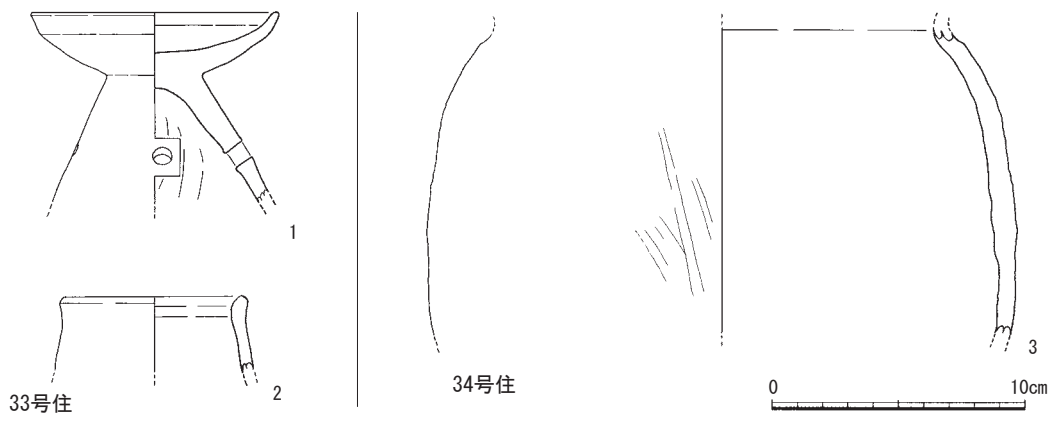
※トーンは焼土



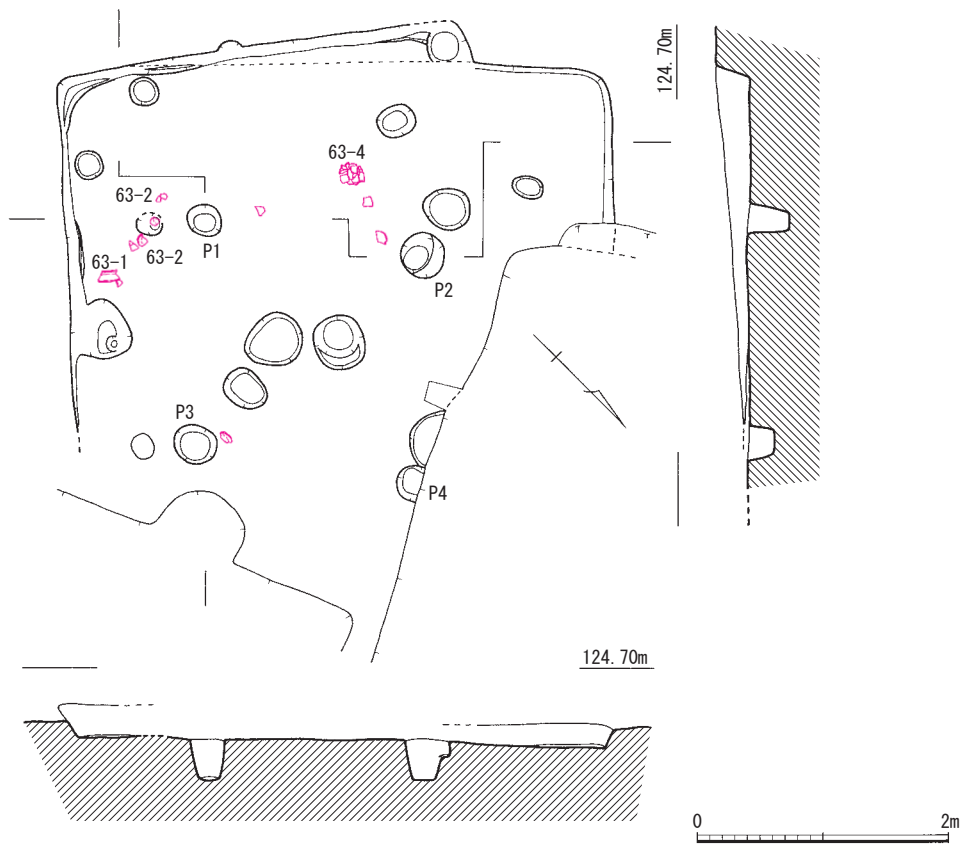
34号竖穴住居カマド



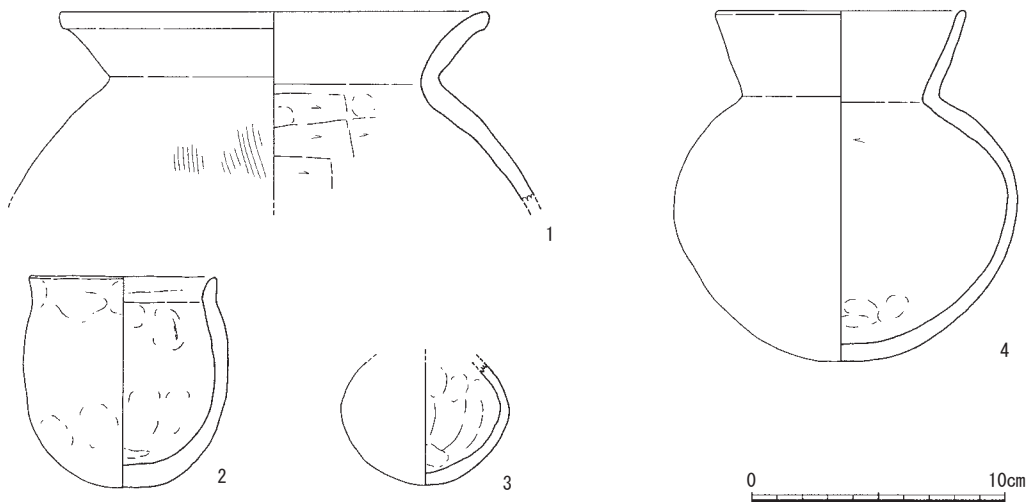
第60図 33・34号竖穴住居実測図(1/60)及び34号竖穴住居カマド実測図(1/30)



第 61 图 33・34 号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)



第 62 图 35 号竖穴住居実測図 (1/60)



第 63 图 35 号竖穴住居出土遺物実測図 (1/3)

35号竪穴住居（第62図 図版19）

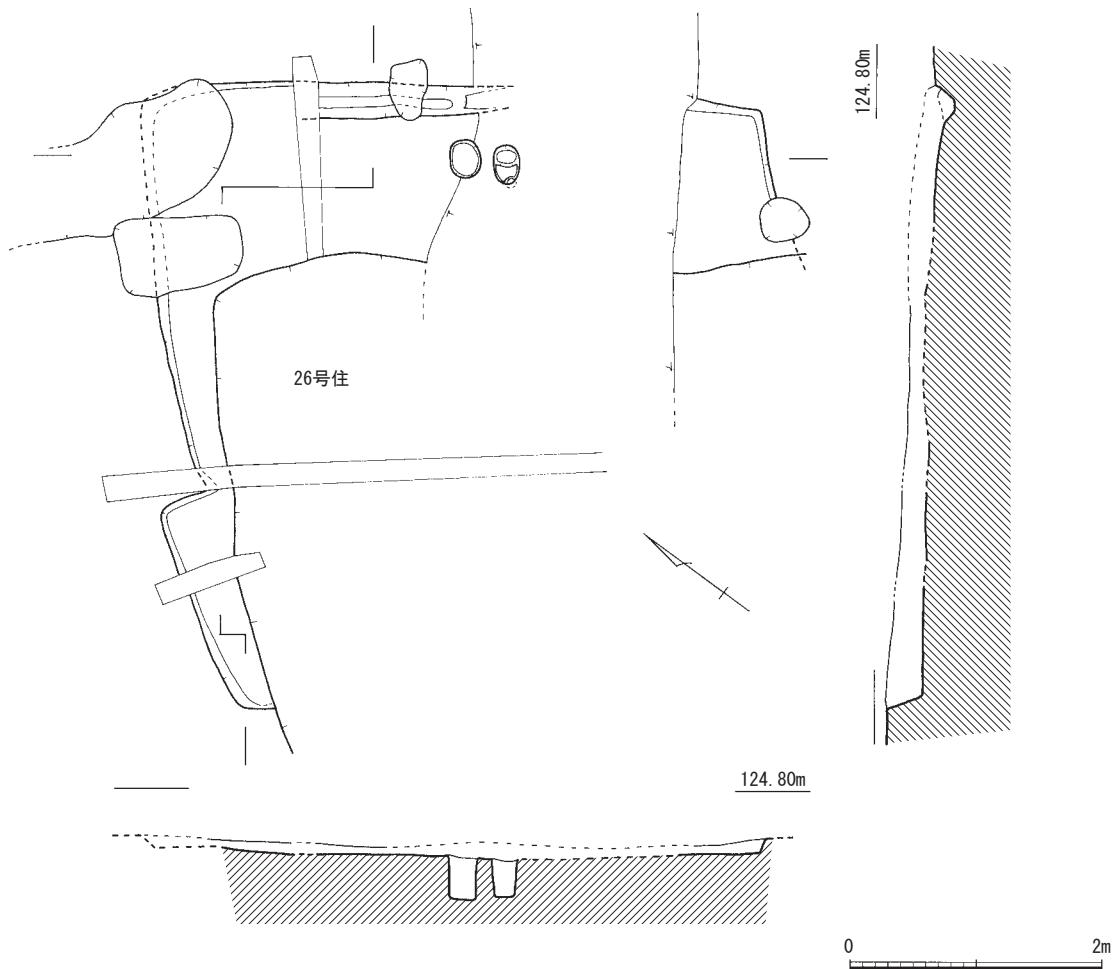
31号竪穴住居の東側で確認され、32・33号竪穴住居を切り、34号竪穴住居に切られる。平面形は方形を呈すとみられ、規模は約4.4m×約3.5m+α、検出面からの深さは最大約30cmを測る。支柱穴は若干軸がずれるものの、P1～P4の4本とみられ、床面からの深さは約20～30cmである。また南東壁際には、屋内土坑が掘り込まれている。この他、炉跡と判断できるような焼土や壁周溝は確認できなかった。

出土遺物（第63図 図版34）

1～4は土師器壺である。1は中型の壺で、口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。器壁はやや中膨らみとなる。2は胴部が直線的に立ち上がり、口縁端部をわずかに外反させる。口縁部径と胴部最大径はほぼ同じである。3は小型壺である。胴部はほぼ球形を呈する。4は口縁部が直線的に開きながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。胴部は楕円形を呈し、中位付近で最大径を測る。

36号竪穴住居（第64図）

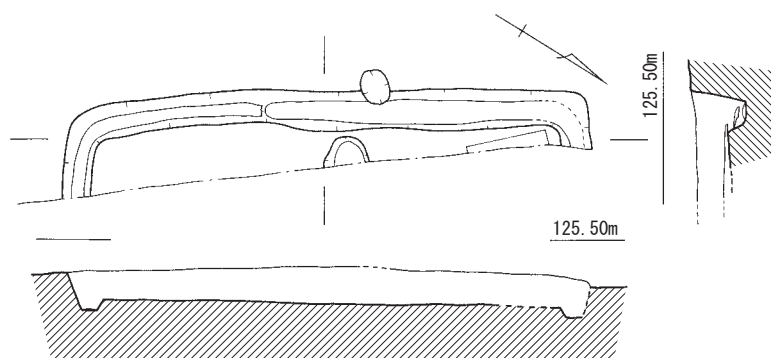
26号竪穴住居の北西側で確認され、この住居および1号石棺墓・14号土坑に切られる。平面形は方形を呈するとみられ、西側に張り出しをもつ。規模は北西-南東軸が約5m、北東-南西軸が5m以上と推定できる。また、検出面からの深さは最大30cmを測る。大部分を26号竪穴住居に切られているため、支柱穴や炉跡などは確認できなかった。



第64図 36号竪穴住居実測図（1/60）

出土遺物 (第 66 図 1～4)

第 66 図 1～3 は弥生土器甕である。1 は口縁部が直線的に開き、端部をやや肥厚させる。2、3 はともに底面は上げ底である。3 は底端部よりやや上位で屈曲して立ち上がる。4 は弥生土器高坏である。脚部中位付近より裾部に向かって開く。



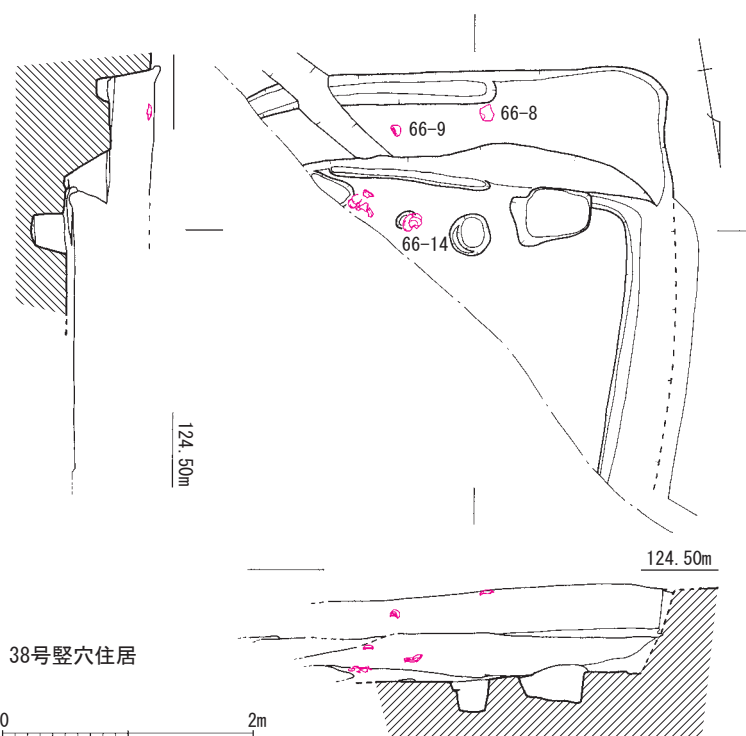
37号竖穴住居

37号竖穴住居 (第 65 図 図版 19)

34号竖穴住居の南東側で確認され、38号竖穴住居に切られる。大部分が調査区外へ広がる。平面形は方形を呈すとみられ、調査区内での規模は約 4.2 m × 約 0.7 m + α を測る。また、検出面からの深さは最大約 20 cm である。調査区内では壁周溝が確認できたが、炉跡・支柱穴等は確認できなかった。

出土遺物 (第 66 図 5)

第 66 図 5 は弥生土器壺である。断面台形の突帯を貼付け、突帯上面に斜め方向の刻み目を施す。



第 65 図 37・38号竖穴住居実測図 (1/60)

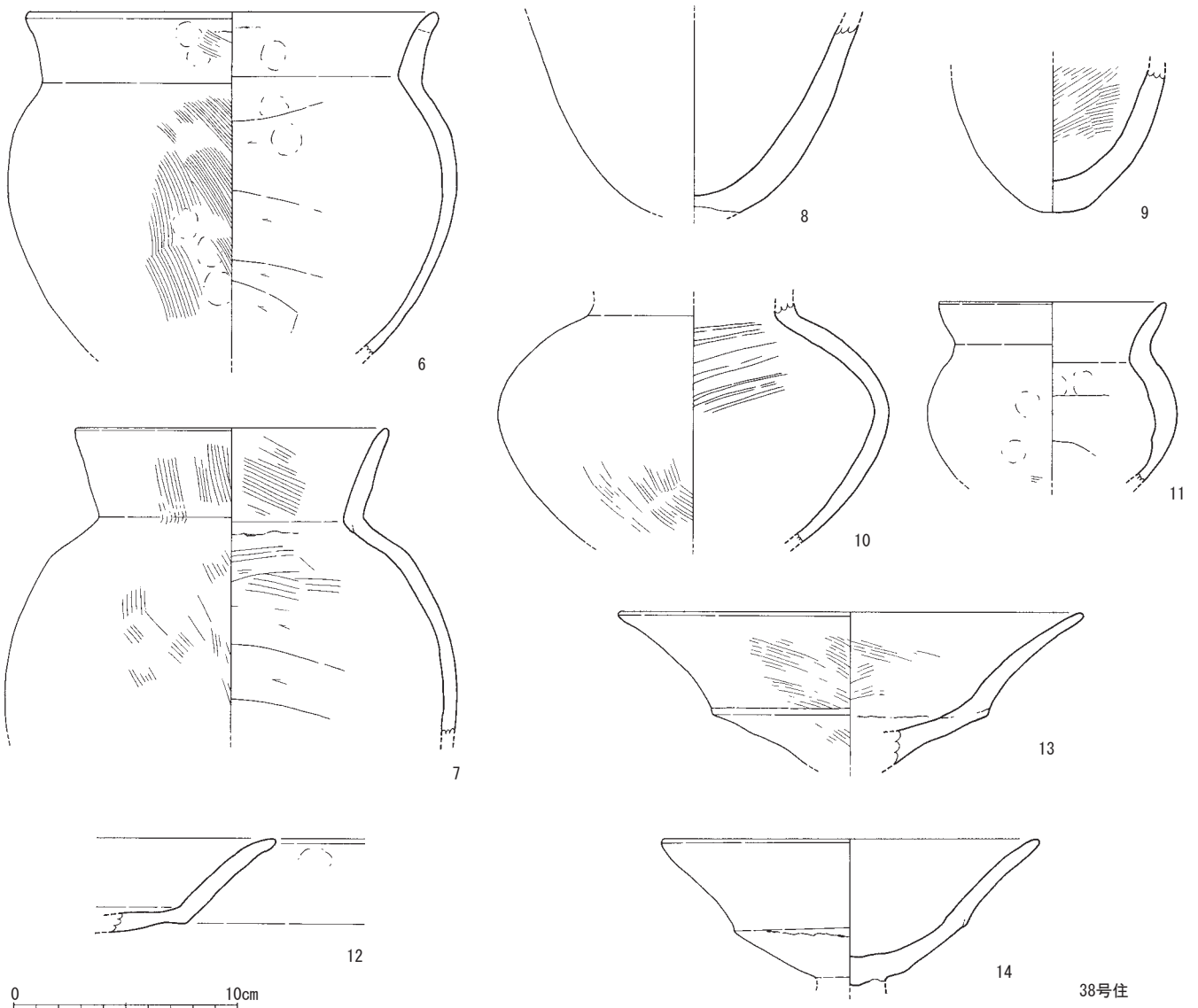
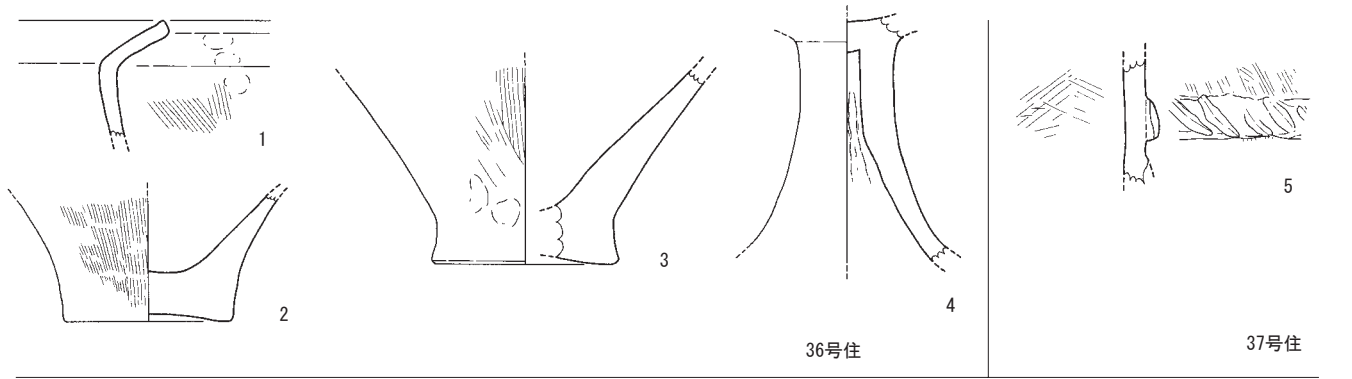
38号竖穴住居 (第 65 図 図版 20)

37号竖穴住居の西側で確認され、この住居を切る。大部分が調査区外へ広がる。平面形は方形を呈すとみられ、西側をやや掘り過ぎたものの、規模は南壁約

3.3 m + α 、西壁約 3.5 m + α を測る。住居の南側にベッド状遺構がみられる。検出面からの深さは、ベッド状遺構までが最大約 35 cm、床面までが最大約 70 cm を測る。また、ベッド状遺構の南壁の一部、床面西壁・南壁際には壁周溝が掘り込まれる。床面にはピットが数個見つかったが、支柱穴や炉跡、屋内土坑とみられるものは確認できなかった。

出土遺物 (第 66 図 6～14 図版 34)

第 66 図 6 は土師器甕である。口縁部は、あまり角度を持たず、外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。胴部は中位よりやや上で最大径を測る。7 は土師器壺である。中型のもので、口縁部は直線的に開きながら立ち上がり、端部をやや薄く仕上げる。胴部はほぼ中位付近で最大径を測る。8、9 は土師器甕か。ともに底部は尖り気味で、器壁を厚く仕上げる。10、11 は土師器壺である。10 は胴部が中位付近よりやや上位で最大径を測る。11 は口縁部が直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。胴部は中位付近で最大径を測り、口縁部と胴部の径はほぼ同じである。12～14 は土師器高坏である。12、13 はともに坏部下部の稜は明瞭で、口縁部は大



第 66 図 36 ~ 38 号竪穴住居出土遺物実測図 (1/3)

きく外反しながら立ち上がる。また、12 は坏部が浅く、13 の坏部は比較的深い。14 は 12、13 に比べ、やや径が小さくなる。坏部底面はやや丸味を帯びている。

2. 竪穴遺構

ここでは、柱穴になり得そうなピット・炉跡といった、竪穴住居と判断できる要素が欠けている遺構について、竪穴遺構として、記述する。

1号竪穴遺構 (第67図 図版20)

1号竪穴住居と同位置で確認され、この住居を切る。平面形は長方形を呈し、南西側に方形の張り出しを持つ。規模は約2.1m×約1.6m、張り出し部分は約0.9m×約0.4m、検出面からの深さは最大約20cmを測る。

遺物は、土師器壺・高坏が出土しているが、1号竪穴住居のものが混入している可能性がある。

出土遺物 (第68図1・2)

1は土師器壺である。小型のもので、口縁部を僅かに外反させ、端部は尖り気味に仕上げる。2は土師器高坏である。脚部は接合部から大きく開くタイプである。

2号竪穴遺構 (第67図 図版20)

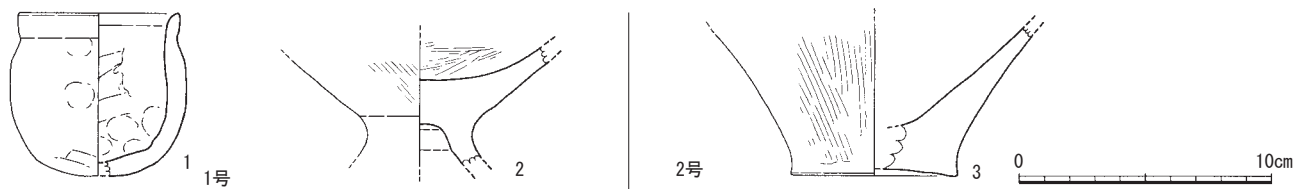
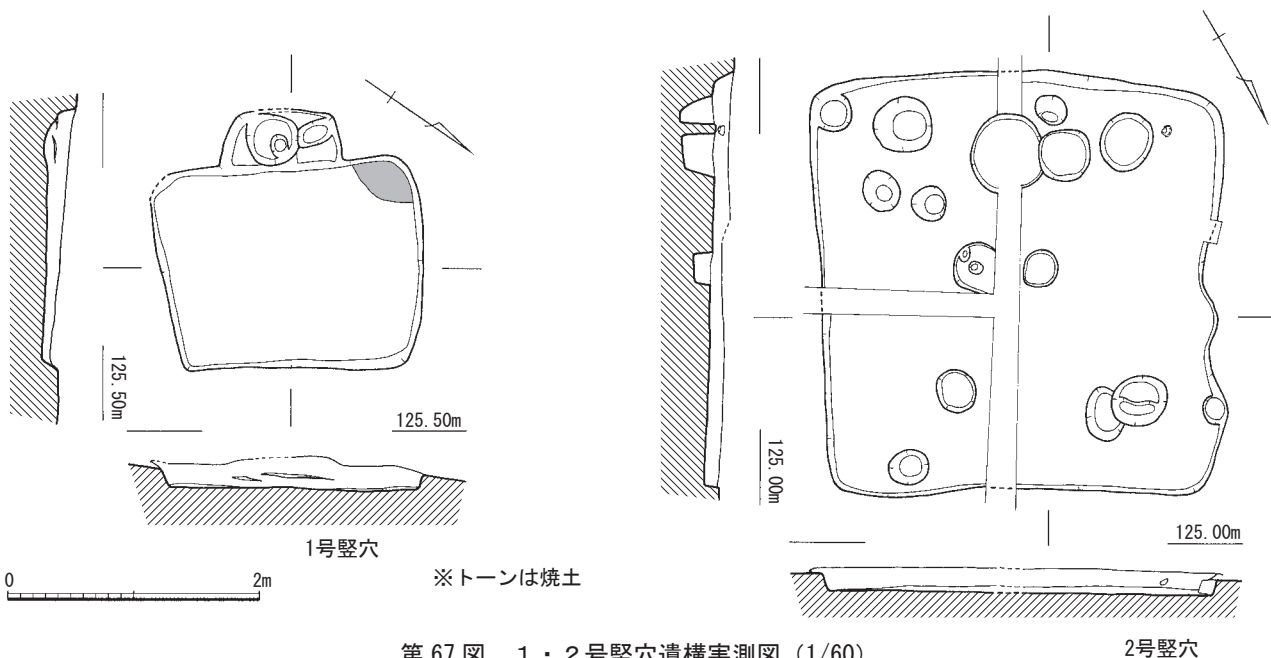
28号竪穴住居の北西側で確認された。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は約3.0m×約3.4m、検出面からの深さは約15～20cmを測る。竪穴内にはピットが多数見られたものの、確実に支柱穴となるようなものはなく、炉跡・壁周溝・屋内土坑も確認されなかったことから、竪穴遺構とした。

出土遺物 (第68図3)

3は弥生土器甕の底部である。底面はやや上げ底である。

3号竪穴遺構 (第69図 図版21)

10号竪穴住居の北側で確認され、11号竪穴住居を切り、10、23号竪穴住居に切られる。大部分が他の遺構に切られているもの、平面形は方形を呈すとみられる。規模は北東壁が約3.6m、北西壁が約1.9m、検出面か

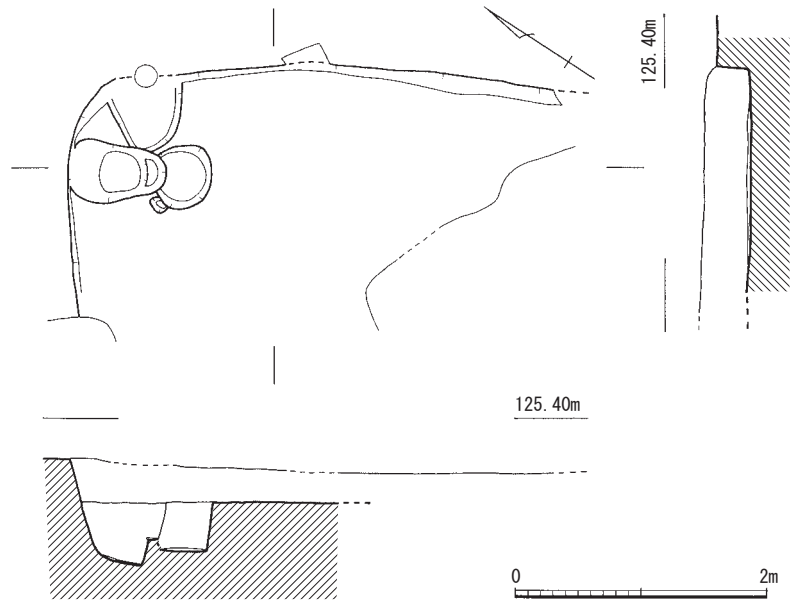


らの深さは約 25 cmを測る。

遺物は、弥生土器甕などが出土しているが図示可能なものはなかった。

3. 溝状遺構

調査区南東側において、近世のものと思われる溝状遺構が数条確認された。これらの遺構の中には拳大の礫が敷かれているものがあり、後述する 22 号土坑のように暗渠と思われるようなものが存在することから、水路として利用された可能性がある。また、ここで記述する以外にも、溝状の落ち込みが見られたが、溝として断定するには至らなかったものがある。



第 69 図 3号竖穴遺構実測図 (1/60)

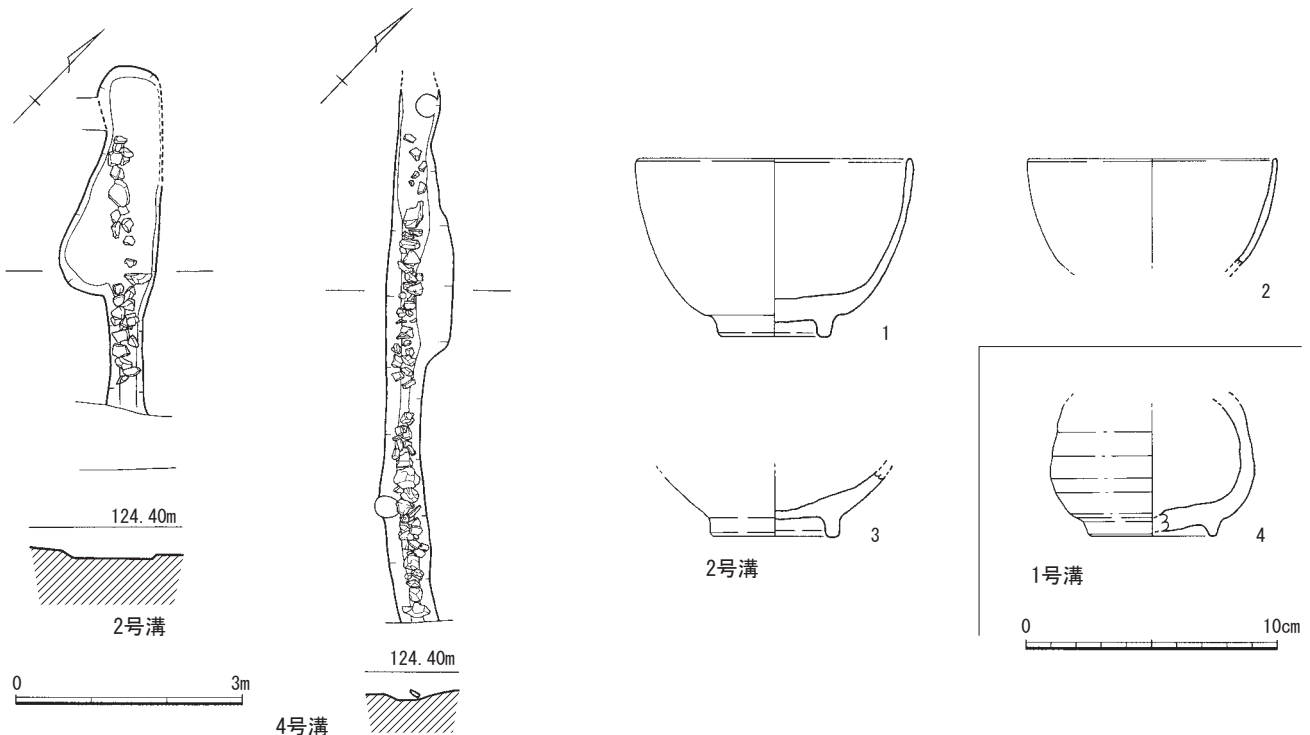
ここでは確認された溝状遺構のうち、礫が敷き詰められていた 2・4 号溝状遺構について、個別に図示した。

1号溝状遺構

調査区をほぼ東西方向に貫く溝である。調査区内での長さ約 26.5 m、幅は約 1 m、深さは 20 ~ 30 cmを測る。底面の調査区内でのレベル差は約 75 cmである。3 次調査の A 区で確認されている落ち込みと繋がるものと思われる。

出土遺物 (第 70 図)

第 70 図 4 は磁器の小壺と思われる。内面は一部露胎する。



第 70 図 溝状遺構実測図 (1/100) 及び溝状遺構出土遺物実測図 (1/3)

2号溝状遺構（第70図 図版21）

調査区東側で確認された。南東側は1号溝と接続する。長さ4.5m、幅は0.4～1.3m、深さは10～15cmを測る。溝底面には拳大の川原石が敷き詰められていた。

出土遺物（第70図）

第70図1・2は磁器碗である。1は口縁部へ向かって、直立気味に立ち上がる。3は陶器碗である。見込みには施釉した際にできたとみられる気泡がある。

3号溝状遺構

2号溝の北東側約1.5mで確認された。2号溝とほぼ平行し、南東側で1号溝と接続する。長さは約8.6m、幅は約0.8m、深さは約10cmを測る。

4号溝状遺構（第70図 図版21）

2・3号溝と平行し、3号溝の北東側約2.5mで確認された。南東側で1号溝と接続する。検出部分で長さは約7.1mであるが、北西側は削平を受けているとみられる。幅は約45～90cm、深さは約5～20cmを測る。

5号溝状遺構

調査区南西側で1号溝の北側で確認された。長さは約4m、幅は0.4～0.8m、深さは約6cmを測る。北西側は削平を受けているが、2号溝と直交して繋がると考えられる。

6号溝状遺構

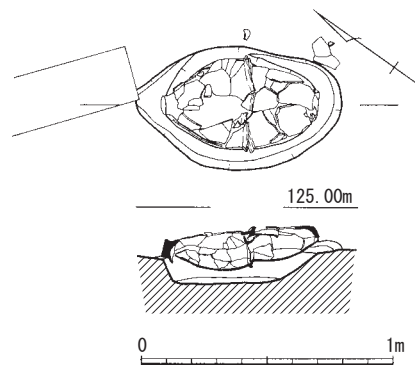
調査区の南端付近で確認された。長さは約6.6mを測り、東よりややカーブして、1号溝と繋がる。この他、一部枝状に分岐する部分も見られる。幅は約20～90cm、深さ5～15cmを測る。遺物は瓦器片が出土したが、図示可能なものはなかった。

4. 墓

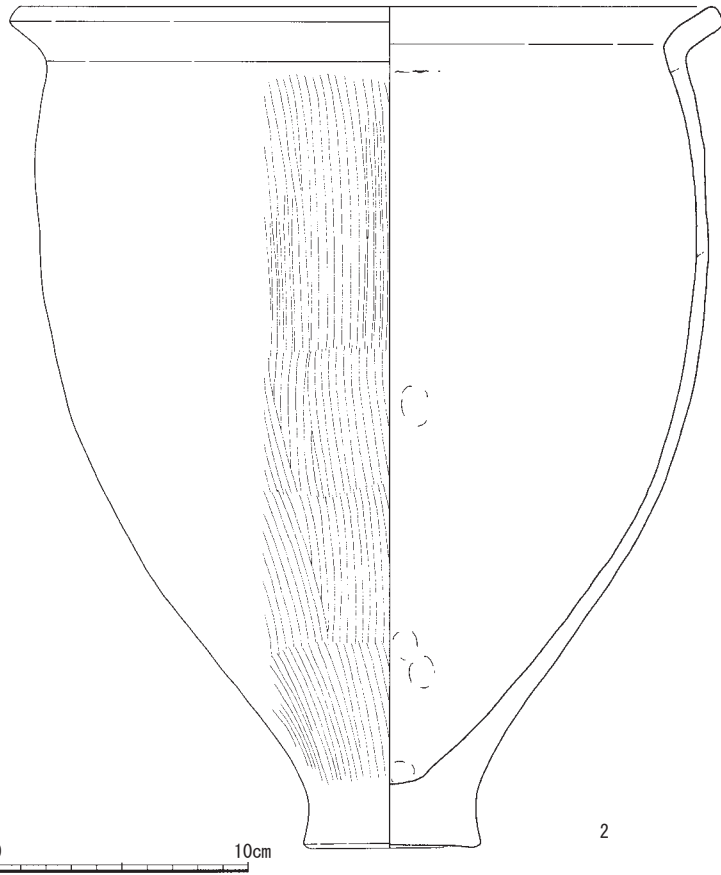
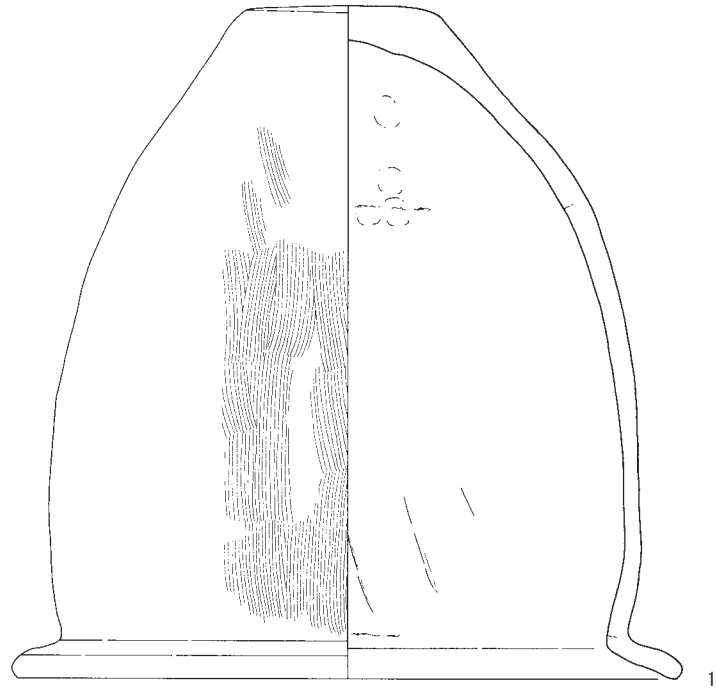
1号甕棺墓（第71・72図 図版22・35）

18号竪穴住居付近で確認された小児用甕棺墓である。上半は削平を受けており、墓坑は下半分程度の残存と思われる。墓坑は楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸約0.82m、短軸0.5m、深さ約20cmを測る。主軸方向はN-36°-Wを取る。甕棺は墓坑が削平を受けた際に、上から押し潰されようように破壊されていたが、下部は原位置を保っているとみられる。甕棺の埋置角度は約10°で、わずかながら南東から北西に向かって傾斜しており、頭位は南東側に置くとみられる。当然、棺内には土砂が流れ込んでおり、人骨や副葬品等は確認されなかった。

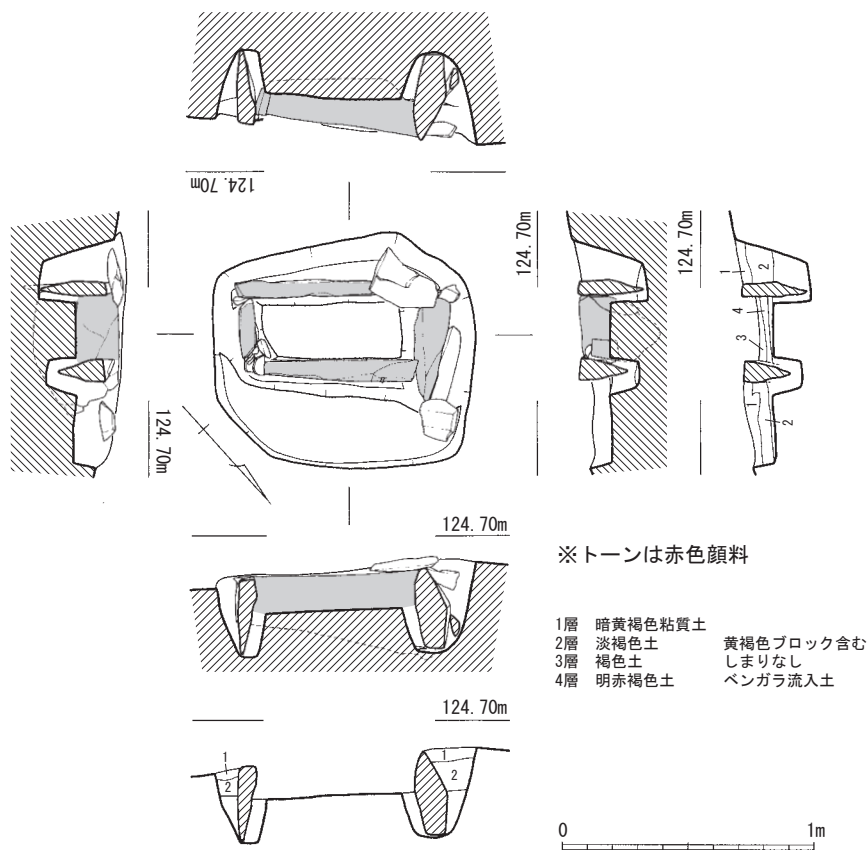
第72図は甕棺墓に使用された甕棺である。1は上甕である。底部はわずかにレンズ状を呈する。胴部は直立気味に立ち上がり、頸部付近は内湾する。口縁部は外に開き、端部をやや肥厚させる。2は下甕である。口縁部は上甕に比べて、開きは少ない。胴部は器壁を薄く仕上げ、上甕同様に頸部付近で内湾させる。底部はわずかに上げ底で外面は柱状に立ち上がる。



第71図 1号甕棺墓実測図（1/30）



第 72 图 1 号甕棺实测图 (1/3)



第73図 1号石棺墓実測図 (1/30)

1号石棺墓 (第73図 図版22・23)

36号竪穴住居の北側で確認され、主軸方向はN-49°-Wにとり、箱式石棺墓である。墓坑は歪な方形を呈し、北東側は2段で掘り込まれている。検出面での規模は長軸1.05m、短軸0.92mを測る。

蓋石はほとんど残ってなく、西隅に確認された蓋石の一部とみられる棺材も原位置を保っていないと考えられる。

石棺の規模は床面の内法で長軸0.63m、短軸0.27m、南東側小口幅0.25m、北西側小口幅0.27mを測る。床面には敷石や石枕等は確認されず、地山を床としている。

床面は北西側から南東側に向かって、約3cm傾斜している。この床面の傾斜と小口幅から、北西側に頭位を置くと考えられる。

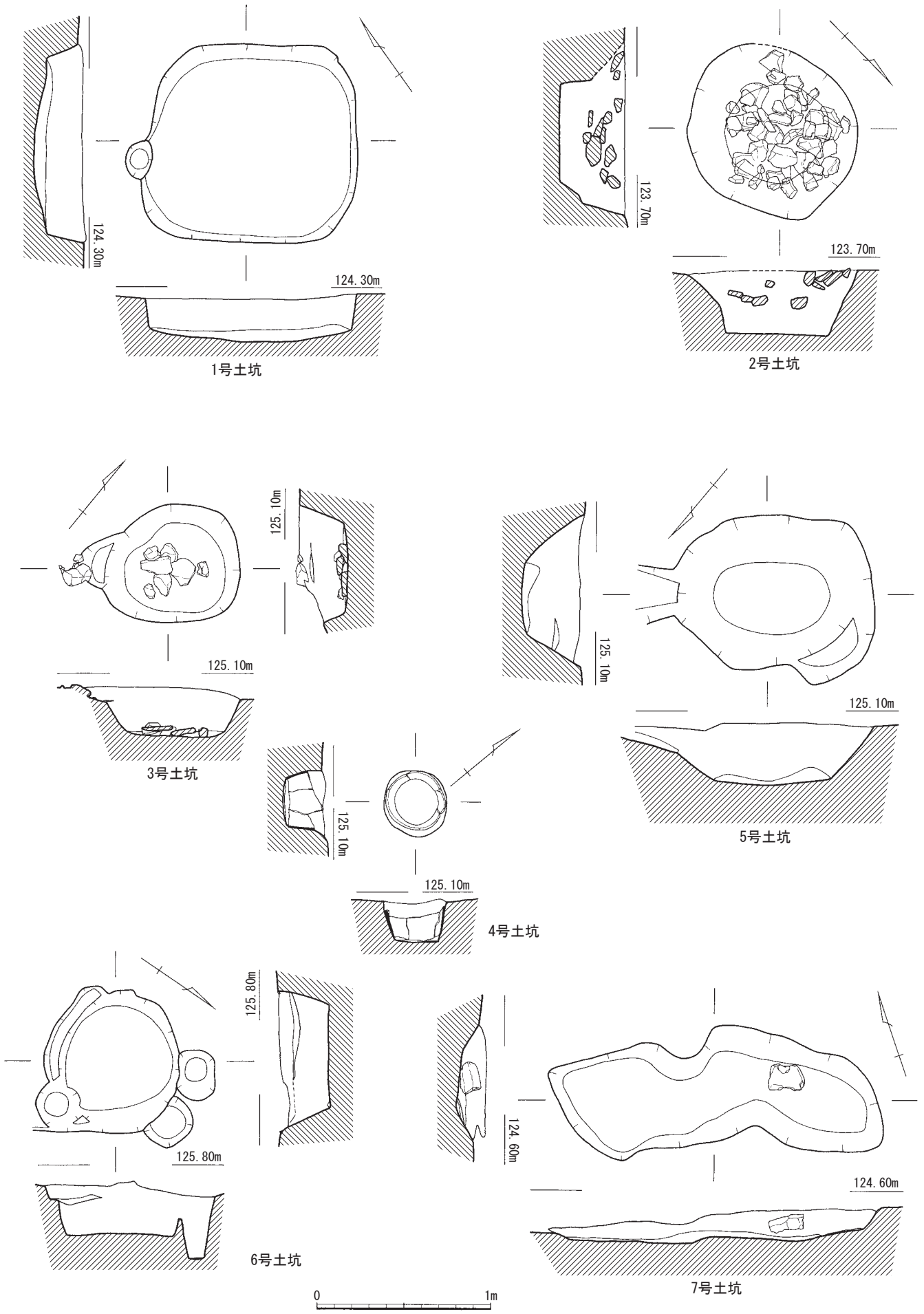
棺身は両長側辺、小口側との板石を1枚ずつ使用され、内部には赤色顔料が塗布されていた。また、頭位側の板石が土圧のためか、若干内側に傾斜していた。

棺内には、棺蓋裏の赤色顔料が崩落したもの(4層)、近年の流入土(3層)が入っており、人骨・遺物等は確認されなかった。

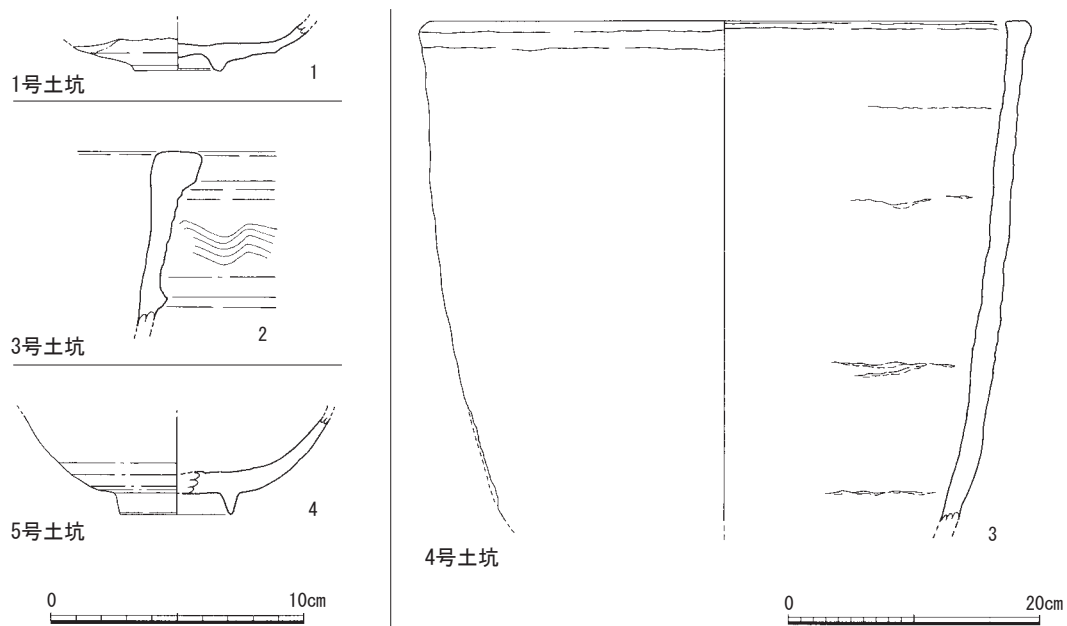
5. 土坑

1号土坑 (第74図 図版23)

調査区の南側で確認され、西側の一部をピットに切られる。平面形は隅丸方形を呈し、底面はやや舟底状となる。壁はほぼ直立する。規模は長軸約1.6m、短軸約1.5m、検出面からの深さは約40cmを測る。



第 74 图 土坑实测图 (1) (1/30)



第75図 1・3～5号土坑出土遺物実測図 (1～3 : 1/3、4 : 1/6)

出土遺物 (第75図)

1は陶器碗である。高台付近は露胎している。

2号土坑 (第74図 図版23)

調査区の東端で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、底面は平坦となる。壁は一部段を持ちながら、斜めに立ち上がる。規模は径約1.3m、検出面からの深さは約50cmを測る。土坑内には、床から20～30cm浮いた状態で大量の礫が確認された。

遺物は出土しなかった。

3号土坑 (第74図 図版24)

調査区の南西側の段落ち際で確認された。平面形は歪な円形を呈し、南西側が半円形に突出するが、他の遺構との切り合いと思われる。底面は平底で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は突出部分を含めた長軸が約1.3m、短軸約0.9m、遺構面からの深さは約40cmを測る。また、床面では板石や礫が確認された。

出土遺物 (第75図)

2は陶器鉢の口縁部か。外面には波状文が施文され、内面はナデが見られる。

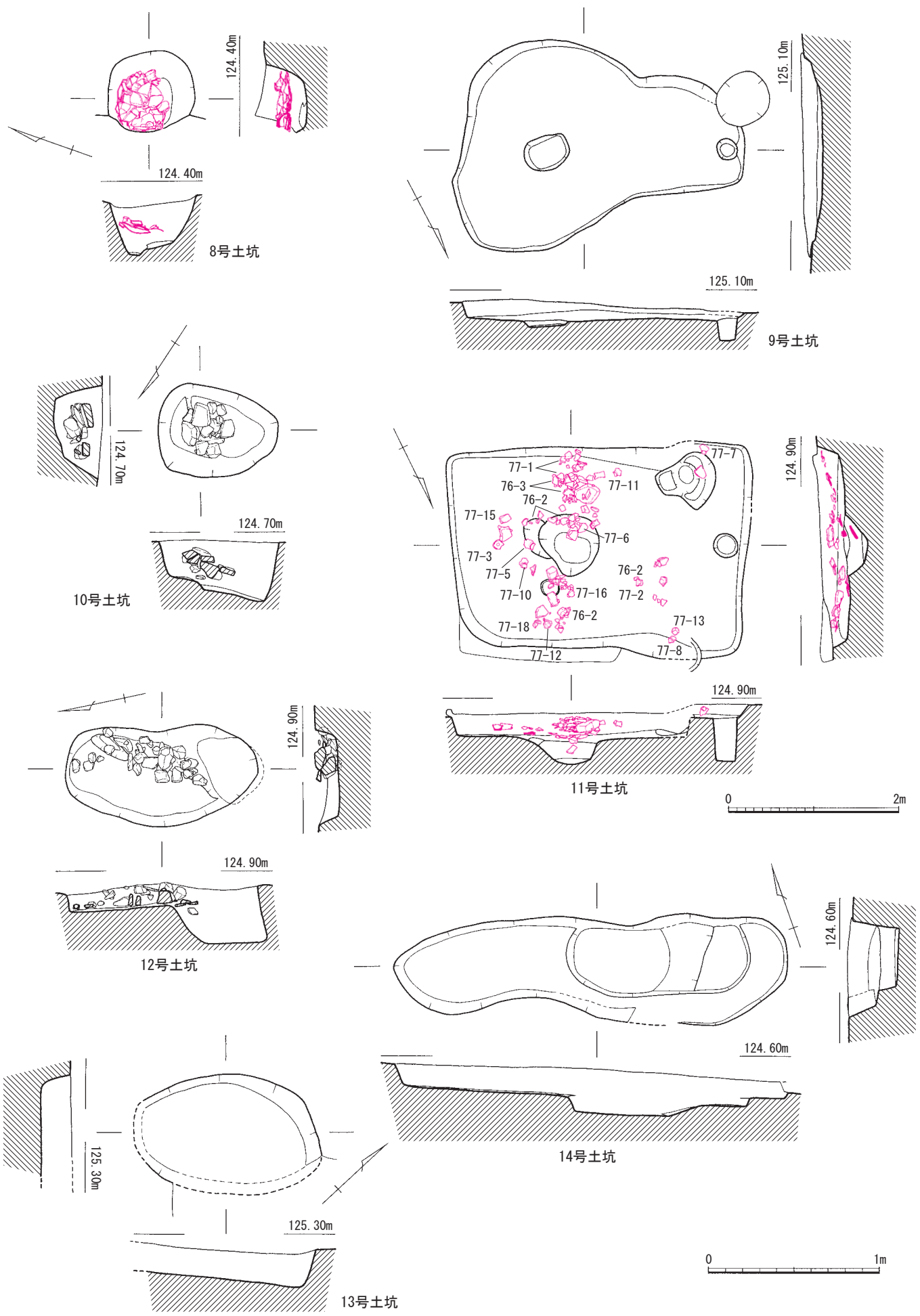
4号土坑 (第74図 図版24)

3号土坑の北西側で確認された。平面形は円形を呈し、底面は平坦になる。内部には急角度で立ち上がる壁に沿って、甕が嵌め込まれている。規模は径約1.0m、検出面からの深さは約30cmを測る。便槽か。

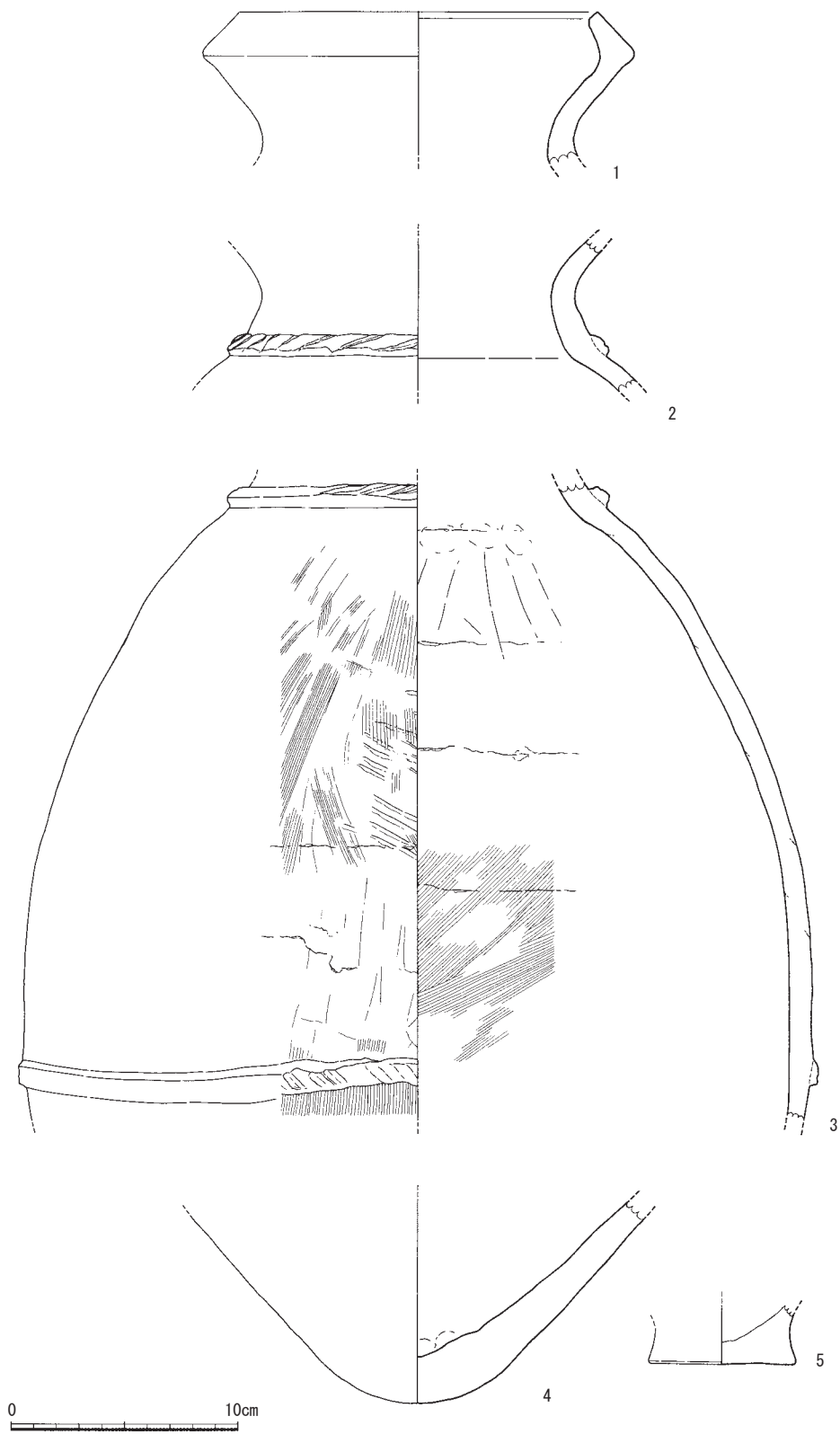
遺物はこの甕のほかにも陶器甕の破片が出土しており、同一個体の可能性もある。

出土遺物 (第75図)

3は陶器甕である。口縁端部はやや肥厚させ、端部を平坦に仕上げる。内面には接合痕が残る。



第 76 図 土坑実測図 (2) (1/30、11号土坑のみ 1/60)



第 77 图 8 号土坑出土遗物实测图 (1/3)

5号土坑 (第74図 図版24)

4号土坑の北西に隣接して確認された。土坑の北東側は削平を受け、西側はピット状の遺構との切り合いと思われる張り出しがあるが、平面形は楕円形を呈する。底面は舟底状となり、壁の立ち上がりは緩やかである。規模は長軸約1.5 m、短軸約1.2 m、検出面からの深さは約45 cmを測る。

出土遺物 (第75図)

第75図4は陶器碗である。高台先端は鋭く仕上げる。

6号土坑 (第74図)

5号土坑の北東側で確認された。他のピットと切り合いはあるが、平面形はほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は比較的急角度で立ち上がる。規模は径約1.1 m、検出面からの深さは約40 cmである。

遺物は出土しなかった。

7号土坑 (第74図)

4号土坑の南東側で確認された。平面形は不定形で、底面には凹凸が見られる。壁の立ち上がりは緩やかである。規模は東西軸約1.2 m、南北軸約0.4 m、検出面からの深さは約15 cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

8号土坑 (第76図 図版25)

調査区の北隅で確認され、31・32号竪穴住居を切る。西側を掘り過ぎてしまったものの、平面形は円形を呈する。底面はやや傾斜があり、段落ちが見られる。壁は緩やかに内湾して立ち上がる。規模は径約1.4 mで、検出面からの深さは1段目が約40 cm、2段目が約50 cmを測る。

遺物は底面より約10 cm浮いた状態で、ほぼ一個体分の弥生土器壺や甕が出土している。

出土遺物 (第77図 図版34・35)

1～4は弥生土器壺である。整理作業段階での接合や図上復元ができなかったが、恐らく同一個体であることから、まとめてみていく。口縁部は二重口縁である。口縁部の屈曲は緩く、上部口縁は直線的に短く立ち上がる。頸部は下部に斜め方向の刻み目を施した断面M字形の突帯を貼り付ける。胴部は中位付近からやや下部までが最大径を測り、下部に断面M字形の突帯を貼り付ける。この突帯にも頸部同様の刻み目が施される。底部は尖り気味で、器壁は厚く仕上げる。

5は弥生土器甕の底部で、底面は平底である。

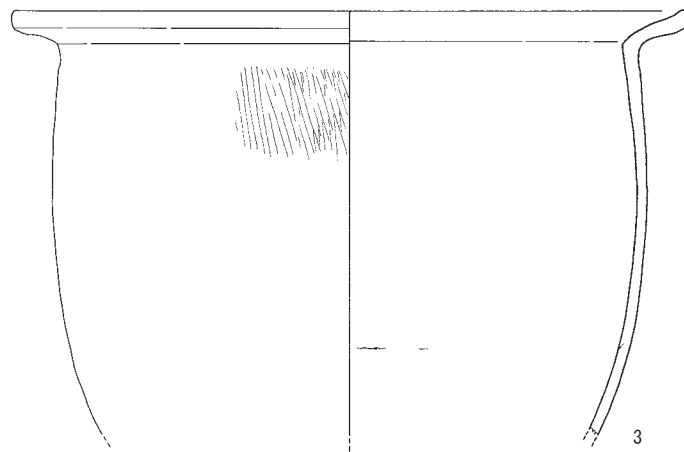
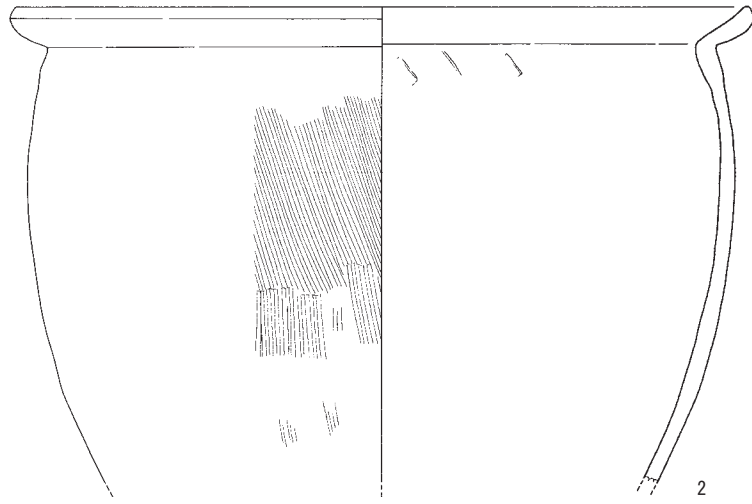
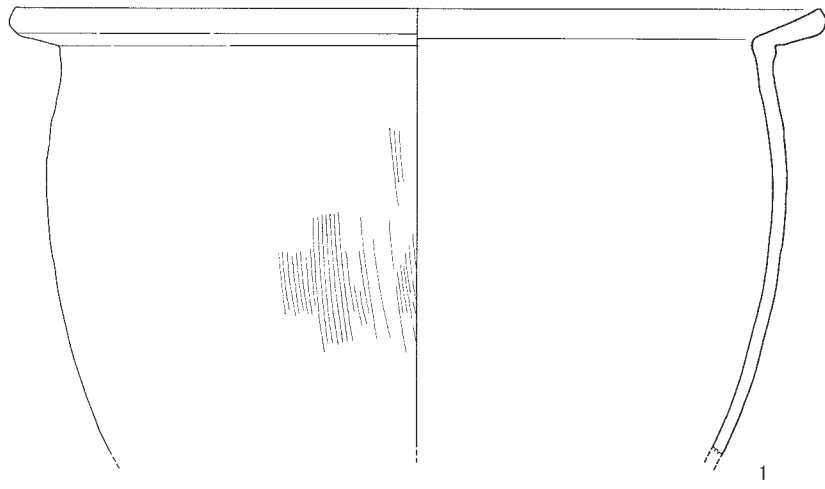
9号土坑 (第76図 図版10)

23号竪穴住居の北側で確認された。平面形は不定形で、底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。規模は東西軸約2.2 m、南北軸約1.4 m、検出面からの深さは約15 cmを測る。

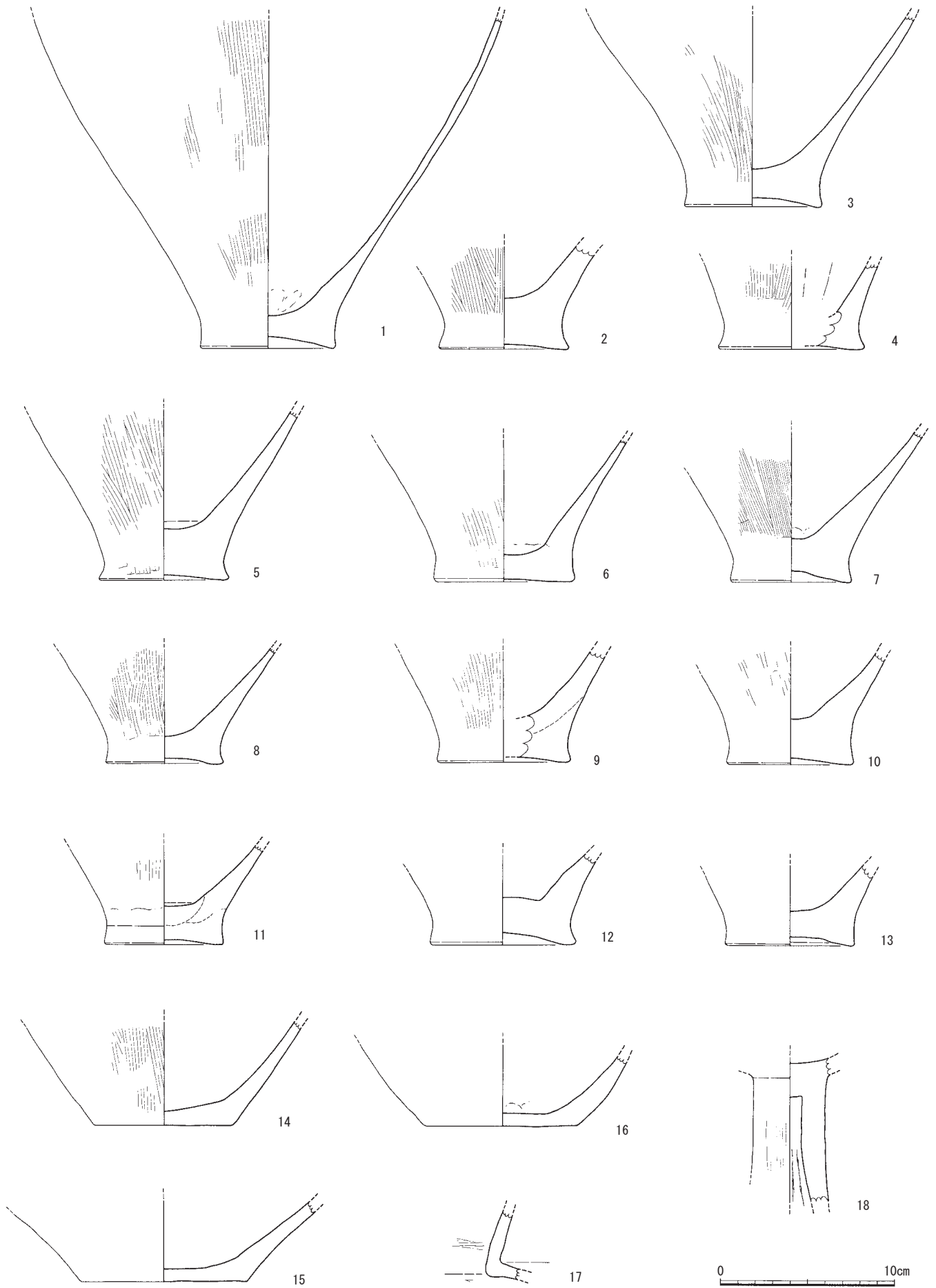
遺物は土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

10号土坑 (第76図 図版26)

32号竪穴住居の南東側で確認された。平面形はほぼ楕円形を呈し、底面は緩やかな段落ちが見られる。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約0.9 m、短軸約0.7 m、検出面からの深さは1段目が約30 cm、2段目が約50 cmを測る。また、床から若干浮いた状態で多くの礫が確認された。



第 78 图 11 号土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)



第 79 图 11 号土坑出土遺物実測图 (2) (1/3)

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

11号土坑（第76図 図版26・27）

10号竪穴住居とほぼ同位置で確認され、この住居を切り、9号竪穴住居に切られる。平面形は長方形を呈し、底面は平坦である。中央付近には不定形の落ち込みがある。また、西壁から約70cm付近では段落ちが見られる。ちょうどサブトレンチを設定していたため、この部分に本来の壁があったのか、段落ちがあったのかは定かではない。規模は現状で確認できた部分において、長軸約3.5m、短軸約2.4mを測り、検出面からの深さは1段目が約15cm、2段目が約30cmを測る。

遺物は、弥生土器のほか、磨製石斧、剥片などが数多く出土している。

出土遺物（第78・79図 図版35）

第78図1～3は弥生土器甕である。1、2は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を肥厚させる。胴部はやや張りを持ち、比較的上位で最大径を測る。3は口縁部が直線的に立ち上がり、端部を跳ね上げる。胴部の張りは1、2に比べて小さい。

第79図1～14、16は弥生土器甕の底部である。1～13はいずれも上げ底である。前図の1～3と同一個体になる可能性のものもあると思われるが、整理の段階で復元できなかった。これに対し、14・16は平底で底部の器壁は薄い。15は弥生土器壺の底部である。底面は平底である。17は弥生土器甕である。口縁部は直線的に開いて立ち上がる。18は弥生土器高坏脚部である。坏部との接合部より直線的に裾部へ向かう。

12号土坑（第76図 図版27）

28号竪穴住居の北側で確認された。平面形は中程で少し屈曲する楕円形を呈す。底面は段落ちが見られ、平坦である。壁は南壁でオーバーハングして立ち上がっており、北壁はほぼ直立する。また、東西壁は緩やかに立ち上がる。規模は南北軸約1.5m、東西軸約0.8m、検出面からの深さは1段目までが約20cm、2段目までは約40cmを測る。1段目からは礫が多く出土している。

遺物は土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

13号土坑（第76図）

24号竪穴住居の東側で確認され、この住居に切られる。一部、削平を受けているが、平面形はほぼ楕円形を呈する。床面は平坦であるが、南西から北東に向かって傾斜する。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.4m、短軸約0.9mと推定でき、検出面からの深さは最大約20cmを測る。

遺物は土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

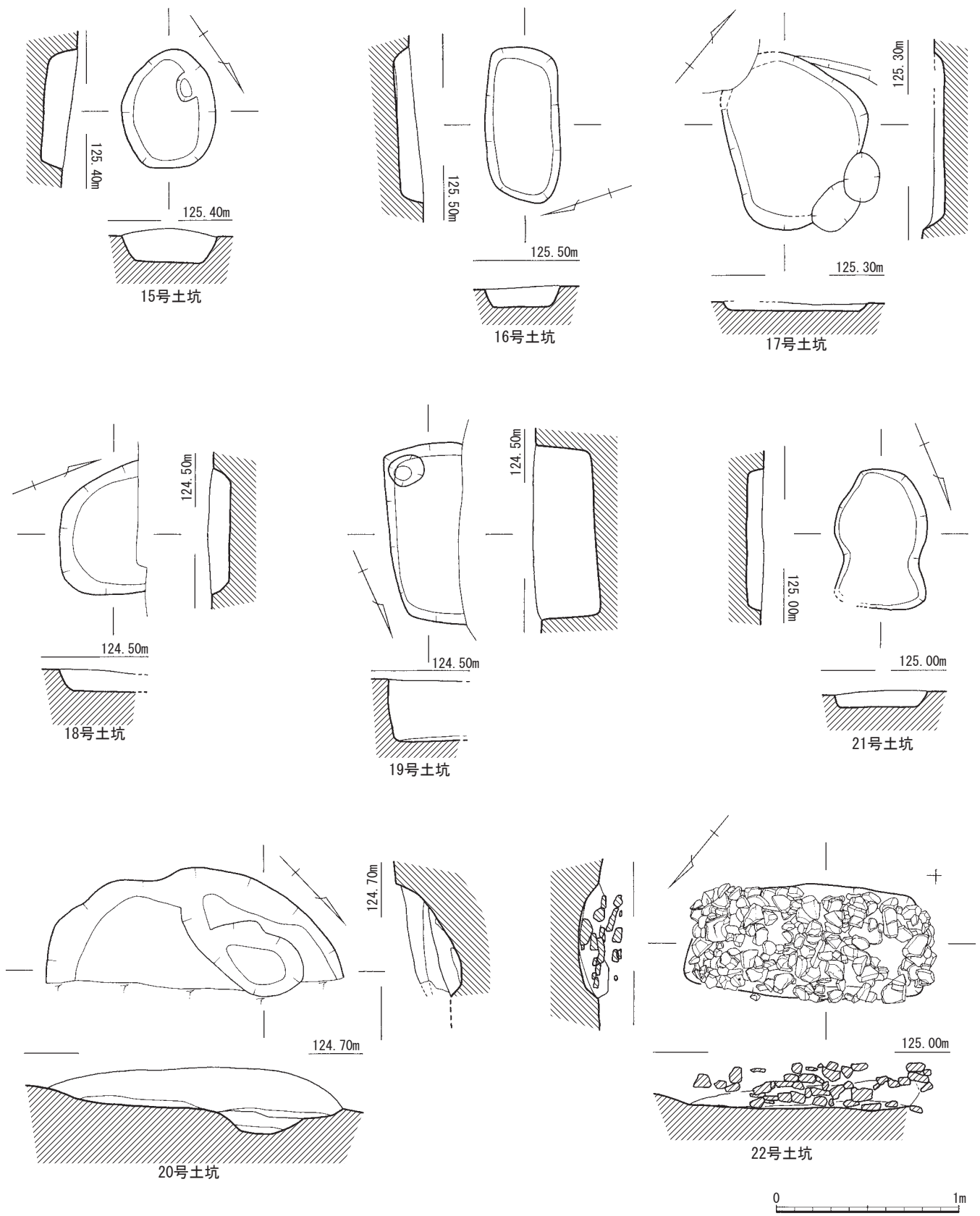
14号土坑（第76図）

36号竪穴住居の北側で確認され、この住居および1号石棺墓に切られる。平面形は長楕円形を呈し、床面は平坦で、数段の段落ちが見られる。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約3.1m、短軸約0.8m、検出面からの深さは、浅いほうから15cm、20cm、35cmを測る。

遺物は出土しなかった。

15号土坑（第80図）

25号竪穴住居の東側で確認された。平面形は楕円形を呈し、底面は平坦である。壁はやや内湾しながら立ち



第 80 图 土坑实测图 (3) (1/30)

上がる。規模は長軸約 0.9 m、短軸約 0.7 m、検出面からの深さは約 20 cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

16号土坑（第80図）

36号竪穴住居の東側で確認された。平面形は隅丸方形を呈し、底面は平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.1 m、短軸約 0.6 m、検出面からの深さは約 15 cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

17号土坑（第80図）

10号土坑の東側で確認され、この土坑やピットに切られる。平面形は不定形を呈し、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。規模は北西-南東軸約 1.3 m、北東-南西軸約 1.0 m、検出面からの深さは約 10 cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

18号土坑（第80図）

35号竪穴住居の南側で確認され、この住居に切られる。平面形は現状で半楕円形を呈し、底面は平坦である。壁はやや内湾気味に緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 $0.6\text{ m} + \alpha$ 、短軸約 0.9 m、検出面からの深さ約 10 cmを測る。

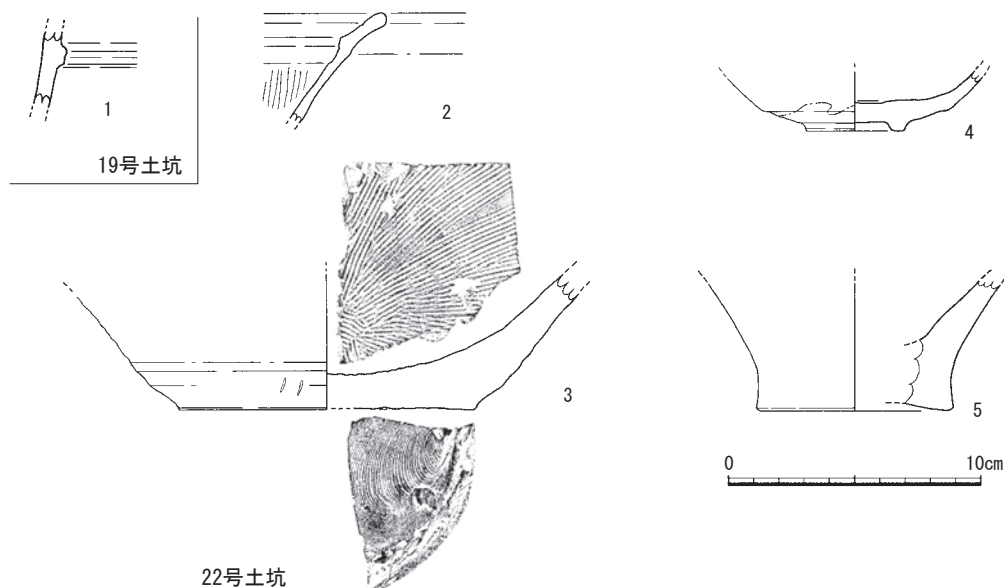
遺物は土師器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

19号土坑（第80図）

32号竪穴住居の東側で確認され、この住居に切られる。半分ほど削平を受けているが、平面形は隅丸方形を呈すとみられ、底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は南北軸約 1.3 m、東西軸約 0.5 m、検出面からの深さは約 45 cmを測る。

出土遺物（第81図）

第81図1は弥生土器甕である。外面には断面「M」字形の突帯が貼付されており、口縁部に近い部分と思われる。外面には丹が塗布されている。



第81図 19・22号土坑出土遺物実測図（1/3）

20号土坑（第80図 図版11）

21号竪穴住居の北側で確認され、21号竪穴住居を切る。北東側がほぼ半分削平を受けているが、平面形は楕円形を呈すると考えられる。底面はやや傾斜しており、北側にはピット状の段落ちが見られる。壁の立ち上がりは非常に緩やかである。規模は長軸約2.2m、短軸約0.9m、深さは約25cm、50cmを測る。

遺物は土師器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

21号土坑（第80図）

8号竪穴住居の東側で確認され、この住居に切られる。平面形は不定形を呈し、底面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は南北軸約1.0m、東西軸約0.7m、検出面からの深さは約10cmを測る。

遺物は土器片が出土しているが、図示可能なものはなかった。

22号土坑（第80図 図版28）

5号竪穴住居の東側で確認された。平面形は長方形を呈し、規模は長軸約1.7m、短軸約0.8m、検出面からの深さは約15cmである。土坑内は、拳大の川原石が全体に充填されており、暗渠の可能性はある。

出土遺物（第81図）

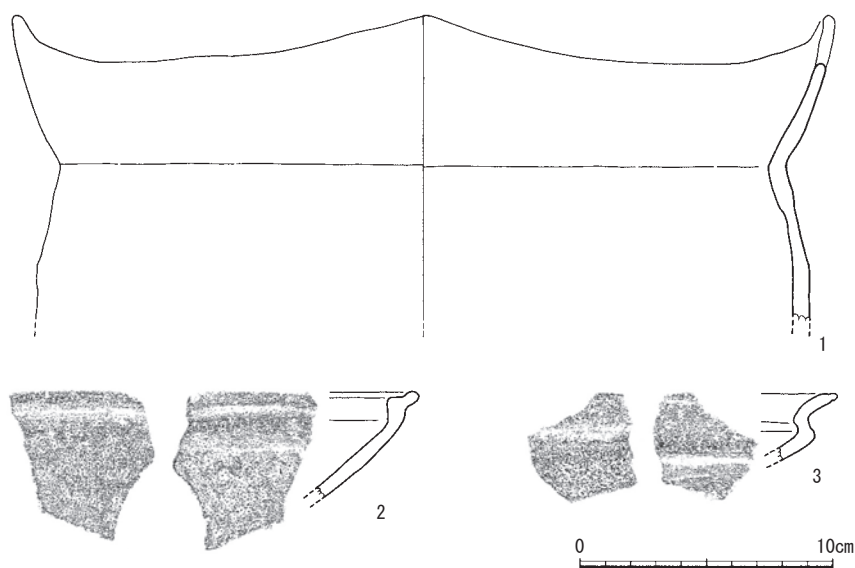
第81図2・3は陶器播鉢である。摺目は細かい。口縁部と底部形態から17世紀後半頃のものと思われる。4は陶器碗である。底部付近が一部露胎している。5は弥生土器甕である。底部はやや上げ底である。この土坑の西側に存在する2号竪穴住居から混入した可能性がある。

6. その他の遺物（第82～91図）

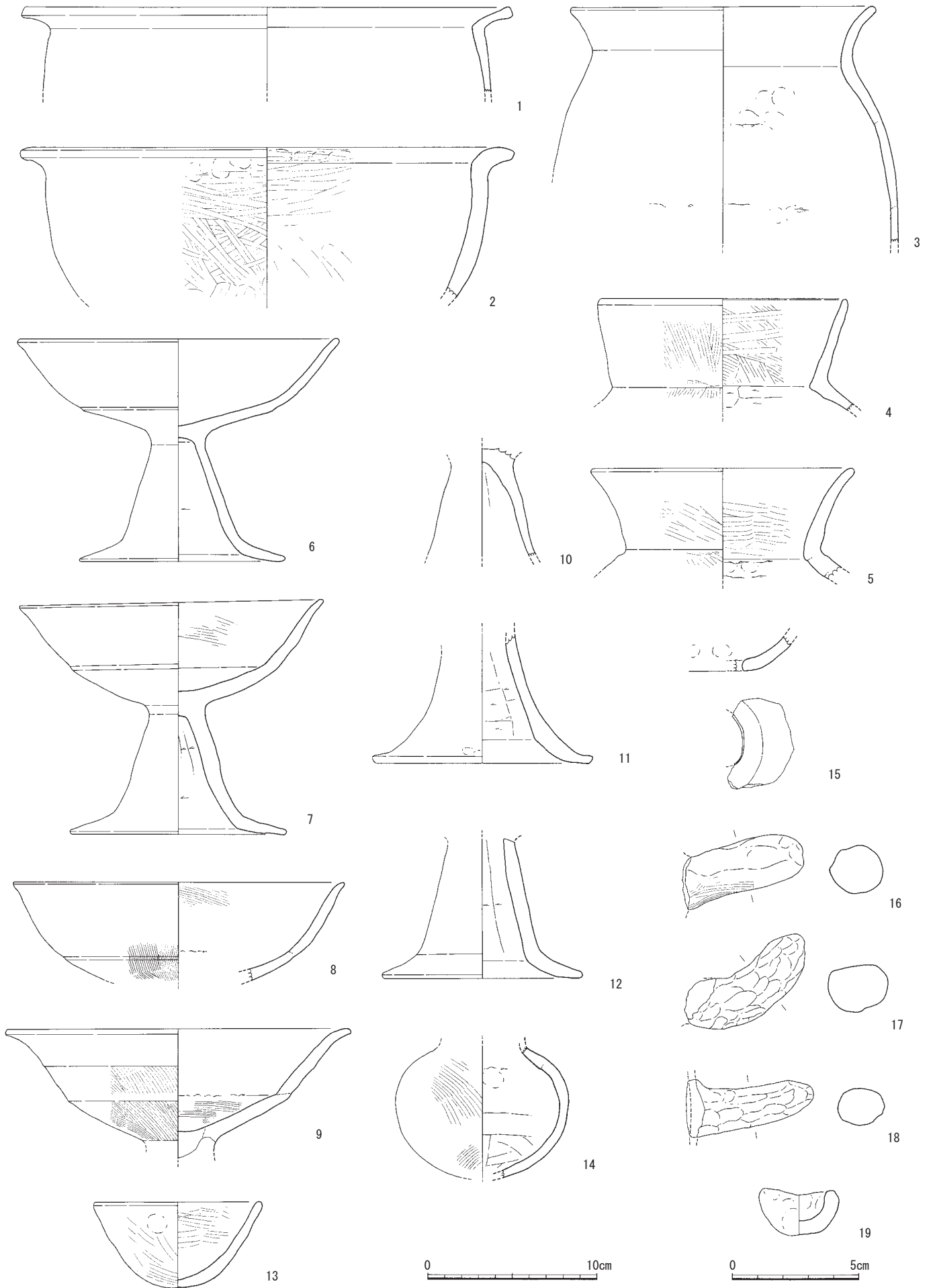
ここではピット出土遺物やグリッド一括遺物及び各遺構出土の石器・土製品・鉄製品について説明を行う。（出土遺構は観察表を参照されたい。）

縄文土器（第82図 図版35）

1は三万田式期の深鉢と思われる。器面には条痕がみられる。2・3は浅鉢である。晩期初頭～前半頃のものと思われる。



第82図 その他の出土土器実測図（1）（1/3）



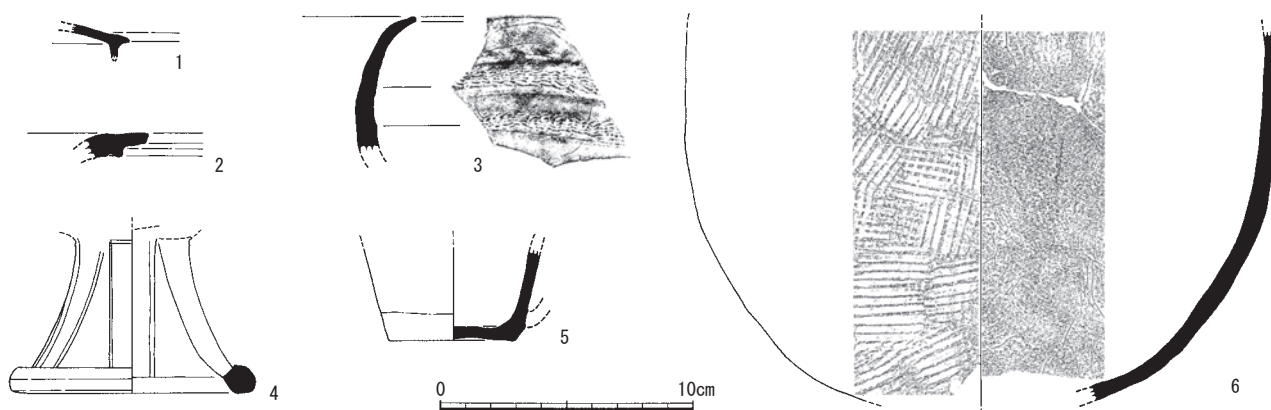
第 83 図 その他の出土土器実測図 (2) (1 ~ 18 : 1/3、19 : 1/2)

弥生土器・土師器 (第83図 図版35)

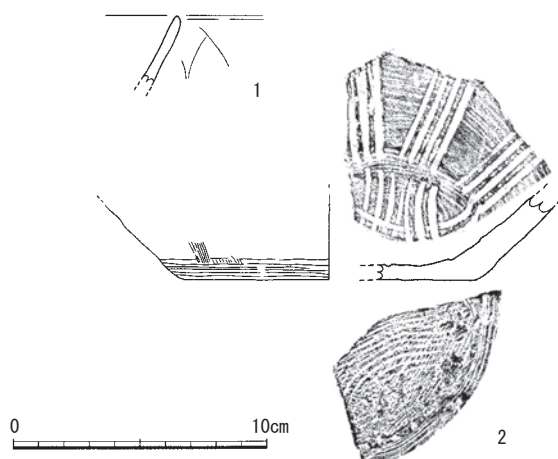
1は弥生土器甕である。口縁部は直線的に大きく開く。端部はやや肥厚させる。2は土師器甕である。口縁部は短く外反させ、厚ぼたく仕上げる。胴部は張らない。3は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反しながら開き、端部を丸く仕上げる。胴部は中位付近で最大径を測りそうである。4は土師器壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げる。5は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反しながら開き、端部を丸く仕上げる。頸部との境付近でやや厚みを帯びる。

6～12は土師器高坏である。6～8はいずれも坏部下部に稜がみられ、口縁部は比較的緩やかに開きながら立ち上がり、端部をやや外反させる。6、7の脚部は接合部から開きながら裾部へ向かい、接地面より1cmほど上で屈曲する。7は脚部の中位付近がやや膨らむ。9は坏部下部の稜が6～8より明瞭に見られ、やや角張った感がある。口縁部は大きく開きながら立ち上がり、端部を外反させる。10は脚部中位付近がやや膨らむ。11は接合部から裾部へ開き、接地面より1cmほど上で屈曲する。屈曲部より下位は器壁に厚みがあり、端部をやや角張らせて仕上げる。12は11に比べ、脚部の開きはやや小さい。屈曲部の位置や裾部は形態は11とほぼ同様で、端部を丸く仕上げる。

13は土師器鉢である。底部はやや丸味を帯び、口縁部は直線的に外に開き、端部を丸く仕上げる。14は土師器の小型壺である。胴部は中位付近で最大径を測る。



第84図 その他の出土土器実測図(3)(1/3)



第85図 その他の出土土器実測図(4)(1/3)

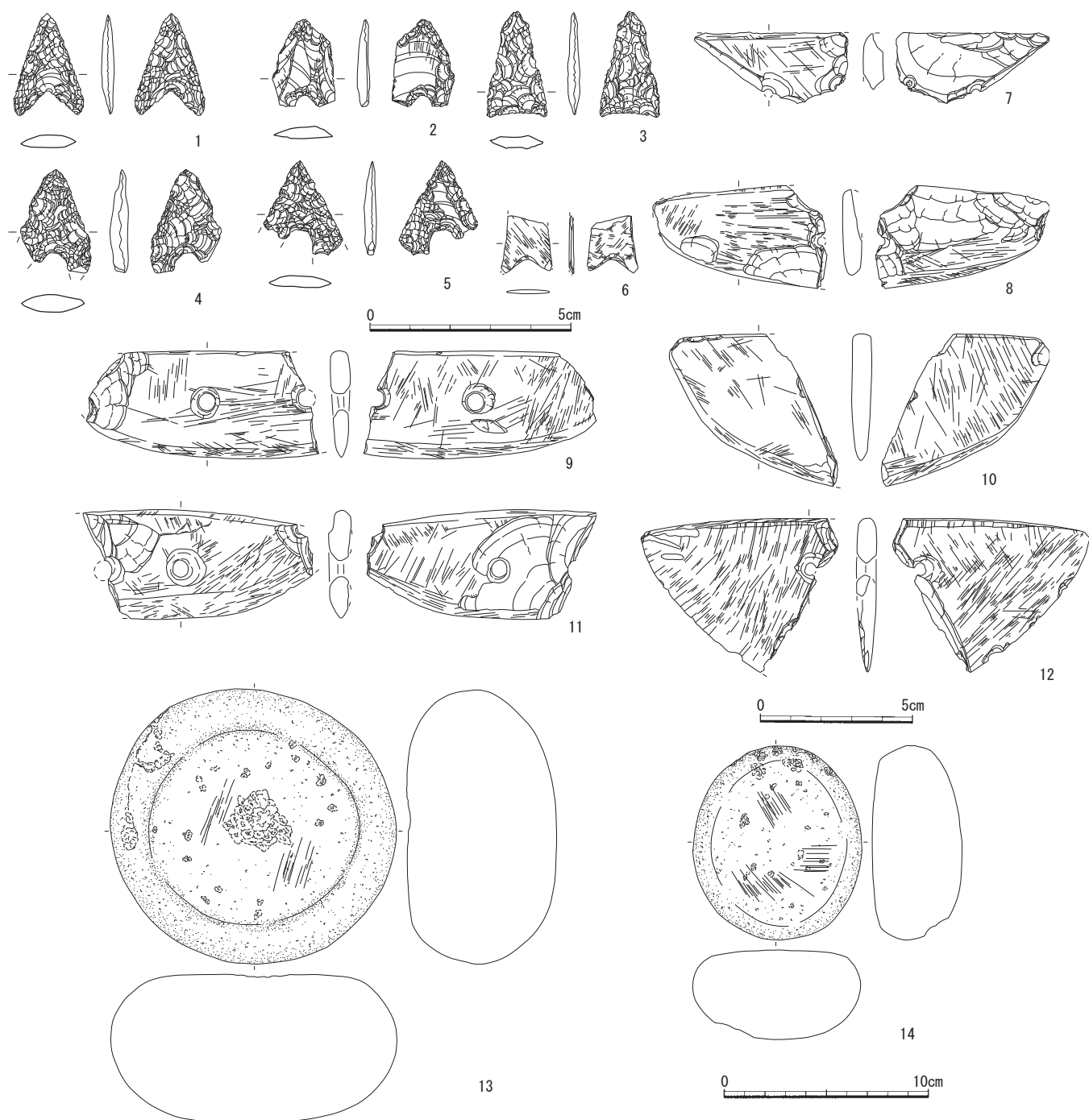
15は土師器甑の底部である。複数の蒸気孔を持つものと思われる。16～18は土師器甑の把手である。どれも傾きは確実ではないが、16、18は直線的に伸びるもので、17はやや上方に屈曲する。

19は手捏土器である。器壁はほぼ均等な厚さで仕上げる。

須恵器 (第84図 図版35)

1は須恵器蓋である。口縁部は端部付近でやや肥厚させ、端部を丸く仕上げる。受け部は短い。2は壺と思われる。外面には下向きの突帯を持ち、口縁部は端部を角張らせて仕上げる。

3は長頸壺の口縁部である。端部は薄く、丸味を帯びて仕上げる。朝倉産か。4はの高坏脚部である。坏部と



第86図 出土石器実測図 (1) (1～6:2/3、7～12:1/2、13・14:1/3)



第 87 图 出土石器实测图 (2) (1/2)



第 88 图 出土石器实测图 (3) (1 ~ 9 : 1/2、10 : 2/3)



第 89 图 出土石器实测图 (4) (2/3)



17
第 90 图 出土石器实测图 (5) (2/3)

の接合部から脚端部にいたる長方形透かしを四方に穿つと思われる。5は鉢である。底部付近に把手の痕跡が見られるが、把手数は1個か2個かは不明である。6は甕である。中心軸や傾きは不確実ではあるが、胴部はあまり膨らみを持たず、直立する。

陶磁器（第85図）

1は龍泉窯系の青磁碗である。外面には蓮弁文がみられる。2は瓦器播鉢である。内面はハケで仕上げた後、4本単位の摺り目が施される。

石器（第86～90図 図版36・37）

第86図1、3～5は打製石鏃で、1、3は安山岩製、4・5は黒曜石製である。2は黒曜石の縦長剥片を利用した剥片鏃である。6は結晶片岩製の磨製石鏃である。切先・基部ともに欠損している。7～12は石庖丁である。石材は7～9が輝緑凝灰岩、10～12が粘板岩である。13は凹石、14は磨石である。ともによく使い込まれている。

第87図、1～3、5は打製石斧である。1は抉りが入っているが、大型剥片の可能性もある。4、7は磨製石斧である。6は扁平片刃石斧である。

第88図1は粘板岩製の石剣である。基部を欠損しているが、丁寧な仕上げである。2～9は砥石である。2が粘板岩製で、それ以外は玢岩製である。10は腰岳系黒曜石製のスクレイパーである。

第89図及び第90図1～17は二次加工剥片および使用痕剥片である。石材は第90図9が珪質岩、10が玉髄であるのを除き、腰岳系黒曜石である。第90図13～15は鈴桶技法によるものである。また16・17は石錐として利用したと考えられる突起部がみられる。第90図18は姫島産黒曜石製の石核である。

これらの剥片は、風化の度合いや鈴桶技法を用いている点などから、前述した縄文土器と同時期の縄文時代後期の所産とみれよう。また、刃潰れしたものが多く、かなり激しく使い込んだものと思われる上、前述の鈴桶技法を用いたものはごく一部で、多くは特定の技法もなく、ただ剥いだというものが多い。

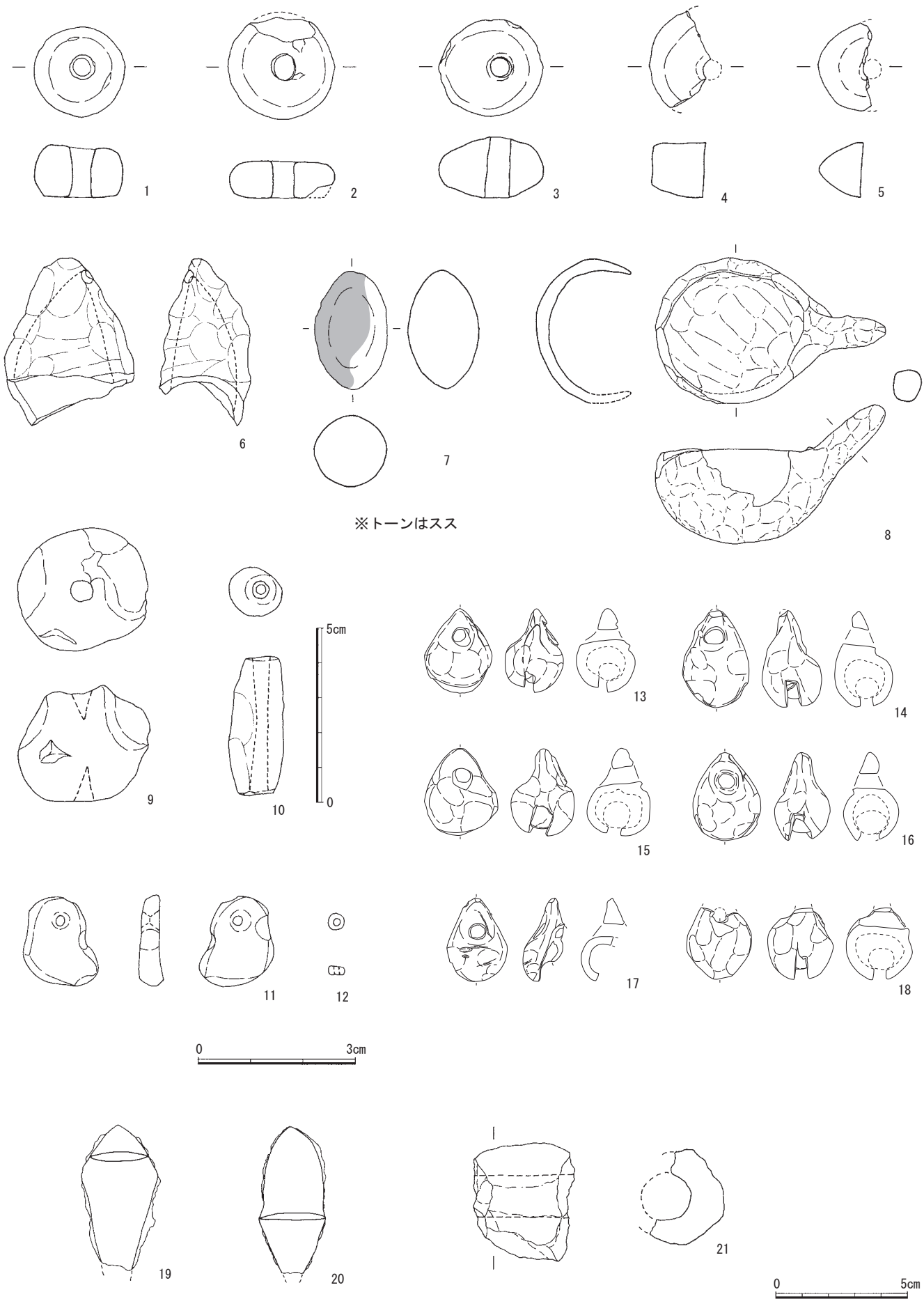
こうした剥片類については、出土位置や層位等に注意して、取り上げを行っていなかったことから、竪穴住居に伴うものかどうかの判断はできなかったが、流れ込みによる可能性が高いと思われる。

土製品・石製品・鉄製品（第91図 図版36）

1～5は紡錘車である。3と5は断面形は楕円形を呈する。6は袋状を呈する土製品であるが、用途は不明である。全面に指押さえやナデの痕があり、上部に1ヶ所穿孔が施される。7は投弾である。形状は楕円形を呈し、黒斑がみられる。8は土匙である。匙部はほぼ半球形になっており、短い把手が付く。9は土玉である。歪な球形を呈し、穿孔も貫通していないことから、製作途中とみられる。10は土錘である。11は硬玉製勾玉の再加工品と考えられる。11は滑石製白玉である。

13～18は土鈴である。いずれも黄橙色系の色調を呈する。13、14、17は同一のピットからの出土であり、調査中に確認ができなかったものの、近世の遺構が存在する可能性がある。

19・20は鉄鏃で、鏃身部のみが残存する。ともに柳葉形を呈するが、ふくらの長さが異なる。21は鞆羽口である。半分ほどが残存している。



第91図 出土土製品・石製品・鉄製品実測図 (1~8、13~21:1/2、9・11・12:1/1、10:2/3)

IV まとめ

以上、金田遺跡の2次調査について報告してきたが、この調査では弥生時代中期から古墳時代後期までを中心に、40軒の竪穴住居や石棺墓・甕棺墓・土坑などが確認された。また、1、3次調査区でも44軒（内、本調査区との重複7軒）の竪穴住居が確認されている。最後にこれまでの調査成果と合わせて、時期や集落の様相について若干の検討を行ってみたい。

(1) 弥生時代の遺構と遺物について

弥生時代の竪穴住居は2、5～7、11～19、23、24、26～28、29、32（ABC）、36、37号の24軒である。まず、竪穴住居の時期^①を整理し、その後、本遺跡における集落の動向を考えてみたい。

遺構の時期について

確認された竪穴住居の中で、古い時期のものは平面形が円形を呈する5、6、11～14、32号竪穴住居で中期に属する。まず、11～14号竪穴住居は11、12～14号の順で切り合い関係にあり、さらに11号土坑が11号竪穴住居を切る。まず、12～14号竪穴住居は数回の建替えが行われたであろうが、出土した蓋（第26図6・7）の径が30～40cmと大きくなっていることから、少なくともこれらは中期後半～末の中に収まるものと考えられる。そして、11号土坑は甕の形態などから中期中頃～後半のものともみられ、よってこれに切られる11号竪穴住居は中期中頃のものともみていいだろう。

次に5号竪穴住居については遺物量が少なく、時期の断定が難しいが、11号竪穴住居と同様の規模で支柱穴も同数であることから、同時期中期中頃と考えたい。よって、これを切る6号竪穴住居は続く中期後半以降で、高坏（第8図1）から中期後半～末になると考えられる。32号竪穴住居は中期後半頃の甕が出土しているが、少なくとも2回以上の建替えが行われており、どの竪穴住居に対応するか確認できなかったが、最も新しい32号C竪穴住居の規模が径約11～12mと大きくなっていることから中期末にかけて営まれたと思われる。

また、方形竪穴住居の28号竪穴住居の屋内土坑からは中期後半頃の甕が出土、さらに27号竪穴住居からは同時期とみられる甕底部が出土しているが、切り合い関係から27号、28号の順となる。

続いて36号竪穴住居は出土した甕底部の形態から、中期末～後期初頭頃とみられ、これを切る26号竪穴住居が続く。さらに7号竪穴住居については、壺の形態から後期前半ものと考えられる。

上記以外の竪穴住居の多くは、後期後半以降のものである。まず、15～18号竪穴住居であるが、これらの竪穴住居からは底部がレンズ状を呈す甕や胴部が大きく横に張る長頸壺（第31図4）などが出土しており、後半～終末のものと考えられ、切り合い関係から17号、16号、15号・18号の順に営まれたとみられる。さらにタタキを施した長胴甕が出土した23号竪穴住居や、口縁部が外反気味に立ち上がる壺（第35図3）、底部が球状を呈す小型甕（第35図4）が出土した19号竪穴住居なども終末期頃のものであり、切り合い関係から23号、24号、19号の順となる。また、8号土坑は出土した複合口縁壺から後期後半頃とみられる。

このほか、2・29号竪穴住居からは中期の甕、37号竪穴住居からは突帯を貼り付けた後期の壺胴部が出土しているが、いずれの竪穴住居も出土量が少ない上、29号竪穴住居に至っては切り合い関係もないことから、詳細な時期については断定を控えたい。

甕棺墓については、胴部の張りや口縁部・底部の形態から、橋口氏の編年のKⅢb式並行^②、中期中頃～後半と考えられ、32号竪穴住居や11号土坑とほぼ同時期である。また、石棺墓は、副葬品等が出土しなかったことから、明確な時期の決定はできないが、36号竪穴住居を切っていることから、少なくとも後期前半以降のものと考えられる。

弥生時代集落の動向

以上の主な遺構の時期をみてきたが、次に1・3次調査区の調査成果と合わせ、本遺跡における弥生時代集落の動向をまとめてみたい。まず、中期中頃に5・11号竪穴住居、SH 204の3軒が作られることで、集落の営みが開始される。その後、中期後半以降には16軒の竪穴住居がみられるが、切り合い関係から同時期に存在した竪穴住居は5軒前後程度と推測され、後期前半にかけて軒数は減少していく。

続く後期前半から後半にかかる時期の竪穴住居はなく、後期後半～終末にかけての時期に10軒が営まれるが、同時期に存在した竪穴住居の数はやはり、切り合い関係から5軒前後であったとみられる。

以上、弥生時代の集落は中期中頃～後期前半、後期後半～終末と大きく2つの時期に分けることで、集落の規模としては大きなものではなかったと考えられる。ただ、本遺跡の対岸に位置する小西遺跡でもこの時期の集落が存在することから^⑤、求来里川流域一帯でいくつかの集落が存在していたことが想定される。

(2) 古墳時代の遺構と遺物について

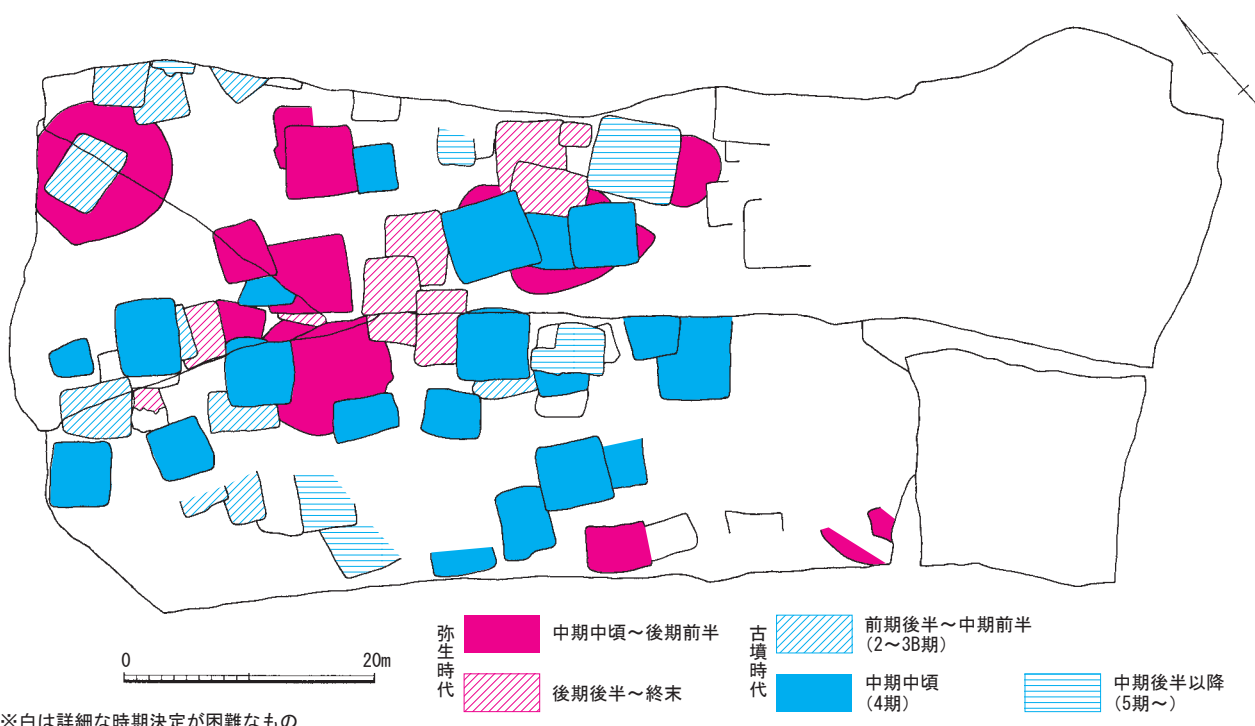
古墳時代の竪穴住居は1、3、4、8～10、20～22、25、30、31、33～35、38号である。以下、前節と同様、遺物の検討や竪穴住居の時期を整理し、本遺跡の古墳時代集落について、検討していく^④。

初期須恵器と朝鮮半島系土器について

9・10号竪穴住居とその周辺のグリッドから初期須恵器や朝鮮半島系土器が10数点出土しており、カマドの導入なども深く関係すると思われるので、以下、主なものについて、簡単ではあるがみていきたい。

まず、9号竪穴住居出土の遺物をみていく。第16図5・6の高坏蓋であるが、山形に突出するツマミや外面に施された櫛歯文は、同様の特徴が見られる大庭寺TG231・232号窯や陶邑ON231号窯のものと考えられる^⑤。次に、第16図7・8の壺について検討する。これらの壺は中村勝氏の分類によるB型波状文が施され、山形の突出部が低くなっている特徴から朝倉産と考えられ、時期はON46～TK208古段階とみられる^⑥。

続いて、10号竪穴住居の出土遺物についてみる。第22図1は口縁部形態から陶邑産や朝鮮半島系の可能性もあるが、断定は難しい。2は口縁形態が福岡県・居屋敷窯跡の甕に類似しており、また、同様の山形突帯は愛媛県・



第92図 弥生～古墳時代の竪穴住居変遷図 (1/600)

市場南組窯跡の壺にも見られる。これらの山形突帯をもつ遺物が直接的に関係するかは判断しかねるが、いずれにしる TK208 以降の特徴と思われる⁷⁾。

続いて、上記の竪穴住居周辺の E 6・E 7・F 6・F 7 グリッド一括で取上げた遺物についてみる。第 84 図 3 は第 16 図 7・8 と同様に B 型波状文が施され、朝倉産とみられる。4 の高坏は脚端部の形態から陶邑産と考えられる⁸⁾。5 の把手付碗是那珂川町松木遺跡や筑紫野市隈・西小田遺跡で類例がみられ、ここでは TK208 並行の甗と共伴している⁹⁾。

また、須恵器以外の土器をみる。10 号竪穴住居出土の第 21 図 2 の多孔式の甗は丁寧なタタキで仕上げられ、胴部中に浅い沈線があり、第 20 図 14 の平底の鉢には格子タタキが見られる。こうしたタタキや沈線などの特徴からともに朝鮮半島系の軟質土器と考えられる¹⁰⁾。

以上、須恵器については多くが陶邑産や朝倉産とみられる。陶邑産のものには他の遺物に比べ時期の古い須恵器もみられるが、朝倉産の壺などは、基本的に陶邑編年 TK216～TK208、重藤氏編年 4 期の範疇に入ると思われる。またこれらと共伴する朝鮮半島系土器については軟質土器のみが存在し、陶質土器が存在しないことが注目されるが、このことについては後述する。

遺構の時期について

まず、前期の遺物が出土しているのが、31・33 号竪穴住居である。31 号竪穴住居は土師器甗（第 57 図 2）及び 3 次調査の SH255 で出土した土師器甗から、また 33 号竪穴住居は土師器器台（第 61 図 1）から、いずれも 2 期のものとみられる。

次に中期に入ると、初頭から前半にかけて 2 軒の竪穴住居がみられる。35 号竪穴住居からは、3 A 期のものとみられる直口壺（第 63 図 4）が出土している。38 号竪穴住居は高坏の形態（第 66 図 7）や壺の口縁形態（第 66 図 13）から 3 B 期のものと考えられる。

続く中期前半から中頃の時期がカマドを造り付けた竪穴住居の出現期にあたる。前述の須恵器や朝鮮半島系土器の時期を参考に竪穴住居の時期を考えていく。

カマドをもった竪穴住居で最も古いのは、切り合い関係から 20 号竪穴住居とみられる。この竪穴住居からは、土師器の小型丸底壺（第 37 図 4）や口縁部が直線外反して開く口縁部の壺（第 37 図 6）、口縁端部を外反させた高坏坏部（第 37 図 8）などが出土しており、その特徴から 3 B～4 期前半頃のものと考えられる。

次にこの竪穴住居を切る 9・10 号竪穴住居が続く。9 号竪穴住居については、前述したように出土した須恵器高坏蓋や甗は TK208 を下限とする。また、カマド内から出土し、支脚に転用した土師器高坏（第 15 図 11）の坏部の屈曲が緩やかになっていること、多孔式の甗が出土していることなどから、4 期後半が下限と考えられ、前述した須恵器の時期とも矛盾しない。

10 号竪穴住居では、土師器小型丸底壺の多くは口縁部径が胴部最大径より小さくなっており（第 19 図）、最も時期の下るもので、4 期前半頃と比定できる。土師器高坏については、脚部の形態が脚の途中で明確な稜をなして開くもの（第 20 図 1・2・10・13）や坏部との接合部から裾部にかけて、直線的に開くもの（第 20 図 3・7）が見られ、3 B 期～4 期の特徴を示している。しかし、前述した須恵器壺、朝鮮半島系軟質土器などの新しい遺物が出土しており、4 期の竪穴住居と考えたい。

9・10 号竪穴住居と同じ時期と考えられるのが、25 号竪穴住居である。土師器高坏の口縁部の傾きや口縁端部が外反する坏などから、4 期の特徴がみられる。さらに 30 号竪穴住居は焼土近くから出土した土師器壺がやや古手の 3 B 期のものとみられるが、1 次調査区（SH22）ではこれより新しい 4 期の遺物が出土しており、9・10・25 号竪穴住居と同時期と考えられる。

上記の竪穴住居に続いて、作られたのが8号竪穴住居である。この竪穴住居から内湾口縁の土師器坏や頸部の稜線が緩やかになる土師器甕が出土しており、5期のものとみられ、中期後半～後期初頭にかかる。

この他、1号竪穴住居は土師器甕の口縁形態から6～7期と思われる。また、3号竪穴住居は4～5期や7期の甕が、4号竪穴住居は2期の土師器小型丸底壺が出土している。さらに、22号竪穴住居は高坏や坏の形態から4～5期、34号竪穴住居はカマドの形態から7期以降と思われる。ただし、以上の竪穴住居は遺物量が少なかったり、詳細な出土位置を押さえていないことから、確実な時期を断定するには材料に乏しい。

10号竪穴住居にみるカマド導入期の様相

次に初期須恵器や朝鮮半島系軟質土器、韃羽口など、多くの遺物が出土し、4期のものと考えられる10号竪穴住居について少し考えてみたい。

まず、遺物は前述の初期須恵器とともに土師器の甕・小型丸底壺・鉢・鉢形甕・高坏などが出土しているが、これらの多くは朝倉市・宮原遺跡BC地区3号住居跡出土の土器と器種構成が類似している⁽¹¹⁾。宮原遺跡の住居の時期は5世紀前半と報告されており、3B期にあたる。このことから、この時期の器種構成がカマドの導入を挟んで4期まで残存していたことが指摘できよう。そして、これらの土器のうち、鉢形の小型甕と多孔式的大型甕が共伴するという九州地方の特徴を示す一方で、九州地方では出土例が少ないタタキ目をもつ朝鮮半島系の甕も見られ、注目される⁽¹²⁾。

韃羽口については、荻鶴遺跡での韃羽口・鉄鋌などが出土した5世紀前半頃の鍛冶遺構⁽¹³⁾、一丁田遺跡での鉄鋌が出土した5世紀初頭～前半頃の竪穴遺構⁽¹⁴⁾など、3期における市内での出土例に次ぐものであり、続く4期には鉄の生産技術がさらに広がりを見せ、定着していたことを窺わせるものといえる。

ところで、日田におけるカマドの導入時期については、これまで4期後半とみられていた⁽¹⁵⁾。しかし、今回の調査や1・3次調査において4期前半頃には確実にカマドをもつ竪穴住居が存在することが判明した。この結果、日田におけるカマドの導入は筑後川中流域での導入とほぼ同時期に行われたと考えられる。

ただし、カマドをもつ竪穴住居を10号竪穴住居が切っているということは、カマドが集落全体で一斉に受容されたわけではなく、一部の住居に限られていたことを示すものである。これは時期の異なる須恵器が共伴してること、朝鮮半島系土器についても軟質土器のみで陶質土器が存在しないこと、さらに日田全体で考えても、鉄の生産技術とカマドの導入時期に差がみられることなど、古墳時代中期における新たな文物の流入が、漸次的に進み、その受容も選択的に行われた可能性があることを示すものであろう。以上、こうした状況の一端を10号竪穴住居の在り方から垣間見ることができると考えている。

古墳時代集落の動向

最後に1・3次調査も含めた、本遺跡における古墳時代の集落についてまとめる。まず、前期には31・33号竪穴住居、SH29・32など5軒の竪穴住居が存在する。これらの竪穴住居は全て2期に属するとみられることから、1期が集落の空白時期となり、弥生時代後期終末から集落が連続的に営まれている可能性は低い。なお、求来里川流域において、この時期の集落は他に確認されておらず、本遺跡が最初の集落になると考えられる。

続く中期の竪穴住居は、3A期に1軒、3B期に3軒程度しか見られず、規模は前期と変わらない。しかし、3B期から4期にかけて4軒、その後4期には16軒と一気に増加する。切り合い関係のある竪穴住居を除いても、少なくとも10軒前後は同時存在していた可能性が高く、中期中頃にカマドの導入とともに金田遺跡の集落規模は最大となる。

中期後半～後期にかけては、5期に2軒、6～7期にも3～4軒と竪穴住居の数は激減する。この時期以降の

集落は本遺跡とほぼ同時期にカマドを導入した求来里川対岸の町ノ坪遺跡やさらに上流の求来里平島遺跡・名里遺跡⁽¹⁶⁾などに見られ、中期後半以降、居住域の中心が川の上流域へと移動・拡大していったことが窺える。

おわりに

今回は本遺跡に限って集落の動向などをまとめたが、次の段階として、求来里川流域における状況を把握することが重要と考えており、今後の検討課題としたい。

また、担当者の力量不足により、全ての遺構や遺物について、触れることができなかつたことをお詫びしますとともに、発掘調査や報告書作成にあたって、数多くのご教示・ご指導を頂いた方々に心より感謝申し上げます。

註

- (1) 弥生土器編年は柳田氏(柳田 1987) 吉田氏(吉田 2001)、平尾氏(平尾 2001)の編年などを参考にした。
- (2) 橋口達也「IV考察」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI 中 弥生時代墳墓編 福岡県教育委員会 1979
- (3) 若杉竜太「小西遺跡」『平成 16 年度(2004 年度) 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2005
- (4) 土師器編年の重藤氏(重藤 2002,2008)、須恵器を田辺氏(田辺 1981)のものに拠り、遺構の時期については重藤氏の編年を使用し、実年代観は、木村氏(木村 2003) や杉井氏(杉井 2003)の論を参考にした。これらに基づき、時期区分については 1・2 期を前期、3～5 期を中期、6・7 期を後期としている。また、4 期については便宜的に前・後半に分けている。
- (5) 第 16 図 5 の蓋はツマミや文様の特徴から伽耶系の土器の可能性も考えたが、その場合 5 世紀後半頃の所産となる可能性が高く(白井 2003)、共存遺物や他の遺構との切り合い関係に齟齬が生じるため、国産と考えるほうが妥当と判断した。
- (6) 中村勝氏のご教示による。
- (7) 類例については中原幹彦氏・中村勝氏にご教示いただいた。
- (8) 中村勝氏・木村龍生氏のご教示による。
- (9) 中村勝氏のご教示による。この他、吉武遺跡群や有田・小田部遺跡等での出土例など多くのご教示をえたにも関わらず、担当者の力量不足から全てを検討することが出来なかつた。
- (10) 杉井健氏のご教示による。
- (11) 児玉真一編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-14』甘木市所在宮原遺跡の調査 I 福岡県教育委員会 1988
- (12) 杉井健「生活様式における中心周辺関係の成立とその意義」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会 2003
- (13) 行時志郎編『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 9 集 日田市教育委員会 1995
- (14) 渡邊隆行編『一丁田遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 83 集 日田市教育委員会 2008
- (15) 渡邊隆行編『大肥遺跡Ⅱ-B・C 区の調査の記録』日田市埋蔵文化財調査報告書第 66 集 2006
土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 39 集 日田市教育委員会 2003
- (16) 土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 39 集 日田市教育委員会 2003
行時桂子編『求来里平島遺跡Ⅱ』日田市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第 77 集 日田市教育委員会 2007
若杉竜太「求来里平島遺跡 E・F 区」『平成 17 年度(2005 年度) 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2007
今田秀樹「名里遺跡」『平成 18 年度(2006 年度) 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2008
今田秀樹「名里遺跡」『平成 19 年度(2007 年度) 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2008
渡邊隆行編『求来里の遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 88 集 日田市教育委員会 2009
原田昭一・田中裕介・松本康弘編『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告 第 31 集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008

(参考文献)

- 木村龍生「古墳時代須恵器の実年代観について」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会 2003
- 酒井清治「須恵器生産のはじまり」白石太郎・上野祥史編『古代東アジアにおける倭と伽耶の交流』国立歴史民俗博物館研究報告 110 国立歴史民俗博物館 2004
- 重藤輝行「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第 5 回九州前方後円墳研究会実行委員会 2002
- 重藤輝行「筑前・筑後の須恵器出現以後の土器」『山口県古墳時代土器編年を考える』山口県考古学フォーラム、2008
- 白井克也「日本における高霊地域伽耶土器の出土傾向-日韓古墳編年の並行関係と暦年代-」『熊本古墳研究』創刊号 熊本古墳研究会 2003
- 杉井健「生活様式における中心周辺関係の成立とその意義」『先史学・考古学論究』IV 龍田考古会 2003
- 副島邦宏編『居屋敷遺跡』一般国道 10 号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書第 6 集 福岡県教育委員会 1996
- 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 平尾和久「浮羽郡内における弥生時代後期の土器について」吉田東明編『仁右衛門畑遺跡Ⅱ』下巻 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 14 集 福岡県教育委員会 2001
- 柳田康雄編『伯玄社遺跡』春日市文化財調査報告書第 35 集 春日市教育委員会 2003
- 柳田康雄「2. 高三瀨式と西新町式土器」佐原真編『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 雄山閣 1987
- 吉田東明「仁右衛門畑遺跡出土の弥生時代中期土器について」吉田東明編『仁右衛門畑遺跡Ⅱ』下巻 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 14 集 福岡県教育委員会 2001

第1表 出土土器観察表(1)

挿図 番号	遺構	写真 図番号	種別	器種	法量:()は復元径・残存高				調 整		胎 土						焼成	色 調		備 考
					口径	胴部径	底径	器高	外 面	内 面	斜長石	石英	赤色粒	白色粒	黒色粒	砂粒		内 面	外 面	
第6図1	1住	12	土師	壺	(16.3)	-	-	(5.0)	ナデ・ハケ	?	○					○	良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第6図2	1住		土師	甑	-	-	-	(3.7)	指オサエ・指ナデ	-		○	○	○			良	-	にぶい黄橙色	
第6図3	2住	12	弥生	甕	(22.6)	-	-	(4.1)	ハケ	?	○	○			○		良	橙色	浅黄橙色	
第6図4	2住		弥生	高坏	-	-	-	(8.6)	ナデ	ケズリ	○	○					良	明黄褐色	明黄褐色	
第6図5	3住	12	土師	甕	(16.4)	-	-	(5.2)	ナデ	ハケ・ケズリ? ナデ?	○	○					良	橙色	橙色	
第6図6	3住		土師	甕	(11.6)	-	-	(5.3)	?	ハケ・ケズリ?	○	○			○		良	にぶい橙色	にぶい橙色	
第6図7	3住	12	土師	甕	(13.2)	-	-	(5.3)	ナデ・ハケ 指オサエ	ハケ・ナデ ケズリ	○	○			○		良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第6図8	3住		弥生	甕	-	-	(6.6)	(3.0)	ナデ	ナデ	○	○			○		良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第6図9	4住	12	弥生	甕	-	-	-	(1.6)	?	?	○					○	良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第6図10	4住		弥生	甕	-	-	-	(2.8)	ナデ	ミガキ	○	○					良	褐灰色	にぶい橙色	
第6図11	4住	12	土師	丸底壺	(11.3)	(7.6)	-	7.2	ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り
第8図1	5・6住		弥生	高坏	25.2	-	-	(6.8)	指オサエ・ナデ?	工具痕・ミガキ ナデ	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面赤彩有り
第8図2	5・6住		弥生	甕	-	-	(6.8)	(6.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	暗黄灰色	淡黄色	
第8図3	5・6住		土師	甕	(16.2)	-	-	(3.9)	ナデ	ナデ・ケズリ	○	○					良	橙色	橙色	
第8図4	5・6住	12	土師	甕	(15.3)	-	-	(6.8)	?	ナデ・ケズリ					○	○	良	橙色	橙色	
第10図1	7住		弥生	壺	-	-	-	(7.4)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ	○				○		良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第10図2	7住		弥生	甕	-	-	6.5	(3.9)	ナデ?	ナデ	○	○			○		良	褐灰色	橙色	
第10図3	7住		弥生	甕	-	-	(5.8)	(3.0)	ハケ?・ナデ	ナデ	○	○					良	黄灰色	橙色	
第10図4	7住		土師	高坏	-	-	-	(10.4)	工具ナデ・ナデ	ナデ・ケズリ	○				○		良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第13図1	8住	12	土師	甕	15.8	18.8	-	20.4	指オサエ・ナデ 工具痕	ナデ・工具痕 ケズリ	○	○			○		良	橙色	橙色	
第13図2	8住	12	土師	甕	(17.2)	(21.0)	-	(13.6)	ナデ	ナデ・ケズリ	○				○		良	橙色	橙色	
第13図3	8住		土師	甕	(15.9)	-	-	(3.5)	ナデ	ナデ・ケズリ					○	○	良	橙色	橙色	
第13図4	8住	12	土師	甕	-	(27.6)	-	(15.4)	ナデ	ケズリ						○	良	橙色	橙色	
第13図5	8住	12	土師	甕	-	-	-	(5.4)	ナデ?	ケズリ	○				○		良	黄灰色	橙色	
第13図6	8住		土師	鉢	(12.2)	-	-	5.9	?	?	○	○			○		良	橙色	橙色	外面黒斑有り
第13図7	8住	12	土師	坏	(13.2)	-	-	5.0	ミガキ?	ミガキ?	○				○		良	橙色	橙色	
第13図8	8住	12	-	手捏土器	2.4	-	-	1.6	指オサエ	指オサエ	○				○		良	淡黄色	淡黄色	
第15図1	9住		弥生	甕	-	-	6.6	(3.6)	?	?	○	○			○		良	にぶい黄褐色	橙色	
第15図2	9住		弥生	甕	-	-	(6.8)	(4.7)	?	?	○	○			○		良	淡黄色	橙色	
第15図3	9住		弥生	壺	-	-	5.6	(2.5)	?	?	○						良	淡黄色	淡黄色	
第15図4	9住	12	土師	甕	(16.6)	(22.6)	-	(15.2)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	○	○			○		良	橙色	にぶい赤褐色	
第15図5	9住	12	土師	甕	(16.5)	24.6	-	(20.5)	ナデ 丁寧なナデ	ハケ・ナデ ケズリ	○	○			○		良	浅黄褐色	浅黄褐色	外面黒斑有り
第15図6	9住	12	土師	甕	(16.8)	(25.2)	-	(23.2)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○				○		良	にぶい橙色	にぶい橙色	外面スス付着
第15図7	9住		土師	甕	(15.1)	-	-	(5.5)	ナデ	ナデ?・指オサエ						○	良	橙色	橙色	
第15図8	9住	12	土師	坏	16.9	-	-	5.2	?	?	○	○			○		良	橙色	橙色	
第15図9	9住	12	土師	坏	12.4	-	-	4.1	?	?	○	○					良	にぶい橙色	にぶい橙色	外面黒斑有り
第15図10	9住	13	土師	坏	14.7	-	-	4.8	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ?	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り
第15図11	9住	13	土師	高坏	19.0	-	13.6	15.8	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ ケズリ	○	○			○		良	橙色	橙色	外面黒斑有り
第15図12	9住		土師	高坏	-	-	-	(3.6)	?	?	○	○			○		良	黒褐色	橙色	
第15図13	9住		-	手捏土器	-	(5.0)	-	(3.1)	ナデ	指オサエ	○						良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第15図14	9住		-	手捏土器	-	-	-	(2.9)	指オサエ	指オサエ	○				○		良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第16図1	9住	13	土師	甌	(26.2)	-	-	(15.2)	ナデ・ハケ 指オサエ	ナデ・ケズリ	○	○			○		良	橙色	橙色	
第16図2	9住	13	土師	甌	-	-	(10.0)	(4.5)	ハケ・ナデ	指オサエ・ナデ	○	○			○		良	橙色	橙色	
第16図3	9住	13	土師	甌	-	-	-	(6.3)	指ナデ	指オサエ・ナデ	○	○				○	良	にぶい橙色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り
第16図4	9住		土師	甌	-	-	-	(1.9)	?	?	○	○			○		良	淡黄色	淡黄色	
第16図5	9住	13	須恵	高坏蓋	12.5	-	-	6.4	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ							良	暗灰褐色	暗灰緑色	外面櫛歯文 内面全面自然釉
第16図6	9住	13	須恵	蓋	(12.2)	-	-	5.2	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ							良	灰白色	灰白色	

第2表 出土土器観察表(2)

挿図番号	遺構	写真図番号	種別	器種	法量:()は復元径・残存高				調 整		胎 土					焼成	色 調		備 考
					口径	胴部径	底径	器高	外 面	内 面	角長石	石英	雲母	赤色粒	白色粒		黒色粒	砂粒	
第16図7	9住	13	須恵	壺	(14.1)	-	-	(7.5)	回転ナデ	回転ナデ	○			○	良	灰黒色	暗黄灰褐色		
第16図8	9住	13	須恵	壺	-	-	-	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	○			○	良	灰黒色	黄灰褐色		
第18図1	10住		弥生	甕	-	-	(7.2)	(9.7)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ	○	○		○	良	黄灰色	橙色		
第18図2	10住		弥生	甕	-	-	7.3	(5.3)	ハケ・ナデ	指ナデ・指オサエ	○				良	淡黄色	淡黄色		
第18図3	10住		弥生	甕	-	-	6.2	(3.8)	?	ナデ	○	○			良	淡黄色	橙色		
第18図4	10住		弥生	甕	-	-	(6.2)	(5.3)	?	?	○	○			良	淡黄色	淡黄色		
第18図5	10住	13	土師	甕	(19.0)	28.8	-	31.6	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	○			○	良	にぶい黄橙色	にぶい褐色		
第18図6	10住	13	土師	甕	(16.4)	(22.0)	-	(25.4)	指オサエ・ナデ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○	○		○	良	にぶい赤褐色	赤褐色	内外面黒斑有り	
第18図7	10住		土師	甕	(15.8)	-	-	(5.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ケズリ	○			○	良	橙色	橙色		
第18図8	10住	13	土師	甕	(18.7)	-	-	(6.6)	ナデ	ナデ・ケズリ	○	○			良	浅黄橙色	浅黄橙色		
第18図9	10住		土師	甕	(14.2)	-	-	(7.1)	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	○	○			良	にぶい黄橙色	褐灰色		
第18図10	10住	13	土師	甕	14.9	-	-	(6.9)	ナデ・ハケ	ハケ・ナデ・ケズリ	○	○			良	淡黄色	淡黄色	外面黒斑有り	
第18図11	10住	13	土師	甕	18.4	-	-	(6.0)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	○	○			良	黄橙色	黄橙色		
第18図12	10住		土師	甕	(20.2)	-	-	(5.4)	ハケ・ナデ	?	○				良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色		
第18図13	10住	13	土師	甕	-	-	-	(11.7)	?	?	○	○			良	にぶい橙色	浅黄橙色	外面スス付着	
第19図1	10住	13	土師	壺	(16.8)	-	-	(14.5)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ 指オサエ	○	○		○	良	橙色	橙色		
第19図2	10住		土師	甕	(11.8)	-	-	(7.0)	ナデ?	ナデ?・ケズリ	○	○			良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色		
第19図3	10住		土師	丸底壺	(10.6)	-	-	(4.9)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	○				良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第19図4	10住	13	土師	甕	10.2	(12.1)	-	(9.0)	ナデ・ハケ 指オサエ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○	○		○	良	黒褐色	赤褐色		
第19図5	10住		土師	丸底壺	(9.8)	-	-	(4.3)	ナデ	ナデ	○				良	褐灰色	褐灰色		
第19図6	10住	13	土師	壺	(10.6)	14.3	-	(11.5)	ナデ・ハケ?	ナデ?・ケズリ 指オサエ	○	○		○	良	にぶい橙色	橙色		
第19図7	10住		土師	丸底壺	(11.5)	-	-	(9.4)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ ミガキ	○			○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色		
第19図8	10住	14	土師	丸底壺	-	(13.7)	6.3	(11.1)	ハケ・ナデ	指オサエ・ナデ	○	○			良	淡黄色	黒褐色	外面スス付着	
第19図9	10住		土師	丸底壺	8.4	9.0	-	10.4	ナデ?・ハケ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○	○		○	良	淡黄色	淡黄色		
第19図10	10住	14	土師	丸底壺	(9.8)	8.2	-	9.9	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ	○	○		○	良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り	
第19図11	10住	14	土師	丸底壺	9.8	10.1	-	10.8	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・ケズリ	○	○			良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り	
第19図12	10住		土師	丸底壺	7.6	9.1	-	9.2	ナデ・ハケ	ナデ・指オサエ	○	○			良	淡黄色	淡黄色	外面黒斑有り	
第19図13	10住		土師	丸底壺	(8.0)	9.3	-	10.9	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・ケズリ	○	○			良	浅黄橙色	浅黄褐色	外面黒斑有り	
第19図14	10住		土師	丸底壺	(10.2)	-	-	(8.0)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・指オサエ	○	○			良	橙色	にぶい黄褐色		
第19図15	10住		土師	丸底壺	(8.8)	-	-	(6.5)	ナデ・ハケ・ミガキ	ハケ・ナデ	○	○			良	にぶい橙色	にぶい褐色		
第19図16	10住		土師	丸底壺	-	(9.0)	-	(6.7)	ナデ・ハケ	ナデ・工具痕 工具ナデ	○	○		○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第19図17	10住		土師	丸底壺	-	-	-	(7.4)	ナデ・ハケ	ケズリ・ナデ	○	○			良	橙色	にぶい褐色		
第20図1	10住	14	土師	高坏	17.6	-	10.5	13.4	ナデ	ナデ?・ケズリ	○	○			良	淡黄色	淡黄色		
第20図2	10住	14	土師	高坏	(20.2)	-	(13.1)	13.5	ナデ・ハケ 指オサエ・タタキ	ナデ・ケズリ	○	○		○	良	橙色	橙色		
第20図3	10住	14	土師	高坏	17.0	-	11.7	12.3	ナデ	ナデ?・ケズリ	○	○		○	良	淡黄色	淡黄色	内面黒斑有り	
第20図4	10住		土師	高坏	(16.2)	-	-	(10.6)	?	指オサエ・ナデ	○	○			良	橙色	にぶい褐色		
第20図5	10住		土師	高坏	-	-	-	(2.8)	ハケ	?	○	○			良	浅黄褐色	浅黄褐色		
第20図6	10住		土師	高坏	-	-	-	(3.3)	ミガキ?	ナデ?・ケズリ?	○	○		○	良	にぶい褐色	褐色		
第20図7	10住		土師	高坏	-	-	13.0	(10.0)	指オサエ・ナデ	ナデ・ケズリ	○	○			良	褐色	褐色		
第20図8	10住		土師	高坏	(16.6)	-	-	(5.4)	ナデ	ナデ	○	○			良	褐色	褐色		
第20図9	10住		土師	高坏	16.1	-	-	(7.2)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ	○	○		○	良	にぶい赤褐色	にぶい褐色	内外面黒斑 赤彩有り	
第20図10	10住		土師	高坏	-	-	(13.2)	(9.0)	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○			良	褐色	褐色	外面黒斑有り	
第20図11	10住		土師	高坏	-	-	(13.0)	(7.9)	ハケ・ナデ	ケズリ・ナデ?	○	○			良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第20図12	10住		土師	高坏	-	-	-	(8.7)	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○		○	良	褐色	褐色		
第20図13	10住		土師	高坏	-	-	13.2	(7.9)	ナデ	ケズリ・ナデ 絞り痕	○	○		○	良	浅黄褐色	浅黄褐色		
第20図14	10住	14	土師	鉢	-	-	9.5	(6.9)	格子目タタキ ナデ	ナデ	○	○			良	淡黄色	褐灰色		
第20図15	10住	14	土師	鉢	19.9	-	13.2	8.1	ナデ・ケズリ 指オサエ	ナデ	○	○			良	淡黄色	淡黄色		

第3表 出土土器観察表(3)

挿図番号	遺構	写真図番号	種別	器種	法量:()は復元径・残存高				調整		胎土					焼成	色調		備考	
					口径	胴口径	底径	器高	外面	内面	角長石	角四石	石英	赤色粒	白色粒		黒色粒	砂粒		内面
第20図16	10住	14	土師	甔	15.5	-	-	(13.3)	ハケ・ナデ	ケズリ・指オサエ	○	○					良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	外面黒斑有り 底部穿孔
第20図17	10住	14	土師	鉢	(12.8)	-	(4.8)	7.8	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○					良	淡黄色	淡黄色	外面黒斑有り
第20図18	10住		土師	坏	(16.4)	-	-	5.2	ハケ・ナデ	ナデ?	○	○					良	浅黄色	橙色	内面スス附着
第20図19	10住		土師	坏	(16.2)	-	-	(5.3)	ナデ?	ナデ?	○						良	橙色	橙色	
第21図1	10住	14	土師	甔	-	-	(11.6)	(13.3)	格子目タタキ ナデ	指オサエ・ナデ	○	○					良	浅黄橙色	淡黄色	外面黒斑有り
第21図2	10住	14	土師	甔	22.0	-	(11.2)	21.3	格子目タタキ ナデ	指オサエ・ナデ	○						良	橙色	橙色	
第21図3	10住	14	土師	甔	(28.8)	-	-	(9.4)	ナデ・ハケ 指オサエ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○	○					良	淡黄色	淡黄色	外面スス附着
第21図4	10住	14	土師	甔	-	-	-	(1.0)	ナデ	ナデ	○						良	淡黄色	黄灰色	
第22図1	10住	14	須恵	高坏蓋	(13.2)	-	-	(3.4)	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	○						良	灰黒色	灰褐色	
第22図2	10住	14	須恵	壺	15.8	(23.0)	-	24.4	回転ナデ ナデ・タタキ	回転ナデ・ナデ	○						良	灰黒色	灰黒色	内面やや赤焼け
第24図1	11住		弥生	甗	(24.8)	(23.4)	-	(9.5)	ナデ・ハケ	ナデ		○					良	浅黄橙色	にぶい黄褐色	
第24図2	11住		弥生	甗	-	-	7.3	(6.3)	ハケ・ナデ	ナデ?	○	○					良	黒褐色	橙色	
第24図3	11住		弥生	甗	-	-	7.5	(7.4)	ハケ・ナデ	指ナデ・ナデ	○	○					良	淡黄色	橙色	
第24図4	11住	15	弥生	甗	-	-	(7.2)	(7.6)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	
第24図5	11住		弥生	甗	-	-	(7.6)	(4.3)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第24図6	11住		弥生	甗	-	-	(8.4)	(4.3)	ハケ・ナデ	工具ナデ・ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい橙色	
第26図1	12~14住	15	弥生	甗	(29.2)	-	-	(6.9)	ミガキ	ミガキ・ナデ? 指オサエ	○	○					良	浅黄橙色	浅黄褐色	内外面赤彩有り
第26図2	12~14住		弥生	甗	(27.1)	-	-	(8.2)	ナデ・ハケ	ナデ	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第26図3	12~14住		弥生	壺	(15.1)	-	-	(4.9)	ミガキ	ミガキ	○	○					良	黒褐色	にぶい黄褐色	内外面赤彩有り
第26図4	12~14住	15	弥生	器台	9.6	-	-	(13.2)	ナデ・ハケ	指オサエ・ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第26図5	12~14住		弥生	器台	-	-	(11.0)	(5.9)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第26図6	12~14住	15	弥生	蓋	31.6	-	-	10.0	ナデ・ハケ	指オサエ・ナデ	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	外面黒斑有り
第26図7	12~14住		弥生	蓋	(37.0)	-	-	(3.9)	ハケ・丁寧なナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第26図8	12~14住	15	弥生	甗	-	-	8.1	(11.8)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ	○	○					良	黄褐色	にぶい褐色	
第26図9	12~14住	15	弥生	高坏	(22.2)	-	-	(9.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○					良	橙色	橙色	
第26図10	12~14住		弥生	甗	-	-	(8.2)	(3.9)	ナデ	ナデ	○	○					良	淡黄色	淡黄色	
第26図11	12~14住		弥生	甗	-	-	6.5	(6.7)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	明黄褐色	橙色	
第26図12	12~14住		弥生	甗	-	-	(6.8)	(3.2)	指オサエ・ナデ	ナデ・指オサエ	○	○					良	黒褐色	淡黄色	
第26図13	12~14住		弥生	甗	-	-	5.8	(6.4)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	外面赤彩有り
第26図14	12~14住		弥生	甗	-	-	6.0	(4.3)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○					良	にぶい黄褐色	橙色	外面黒斑有り
第28図1	15住		弥生	甗	(25.6)	-	-	(9.7)	ナデ・ハケ	ハケ・ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第28図2	15住		弥生	甗	-	-	-	(6.3)	ナデ・ハケ	ハケ	○	○					良	にぶい褐色	にぶい褐色	内面黒斑有り
第28図3	15住		弥生	高坏	-	-	-	(9.0)	ナデ	ナデ・絞り痕	○						良	橙色	橙色	外面黒斑有り
第28図4	15住	15	弥生	甗	-	(19.5)	5.8	(13.9)	ハケ・ケズリ	ナデ・ハケ 指オサエ	○	○					良	明褐色	明褐色	
第28図5	15住	15	弥生	甗	-	-	-	(15.9)	ハケ	ハケ	○	○					良	明褐色	明褐色	
第30図1	16・17住	15	弥生	甗	(24.0)	(28.6)	8.0	(40.8)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ 指オサエ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り
第30図2	16・17住		弥生	甗	(24.9)	-	-	(10.8)	ハケ・ナデ	ハケ	○	○					良	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
第30図3	16・17住		弥生	甗	(13.2)	-	-	(12.1)	ナデ・ハケ	ハケ	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第30図4	16・17住	15	弥生	甗	(22.2)	-	-	(20.3)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	外面黒斑有り
第30図5	16・17住		弥生	甗	-	-	6.4	(11.2)	ナデ	ナデ?	○	○					良	にぶい褐色	橙色	
第30図6	16・17住		弥生	甗	-	-	(8.8)	(3.9)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい褐色	にぶい黄褐色	
第30図7	16・17住		弥生	甗	-	-	(5.8)	(4.3)	ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第30図8	16・17住		弥生	甗	-	-	6.8	(5.2)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	明黄褐色	明黄褐色	
第30図9	16・17住		弥生	甗	-	-	(6.6)	(6.2)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○					良	黄灰色	橙色	
第31図1	16・17住	15	弥生	壺	(14.0)	-	-	(12.2)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ 指オサエ	○						良	褐色	褐色	内面黒斑有り
第31図2	16・17住	15	弥生	壺	15.2	(26.1)	-	(18.7)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ 指オサエ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第31図3	16・17住	15	弥生	甗	(15.0)	-	-	(17.4)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	○	○					良	灰黄褐色	灰黄褐色	外面スス附着

第4表 出土土器観察表(4)

挿図 番号	遺構	写真 図版 番号	種別	器種	法量:()は復元径・残存高				調 整		胎 土					色 調		備 考			
					口径	胴部径	底径	器高	外 面	内 面	斜長石	角閃石	石英	赤色粒	白色粒	黒色粒	砂粒		焼成	内 面	外 面
第31図4	16-17住	15	弥生	壺	-	12.6	2.0	(6.9)	ミガキ?	ナデ・指オサエ	○	○				○	良	にぶい橙色	にぶい橙色	外面黒斑有り	
第31図5	16-17住	15	弥生	壺	-	-	-	(5.3)	?	?							○	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	傾き不明
第31図6	16-17住		弥生	壺	-	-	9.0	(3.3)	ナデ	ハケ	○	○					良	褐色	橙色		
第31図7	16-17住		弥生	鉢	(21.8)	-	-	(12.2)	タタキ・ナデ	ナデ・工具痕 指オサエ	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面黒斑有り	
第31図8	16-17住		弥生	鉢	-	-	-	(5.5)	工具痕(タタキ?)	工具ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第31図9	16-17住	15	弥生	鉢	14.2	-	-	7.6	?	ナデ・指オサエ	○	○					良	にぶい褐色	にぶい褐色	外面黒斑有り	
第31図10	16-17住		弥生	鉢	14.1	-	-	6.3	ミガキ?	ナデ	○	○					良	にぶい褐色	にぶい褐色	内面暗文 外面黒斑有り	
第31図11	16-17住	15	弥生	鉢	12.5	-	-	6.9	ナデ	ナデ・工具痕	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第32図1	16-17住	15	弥生	高坏	(28.8)	-	-	(3.3)	ナデ?・ミガキ?	ナデ?・ミガキ?	○	○					良	明褐色	明褐色	口縁上端に暗文?	
第32図2	16-17住	16	弥生	高坏	18.9	-	17.8	21.4	ハケ・ミガキ・ナデ	ハケ・ナデ 絞り痕	○	○					良	黄褐色	浅黄色		
第32図3	16-17住		弥生	高坏	-	-	-	(4.1)	ハケ	ナデ	○	○					良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第32図4	16-17住		弥生	高坏	-	-	-	(7.1)	ミガキ	ナデ	○	○					良	淡黄色	淡黄色		
第32図5	16-17住		弥生	高坏	-	-	(14.2)	(15.1)	?	?	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第34図1	18住	16	弥生	甗	21.7	24.5	4.8	35.7	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○					良	褐色	褐色	内外面黒斑有り	
第34図2	18住	16	弥生	甗	-	-	-	(17.0)	ハケ・ナデ	ハケ	○	○					良	にぶい褐色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り	
第34図3	18住	16	弥生	高坏	-	-	11.2	(14.0)	ミガキ?・ナデ	ナデ・絞り痕	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	外面黒斑有り	
第35図1	19住		弥生	甗	(21.6)	(19.0)	-	(5.4)	?	ナデ	○						良	淡黄色	淡黄色		
第35図2	19住		弥生	甗	(16.7)	-	-	(5.8)	ナデ	ナデ	○	○					良	明黄褐色	明黄褐色		
第35図3	19住	16	弥生	壺	(15.3)	-	-	(6.8)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ	○	○					良	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		
第35図4	19住	16	弥生	甗	(17.0)	(15.8)	-	12.3	ナデ・ハケ	ハケ・ナデ・指オサエ	○	○					良	明黄褐色	明黄褐色	外面黒斑有り	
第35図5	19住	16	弥生	高坏	-	-	-	(12.4)	ミガキ?	ナデ・ハケ	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	外面黒斑有り 脚部穿孔7ヶ所	
第35図6	19住	16	弥生	高坏	-	-	(13.4)	(8.6)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ 絞り痕	○	○					良	褐色	褐色		
第35図7	19住		弥生	甗	-	(20.0)	(6.8)	(16.6)	ハケ	ハケ・ナデ 指オサエ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り	
第35図8	19住		弥生	甗	-	-	(6.0)	(4.3)	ハケ?・ナデ	ナデ?	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第35図9	19住		弥生	甗	-	-	(6.8)	(4.6)	ハケ?・ナデ	ナデ	○	○					良	灰黄褐色	にぶい褐色		
第35図10	19住		弥生	甗	-	-	(6.3)	(5.4)	ナデ?	ナデ	○	○					良	褐色	にぶい褐色		
第37図1	20住		弥生	甗	-	-	-	(3.5)	ナデ	?	○						良	浅黄色	浅黄色		
第37図2	20住		弥生	高坏	-	-	-	(2.5)	ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第37図3	20住		弥生	甗	-	-	(6.2)	(4.7)	ハケ?・ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	褐色	外面黒斑有り	
第37図4	20住	16	土師	丸底壺	11.4	14.6	-	15.4	ハケ・ナデ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○	○					良	黒褐色	にぶい褐色		
第37図5	20住		土師	甗	(12.2)	(16.0)	-	(14.8)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ ケズリ	○	○					良	灰褐色	褐色	外面黒斑有り	
第37図6	20住	16	土師	甗	(14.5)	(24.0)	-	(23.9)	ハケ・ナデ	ナデ・ハケ ケズリ	○	○					良	浅黄色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り	
第37図7	20住	16	土師	甗	(26.4)	-	-	(13.0)	ナデ?	ナデ?	○	○					良	黄褐色	黄褐色	外面黒斑有り	
第37図8	20住		土師	高坏	20.9	-	-	(6.8)	?	?	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第37図9	20住		土師	高坏	(19.4)	-	-	(6.8)	?	?	○	○					良	褐色	褐色		
第39図1	21住	16	土師	甗	(15.6)	-	-	(8.8)	?	ナデ?	○	○					良	黄褐色	黄褐色	外面スス附着	
第42図1	22住		土師	坏	12.7	-	-	(6.4)	ハケ	?	○	○					良	にぶい褐色	にぶい褐色		
第42図2	22住		土師	甗	-	-	-	(2.9)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	暗赤褐色	暗赤褐色		
第42図3	22住		土師	高坏	(21.4)	-	-	(7.5)	?	?	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第42図4	23住	16	弥生	甗	(15.4)	(17.2)	-	33.2	ナデ・ハケ・タタキ	ナデ・ハケ 指オサエ	○	○					良	褐色	褐色		
第42図5	23住		弥生	甗	-	-	-	(6.8)	ハケ・ナデ・タタキ	ナデ・ハケ	○	○					良	褐色	褐色	外面黒斑有り	
第42図6	23住		弥生	甗	-	-	-	(1.4)	?	?	○						良	黄灰色	黄灰色		
第42図7	23住		弥生	甗	-	-	-	(1.2)	ナデ	ナデ	○	○					良	浅黄色	浅黄色		
第42図8	23住		弥生	壺	-	-	-	(4.0)	ナデ・ハケ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第42図9	23住		弥生	高坏	-	-	-	(6.4)	ミガキ	指オサエ・ナデ	○	○					良	淡黄色	淡黄色		
第42図10	23住		弥生	甗	-	-	(8.2)	(3.5)	工具ナデ・ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		
第42図11	23住	16	土師	坏	14.0	-	-	4.9	ナデ・ハケ	ナデ	○	○					良	にぶい褐色	にぶい褐色	内面黒斑有り	

第5表 出土土器観察表(5)

挿図番号	遺構	写真図番号	種別	器種	法量:()は復元径・残存高				調整		胎土					焼成	色調		備考	
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面	斜長石	角閃石	石英	赤色粒	白色粒		黒色粒	砂粒		内面
第42図12	23住		土師	甕	-	-	-	(8.8)	工具ナデ	ハケ・指オサエ	○	○					良	にぶい橙色	にぶい橙色	
第44図1	24住		弥生	甕	-	-	-	(2.9)	ナデ	ハケ・ナデ	○	○			○		良	にぶい黄橙色	褐色	内外面赤彩有り
第44図2	24住		弥生	甕	-	-	(6.6)	(3.5)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	褐色	にぶい黄橙色	
第44図3	24住	16	土師	高坏	(19.8)	-	13.3	(14.1)	ハケ	ハケ・ケズリ	○	○			○		良	にぶい橙色	にぶい橙色	外面黒斑有り
第46図1	25住	16	土師	壺	9.4	13.1	-	(9.5)	ナデ・工具ナデ 指オサエ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○	○			○		良	褐色	褐色	外面黒斑有り
第46図2	25住		土師	甕	-	-	-	(12.7)	ナデ・ハケ?	ケズリ?	○	○					良	橙色	にぶい黄橙色	
第46図3	25住		土師	甕	-	(25.2)	-	(18.9)	ハケ	ケズリ・ナデ 指オサエ	○	○			○		良	明黄褐色	明黄褐色	外面スス付着
第46図4	25住		土師	甕	-	-	-	(4.2)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	○	○			○		良	黄橙色	灰黄褐色	
第46図5	25住		弥生	甕	-	-	-	(4.6)	ナデ	ナデ	○	○					良	黄灰色	黄灰色	
第46図6	25住	16	土師	鉢	14.0	-	-	6.7	ナデ	工具ナデ・工具痕	○						良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第46図7	25住		土師	坏	(18.8)	-	-	(5.4)	ナデ?	ナデ?	○	○			○		良	にぶい橙色	にぶい橙色	
第46図8	25住		土師	坏	(13.4)	-	-	(5.3)	ナデ	ナデ	○	○			○		良	橙色	褐色	
第46図9	25住	16	土師	高坏	(19.4)	-	14.2	14.9	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ ケズリ	○	○					良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第46図10	25住	17	土師	甕	-	-	(13.2)	(15.6)	ナデ	ナデ	○				○		良	黄灰色	にぶい黄色	外面黒斑有り
第46図11	25住		-	手捏土器	3.1	-	-	2.6	指オサエ	指オサエ	○				○		良	明黄褐色	明黄褐色	
第46図12	25住		-	手捏土器	2.6	-	-	2.2	指オサエ	指オサエ	○				○		良	明黄褐色	明黄褐色	
第48図1	26住		弥生	甕	-	-	-	(3.2)	ナデ・ハケ	?	○	○			○		良	褐色	褐色	
第48図2	26住		弥生	甕or壺	-	-	-	(3.4)	ナデ	ナデ・ハケ	○	○					良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第48図3	26住		弥生	甕	-	-	(7.5)	(5.5)	ナデ	ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	褐色	
第48図4	26住		弥生	甕	-	-	(6.4)	(2.4)	ナデ	?	○	○					良	-	にぶい黄褐色	
第50図1	27住	17	弥生	高坏	-	-	-	(3.4)	ナデ?	ナデ?	○				○		良	褐色	褐色	内外面赤彩有り
第50図2	27住		弥生	甕	-	-	6.5	(3.4)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○			○		良	褐色	にぶい黄褐色	
第50図3	27住		弥生	甕	-	-	-	(3.6)	ナデ	ナデ?	○	○			○		良	にぶい橙色	にぶい褐色	
第52図1	28住	17	弥生	甕	23.5	22.6	6.8	28.8	ナデ・ハケ	ナデ・指オサエ	○	○			○		良	淡黄色	黄褐色	内外面スス付着
第52図2	28住		弥生	甕	-	-	-	(4.2)	ハケ	?	○				○		良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第52図3	28住		弥生	甕	-	-	(6.6)	(3.9)	ナデ	ナデ	○	○					良	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
第52図4	28住		弥生	甕	-	-	(7.2)	(5.0)	ナデ	ナデ	○	○			○		良	灰黄褐色	褐色	
第52図5	28住		弥生	甕	-	-	(8.0)	(4.9)	ナデ?	ナデ?	○	○					良	灰黄褐色	褐色	
第52図6	28住		弥生	壺	-	-	(8.6)	(3.6)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○					良	灰黄色	灰黄色	外面黒斑有り
第52図7	28住		弥生	高坏	-	-	-	(3.6)	ナデ?	ナデ?					○		良	淡黄色	淡黄色	内外面赤彩有り
第53図1	29住		弥生	壺	-	-	-	(3.8)	ナデ?	ナデ	○	○					良	褐色	褐色	
第53図2	29住		弥生	甕	-	-	(6.3)	(1.6)	ナデ?	指オサエ	○	○					良	にぶい黄褐色	褐色	
第55図1	30住	17	土師	壺	10.4	14.2	-	14.4	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ 指オサエ	○	○					良	黄褐色	黄褐色	
第55図2	30住		土師	高坏	-	-	(12.6)	(7.6)	?	ケズリ?	○	○			○		良	褐色	褐色	
第57図1	31住	17	土師	甕	(11.0)	-	-	(5.6)	ナデ・ハケ	ナデ	○	○			○		良	褐色	褐色	外面黒斑有り
第57図2	32住		弥生	甕	(19.2)	-	-	(6.2)	ナデ	ナデ・ケズリ	○				○		良	浅黄色	にぶい黄褐色	
第57図3	31住		弥生	甕	-	-	(8.0)	(5.8)	ナデ?	ナデ?	○	○					良	にぶい黄褐色	褐色	
第59図1	32住		弥生	甕	(23.1)	(21.0)	-	(16.0)	ナデ・ハケ	ナデ	○				○		良	淡黄色	淡黄色	
第59図2	31住	17	弥生	甕	-	-	-	(3.9)	ナデ・不明	?					○		良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第59図3	31住		弥生	甕	-	-	-	(3.1)	?	?	○				○		良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第59図4	32住	17	弥生	甕	-	-	-	(3.9)	?	ナデ					○		良	明黄褐色	明黄褐色	
第59図5	32住	17	弥生	甕	-	-	-	(6.6)	ナデ?	?	○	○					良	明黄褐色	明黄褐色	
第59図6	32住		弥生	甕	-	-	7.2	(7.1)	ハケ・ナデ	工具ナデ・ナデ	○	○			○		良	灰黄褐色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り
第59図7	32住		弥生	甕	-	-	6.6	(4.5)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	○	○					良	灰褐色	にぶい黄褐色	
第61図1	33住	17	土師	器台	(9.8)	-	-	(7.6)	ミガキ?	ミガキ?・工具ナデ	○	○					良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	脚部穿孔4ヶ所
第61図2	33住		弥生	器台	(7.0)	-	-	(3.0)	ナデ?	ナデ?	○	○			○		良	赤褐色	浅黄褐色	
第61図3	34住		土師	甕	-	(23.0)	-	(12.3)	ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ?	○	○			○		良	淡黄褐色	暗褐色	

第6表 出土土器観察表(6)

挿図番号	遺構	写真図番号	種別	器種	法量:()は復元径・残存高				調 整		胎 土						色 調		備 考		
					口径	胴部径	底径	器高	外 面	内 面	斜長石	角閃石	石英	雲母	赤色粒	白色粒	黒色粒	砂粒		焼成	内 面
第63図1	35住		土師	壺	(16.8)	-	-	(7.5)	ナデ・ハケ?	ナデ・ケズリ指オサエ	○	○	○	○	○	○	○	良	橙色	橙色	
第63図2	35住	17	土師	壺	7.3	8.1	-	8.4	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	○	○						良	にぶい黄橙色	にぶい褐色	外面スス附着
第63図3	35住		土師	小型壺	-	(6.7)	-	(4.9)	ナデ	指ナデ	○	○						良	浅黄橙色	浅黄褐色	
第63図4	35住	17	土師	壺	(9.6)	13.6	-	13.9	丁寧なナデ	ナデ・ケズリ?指オサエ	○	○			○	○	○	良	にぶい褐色	にぶい赤褐色	内外面スス附着
第66図1	36住		弥生	甗	-	-	-	(4.6)	ナデ・ハケ指オサエ	ナデ	○	○						良	橙色	橙色	
第66図2	36住		弥生	甗	-	-	(6.6)	(5.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	
第66図3	36住		弥生	甗	-	-	(7.0)	(7.7)	ハケ・ナデ指オサエ	ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい褐色	
第66図4	36住		弥生	高坏	-	-	-	(9.6)	ナデ?	絞り痕・ナデ	○	○						良	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
第66図5	37住		弥生	壺	-	-	-	(5.0)	ハケ	ハケ・ナデ?	○	○						良	橙色	橙色	
第66図6	38住	17	土師	甗	(18.0)	(20.0)	-	(15.3)	ナデ・ハケ指オサエ	ナデ・ケズリ指オサエ	○	○						良	橙色	橙色	
第66図7	38住	17	土師	壺	(13.8)	(20.2)	-	(13.7)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ・ケズリ	○	○						良	橙色	橙色	
第66図8	38住		土師	甗	-	-	-	(8.5)	ナデ?	ナデ?	○	○						良	浅黄褐色	浅黄褐色	外面黒斑有り
第66図9	38住	17	土師	壺?	-	-	-	(6.4)	ナデ・板状圧痕	ハケ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面黒斑有り
第66図10	38住	17	土師	壺	-	(17.4)	-	(10.7)	ミガキ・ハケ	板状工具での調整丁寧なナデ	○	○						良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第66図11	38住		土師	小型壺	(10.0)	(10.2)	-	(8.0)	ナデ?・ハケ?指オサエ	ナデ?・指オサエ	○	○						良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第66図12	38住		土師	高坏	-	-	-	(4.2)	指オサエ・ナデ	不明	○	○						良	橙色	橙色	
第66図13	38住		土師	高坏	(20.7)	-	-	(6.8)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第66図14	38住	17	土師	高坏	16.8	-	-	(6.6)	ナデ	ナデ?	○	○						良	橙色	橙色	
第68図1	1竪		土師	壺	(6.2)	(7.0)	-	6.5	ナデ・指オサエ	指オサエ・ナデ	○	○						良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第68図2	1竪		土師	甗	-	-	-	(4.9)	ハケ・ナデ	ハケ・ミガキ・ナデ	○	○						良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第68図3	2竪		弥生	甗	-	-	(6.4)	(6.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第70図1	2溝		磁器	碗	(11.0)	-	4.5	7.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	一	灰緑色	灰緑色	
第70図2	2溝		磁器	碗	(9.8)	-	(4.3)		-	-	-	-	-	-	-	-	-	一	白色	白色	
第70図3	2溝		陶器	碗	-	-	(5.2)	(2.6)	ナデ	ナデ	○	○						良	暗茶色	暗茶色	みこみに気泡あり
第70図4	1溝		磁器	小壺	-	(8.2)	(5.0)	(5.3)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	一			内面一部露胎
第73図1	1甗	18	弥生	甗棺	26.2	23.5	7.7	26.8	ナデ・ハケ	指オサエ・ナデ	○	○						良	淡黄色	黄灰色	外面スス附着
第73図2	1甗	18	弥生	甗棺	27.6	26.6	6.4	33.5	ナデ・ハケ	ナデ・指オサエ	○	○						良	灰黄色	暗黄褐色	外面スス附着
第75図1	1土		陶器	碗	-	-	3.6	(1.9)	ケズリ	ナデ	○	○						良	灰白色・淡茶褐色	灰白色	外面一部露胎
第75図2	3土		陶器	鉢	-	-	-	(7.0)	ナデ	ナデ	○	○						良	灰茶褐色	灰茶褐色	
第75図3	4土		陶器	甗	48.4	-	-	(20.0)	?	ナデ	○	○						良	灰黄色	淡黄色にぶい黄褐色	外面スス附着
第75図4	5土		陶器	碗	-	-	(4.6)	(4.0)	ケズリ	ナデ	○	○						良	乳白色	乳白色	高台底面、内底面露胎
第77図1	8土	17	弥生	壺	(15.8)	-	-	(6.7)	ナデ	ナデ	○	○						良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第77図2	8土		弥生	壺	-	-	-	(6.7)	ナデ	ナデ	○	○						良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第77図3	8土	18	弥生	壺	-	(35.2)	-	(28.3)	ハケ・タタキ?	ナデ・ハケ指オサエ	○	○						良	灰黄褐色	灰黄褐色	
第77図4	8土		弥生	壺	-	-	-	(9.0)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○						良	灰褐色	灰褐色	
第77図5	8土		弥生	甗	-	-	6.2	(2.6)	ナデ	-	○	○						良	-	橙色	
第78図1	11土		弥生	甗	(31.6)	(29.3)	-	(17.8)	ナデ・ハケ?	ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第78図2	11土	18	弥生	甗	(29.0)	(28.0)	-	(18.9)	ナデ・ハケ	ナデ・工具痕	○	○						良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第78図3	11土		弥生	甗	(26.4)	(23.5)	-	(16.8)	ナデ・ハケ	ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第79図1	11土		弥生	甗	-	-	(7.5)	(19.2)	ハケ・ナデ	ナデ・指オサエ	○	○						良	褐色	にぶい褐色	外面スス附着
第79図2	11土		弥生	甗	-	-	7.0	(5.9)	ハケ・ナデ	工具ナデ・ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	黄褐色	
第79図3	11土		弥生	甗	-	-	7.6	(11.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	灰褐色	橙色	
第79図4	11土		弥生	甗	-	-	(8.2)	(5.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	にぶい褐色	にぶい褐色	
第79図5	11土	18	弥生	甗	-	-	(7.0)	(9.7)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第79図6	11土		弥生	甗	-	-	7.8	(8.2)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	橙色	
第79図7	11土	18	弥生	甗	-	-	6.6	(8.7)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	橙色	
第79図8	11土		弥生	甗	-	-	6.6	(6.6)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	淡黄色	灰黄色	

第7表 出土土器観察表(7)

挿図番号	遺構	写真図版番号	種別	器種	法量:()は復元径・残存高				調整		胎土					焼成	色調		備考		
					口径	胴口径	底径	器高	外面	内面	銅長石	角閃石	石英	雲母	赤色粒		白色粒	黒色粒		砂粒	内面
第79図9	11土		弥生	甕	-	-	(7.4)	(6.4)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第79図10	11土	18	弥生	甕	-	-	6.9	(6.5)	ハケ・ナデ	ナデ?	○	○			○			良	にぶい黄褐色	橙色	
第79図11	11土		弥生	甕	-	-	(6.8)	(5.7)	ハケ・ナデ	?							○	良	褐灰色	浅黄褐色	
第79図12	11土		弥生	甕	-	-	8.0	(5.2)	ナデ	ナデ	○	○					○	良	黄灰色	黄褐色	
第79図13	11土		弥生	甕	-	-	(7.2)	(4.7)	?	?	○	○			○			良	灰黄褐色	橙色	
第79図14	11土		弥生	甕	-	-	(14.0)	(6.0)	ハケ・ナデ	ナデ	○	○						良	浅黄褐色	にぶい黄褐色	
第79図15	11土		弥生	壺	-	-	(9.6)	(4.6)	ナデ	ナデ	○	○			○			良	褐灰色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り
第79図16	11土	18	弥生	甕	-	-	8.6	(4.8)	ナデ?	ナデ・指オサエ	○	○			○			良	黒褐色	橙色	
第79図17	11土		弥生	甕	-	-	-	(4.0)	ナデ	ミガキ・ケズリ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面赤彩有り
第79図18	11土		弥生	高坏	-	-	-	(8.2)	ミガキ?	ナデ・絞り痕	○				○			良	暗灰黄色	橙色	外面一部赤彩
第81図1	19土		弥生	甕	-	-	-	(2.9)	ミガキ?	ナデ?	○	○			○			良	赤褐色	暗褐色	外面赤彩有り
第81図2	22土		陶器	鉢	-	-	-	(4.4)	ナデ?	ハケ・ナデ?								良	暗茶色	暗茶色	
第81図3	22土		陶器	播鉢	-	-	(11.4)	(5.3)	ナデ	摺目	○				○			良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第81図4	22土		陶器	碗	-	-	(4.0)	(2.4)	ケズリ	ハケ	○	○						良	灰白色・淡茶褐色	灰白色	底部付近一部露胎
第81図5	22土		弥生	甕	-	-	(7.5)	(5.1)	ナデ?	ナデ?	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第82図1	26住	18	縄文	深鉢	(32.4)	-	-	(12.1)	条痕	条痕	○	○			○			良	明黄褐色	にぶい黄褐色	
第82図2	10住		縄文	浅鉢	-	-	-	(4.2)	ナデ	ナデ		○						良	黄灰色	にぶい黄色	
第82図3	18住		縄文	浅鉢	-	-	-	(2.7)	ナデ(ミガキ?)	ナデ(ミガキ?)	○				○			良	黄灰色	黄灰色	
第83図1	D6-P3		弥生	甕	(28.4)	-	-	(5.0)	ナデ	ナデ	○	○			○			良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第83図2	E6		土師	甕	(29.0)	(26.2)	-	(8.9)	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	○	○			○			良	灰褐色	灰褐色	
第83図3	F6-P7		土師	甕	17.7	-	-	(14.0)	ナデ	ナデ・指オサエ	○	○			○			良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面黒斑有り
第83図4	E6-P23	18	土師	壺	14.4	-	-	(6.7)	ナデ・ハケ	ハケ・ナデ・ケズリ	○	○			○			良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第83図5	E5, E6		土師	甕	(15.4)	-	-	(6.5)	ハケ	ハケ・ナデ 指オサエ	○	○			○			良	にぶい橙色	にぶい橙色	内外面黒斑有り
第83図6	F6		土師	高坏	(18.6)	-	11.8	13.2	?	ナデ・ケズリ	○	○			○			良	橙色	橙色	
第83図7	F6, F7	18	土師	高坏	17.8	-	12.5	13.9	ナデ	ハケ・ケズリ・ナデ							○	良	黄褐色	黄褐色	
第83図8	一括		土師	高坏	(19.4)	-	-	(5.8)	ナデ・ハケ	ハケ・ナデ	○	○			○			良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第83図9	一括		土師	高坏	20.2	-	-	(7.6)	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	○	○			○			良	灰黄色	浅黄褐色	内面黒斑有り
第83図10	一括		土師	高坏	-	-	-	(6.4)	ナデ	ナデ	○	○			○			良	浅黄褐色	浅黄褐色	
第83図11	一括		土師	高坏	-	-	12.5	(7.7)	ナデ・指オサエ	ケズリ・ナデ	○	○			○			良	淡黄色	淡黄色	外面黒斑有り
第83図12	F6	18	土師	高坏	-	-	(11.4)	(8.3)	ナデ	ケズリ・ナデ	○	○			○			良	淡黄色	淡黄色	内外面黒斑有り
第83図13	一括		土師	鉢	(9.7)	-	-	5.1	ナデ・ハケ 指オサエ	ハケ・ナデ	○	○			○			良	黄褐色	黄褐色	
第83図14	一括		土師	壺	-	(10.2)	-	(7.8)	ナデ・ハケ	ナデ・指オサエ	○	○			○			良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面黒斑有り
第83図15	F7		土師	甕	-	-	-	(2.1)	ナデ	指オサエ・ナデ	○	○						良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
第83図16	E7		土師	甕	-	-	-	(4.5)	指ナデ・ハケ 指オサエ	-	○	○			○			良	-	にぶい黄褐色	傾き不確実
第83図17	F6		土師	甕	-	-	-	(5.7)	指オサエ・指ナデ	-	○	○			○			良	-	褐灰色	傾き不確実
第83図18	F6		土師	甕	-	-	-	(3.4)	指オサエ・指ナデ	-	○				○			良	-	にぶい黄褐色	
第83図19	F5		-	手捏土器	2.7	-	-	1.9	指オサエ	指オサエ					○			良	淡黄色	淡黄色	
第84図1	E8		須恵	蓋	-	-	-	(1.2)	回転ナデ	回転ナデ	○				○			良	灰褐色	灰褐色	
第84図2	一括		須恵	壺	-	-	-	(1.1)	回転ナデ	回転ナデ	○				○			良	灰褐色	灰褐色	
第84図3	E6	18	須恵	壺	-	-	-	(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	○				○			良	黄灰褐色	灰黒色	
第84図4	F7	18	須恵	高坏	-	-	(9.8)	(6.2)	回転ヘラケズリ 回転ナデ	-	○				○			良	黄灰褐色	黄灰褐色	
第84図5	F7	18	須恵	鉢	-	-	(5.0)	(3.6)	ナデ	ナデ	○				○			良	黄灰褐色	灰黒色	内面自然釉付着
第84図6	F6, E7		須恵	甕	-	-	-	(14.8)	タタキ	タタキ・ナデ					○			良	灰色	灰色	
第85図1	一括		青磁	碗	-	-	-	(2.7)	-	-								一	淡緑色	淡緑色	外面蓮弁文 龍泉窯系
第85図2	一括		陶器	播鉢	-	-	(11.6)	(3.0)	ナデ・ハケ	ハケ・摺目	○	○			○			良	暗灰褐色	灰褐色	

※ 縄文：縄文土器、弥生：弥生土器、土師：土師器、須恵：須恵器

※ 住：竪穴住居、竪：竪穴遺構、溝：溝状遺構、土：土坑、甕：甕棺墓

第8表 出土石器観察表(1)

挿図 番号	写真 図版	出土位置等	器 種	石 材	長さ (c m)	幅 (c m)	厚み (c m)	重さ (g)	備 考
第86図1	18	19住	打製石鏃	安山岩	2.50	1.70	0.30	0.90	
第86図2		23住	剥片鏃	黒曜石	2.15	2.55	0.30	1.00	
第86図3	18	12~14住	打製石鏃	安山岩	2.60	1.50	0.30	1.00	
第86図4		33住	打製石鏃	黒曜石	(2.50)	(1.75)	0.50	1.60	
第86図5	18	8住	打製石鏃	黒曜石	(2.30)	(1.95)	0.30	0.90	
第86図6	19	26住	磨製石鏃	結晶片岩	(1.80)	(1.60)	0.15	0.80	
第86図7		16住	石庖丁	輝緑凝灰岩	(2.30)	(5.05)	(0.65)	8.60	未成品、穿孔途中
第86図8		12~14住	石庖丁	輝緑凝灰岩	(3.40)	(5.70)	0.60	14.10	
第86図9	19	12~14住	石庖丁	輝緑凝灰岩	3.50	(7.40)	0.65	26.10	
第86図10		21住	石庖丁	粘板岩	(4.25)	(4.00)	0.60	17.50	P1出土
第86図11	19	31住	石庖丁	粘板岩	3.60	(7.10)	0.70	29.80	
第86図12		11住	石庖丁	粘板岩	(5.00)	(6.45)	0.65	23.30	
第86図13		10住	凹石	閃緑岩	13.55	14.10	7.30	2300.0	
第86図14		11住	磨石	輝石安山岩	9.60	8.30	4.40	556.0	
第87図1		F7	打製石斧	粘板岩	12.85	5.30	1.05	66.2	
第87図2		10住	打製石斧	粘板岩	(7.90)	(6.60)	1.70	83.10	
第87図3		31住	打製石斧	粘板岩	(8.25)	(10.25)	1.20	130.00	
第87図4		11土	磨製石斧	砂岩	(3.80)	3.90	0.70	26.80	扁平片刃か?
第87図5	19	19住	打製石斧	砂岩	(9.00)	(4.15)	2.35	111.10	
第87図6		12~14住	打製石斧	角閃片岩	(11.30)	(5.85)	2.00	242.20	中央土坑出土
第87図7	19	10住	磨製石斧	蛇紋岩	14.15	5.75	2.55	359.50	
第87図8		32住	柱状片刃石斧?	輝石安山岩	(12.80)	5.10	3.40	383.50	
第88図1	19	11住	石剣	粘板岩	15.80	3.10	0.55	43.50	
第88図2		4住	砥石	粘板岩	(15.10)	4.70	2.10	234.90	
第88図3		10住	砥石	玢岩	(5.00)	4.95	2.00	72.80	
第88図4		10住	砥石	玢岩	(7.55)	4.00	2.00	61.20	
第88図5		F6	砥石	玢岩	(7.20)	6.80	4.60	233.90	
第88図6	19	32住	砥石	玢岩	9.80	2.80	1.90	104.90	
第88図7	19	9住	砥石	玢岩	(7.10)	3.60	3.10	76.70	
第88図8		16・17住	砥石	玢岩	(4.80)	2.10	2.00	25.20	
第88図9		27住	砥石	玢岩	(4.90)	(4.25)	0.90	18.80	P1出土
第88図10		15住	スクレイパー	腰岳系黒曜石	1.60	2.50	1.25	4.6	
第89図1	20	26住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.80	1.60	0.40	0.8	
第89図2	20	10住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.15	1.70	0.65	1.4	
第89図3	20	9住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.90	1.70	0.50	1.2	
第89図4	20	31住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.40	1.40	0.40	1.0	
第89図5	20	24住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.90	1.80	0.40	2.4	
第89図6	20	5・6住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.70	1.90	0.75	1.6	
第89図7	20	26住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.60	1.85	0.50	1.6	
第89図8	20	38住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.10	2.10	0.50	1.2	

第9表 出土石器観察表(2)

挿図 番号	写真 図版	出土位置等	器 種	石 材	長さ (c m)	幅 (c m)	厚み (c m)	重さ (g)	備 考
第89図9	20	32住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.80	2.25	0.70	2.2	
第89図10	20	10住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.70	2.30	0.40	1.8	
第89図11	20	10住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.95	2.65	0.70	2.4	
第89図12	20	10住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.50	2.00	0.40	0.6	
第89図13	20	31住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.20	1.60	0.50	1.8	
第89図14	20	一括	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.60	2.00	0.70	1.4	
第89図15	20	22住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.40	1.50	0.60	1.4	
第89図16	20	22土	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.60	2.40	0.75	3.0	
第89図17	20	1壺	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.90	2.55	0.75	3.4	
第89図18	20	23住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.80	1.60	0.60	2.0	
第89図19	20	1壺	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.40	1.10	0.40	0.8	
第89図20	20	9住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.45	2.20	0.55	2.2	
第89図21	20	10住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.00	1.75	0.65	1.4	
第89図22	20	25住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.60	1.50	0.35	1.8	
第89図23	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.60	1.85	0.50	2.2	
第89図24	20	1住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	1.90	2.50	0.60	3.0	
第89図25	20	18住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.30	2.85	0.65	3.4	
第89図26	20	8住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	1.80	2.40	0.70	2.2	
第89図27	20	11土	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.40	2.40	0.55	2.4	
第89図28	20	9住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.40	3.00	0.65	4.4	
第89図29	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	3.45	3.10	1.20	10.2	
第90図1	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.30	3.70	0.90	7.0	
第90図2	20	11住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.40	2.00	0.75	3.4	
第90図3	20	26住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.65	2.50	0.60	2.0	
第90図4	20	9住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.25	1.90	0.95	3.8	
第90図5	20	10住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	2.95	3.60	1.15	12.2	
第90図6	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.95	2.25	0.70	4.2	
第90図7	20	25住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	4.40	2.30	1.20	6.8	
第90図8	20	9住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.10	2.75	0.95	5.2	
第90図9	20	1壺	二次加工剥片	珪質岩	2.35	2.70	0.95	5.8	
第90図10	20	10住	二次加工剥片	玉髓?石英?	2.60	4.95	2.20	27.0	
第90図11	20	32住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	3.45	1.80	0.60	3.2	
第90図12	20	33住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	4.20	2.35	0.80	7.0	
第90図13	20	1壺	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	6.00	2.40	0.75	8.2	
第90図14	20	33住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	3.00	1.65	0.45	1.6	
第90図15	20	16・17住	使用痕剥片	腰岳系黒曜石	4.00	1.70	0.70	2.6	
第90図16	20	18住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.05	1.25	0.40	2.2	
第90図17	20	38住	二次加工剥片	腰岳系黒曜石	2.80	2.90	0.90	4.6	
第90図18	19	一括	石核	姫島産黒曜石	4.80	4.80	4.15	81.6	

第 10 表 出土土製品観察表

挿図番号	写真図版	遺構	器種	径 (cm)	孔径 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	色 調	備 考 (胎土等)
第91図1	19	8住	紡錘車	3.5	1.0	2.0	26.9	暗褐色・褐色	角閃石・斜長石・赤色粒
第91図2		一括	紡錘車	4.1	0.9	1.4	22.2	暗黄褐色	角閃石・斜長石・石英赤色粒・白色粒
第91図3	19	27住	紡錘車	4.0	0.8	2.3	30.4	赤褐色	角閃石・斜長石・石英赤色粒・白色粒
第91図4		10住	紡錘車	—	—	2.1	17.1	淡茶褐色	角閃石・斜長石・石英赤色粒
第91図5		10住	紡錘車	—	—	2.1	9.8	暗赤褐色	角閃石・斜長石・石英白色粒

挿図番号	写真図版	遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	色 調	備 考 (胎土等)
第91図6		27住	不明土製品	(6.0)	4.9	3.5	39.9	赤褐色	一部丹塗り、斜長石・角閃石・白色粒
第91図7	19	12~14住	投弾	4.6	2.8	2.7	28.2	にぶい橙色	スス付着
第91図8	19	23住	土匙		—	—	172.0	橙色	匙部口径:7.0cm、高:7.9cm 斜長石・角閃石

挿図番号	写真図版	遺構	器種	長さ・径 (cm)	厚さ・幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	色 調	備 考
第91図9		10住下層	土玉 (丸玉)	2.5	2.2	0.4	11.7		
第91図10		近世攪乱	土錘	4.0	1.5	0.6	7.9		

挿図番号	写真図版	遺構	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	穿孔径 (cm)	重さ (g)	色 調	備 考
第91図13	19	B2-P1	土鈴	3.3	2.8	2.4	0.6	10.6	浅黄橙色	
第91図14	19	B2-P1	土鈴	4.4	2.6	2.1	0.6	10.4	黄橙色	
第91図15		1溝	土鈴	3.2	2.6	2.2	0.4~0.5	8.5	橙色	
第91図16		一括	土鈴	3.2	2.3	1.5	0.5~0.6	3.9	浅黄橙色	
第91図17		B2-P1	土鈴	3.7	2.6	2.2	0.6~0.7	10.6	浅黄橙色	
第91図18		一括	土鈴	2.7	2.5	2.5	(0.5)	9.8	にぶい黄橙色	

第 11 表 出土土玉類観察表

挿図番号	写真図版	遺構	器種	長さ (cm)	幅・径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	石材	色調	備 考
第91図11	19	9住	勾玉再加工品	1.6	1.3	0.2	2.1	硬玉	淡緑色	
第91図12	19	5住	白玉	—	0.3	0.15	0.1以下	滑石	濃緑色	厚さ0.15cm

第 12 表 出土鉄器観察表

挿図番号	図版番号	遺構名	器種	全長 (cm)	刃部長 (cm)	刃部幅 (cm)	頸部幅 (cm)	刃部厚 (cm)	頸部厚 (cm)	重さ (g)	備 考
第91図19	—	4住	鉄鏃	—	(5.4)	(2.9)	—	0.4	—	18.0	
第91図20	—	18住	鉄鏃	—	(5.5)	(2.5)	—	0.2	—	14.2	
第91図21	—	10住	鞆羽口	(3.6)	—	—	—	—	—	27.9	復元羽口径1.9cm、幅4.5cm



調査区遠景（東から）



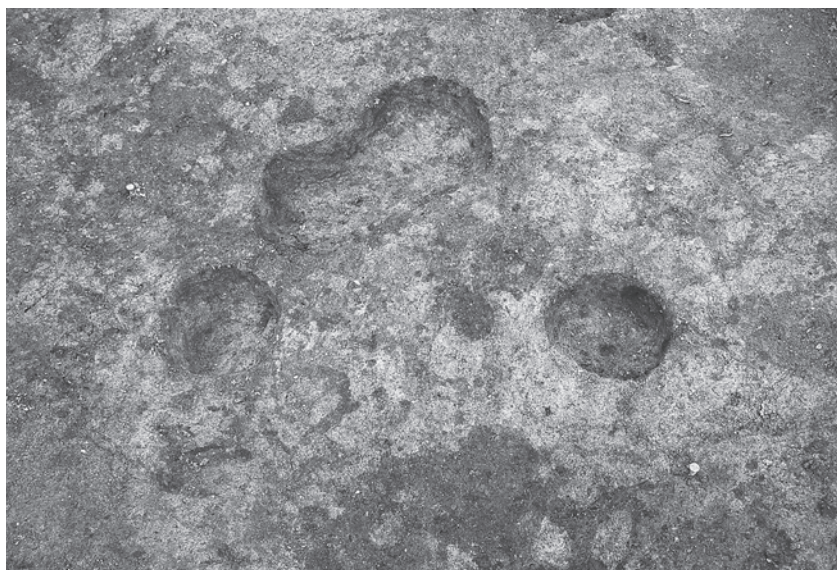
調査区空中写真（真上から）



1号竖穴住居発掘状況（南東から）



1号竖穴住居Aカマド発掘状況（南東から）



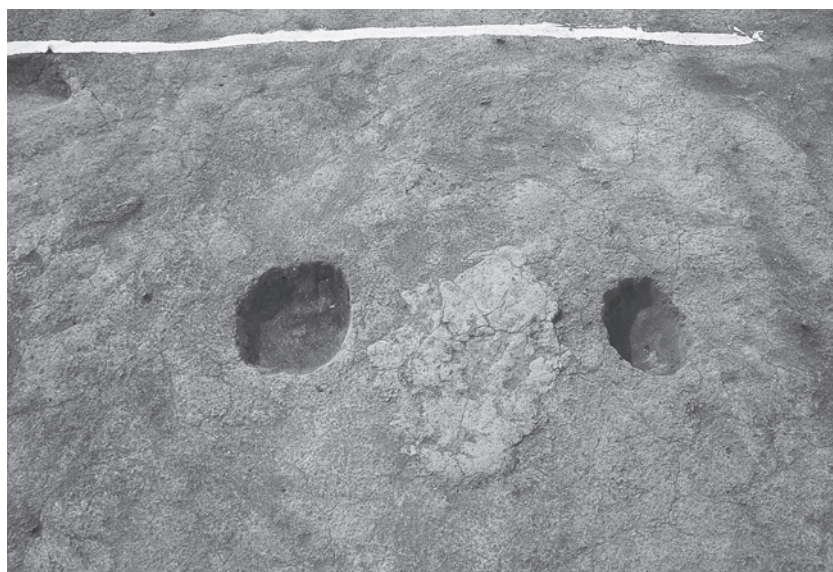
1号竖穴住居Bカマド発掘状況（南東から）



2号竪穴住居発掘状況（南東から）



3号竪穴住居発掘状況（南東から）



3号竪穴住居カマド発掘状況（南東から）



5・6号竪穴住居発掘状況（北西から）



5・6号竪穴住居遺物出土状況



8号竪穴住居発掘状況（南東から）



8号竪穴住居カマド発掘状況（南東から）



9号竪穴住居カマド遺物出土状況



9号竪穴住居カマド発掘状況（南東から）



9号竖穴住居遺物出土状況



9号竖穴住居遺物出土状況



10号竖穴住居発掘状況（南西から）



10号竖穴住居遺物出土状況



10号竖穴住居遺物出土状況



10号竖穴住居遺物出土状況

写真図版8



11号竪穴住居発掘状況（北から）



11号竪穴住居遺物出土状況



11号竪穴住居遺物出土状況



12～14号竪穴住居発掘状況（北東から）



15号竪穴住居発掘状況（南から）



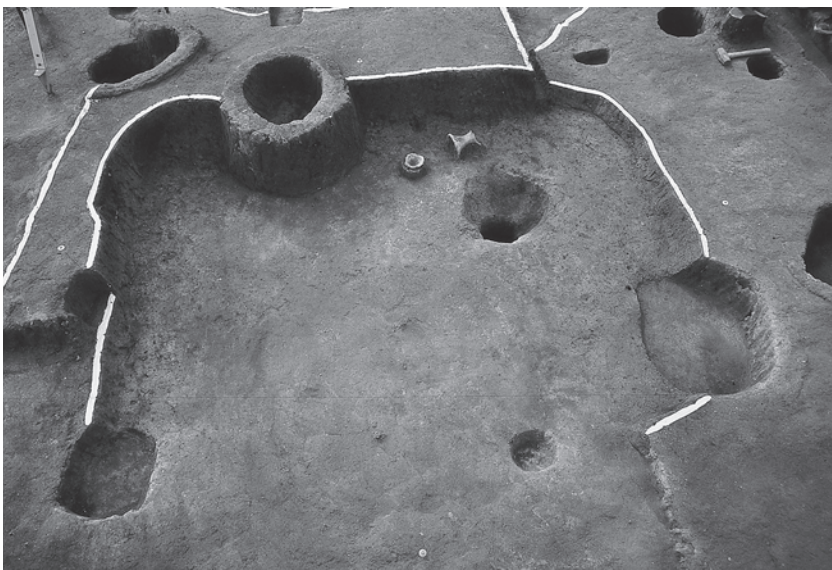
16・17号竪穴住居発掘状況（北西から）



16・17号竖穴住居遺物出土状況



16・17号竖穴住居遺物出土状況



18号竖穴住居発掘状況（北東から）



18号竖穴住居遺物出土状況



19号竖穴住居発掘状況（南西から）



20号竖穴住居発掘状況（北東から）



20号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）



20号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）



23号竪穴住居発掘状況（北西から）



24号竪穴住居発掘状況（南東から）



24号竪穴住居焼土・炭化物検出状況



25号竪穴住居発掘状況（南東から）



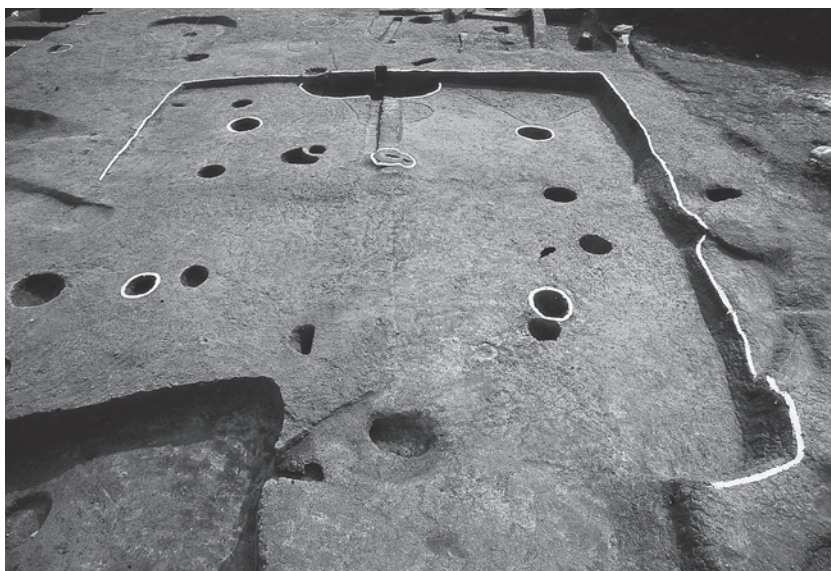
25号竪穴住居カマド遺物出土状況



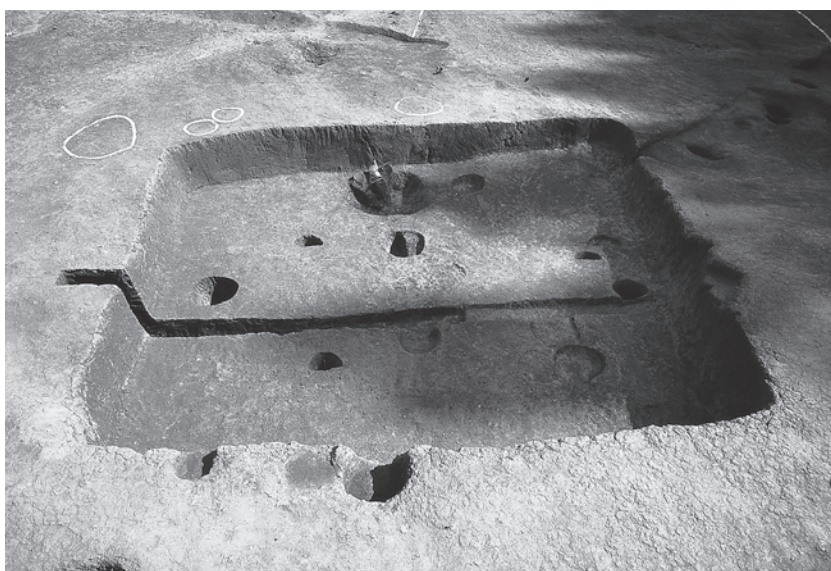
25号竪穴住居カマド発掘状況（南東から）



26号竪穴住居発掘状況（北西から）



27号竪穴住居発掘状況（北西から）



28号竪穴住居発掘状況（北西から）



28号竪穴住居屋内土坑遺物出土状況



29号竖穴住居発掘状況（北東から）



30号竖穴住居発掘状況（南西から）



30号竖穴住居遺物出土状況



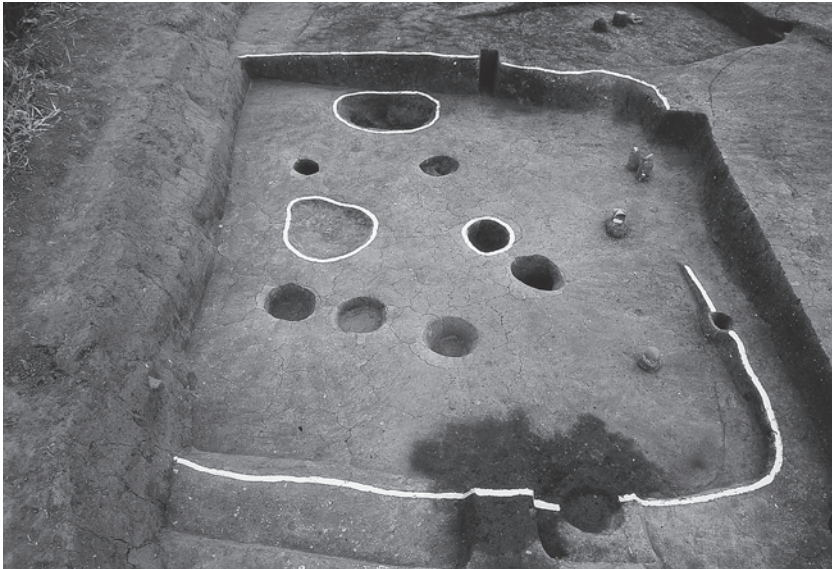
31号竪穴住居発掘状況（北から）



31号竪穴住居遺物出土状況



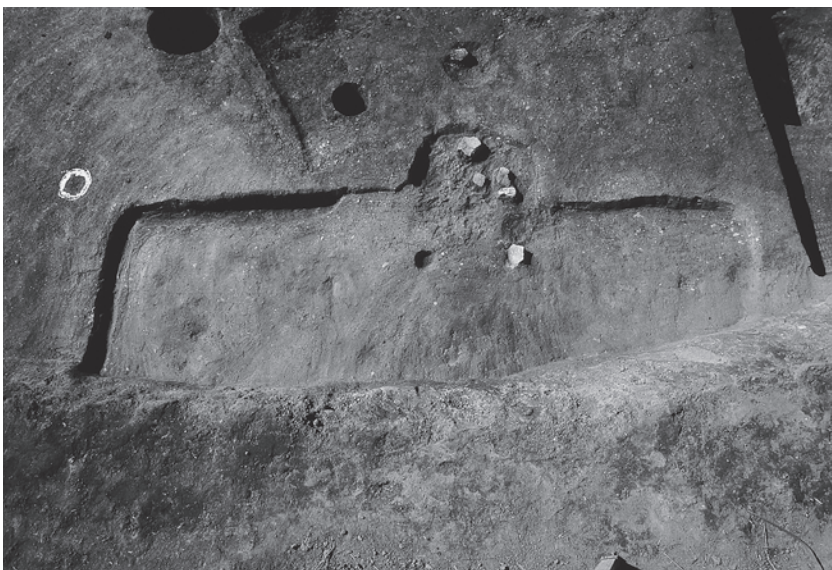
32号竪穴住居発掘状況（東から）



33号竪穴住居発掘状況（北西から）

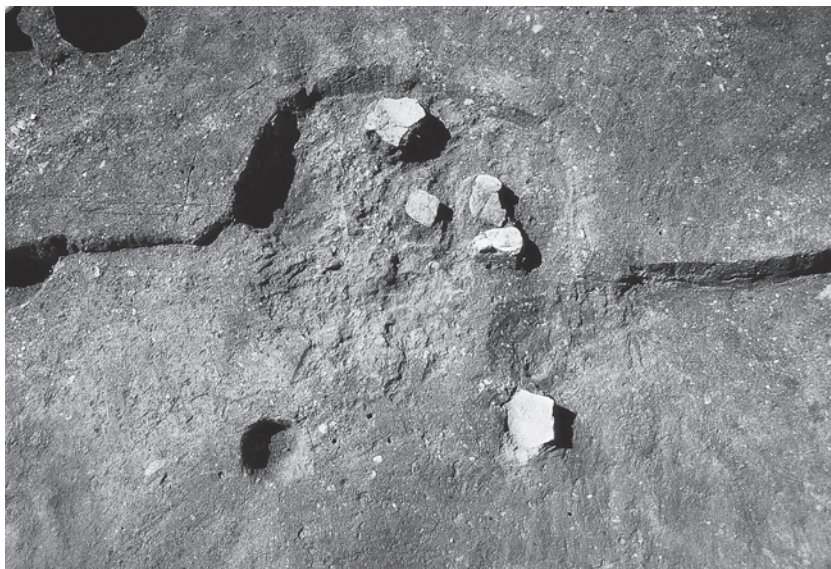


33号竪穴住居遺物出土状況

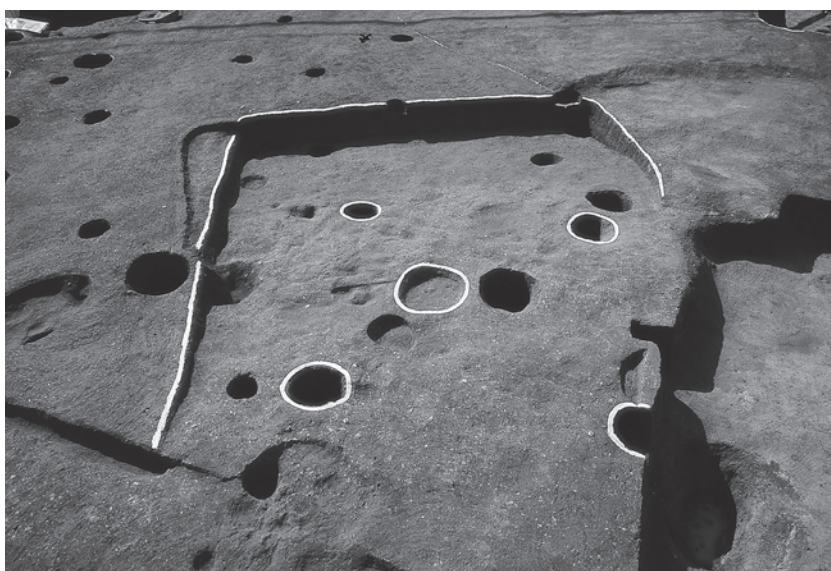


34号竪穴住居発掘状況（北東から）

34号竪穴住居カマド発掘状況（北東から）



35号竪穴住居発掘状況（北東から）

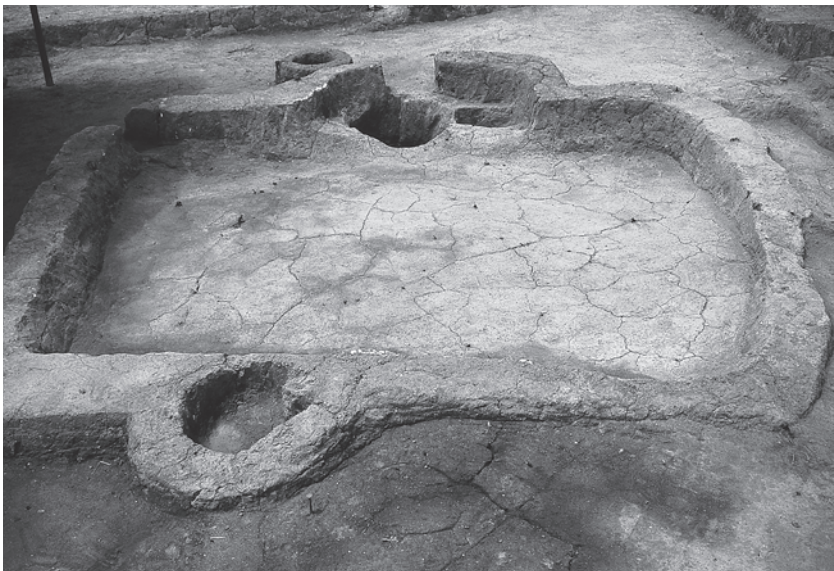


37号竪穴住居発掘状況（北東から）





38号竪穴住居発掘状況（北から）



1号竪穴遺構発掘状況（北東から）



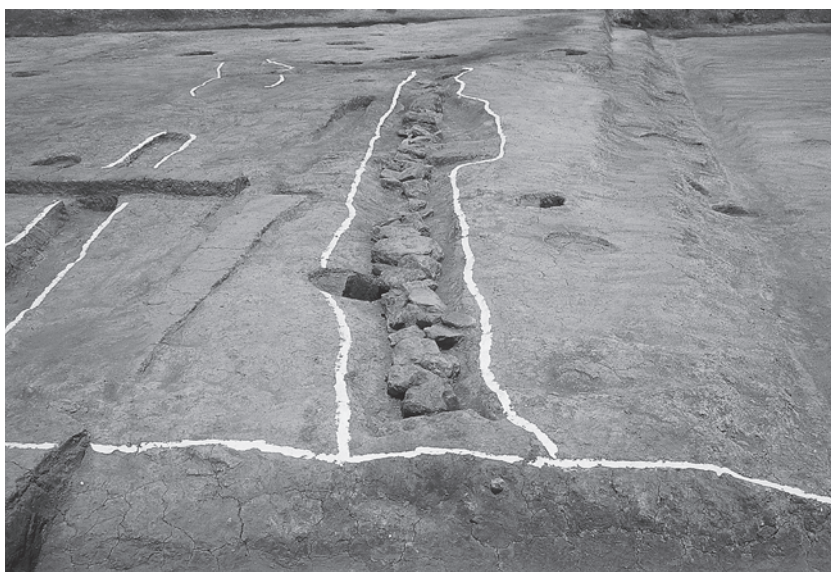
2号竪穴遺構発掘状況（南東から）



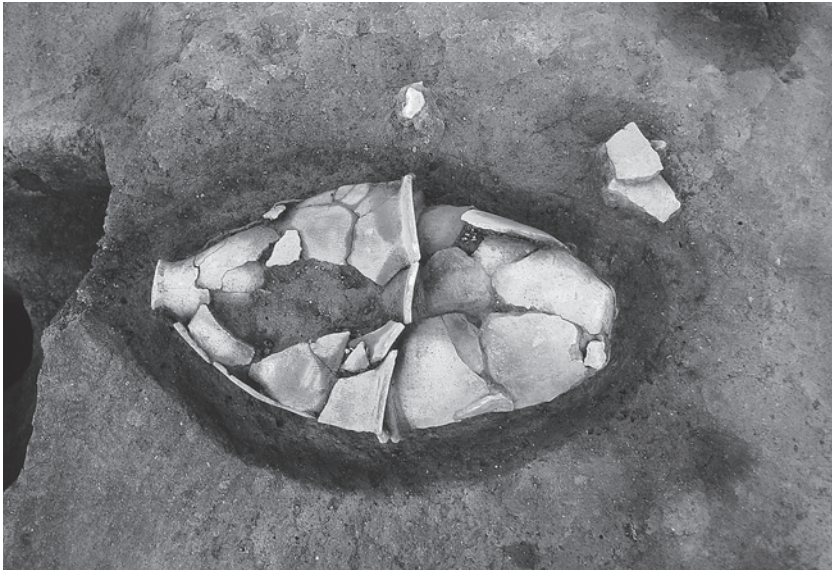
3号竖穴遺構発掘状況（北東から）



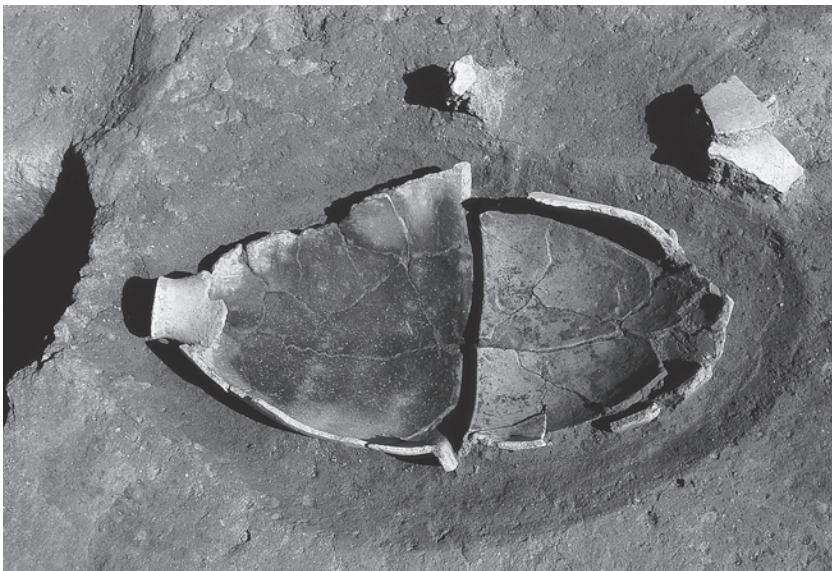
2号溝状遺構発掘状況（南東から）



4号溝状遺構発掘状況（南東から）



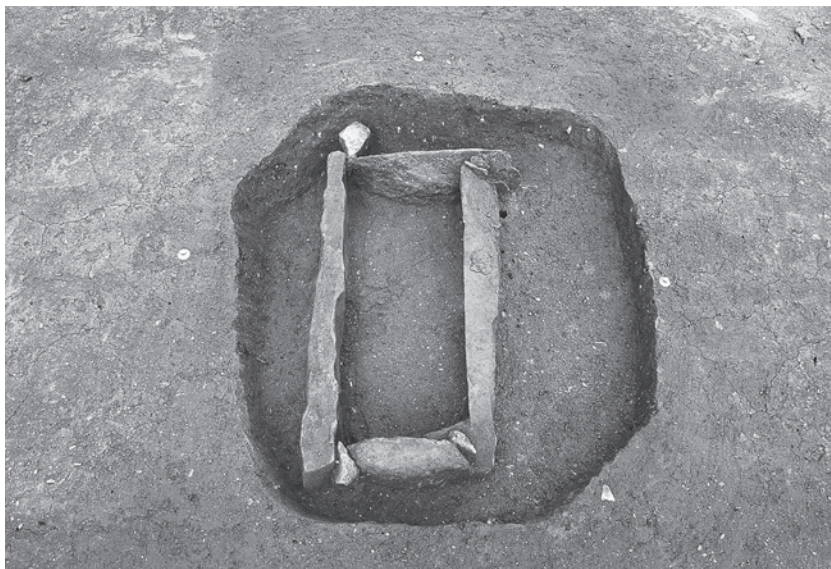
1号甕棺墓発掘状況（南西から）



1号甕棺墓発掘状況（南西から）



1号石棺墓検出状況（南東から）



1号石棺墓発掘状況（南東から）



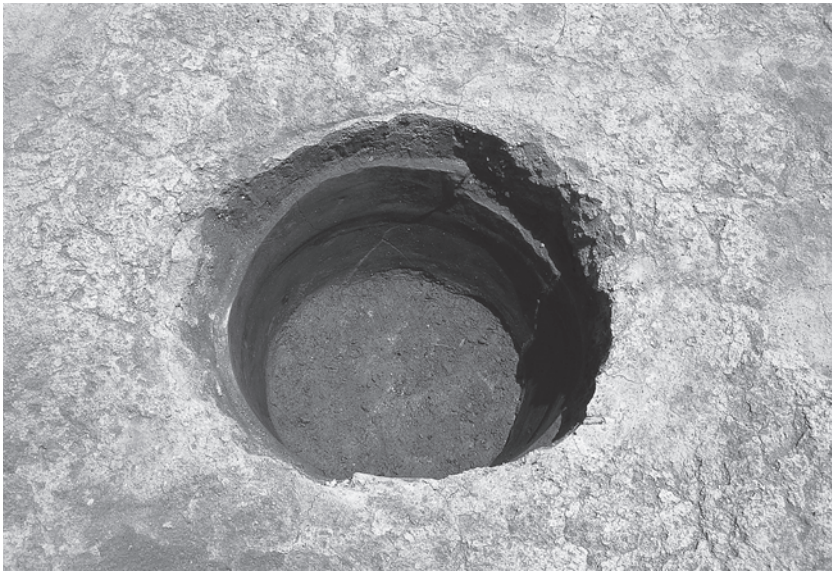
1号土坑発掘状況（北東から）



2号土坑発掘状況（北西から）



3号土坑発掘状況（北西から）



4号土坑発掘状況（南東から）



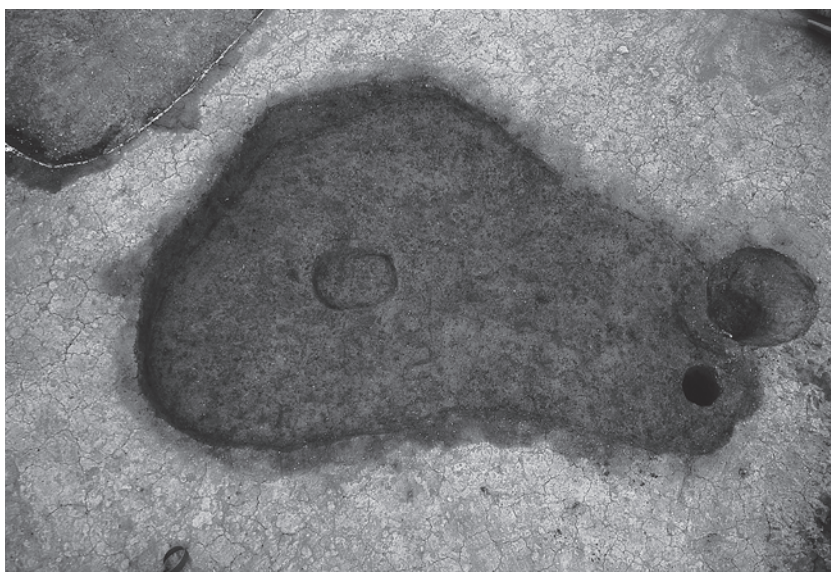
5号土坑発掘状況（南西から）



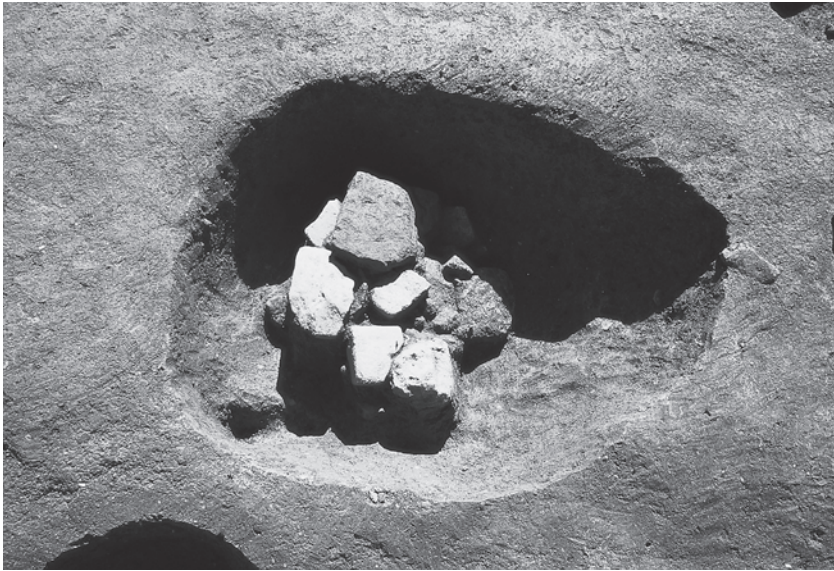
8号土坑遺物出土状況



8号土坑遺物出土状況



9号土坑発掘状況（北から）



10号土坑発掘状況（北西から）



11号土坑発掘状況（東から）



11号土坑遺物出土状況



11号土坑遺物出土状況



12号土坑発掘状況（東から）



20号土坑発掘状況（北東から）



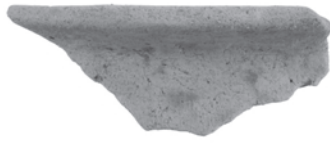
22号土坑発掘状況（南西から）



発掘作業に従事したみなさん



6-1



6-3



6-5



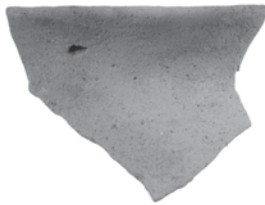
6-7



6-9



6-11



8-4



13-1



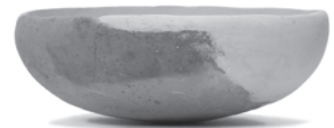
13-2



13-4



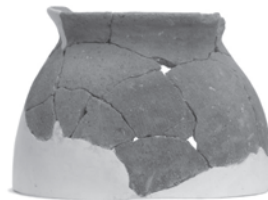
13-5



13-7



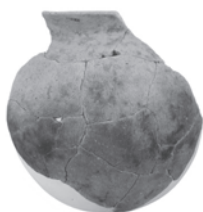
13-8



15-4



15-5



15-6



15-8



15-9



15-10



15-11



16-1



16-2



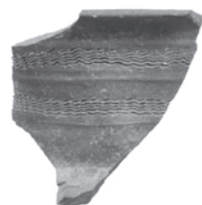
16-3



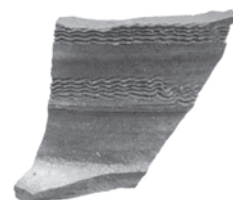
16-5



16-6



16-7



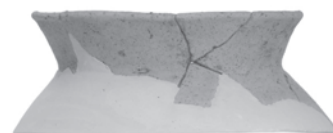
16-8



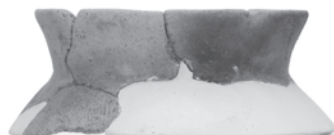
18-5



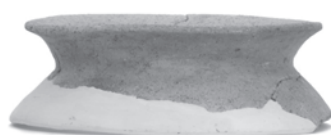
18-6



18-8



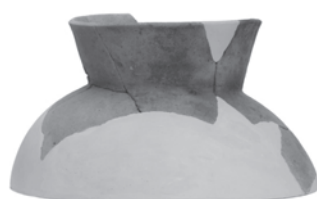
18-10



18-11



18-13



19-1



19-4



19-6



19-8



19-10



19-11



20-1



20-2



20-3



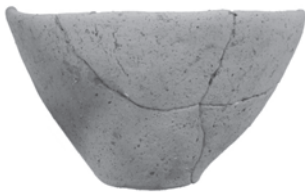
20-14



20-15



20-16



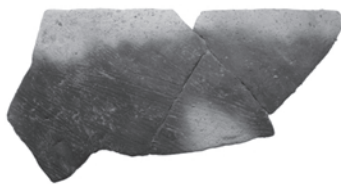
20-17



21-1 (側面)



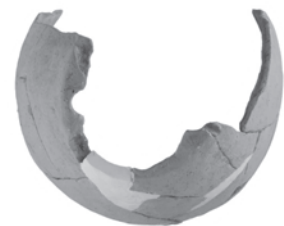
21-2 (側面)



21-3



21-1 (底面)



21-2 (底面)



21-4



22-1



22-2



24-4



26-1



26-4



26-6



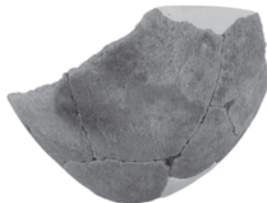
26-8



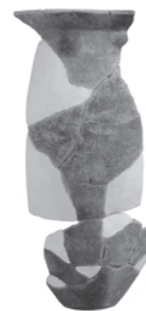
26-9



28-4



28-5



30-1



30-4



31-1



31-2



31-3



31-4



31-5



31-9



31-11



32-1



32-2



34-1



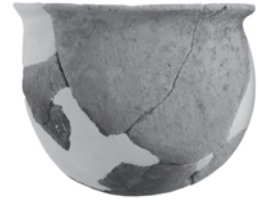
34-2



34-3



35-3



35-4



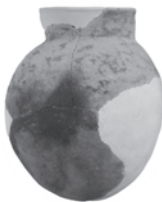
35-5



35-6



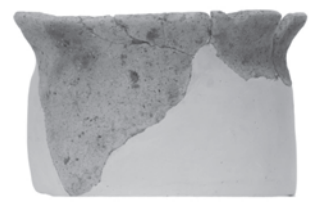
37-4



37-6



37-7



39-1



42-4



42-11



44-3



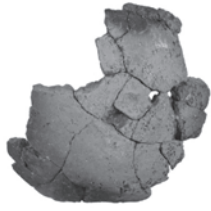
46-1



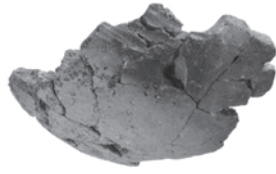
46-6



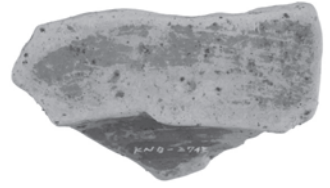
46-9



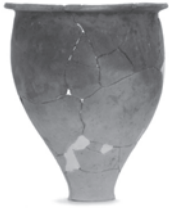
46-10 (側面)



46-10 (底面)



50-1



52-1



55-1



57-1



57-2



59-3



59-4



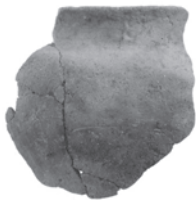
61-1



63-2



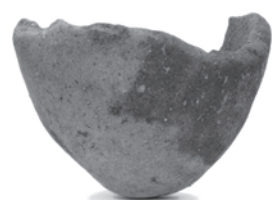
63-4



66-6



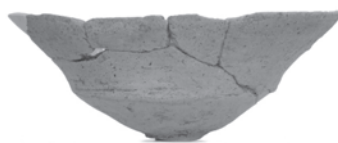
66-7



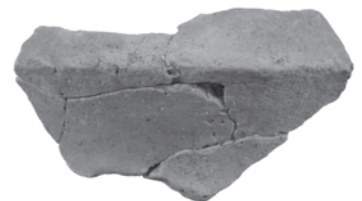
66-9



66-10



66-14



77-1



73-1 (上甕)



77-3



78-2



73-2 (下甕)



79-5



79-7



79-10



79-16



82-1



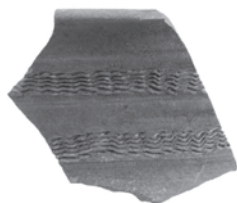
83-4



83-7



83-12



84-3



84-4



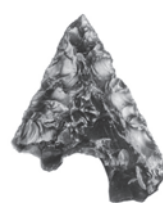
84-5



86-1



86-3



86-5



86-6



86-9



86-11



87-5



87-7



88-1



88-6



88-7



90-18



90-1



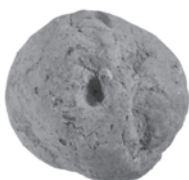
90-3



90-7



90-8



90-9



90-11



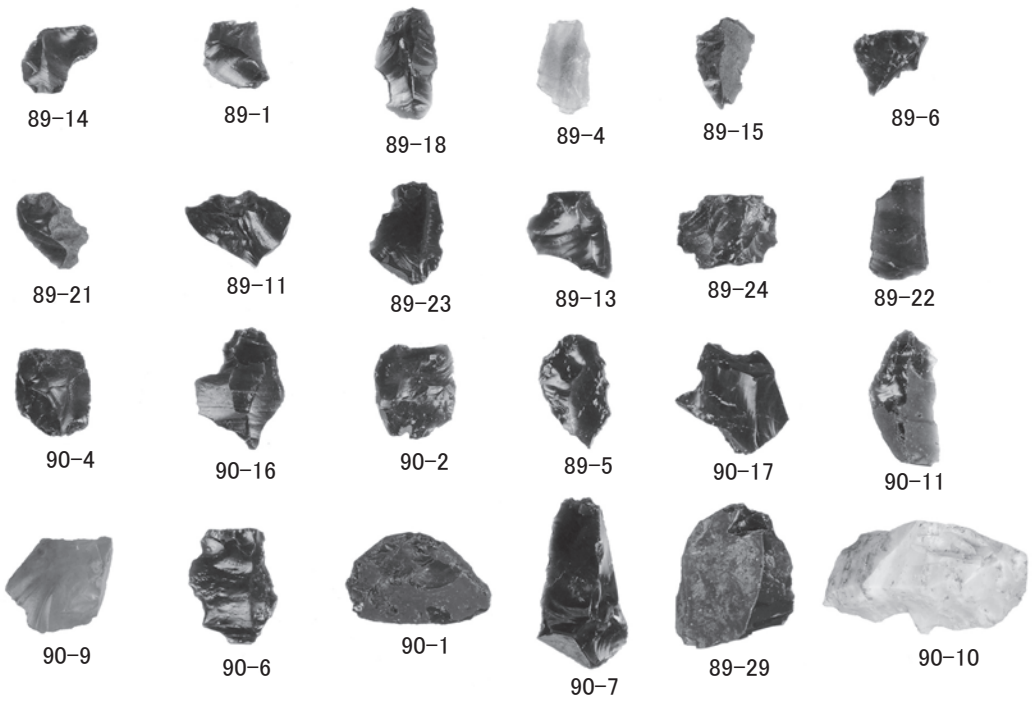
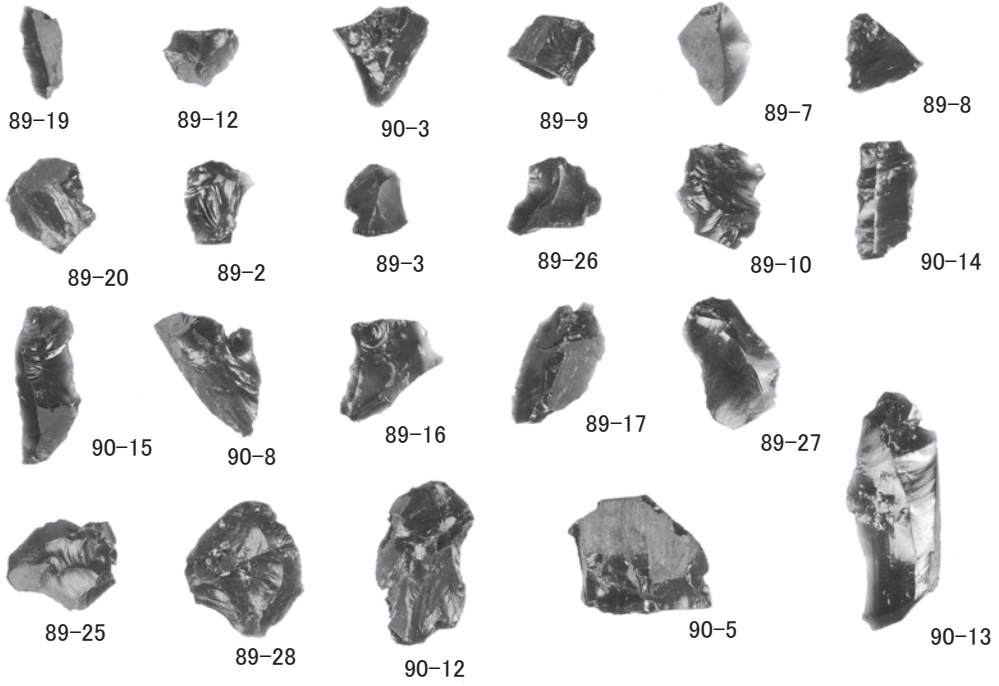
90-12



90-13



90-14



報 告 書 抄 録

ふりがな	くぐりのいせき に
書 名	求来里の遺跡Ⅱ
副書名	県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
巻 次	（2）
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	89
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2009年3月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
金田遺跡	大分県日田市 大字求来里 字金田1060ほか	44204-6	204239	33° 18' 57"	130° 57' 52"	20040423 } 20041126	1,650㎡ (3次調査 区との重 複60㎡)	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金田遺跡	集落 墓地	弥生 古墳 近世	竪穴住居 甕棺墓 石棺墓 土坑 溝状遺構	弥生土器・石器 土師器・須恵器・鉄器 陶磁器	カマド導入期の集落 朝鮮半島系土器・初 期須恵器が出土

求来里の遺跡 II

— 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）—

金田遺跡の調査

2009年3月19日

編 集	日田市教育庁文化財保護課 〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1
発 行	日田市教育委員会 〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1
印 刷	(有)中央印刷 〒877-0012 大分県日田市淡窓2-3-1



日田市